
瞳で繋がる六道輪廻

二百野速斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳で繋がる六道輪廻

【Nコード】

N4209K

【作者名】

二百野速斗

【あらすじ】

世界は支配するものじゃない。自由に生きるものだ——。人が人を護るための力である守護術。その中でも瞳の色を変えるこの世界の魔法、瞳術。瞳術を使わない一人の少年。闘うことを嫌う少年は大切な仲間を得て“護るための闘い”に身を投じる。そして少年は六道を巡る——。現在更新停止中です。更新が再開するかは未定です。

一話：護る闘いの始まり（前書き）

一章 琴鳴学園編

運命は少年を思いもしなかった再会、新たな出会い、そして闘いの日々で成長させ“六道輪廻”の旅へと誘う。

一話：護る闘いの始まり

「……」

血で赤く染まった野原の中心にたたずむ少年は静かに、雪の降り続ける空をただ見上げる。

右目からは透明な涙、左目に負った十字傷からは赤い鮮血が流れる。

両手に握った黒い双剣と制服に付着した血がただの学生ではないことを物語る。

少年の周囲には同じ学生服を着た学生たちが横たわっていた。全員かろうじて息はあるが、体中に切り傷があり、出血がひどくていつ死んでもおかしくない状態だ。

「俺と関わったせいでこんなことに……」

視線を下ろした先に、仰向けに倒れる学生服の少年。

右肩から左脚に、左肩から右脚にかけて二本の傷が十字に交わる。見上げた空には優しく光る月。

しかしその光は心には届かない。

閉じた左目にも光は届かない。

時は止まった。

だが二年の時を経て止まっていた時は進み、輪廻は巡る――。

新たな出会いを祝福するかのように咲き誇る桜。

四月五日。今日は高校の入学式。

心地良い風が吹き舞い散る花びらの中で桜の木を俺、うるうるんげつ閏天月は見上げていた。

「ふわ〜あ……」

左目に眼帯、胸元には太陽の日差しに反射して光る銀の十字架。

「義務教育は中学で終わりなんだから別に高校行かなくてもいいよな……」

とはいえずでに受かってしまったので行くしかない。

早く夏休みになってもらいたい。

「そろそろ行くか」

いやいや教室に行こうとしたら目の前を横切る少女。

腰の辺りまで伸ばした赤みがかった髪。

気の強さを表す燃えるような瞳。

健康的な色の肌に細い手足。

俺より小さい身長に発育のよい体型。

歩くだけですれ違った人全員が見とれてしまうほどの美少女。

「神無月^{かなづき}？」

「えっ……聞？」

驚いた様子の少女、神無^{せつな}月瀬津奈。

「……久しぶりだな」

「来ないで！」

いきなりの大声に周囲の人間も俺自身も驚いてしまう。

「あたしは許してないから」

一言だけそう告げて逃げてしまった。

「悪いのは俺だしな」

見上げた空は雲一つない青空だった。

入学式も終わり、生徒達が開放された放課後。

普段から開いている屋上に四人の生徒の姿があった。

「ちょっと！ 何する気よ！」

「気の強い女だな。ますます俺のタイプだぜ」

神無月瀬津奈は屋上からの景色を眺めていたら突然三人の男子生徒に囲まれた。

「いいから放しなさいよ！」

もう最悪。

ただでさえ会うことはないと思っていた閨に会ってしまった上にこんな奴等にかからまれてしまうなんて。

「まあそっいうなよ。じゃあ早速——」

体格のいい偉そうな男が瀬津奈に触れようとする。

反抗するつもりだったが無意識に体は震えてしまい目を閉じてしまふ。

そのとき屋上の扉の開く音がして、その場にいた全員が扉の方を見た。

屋上に来たのは、瀬津奈が今一番会いたくない人物だった。

「……ん？」

屋上の景色を眺めて帰ろうとしたら男女の言い争っている声、神無月の声が聞こえる。

「……巻き込まれたくないしな」

大体丸腰だし。

帰るために階段を下りようとする、泣きながら怒っている神無月の顔が思い浮かんだ。

“あのとき”の顔だ。

恐らく戦闘になる。

闘えない。

闘いたくない。

でも気分が悪い。

「……今日だけだ、今日だけ」

自分に言い聞かせるように呟いて屋上の扉を開ける。

屋上の扉を開けるとこちらを見る四人。

柵を背に三人の男子生徒に囲まれる少女は俺の姿を見て叫ぶ。

「聞！　なんでここに來たのよ！」

「俺がどこに行こうと俺の自由だろ？」

「そ、それはそうだけど……」

唇に人差し指を当てる。

そして神無月をなだめるために一言。

「ちゃんと助けるから静かに」

「だ、誰もあんたなんかに助けてほしくないんだから！」

「お前が助ける？」

何がおかしいのか、ニヤニヤと笑っている長身で偉そうな男。

近くにいる二人も笑いを堪えるのに必死になっている。

「な、なんで笑ってるのよ？」

こいつらとは初対面なのにいきなり人のこと笑うとはどういう教育を受けてきたんだ？

「お前だろ？　この学園に入学した生徒の中で唯一瞳術じゆうが使えない生徒は」

「え……？」

「なんで知ってるんだ？」

どうせ分かることだから秘密ってわけじゃないけど。

「知ってるやつは知ってるぜ？　瞳術を使えない人間なんて珍しいからな」

瞳術——瞳の色を変えることにより人体に流れている波動うはなをそれぞれの色に染め、発動するこの世界の魔法。

波動を動力源エネルギとし、指などに波動を集中させて空間や物質に文字を刻む文刻ぶんこくと呼ばれる行為を行い、発動する。

小学校の授業の課程で習うため、高校生になって使えない人間はほとんどいない。

「どういうことよ聞！ “あるとき”は使えてたじゃない！」

「神無月」

「な、なによ？」

急に名前を呼ばれて驚いたみただけと言葉は刺々しい。

説明しないと納得しないだろうな。

俺は溜め息をついて眼帯をしている左目を押さえる。

「一つ教えてやるよ」

「あ？」

「力を“使えない”ことと“使わない”ことは違うんだよ」

左手で眼帯を外し、十字傷のある左目をゆっくりと開ける。

左目が開ききった瞬間、体から溢れだす息ができなくなるほど濃密な波動の風。

「きゃっ！」

「ぐっ！」

空間を切り裂く音が屋上に鳴り響く。

屋上に張ってある今まで見えなかった結界がひび割れていく。

「結界張ってあったのかここ。毎日来てるのに知らなかったな」

「ちょ、ちよつと聞！」

のんびり結界の壊れる様子を見てたら怒鳴られた。

やべ、苦しそうだ。

息できてないのか。

「ああ、ごめん。やっぱり加減の仕方忘れてるわ」

体から波動が流れないように調整する。

実際波動垂れ流しても意味ないし。

風は徐々に弱くなり、数秒後には吹き止む。

「ゲホッ、ゴホッ！」

「どうする？ まだ戦う気か？」

「……なめやがって」

悔しそうに睨む男子生徒。

このまま諦めてくれたら戦わないで済んだのに。
あの風の中立ち続けたのは立派だと思うけど。

「波動は操れるみたいだがどうせ波動だけだろ！」

右目が茶色に変わったあと周囲に波動の風が吹き荒れる。

「文刻！ 岩石拳！」

大声で叫び、左手の人差し指と中指を右手の甲にあてて手首から
指先へゆつくりと指先を滑らせる。

その跡に刻まれる文字。

その文字が茶色に淡く光ったと思えば、右手が岩石の拳になって
いた。

「いくぞお！」

拳の射程距離まで走って近付き、俺に向かって拳を放つ。

「避けられないとでもおもっ——」

避けようとした刹那、足下が凍りだす。

神無月の近くにいた一人が下から上に振り上げたであろう、人差
し指と中指を立てた右手を高く掲げていた。

そして縹色はなだの右目。

一人を警戒しすぎて他にも敵がいたことを忘れていた。

まずい、直撃する！

そう思ったときには腹部を殴られた。

「がっ」

足下の氷は無残に崩れた。

俺は鈍い音を立てて吹き飛ぶ。

やば、骨一本くらい折れたかも。

「閨！」

「そこから離れる神無月！」

一回転して足から着地し、名前を叫ぶ。

叫んだときに少し血を吐いてしまう。

神無月は急に名前を呼ばれて驚いたようだが、俺の方へ向かって

走る。

よし、ここまで来たなら神無月には当たらないな。

「ちっ、逃がすな！」

「これで終わりだ！」

神無月を捕まえようとした二人も驚いてこちらを見る。

「痛みはないから安心しろ」

天月の左目が縹色に変わった瞬間、微かに冷気が漂う。

右手の人差し指を前に突き出し、空間に大きく円を描いて文字を刻む。

——永久凍結の氷河えいきゅうとうけつつのひょうが

文字が縹色に淡く光って、気付いたときには巨大な氷塊が地面から現れてその中で三人が凍りづけになっていた。

「えっ……」

「終わったよ」

神無月はいきなりのことに驚いてるみたいだが俺はもう疲れた。

久しぶりに瞳術使ってマジしんどい。

でもまだやることが残ってるよな。

俺は柵に掛けてあった神無月の鞆を拾い、嫌がる神無月を無理矢理抱えて校舎裏へ飛び下りる。

「きゃ~~~~~っ！」

「よっ」と

教師に色々聞かれるのがめんどくさいので嫌がる神無月を無理矢理お姫様だっこして四階建ての校舎の屋上から飛び下り、見事に着地した。

落下中もずっと叫んでたから耳が痛い。

“永久凍結の氷河”は名前の通り本気でやれば永久にそのまま凍ったままだが、力をかなり抑えていたのもうそろそろ溶け始めているだろう。

「ちょ、ちよつと……あんたねえ……」

「……なに？」

嫌な予感がするが、一応話は聞こう。

「すごい瞳術使えたり、屋上から平気で飛び下りたり、あんた一体何者なのよ！」

「瞳術は普段使わないだけだつて」

顔を近づけて怒鳴り出す。

顔近い！ 俺顔赤くなってるな。

これだけ接近されるとドキドキする。

「ちょ、もうちよつと離れて……」

「ふえ？」

さっきまでの威勢はどこへやら、目を丸くして可愛い声を出す。

状況に気付कि顔を真っ赤にして離れる。

「も、もついいわよ！ それじゃあね！」

「神無月」

「な、なによ？」

帰ろうとしたところを止められ、振り返る神無月。

「忘れ物」

「え？ あつ、あたしの鞆……」

鞆を手渡す。神無月はようやく手ぶらで帰ろうとしたことに気付いたみたいだ。

「その……ありがとう」

「いいよこれくらい」

「そ、そうじゃなくて……その……」

恥ずかしそうに目を逸し、言葉を詰まらせる神無月。もじもじと動いて顔を赤くした様子がかなり可愛い。

「助けてくれて、ありがとう……」

「いや、その……どういたしまして」

突然の素直な態度に照れてしまう。

駄目だ、なんか恥ずかしい。

神無月は俯いて黙っちゃうし。

「じゃあ俺はそろそろ……」

「教えてよ……」

「え？」

俯いたまま小さな声で言った一言。

聞き取れなかったので聞き返す。

するといきなり顔を上げて俺に問い質す神無月。

「本当に閨なの！？ “あのとき”なんで？ なんでなの？ 今あたしを助けてくれたのになんで……なんであの時は……お願いだから、教えてよ……」

神無月の目から溢れ出す涙。

俺にはその涙を止められない。

「悪いけど……」

「なんでよ？ お願いだから教えてよ！ 教えてくれないなら、教えてくれるまで離れないから！」

「……」

神無月の涙を見て罪悪感が生まれるが、それでも今は何も言えない。

いつか話すそのときまで、俺はこの子を護らないとな。
心にそう誓って。

一話：護る闘いの始まり（後書き）

製作裏話その1

というわけで新連載です。

まあ後書きではぼちぼち裏話でも書こうかなと。

まずこの作品は一話だけでもかなり書き直しました。

最初は三人称の物語でしたが、一人称に書き直し、文章の書き方変えて、季節を秋から春に変えてと。

次の裏話はキャラの設定にでもしようかな？

それでは二話からもよろしくお願いします（・ω・）ノ

二話：仮面を被ったお嬢様

高校生になって初めて授業がある今日。

一時間目は瞳術の授業。

「それじゃあみなさん！ 今から瞳術の基本を復習しますよー！」
黒い髪を肩の辺りまで伸ばし、本当に二十歳を過ぎているのか疑わしい身長つばきはるかの椿春風先生。

子どもをあやすような喋り方が特徴だ。

「瞳術は人が人を護るための術である守護術の中で一番研究が進んでる術で、他には獣の力を借りるごまごま獣術、自らの肉体で戦うぶじゅつ武術、人の五感を狂わせる幻術げんじゅつ、怪我を治したり結界を張ったりする癒術ゆじゅつの計五つで構成されています」

「先生！ なんで小学生の内容を復習するんですか？」

クラスの委員長が小学生で勉強した内容を今更復習することに疑問を感じたのか、先生に質問した。

流石は委員長。決まったのは昨日だが。

「えー？ だって春休みの間にみんな忘れちゃってるかもしれないもん」

そんな根本的なこと誰も忘れないだろ。

「それじゃあ今から瞳術の説明です。瞳術は基礎瞳術が九つ、上級瞳術が二つ、禁断瞳術が四つと全部で十四種類あります」

生徒から「十五種類やろ！」とツツコミが入るが、聞こえてないのか先生は説明を続ける。

そのせいでわざわざ立ち上がってツツコミをした生徒がすべった形になった。

「じゃあ種類の説明は……ことな琴鳴さん！」

「はい」

隣りの女子がゆっくりと立ち上がる。

神無月と同じくらいの身長で淡い黄色の髪を背中の中ほどまで伸

ばして側頭部に黒色のリボンを付けた琴鳴^{ちか}千華。

物静かでお淑やかな少女は誰にでも優しくて早くも学年の人気者になっていた。

確かこの私立『琴鳴学園』の理事長の孫で相当なお嬢様とか誰かが噂してた気がする。

まあ私立っていつても実際は公立高校みたいなものだけど。

金銭面では公立高校と変わらず学区の無い公立高校って感じで人気がある。

「基礎瞳術は火の赤色、水の青色、土の茶色、風の緑色、花の桃色、電気の黄色、毒の紫色、氷の縹色^{はなだいろ}、金属の金色の九つ。上級瞳術は光の白色と闇の黒色の二つ。禁断瞳術は創造、時間、空間、操作の四つです」

「はい、完璧な説明ですね。さすがは千華ちゃん。ちなみに補足すると白色と黒色の瞳を持つ人は千人に一人程の確率でしかしかいなくて、禁断瞳術は使うこと自体が禁止されていて現在は文献に残っている程度の幻の瞳術です」

琴鳴は入学してすぐに行われたテストで学年一位だった。

俺は平均点そこそこだった。

「それじゃあ今日はこれからの授業について説明をします」
これからの授業の流れを説明してたが俺はほとんど聞き流していた。

そういえば今日は大河内たち三人は欠席らしい。

先週殴られた俺の腹部も結局骨に異常はなくて寝たら治った。

昔から頑丈なのと回復が早いのが取り柄なんだ。

「おっと」

消しゴム落ちちゃったよ。

拾おうと手を伸ばした先に伸ばされた白い手。

「はい、どうぞ」

軽く微笑み掛ける琴鳴。

その笑顔と優しさに男が心を奪われるのも分かる気がする。

「あつ、ありがとう」
クスリと笑うその笑顔は何故だか曇りがある気がするがそれでも魅力的だった。

琴鳴千華は珍しく歩いて下校していた。
たまには気分を変えて歩いて帰ろうと思ひ迎えの車を呼ばなかった。

千華は気付いてないが後方にはSPが数名ついて来ている。
「あいつも一緒かな……」

何となく天月は何の男とは違うと思つて試しに優しくしてみたけど結局は同じだった。

男なんてみんな馬鹿だ。

ちよつとお嬢様を演じて優しくすればすぐに騙されて勘違いする。

「もううんざり……」

公園のベンチに腰掛けて小さく、小さく呟いた。

「お嬢様！」

「え？ きゃあ！」

いつの間にか黒っぽい生物がこちらを睨んでいた。

「お嬢様！」

SPたちが千華を護るよつに動き、黒っぽい生物がSPたちに襲いかかった。

「ようやく放課後か」
やっとこの一日が終わつた。
早く帰つて布団で寝たい。

琴鳴もすでに帰ったみたいだ。

「閨」

「いやだ」

「まだ何も言っていないわよ！」

何を聞かれるかだいたい分かるし。

分かるけど答えるつもりは全くないし。

溜め息を吐きつつも神無月の方を見る。

「俺の能力について聞きたいんだろ？」

「教えてくれるの？」

正直なのはいいことです。

まあ正直だろうと嘘つきだろうと言わないけど。

帰ろうと教室を出ると後ろからついて来る。

まあついてくるのは「離れない」って言ってたからいいんだけど
一応訊こう。

「なんでついてくんの？」

「別に家の方向一緒だからいいでしょ？」

「あれ？ 俺の家知ってんの？」

「えっ、いや、それはその……うっ、うるさい！」

顔を赤くしながら思いつきり顔を殴ってきた。

グーで。女の子がグーで殴るってどうなの？

言ったらまた殴られそうだから黙ったけど。

「ごめんなさい」

「分かればいいのよ」

俺が謝る理由はないだろ。

むしろ謝るべきは神無月だろ。

殴られた右頬を押さえつつ、自分の女性に対する無力さに悲しく
なって溜め息を吐いてしまう。

「殴られたくなかったら説明しなさい」

「脅迫ですか。すでに殴られたけど」

「脅迫じゃないわ。普通の女の子が普通をお願いしてるだけ」

「普通の女の子は拳に力を込めてお願いしないと思う」
脅迫にも負けず校門を出る。

会話しながら家へ向かって歩いていた。

家の近くにある公園が見えたから家はもうすぐだ。

「殴られても話さないぞ」

「じゃあそのことはいいいわ。なんで今日は武具を持ってるの？」

俺は今日、“ある生物の角”を加工して作られた鞘。

その鞘に納められた刀を携えている。

武具とは人が人を護るための武器。

民間人の所持も許されている。

「それは……ってあれ、琴鳴？」

「へ？」

公園には琴鳴と一匹の犬のような黒っぽい禍々しい生物、琴鳴を護るようにスーツ姿のSPらしき男性たちが黒っぽい生物と対峙している。

よくみればスーツ姿の男性たちは怪我を負っているみたいだ。

「あれは……魔獣^{まじゅう}か」

魔獣——獣が地獄界に堕ち、闇の力を得て凶暴化した獣。

強大な力を得たかわりに一般的に知能が低い。

「助けないと！」

「……」

「ねえ、聞いているの？」

「……いやだ」

「なに言ってるの！？ このままじゃ琴鳴さんが危ないのよ！？」

あんたは力を持ってるのに助けないの！？」

なにを言われても俺は闘いたくない。

ほっといてくれよ！

「っ……もういいっ！」

最後にそう怒鳴って神無月は走り出す。

その姿を俺はただ見つめるだけ。

神無月は助けることしか考えてない。

——この刀は何のためにある？

不意に頭に浮かんだ疑問。

この刀は人を護るためにあるんじゃないのか？

今この刀を抜かないでどうする？

相手は獣。命を奪うことにためらいはあるが琴鳴を助けるためだ。何を迷うことがある？

「俺は馬鹿だな」

一言呟き、魔獣へ向かってつむじ風を起こしながら走る。

「きやつ！？」

突然の強風に驚いた神無月を尻目に加速を続ける。

右手で左腰に差した刀の柄を握り、勢いよく刀を振り抜いてすれ違いざまに魔獣を斬る。

刀を鞘に納めて斬った魔獣の方へ振り向く。

魔獣は呻きながら体が風に吹かれる砂のようにさらさらと消えていく。

「ふう……大丈夫？」

「え？ あつ、うん。助けてくれてありがとうね」

「お嬢様！？」

「あつ、しまった！」

あれ？ 琴鳴つてもっと丁寧な口調で喋ってなかったっけ？

「うっ……ばれちゃったあ……」

溜め息を吐く琴鳴はいつもの物静かでお淑やかな姿はかけらもない。

「ええっと……」

二重人格？ って訊こうと思ったけどその前に説明してくれた。

「説明するとあたしはこっちが素なのよ。普段学校ではお嬢様を演じてるだけ。まあ本物のお嬢様だけだね」

ニヤリと子供っぽく笑う琴鳴の姿を見ると納得するしかない。

「それよりさっきの抜刀術よね！ 斬った姿が見えないくらい速い

なんてすごいじゃない！」

刀を鞘に収めた状態から刀を抜き放ち一撃を加える抜刀術。

刀を抜く時に鞘で刀を滑らせて加速させることによりかなりの速度と威力を持った一撃が放てるが隙が大きく実践向きではないとされている。

「知ってるの？」

「勿論！ すっごいかつこよかった！」

無邪気に目を光らせるお嬢様。

あゝ、明るい顔をしてる方が可愛いな。

そんなことを考えてるといきなり頭にかかどが落ちてきた。

「ぐおっ！？ か、かかと落として……」

あまりの衝撃に涙が出てきた。

かかと落としてはマジで危ないって。

犯人である神無月は何故か不満そうに俺を睨んでいた。

「ふん！ まあちゃんと助けたんだからこれぐらいで許してあげるわ」

神無月め。俺が何をしたと言うんだ。

しかもなんで上から目線なんだよ。

「ちよつと神無月さん！？」

「気にしないで。閨は蹴られて喜ぶから」

「そ、そうなの？」

「変なこと言うな！ 俺はそんな性癖は持ってない！ そして琴鳴信じるな！」

目を丸くしてこちらを見てる琴鳴。

驚いてるみたいだが俺は至ってノーマルだ。

「そっか。なんか安心したよ」

ほっと胸を撫で下ろす琴鳴。

俺も安心した。

危つく変態扱いされるところだ。

「それじゃあ閨、帰るわよ」

「はいはい」

動いて疲れたから早く帰りたい。

帰ろうとすると何故か袖を掴まれた。

「琴鳴はじーっと俺の顔を見ていた。」

「どうかした？」

「天月はさ……」

「ん？」

「あたしのこと好き？」

「……は？」

いきなり名前で呼んだり好きって訊いたりこの子はどうしたんだ？

「お嬢様！？ お嬢様には婚約者が」

「あんな人認めてないもん！ あたしは天月と結婚する！」

え？ これは一体……ドッキリ？

「うゝるゝうゝ！」

「殺気！？」

殺気を感じた瞬間、神無月に後頭部を蹴られた。

その衝撃で意識が闇に薄れていく……。

「ふゝん。なるほど」

何かが分かったように顔をしかめる千華を見てたじろぐ瀬津奈。

「な、なによ？」

「あなたも天月のことが好きなんでしょ？ 違う？」

「な、何言ってるのよ！？ そんなわけないでしょ！」

顔を真っ赤にして否定する瀬津奈。

その様子に千華は確信した。

「でもあたしは負けないからね！」

高らかに宣言する千華。

千華とは対照的に瀬津奈は悲しそうに目を伏せる。

今も目を閉じると思い浮かぶ大好きだったあいつの顔。

「あたしは好きにはなれないよ」

あいつのことを忘れてしまうから。

その眩きは千華には聞こえなかった。

二話：仮面を被ったお嬢様（後書き）

製作裏話その2

二話更新です。

キャラ設定ということでは主人公の天月から。

名前は最初から『天月』でしたが名字は『閏』か『閏月』かどうするか迷いました。

結局は『閏』になりましたが。

あと容姿は銀色の長髪のイケメン設定でしたww

今は普通の男の子設定ww

さて、高校の宿題するか……

三話：相性最高の契約獣は義理の姉

「うーん、よく寝た」

普段寝起きが悪くて三十分くらいぼーっとしないと行動できない俺が珍しくすつきり目覚めた。

「かなり余裕あるな」

二度寝する気も起きないので制服に着替えて学校に行く準備をする。

洗面所で顔を洗って冷蔵庫の中身を確認していると家の前に車が止まる音がする。

「……まさか」

もしかしてまた？

確認のため玄関に行つて扉を開けると見るからに高そうな車が一台止まっていた。

「あれ？ 今日早いね」

車から降りてきた少女、琴鳴千華は俺の姿を確認して驚く。

「やっぱり……」

これで土日挟んで7日連続で家まで迎えに来た。

「もしかして今までもこの時間に来て待ってた？」

「そうだよ？ でも天月のためならいくらでも待てるよ」

うわー申し訳ない……とりあえず聞いてる方が恥ずかしくなる言葉とウイंकは無視する。

「ふーん」

「あれ？ 神無月までなんで？」
すっごく睨んでるよ。

目茶苦茶殺気を感じるよ。

これは謝った方がいいのか？

「えーっと……」

「さっさと鞆取ってきなさい！ 遅刻するわよ！」

「はい！」

いつもより30分余裕あるから遅刻はしないと思うけどね。
てか朝食まだなんですけど。

どうせ冷蔵庫の中身は空っぽだけださ。

「取ってきたよ。ちよつと早いけど行こうぜ」

「うん。それじゃあ爺帰っていいよ。ありがとうね」

「行きましようか」

俺の嫌味は軽くスルーかよ畜生。

「早く行こうよ」

「なっ、琴鳴！？」

「もっ、千華って呼んでずっと言ってるじゃん」

いやいやいや、名前で呼ぶとかそんなことより腕に抱きつくな！
後ろから怖い視線が送られてるから！

「さっさと歩きなさいよ」

「うん、ちゃんと歩くから背中を蹴るのは止めて頂きたい」

最近よく暴力受けるな……。……。

今日の三時間目は獣術の実技授業。

今は屋上にて担当教師による説明中。

「一度召喚した獣と契約することで次からもその獣を召喚できる。

そついう獣のことを契約獣と呼ぶ」

誰も聞いちゃいないけどね。

自分の契約獣を召喚できるってことでテンション上がってみんな
喋りまくりだ。

「契約獣は召喚主の魂に応じて召喚されるから相性が最高の獣が召
喚されるはずだ」

獸術担当教師の柏原先生は『人の話を聞かない奴が悪い』と一番最初の授業で言い切り説明中に何してようと無視して説明する。

それで分からないところを聞いても『説明しただろ?』の一言で一蹴される。

ある意味凄い人だ。

「陣、展開」

先生の言葉で展開される陣形。

十二個の丸の中にそれぞれ干支の文字が刻まれて丸を頂点として丸同士が繋がって正十二角形となっている。

「この陣の中心に左手を置いて右手を胸に当てる。あとは神経を集中すれば召喚できる」

出席番号の一番から始めていく。

俺は五番だからすぐだな。

結果は分かっているんだが。

「天月様はどんな契約獣でしょうね?」

「さあ……」

学園では一応本性を隠している千華。

でも俺にはすでに契約獣がいるからする意味ないんだよね。

瞳術が使えない問題児が授業前に契約獣がいるなんて騒がれそうだ。

「次、聞」

「はい」

とりあえず片膝をついて左手を地面に置いて右手を胸に当てる。

適当にして変な獣が召喚されたらめんどくさいので真面目にする。目を閉じて周りの息遣いが聞こえるまで神経を集中させると目の前の空間が光り出す。

「……ん?」

「あれって……?」

周りは何故かざわつき出したのでゆっくり右目を開ける。

光はすでに収まっており、目に飛び込んできたのは大きなリボン

を付けた長くて綺麗な茶色の髪。

整った小さな顔にすらりと伸びた長い手足。

制服とは違う純白のワンピース。

間違なく人。

しかも俺の知ってる人物だった。

「……リン姉？」

「えっ？ ツキ君？」

これは一体どういうことだ？

「……なるほどね。まさか私が召喚されるとは」

何故か召喚された漣凜鈴ことリン姉は溜め息混じりに言葉を吐き出す。

俺は屋上の隅で正座させられて説明することになった。

先生は人を誘拐犯扱いするし、リン姉は実の姉じゃないって言う
と神無月と千華は怒るしでなかなか大変だった。

「うゝん、私が“はじまりの森”の近くに住んでるからかな？」

召喚される獣は全て“はじまりの森”という森に住んでいる獣が
召喚される。

そしてリン姉は森の近くっていうか森の中にある村に住んでいる。

「そ、それだけの理由で人が召喚されるんですか！？」

流石神無月、的確なツツコミだ。

「それは私とツキ君の相性が最高だったからじゃない？」

ニッコリ笑って爆弾発言をするリン姉。

誰も瞳術を使っていないのに空間が割れる音がした。

無言で睨み合う三人。その中心に俺。

他の生徒も授業そっちのけでこちらを見てることにいい加減気付

いて頂きたい。

「修羅場だな」聞

先生も見てるだと!?

しかも冷やかされたぞ!

「あの、お三方? そろそろ落ち着いてもらえませんか?」

なるべく下手に出たが三人の威圧感に敗北した。

駄目だ怖い、引き下がるしかない。

「連様でしたか? 今日のところはお引き取り願えませんか?」

どこまでも丁寧な口調だが、その裏に隠れた怒りが見え隠れしている。

「そんなこと言われても……連れてきたのはツキ君だし」

「聞! 何とかしなさい!」

「俺かよ?!」

何とかしろと言われても……でもこのままじゃ怖いし。

「はあ……分かったよ」

今更目立つも何もないか。

立ち上がって人差し指で目の前の空間に“隼”の一字を刻む。

文字が光り出し現れる普通サイズのハヤブサより2倍以上大きい
俺の契約獣疾風隼。

「久しぶりだな疾風」

「キイイイ!」

心なしか嬉しそうに鳴く疾風。

俺も久しぶりで嬉しくて頭を撫でる。

「それじゃアリン姉を送ってくれ」

頷く疾風。これで問題解決だ。

「あんた契約獣いたの?!」

「流石は天月様です」

「疾風久しぶりね」

「なんだ、いるならいるって言えばよ」

説明が残ってたー!

目茶苦茶めんどくさい！

「ほらリン姉、早く乗って」

「え……？」

何故か暗い表情をするリン姉。

嫌な予感がプンプンする！

「ツキ君……私のこと嫌いになった？」

そう言っただけとあまり身長が変わらないのに、ちょっとしゃがんで目に涙を溜めた上目遣いで俺を見ってくる。

「いや、嫌いになんてなっていないから！」

「本当に？　じゃあ私の好き？」

「なっ？！　いや、だからその……」

「うるたえるな〜！」

飛び蹴りもらいました。

爪先がこめかみにクリーンヒット。

「天月様！　貴方様には私がおります！」

「どさくさに紛れて何言っただのよ！」

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

「誰のせいですか！」

見事なハモリ。

もちろん原因はリン姉だ。

こめかみが痛むのもリン姉のせいだ。

「大丈夫、ちゃんと帰るから。私もこのままじゃ困るしね」

疾風に飛び乗るリン姉。

ようやく帰る気になってくれたか。

「ごめんなリン姉」

「気にしないでよ。その代わりまた遊びに来るからね。そちらの二人も」

疾風が羽ばたき、青い空の彼方へ飛んで見えなくなる。

凜鈴の言葉が後に現実となり、一騒動起きるとはこの時は誰も知らなかった。

「まさかこんな形でツキ君と再会できるなんてね」

雲の上を飛ぶ疾風の背中、凜鈴は嬉しそうに呟く。

「にしても女の子二人も側にいるなんてツキ君もやるな」

本当は少し怒ってるけど。

怒ってたから少しかかったんだし。

「私不利かな」

眼下に広がる雲を見つめて。

凜鈴は頭の中で作戦を練るのだった。

「何か喋ったら？」

「……」

「あたしも天月の話聞きたいな」

二人の機嫌が悪い。

その二人に挟まれて下校してるから気まずいことこの上ない。

「閨天月だな？」

「はい？」

前方に立ちふさがる大男。

先輩っぽいけど俺の知り合いにこんな人いない。

「大河内に頼まれて潰しに来たぜ」

「大河内？」

「ほら、入学式の日」

「あゝ、そういえばそんなことあったな」
すっかり忘れてたがいたな、そんな奴。

「大河内なんてどうでもいいや。ところで先輩、あなた死人しにんですね？」

「え？」

「天月？ 何言ってるの？」

死人——死んだ人間や獣の魂、死魂しこんが生きた人間に憑依すること。
憑依された期間が長いほど憑依された人間は人格を失い、死魂は
体に馴染んで離れにくくなる。

「……ナルほど、ヨク見破ったナ」

急に雰囲気が変わって口調もおかしくなる。

「また戦闘かよ……」

文句を言うが誰も聞いてくれない。

仕方なしに前に出る。

「頑張つてね天月！」

目をキラキラさせてるが俺は闘いたくないんだよね。

「ほら、早く来いよ。死人に手加減はなしだ」

「ガああアアああ！」

「二人とも下がって」

結構速い速度で突進してくる。

対する俺は左腰の刀の柄を握って抜刀術の構え。

「ぐオオオオっ！」

振り上げた手を俺に叩きつけようとしてくる。

刀を振り抜き右手を斬り捨てる。

「ギャああアアあ？！」

苦しそくに叫ぶが俺は右腰の刀の柄を握る。

「月に祈れ」

抜刀術で腹部を斬りつける。

先輩から出てくる黒い塊。

「オのれ、おのれーっ！」

「うるさい」

逃げようとする黒い塊を飛んで斬る。
膝を折って倒れる名も知らない先輩。

「あー疲れた」

「そ、その刀なんなのよ！」

「私も気になるう」

「あ」

両手に握った刀には刃が無い。

刃があるべき部分は波動が刀の形になって刃の代わりとなっている。

「んゝ、とりあえず波動を流さないとこんな感じ」

刀に波動を流すのを止めると刀身の短くて細い刃が現れる。

「え？ どこから？」

「す、すごい！ すごいすごい！」

「こいつの名は神宝具しんほうぐ、無刃想むじんそう。俺の相棒だ」

神宝具——天界に住むとされる天人てんにんの武器。

武具とは比べ物にならない強力な力を秘めている。

「し、神宝具って天界の武器じゃない！」

「そ、そんな超絶高級品あたしでも持ってないよ！」

おお、超絶金持ちの千華が持ってないっていうのは優越感を感じるな。

「知り合いから譲り受けたんだよ」

「知り合いいたの？」

相変わらず失礼だねこの毒舌ツンデレ美少女は。

本気で意外そうなのが泣けてくるぜ。

「天月やつぱり好き〜！」

「なっ？！」

笑顔で腕に抱きついてきた千華。

それを見た途端神無月が睨んでくる。

拳を振りかぶる神無月……拳？

「え？ ま、待つて、その……」

「誰が待つかあああああ！」

はい、顔に拳をもらいました！。

誰か吹き飛ばさないで踏ん張った俺を褒めて下さい。

三話：相性最高の契約獣は義理の姉（後書き）

裏話その3

本当は昨日投稿したかったんですが、高校のクラブ行って疲れたので……。

凜鈴は予定では登場まだだったんですが、閃いたので登場させましたww

三話まで女の子登場↓敵を倒すの流れになってますが、次話からはバトル多めになります（*^|^*）

四話：闇夜に飛ぶは命を刈る哀しき鴉

真つ暗な空の中に光る満月。

月の光り以外届かない夜道。

俺は一人家へ向かつて歩いていた。

「はー、疲れた」

現国の授業でつい宿題やるの忘れて八時まで居残りさせられた。
宿題忘れたの初めてだったのにさ。

次からはちゃんとやろう。

「あれ？」

暗くてよく見えないが多分鳥が空を飛んでいた。

その鳥を見ていると背中になにかが刺さった感触がした。

自分の体を見ると刀が刺さっており血が流れていた。

「なっ……」

首だけ動かして後ろを見ると俺と同じくらいの年齢の男が立っていた。

「もうすぐ五月か」

早いもので入学してから一か月近く経とうとしていた。

この一か月で何故か俺は無刃想を常備するしかない状態になってしまった。

未だに瞳術使えない問題児扱いだし。

瞳術使えないくせに契約獣が授業前にいるとか神無月や千華と一緒にいることで周囲からは（主に男子）疎ましく思われている。

「なあ天月」

「ん？」

「なんで宿題忘れたくらいで居残りせなあかんねん」

「俺に言わないでくれ」

人の少なくなつた放課後の六組の教室、すでに帰つた千華の席に座っているこの男は万軸銀。ばんじくしろがね

整つた顔立ちに大阪出身らしくて明るい誰とでも仲良くできるキヤラから学年の人気者である。

運動はできるが勉強面は残念な感じで瞳術もほとんど使えなくて一緒に補習を受けてるうちに仲良くなつてしまった。

いや、銀は頭悪いけど俺はそこまで悪くないぞ？

居眠りとかたまに宿題忘れたりとかで補習に呼ばれるだけで成績は並だからな？

「誰に言い訳してんだろ？」

「どうしたん？」

「なんでもない」

「ふゝん。あつ、ちよつと耳貸せ」

「なんだ？」

耳を貸すと息を吹き掛けてきたので顔を平手で叩く。

「いったゝ！ 冗談や冗談！」

「次は殴るからな」

鼻を押さえながら頷いたのでとりあえず耳を貸す。

「実はな、お前が殺し屋に狙われてるって話があるねん」

「殺し屋？ てかその話どこから？」

「情報源を話すと天月が危なくなるから言われへん」

「俺も聞きたくないから言うな。まあ一応気をつけるよ」
「実際信じてないけど。」

とりあえずさつさと課題をやつてしまおう。

俺は課題をやるうと気合いを入れるが、教室の扉が開いて椿先生の顔がひよっこり現れた。

「天月くゝん、ちよつと手伝つてゝ」

俺を名指しなのはなんでだ椿先生。

「はい……」

仕方なく手伝いに行く。

現国の教師も許可してくれた。

「それじゃあまずはこれお願い」

ちよつと大きめの段ボールを指差す椿先生。

持ち上げて先生の指示通りに運ぶ。

先生が手ぶらなのが気になったがこの際知るか。

段ボールをあっちに運んだりこっちに運んだり蛍光灯取り替えた
り壊れた扉修理したり。

大半が生徒のお手伝いレベルではないものだったが。

「ありがとう天月くん。これで終わりだから補習頑張ってね」
椿先生に見送られながら教室に戻る。

普通に三時間程かかったんだけどどうということだ？

時間は六時半、補習が終わってることを期待して扉を開けると教
室には誰もいなかった。

「これはもう帰ってもいいよな？」

よし、帰ろう。

自分の机に向かうと机の上に一枚の手紙が置いてあった。

「この字は先生？」

とりあえず一応読んでおくか。

『お前がいつまで待っても帰って来ないので先生は帰ります。課題
は今日中にやって職員室の先生の机の上に置いといてくれ』

「読まなければよかったああ~~~~~！」

静かな校舎に響く俺の悲痛の叫び。

読まないで破り捨てればよかった！

「はあ……」

このまま帰ったら明日も居残りさせられそうだな。

椅子に座ってシャーペンを取り課題を始める。

静かな教室で黙々と課題をする俺。

段々と終わりが見えてきてペースアップする。

「終わったー！」

課題に一時間かった。

職員室に行ったが先生が誰もいなくて、公務員さんに開けてくれるように頼んだが何故か侵入者に誤解されて説明するのに三十分かかってしまい結局八時。

「はー、疲れた」

さつさと家に帰って寝よう。

こういう時でも一人暮らしは自炊するしかないからめんどくさい。

「あれ？」

空を見上げると暗闇の中鳥？ が飛んでいた。

「ん……」

鳥に違和感を感じて見ていると背中に何かが刺さった感触がした。刀が抜けると地面に倒れ込む。

「お前に恨みはないが……悪いな」

「誰に謝ってるんだ？」

「……ほう」

塀に腰掛けている俺を見て黒いコートを羽織った男は少し意外そうな顔をした。

ズボンも黒で全身黒ずくめ。

夜にこんなことするにはぴったりの格好だろう。

整った顔立ちで……あれ？ どこかで見た気がするぞ？

「どういうトリックだ？」

「は？ なにが？」

「とほ惚けるな」

「はいはい。訊きたいのは俺が無事な理由だろ？ 幻術だよ」

「幻術か……なるほど」

納得したようで倒れている方の俺を見ている。

そしてその体が霧散する。

「きりがすみ霧霞」

一度攻撃を受けたように見せかけて時間差で体が霧散する幻術。
勿論本体は無傷。

「暗殺に失敗したのは久しぶりだ」

「さらっと暗殺なんて言っちゃって。殺し屋か？」

「その通りだ」

こっちは冗談のつもりだったのに。

銀が言っただのは本当だよ。

「暗殺を防いだことに敬意を表し、名乗っておくか。」

“やみよがらす闇夜鴉”の

とこほつよるや
東宝夜鷺だ」

「東宝？ 聞いたことあるような」

「お前と同じ琴鳴学園の一年だからな」

「あー！ 思い出した！」

確か銀が一緒にすごい奴がいるって言ってたな。

夜鷺は黒い刃の切っ先を俺に向ける。

「黒刀か」

「早く刀を抜け」

「俺は闘いたくないんだけど？」

「待ってるから早く抜け」

「正々堂々闘おうってか？」

「暗殺に失敗した時点で顔は見られてるからな。どう闘おうと俺の自由だ」

「夜道に背後から刺した人間の台詞かよそれが」

塀から下りて刀を鞘から抜く。

「逃げたらまた襲ってきそうだからな。そうすると他の人が巻き込まれる可能性がある」

「……行くぞ」

正面から猛スピードで突っ込んでくる。

それを俺は飛んで回避する。

夜鷺も飛んで突きをくりだす。

身体を捻ってなんとか攻撃をかわす。

「黒妖くくちゆう」

刃が舞うように上下左右、様々な角度から天月に襲いかかる。避けきれず攻撃をもろに受けて全身に痛みが走る。

「いつてゝ！」

たたみかけるように右脚の蹴りを横腹に喰らって吹き飛ぶ。

「がつ！」

吹き飛んだ軌道上には塀がある。

空中で一回転して両脚で塀を蹴る。

その加速で夜鵒に突進する。

「っ！？」

身体に走る悪寒。

刀を振りかぶっていた手が震える。

「残念だったな」

夜鵒は塀の上に立っており、突進の勢いを失った俺は落下する。

「くっ……まさか幻術か？」

「魔宝具まほうぐ、黒刀くろへの黒紅闇夜幻くろべにあんやまぼろし」

「長い名前。しかも魔宝具かよ」

魔宝具は地獄界に存在する武器。

その価値は神宝具と同様に武具とは比べ物にならない。

「こいつの刃に斬られた者は強制的に幻術にかかる。幻術の内容は俺の波動の流し方で変わるがな」

ダメージより幻術をかけることを目的としてるから傷が浅いのか。斬られた痕には少し血が滲んでるくらいで致命傷には至っていない。

「危ない武器だな。それで俺にはどんな幻術をかけた？」

「じきに分かるさ」

会話途中から視界が暗くなっていた。

「これが幻術の内容ね」

だんだんと周囲が真っ暗になり、完全に視界が暗黒に沈む。

「時間をかけたくないから一気に終わらせるぞ」

夜鷯の左手には一本のナイフ。
黒羽

そのナイフが突然四本に増えて天月に投げる。

空気を斬り裂きながら天月へ向けて飛んでくる。

天月は刀を振ってナイフを叩き落とす。

「音か」

「視覚がはたらかないくらいで勝った気になるのは早いぜ」

「……視覚だけじゃないさ」

「は？」

「気付かないか？」

「……まさか」

夜鷯の声も、天月自身が発した声も天月にはほとんど聞こえなかった。

「闇は全てを飲み込む……お前の負けだ」

見えない。聞こえない。

出し惜しみする状況でもない。

天月は手探りで左目の眼帯を外す。

左目の色は黄色。

両手の人差し指をつけて離す。

「瞳術か？」
鎖放電

——
身体からだの表面に迸る電流。

その電流が鎖の形をして天月を中心に全方位に流れます。
「ちっ」

夜鷯は後ろに飛んで電流を回避する。

だが電流の速度には敵わない。

「ぐっ！」

威力はあまりないが天月の目的はダメージを与えることではなかった。

全方位全てを攻撃する雷の鎖。

鎖の当たった感触は天月に夜鷺の居場所を知らしめた。

「……月に祈りな」

瞳の色が白色に変わる。

右手の人差し指と中指を立てて横、縦、横、縦と直線を空間に刻む。

——光の世界ひかりのせかい

「なんだっ……?!」

白い光が夜鷺を覆い、夜鷺の姿が光で見えなくなる。

「これ……はっ……！」

数秒か数分か、光が収まった時には夜鷺は倒れていた。

「あ、目が見える」

自分の声も聞こえるし幻術は解けたみたいだな。

俺は倒れている夜鷺を見下ろす。

「あんたの負けだよ」

「……そうみたいだな」

対象者を光に包み浄化する、白色の瞳術の中でも強力な光の世界。加減しても左目の負担は大きい。

「あんた程の実力があってなんで殺し屋なんてしてるんだ？ なにか理由があるんだろう？」

「……長くなるが聞いてくれるか」

俺は黙って頷き、仰向けに倒れている夜鷺の言葉に耳を傾ける――

とある会社の社長の一人息子として生まれた東宝夜鷺。

十年程前、今後の人生で彼が表の世界で生きていけない出来事が起きた。

両親とともに出掛けた旅行先で夜鷺は自分よりも恵まれた環境に育ちながらとても優しい少女に出会う。

夜鷺が怪我をしたところを助けてくれた少女。

夜鷺と少女が仲良くなり、夜鷺が少女を想うのに時間はかからなかった。

ある日二人が洞窟を探険していた時、あまりの暗さに二人ははぐれてしまった。

夜鷺は先に出てこれたが夜鷺がいくら待っても少女は出てこなかった。

仕方なく両親に話すと両親は自分たちが探すからここにいろと言い別荘を出た。

けれどもいつまで待っても両親は帰ってこない。

それもそのはず、両親は夜鷺を捨てたのだから。

少女の両親の財閥に圧力をかけられれば会社は倒産してしまう、

そう判断した夜鷺の両親は夜鷺を捨てた。

そして両親は夜鷺が少女の両親に捕まる前に夜鷺をある組織に売った。

金で人の命を奪う組織に。

幼い少年は人の命を喰らって生きた。

四話：闇夜に飛ぶは命を刈る哀しき鴉（後書き）

高校のクラスに友達がいらない（TOT）

ロントリーですよww

製作裏話その4

近況報告はほどほどにします

今回は女の子が椿先生だけでしたが……

次話も新キャラ出てバトルルートになります

瀬津奈も千華もちゃんと出ますよww

来週から授業始まるので更新いつになるか分かりませんが（・ω・）
ノ

……これ次回予告じゃんΣ（　　；）

五話：重なり奏でるゝ全てを縛る鎖ゝ

午前中の授業が終わった昼休み。

弁当を食べた俺は机に突っ伏してあくびを一つ。

「あゝねむ……」

「あんたいつもねむいねむいって言ってるじゃない」

千華と机合わせにして弁当を食べながら律義にツッコむ神無月。
いつの間に仲良くなったんだ。

もう四月末だし不思議じゃないけどさ。

「そうだけど今日は特別。昨日は全然寝れなかったから」

「なんで？」

「ちよつと用事」

今度こそ寝ようと目を閉じたらクラスの女子に声をかけられた。

「閨くん、東宝くんが呼んでる」

「……ありがとう」

人の睡眠時間を妨げやがって。

少々不機嫌気味に夜鷗の待つて廊下まで行く。

「なに？」

「ここじゃ話にくいんでな。場所を変えて話そう」

「了解。屋上にでも行くか」

どう考えても昨日の話だよな。

二人並んで屋上に向かう。

「あつ、夜鷗くん！」

「東宝くゝん！ こっち向いてゝ！」

「意外と人気者だな」

「うるさいだけだ」

「うわ、すつごいクール。」

女子に騒がれたら普通男子は嬉しいものじゃないの？

俺は騒がれたらうるさいし迷惑だけだ。

飛び交う黄色い声に戸惑いながらもようやく屋上に着いた。

「それで？ 俺は何を話せばいい？」

「昨日の夜中のうちに組織が潰された」

誰が潰したか分かってるくせにわざと焦らしてるな。

「組織専属の殺し屋に雇われた殺し屋、首領から構成員全て病院送りだ」

「それでも穏便に済ませたんだよ」

最初はビル丸ごと壊すつもりだったから十分穏便だ。

「なんでそんなことをしたんだ？」

「言わなかったか？ あんたを闇の呪縛から救いたって」

「聞いた覚えがないな」

「俺も言った覚えがないな」

「……」

「……」

すみません。ちょっとふざけました。

夜鷗は真面目に話してるし俺も真面目に話そう。

「あんたを救いたってのは本当だよ」

「俺はお前を殺そうとしたんだぞ？ そんな俺をどうして気にかける？」

「あんたはまだ戻れる。罪を償って生きるんだ。このままだといずれ後悔するぞ」

自分の想いを伝えて屋上を後にする。

きつと夜鷗なら大丈夫だろう。

「にしてもまずいな」

屋上の扉を閉めて右手を見つめる。

最近闘うことが多くなつて動きが段々戻ってきた。

動きが戻るのは構わないが瞳術を頻繁に使うことはまずい。

「このままだと……」

最近左目が疼くこともある。

俺は眼帯を外す。

左目を開けて何もない空間を見る。

「今度暴れたら俺も全力で止めるぞ」

俺の言葉に応えるように左目が疼いた。
眼帯を付け直して教室に戻る。

「しかしなあ」

行きと帰りでこんなに周囲の態度が変わるか。

みんな俺を見てヒソヒソ話してるし。

完全に馬鹿にした目で見てくるし。

教室に入ると銀が人なっこい笑顔で話しかけてきた。

「なあなあ、天月は知ってる？」

「なにを？」

「今の二年は凄い人が集まってること」

「あゝ、聞いたことあるかも」

始業式の際に校長褒めちぎってたしな。

我が校の歴史で最高の学年とか素晴らしい才能を持っているとか
ウザいくらい。

二年を贖身しないように理事長は気を付けてるらしいけど。

「そんでこの学校の頂点に立つ五人のことをこう呼ぶねん」

勿体ぶつてると神無月が言ってしまう。

クインテット

「五重奏でしょ？」

「そうなの？」

大層なお名前。

言いたかったのか不満そうに口を尖らせて文句を言う銀。

「神無月」。俺が言いたかったのに先に言わんでーや。天月盗った
のは悪かったけどさ」

「なっ……何の話よ！」

顔赤いぞとからかってるけどその怒りの矛先は何故か俺に向く
んだから止めてほしい。

「分かった分かった。もう返すってほら」

面白そうに笑いながら俺の背中を押す。

ぶるぶる震えながら俺を睨んでるのはなんでだ？　こんな時に限ってストッパー役の千華はいないし。

「ばかあああ~~~~~！」

「ごふあつ！」

膝で鳩尾みぞおちを蹴るのは絶対反則だろ！　マジで生死に関わる！

「べ、弁当のハンバーグ吐きそう……」

「汚いこと言わないでよ」

そんな冷たい目で見ないでください。

俺はそんなことでは喜ばないぞ。

「ドンマイ天月。生きろよ」

親指を立てていい笑顔だが、お前のせいだこの野郎。

「あー！　天月大丈夫！？」

俺の姿を見つけて寄ってくる千華。

もうちよつと早めに帰ってきて神無月の暴力を止めてほしかったぜ。

「瀬津奈ー。暴力はほどほどにしてよー」

千華、止めが弱い。

最初からほとんど諦めてるじゃん。

「こいつが悪いのよ」

俺は悪くねー！

理不尽な暴力だ！

「ほら、天月立って」

「まさかこのままサバろうとか考えてないでしょうね？」

「ま、まっさか」

目茶苦茶考えてました。

でも神無月と千華に怒鳴られるし。

千華は暴力はないけどそういうのは許せないみたい。

神無月は問答無用で暴力。

もう怒鳴られた回数二桁いったぜ。

最後は「天月はあたしと結婚するんだからしっかりしてよー！」っ

て千華が言つて神無月に俺が殴られて終わる基本パターン。

「苛められとるお前は輝いてんで」

嬉しくねえよ畜生。

「ほんとめんどくせえ」

授業中の屋上、目付きの悪い男子生徒の姿があつた。

「弱いのに突っ掛かるなよ」

床に倒れている三人の生徒。

授業をサボつて屋上に来たところ、この男子生徒たちがいて喧嘩を仕掛けられたので逆に返り討ちにした。

あまりの手応えの無さにムシヤクシヤしていると屋上の扉が開いてメガネをかけた生徒が呆れた様子で屋上に来た。

「やっぱりここにいましたか」

「お前もサボリか？」

「貴方を探しに来たんです。サボるならもう少し見つかりにくい場所です。サボればどうですか？」

探しに来たくせにサボる場所を移すように助言するってどういうことだ。

いつも涼しい顔をしゃがって。

「なんで風紀委員長がいちいち探しに来るんだよ」

「代議員は君を怖がってますから。授業を抜けて貴方を探すはめになる僕のこと少しは考えてください」

人差し指でメガネをあげる。

その単純な動作も様になる。

「分かった分かった。大人しく戻るわ」

「少し待ってください」

教室に戻ろうとすると呼び止められた。

「お前は俺を連れ戻しに来たんじゃないのか？」

「すぐ済みます。君に頼みたいことがあるんです」

「あ？」

「一年生の閏天月君と闘ってもらいたい」

「閏天月？」

一年生だからという理由もあるが、聞き覚えのない名前だった。

「一年の大河内君、東宝君。そして三年生唯一の五重奏、沼津さん」

「沼津？」

黙って倒れている大きい男を指差す。

どこかで見たような気がする。

「あゝ。そっぴゃ口ばかりの奴いたな」

「先輩ですよ」

「弱い奴に興味ねえ」

「その点は同感です。閏君や君に負けたので彼は恐らく五重奏の称号は剥奪でしょう」

「どうでもいいがな。それじゃあ俺は閏って奴と闘えばいいんだな？」

「あまり派手にしないでくださいよ」

カバーするのは僕なんですからと、呟きが聞こえた。

「なるべく気を付ける」

「頼みますよ。五重奏の鍵錠楔君」

二年八組鍵錠楔。

呼称『鎖に縛られた番犬』。

「くあゝ……」

二時間目の化学の時間。

ついついあくびをしてしまう。

先生に睨まれたが気にしない。

この学園は瞳術や獣術、体育の代わりに武術がある以外は普通に五教科の授業などもある。

一応言つと俺は授業中に寝てる時間より真面目に授業を受けてる時間の方が多い。

そこら辺勘違い無いように。

「それじゃあ閨！ この問題の答えは？」

「はい。えつと」

問題に答えるために立つと何故か天井からなにかの破片が落ちてきた。

「なんだ？」

異変を感じて天井を見るとコンクリートの天井を派手な音を立てて突破り、俺に向かって伸びる幾多の鎖。

「閨？！」

「天月！」

鎖が俺に絡み付いて身動きが取れず、天井に向かって引っ張り上げられる。

「やべっ」

頭からコンクリートの天井に突っ込み、天井を壊してそのまま屋上まで連れてこられた。

「いつ……」

さらに鎖ごと身体が引っ張られて屋上の床に背中から叩き付けられた。

「立てよ。ここからが本番だ」

聞いたことのない声。

恐らくこの声の主が鎖を操って俺を襲った張本人だろう。叩き付けられた時に埃が舞って今はなにも見えないが。

「あーくそ、クラクラする」

頭から血が流れてるせいだが。

「ちゃんと立ったか」

どこか嬉しそうな声。

ようやく埃が晴れて声の主の姿が認識できた。

「一応自己紹介しようか。五重奏クインテットの一人、二年八組鍵錠楔だ」

「マジかよ」

先輩とは思ってたけどまさかの五重奏クインテットかよ。

こんなことしても許されるのか？

「一年六組閨天月です」

軽く貧血気味ですと付け足したら鍵錠先輩は楽しそうに笑うだけだった。

目付きの悪い鋭い目。

髪は目にかかる程の長さ。

身長は高めで贅肉ぜいにくの無い絞まった身体。

ちなみに瞳の色は金色。

つまりさっきの鎖は瞳術だろう。

「天月ー！」

「千華か」

みんな心配してるみたいだな。

普通いきなり天井突き破れば驚くか。

実際あの勢いでコンクリートに突っ込んだら死んでもおかしくないな。

流血で済んだのは運がよかったかもな。

「……うるさいな」

鍵錠先輩は両手の人差し指を立てて前に突き出し、右手は左斜め下、左手は右斜め下の方向に中央で垂直に交わるように動かす。

「発動、鎖くさりの防壁ぼうへき」

開いた穴を塞ぐように幾重に交わる鎖。

続いて開いた手の平を前に突き出す。

「捕縛ほさくの鎖くさり」

屋上の扉が開かないように絡み付く鎖。

これで屋上は封鎖されてしまった。

「それじゃあやろうか？」

「お断りします」

瞳術を発動してる隙に緩んだ鎖を無刃想で斬り裂く。

「なに？」

両手の無刃想を鞘に納め、鍵錠先輩に向き合う。

「俺は闘うつもりはありません」

「なら闘いたくなるまで攻撃し続けるぞ」

「どうぞ。その代わり耐えきれたら開放して頂けますか？」

「さあな」

左側頭部に襲いかかる鎖。

さっき俺が斬った鎖をそのまま伸ばして鞭のように俺を攻撃する。
変幻自在な鎖の乱舞が俺を確実に戦闘不能に追い込んでいた。

「とどめだ」

そう言って両手に握った鎖を伸ばして一気に俺に振り下ろす。

ここまでか。そう覚悟した。

死をもつて罪を償うのもいいだろうと。

この一撃を耐えても自ら命を絶とうと。

そう思った。

「——！」

「っ?!」

間一髪、ぎりぎりで鎖の一撃を避ける。

コンクリートは派手に砕けていた。

「今の声は……」

聞こえたその声は教室で天月の無事を祈っている二人の少女の声だった。

「前言撤回です、先輩」

両手の刀を抜き、右手の刀の切っ先を鍵錠先輩に向ける。

そっだ、俺にはまだ。

「そこないとな」

俺はまだ死ぬわけにはいかない。
護るべき人たちがいる。

五話：重なり奏でるゝ全てを縛る鎖ゝ（後書き）

高校生活が思いの他忙しいです。

学校↓クラブ↓宿題で自由な時間がほとんどないです。

更新ペースもどうなるかわかりません。

更新停止はありませんが。

文字数減らせばもう少し早く更新できるかもしれませんが……

六話：何人たりとも縛るは敵わぬ強き志

「避けて！」

二人が同時に叫んだすぐ後、強い衝撃が校舎に走る。

何故か天月に危機が迫っているように思い、叫んでしまった。

「天月大丈夫かな……」

「大丈夫やろ」

ところで、そう前置きを置いて銀は千華の方を見る。

「琴鳴喋り方おかしい？」

「え？ あ」

天月がうずくまっている姿を見たところから冷静さがかけてしまい、つい素で話してしまっていた。

「しまった……えーい、もういい！　これがあたしの本当の姿よ！」

教室中の生徒に向かって大声で堂々と開き直る千華。

その間もずっと瀬津奈は心配そうに鎖に塞がれた穴を見ていた。

「あいつが簡単にくたばるわけないやろ」

「……そうかもね」

「そうよ。天月が負けるはずないわ！」

そうは言ってるが千華も心配そうな顔で天井を見上げていた。

二人の心配は当たってしまうのだった。

「最初から本気で行くぞ」

楔は人差し指で素早く“戌”と大きく文字を描き、その文字が光り出す。

「ならこっちも」

対抗して“隼”と描き疾風を召喚する。

「鎖縛^{さばく}」

大型犬程度の大きさの鎖を身体中に巻き付けた犬が現れる。

「行きますよ」

天月は一瞬で楔の後ろに回り、背後から斬りかかる。

楔は振り返って手に持った鎖で刀を受け止める。

「危ねえな」

疾風が楔の背中を嘴で突き刺す。

突き刺さった瞬間に身体が鎖になり、音を立てて床に落ちる。

「くそ！」

楔の姿を確認しようと辺りを見回すが、鎖縛が吠えて身体に巻かれた鎖が天月に向かって伸びる。

鈍く光る金属のそれは少し掠っただけでも血が滲み出た。

「やすりみたいなものか？」

「失礼な事言うんじゃないよ」

天月の視界の左側、笑みを浮かべる楔の姿があった。

「やすりじゃなくて鋭利^{えいり}って名前がちゃんとあるんだよ」

「興味ないですね」

左腕の傷跡を指でなぞり、指に付着した血を舐める。

「つれないなあ」

そう言いながら手を下から上へゆっくり動かす。

両目の色が金色になる。

「螺旋鉄槍^{らせんてつそう}」

突き上げた右手に纏^{まと}った鎖。

肘の辺りが一番太く、そこから段々と細くなり、槍のようにもドリルのようにも見える。

鈍色の鎖が太陽の光に反射して鎖そのものが輝いているようだ。

「重瞳^{かさねめ}でそんな瞳術まともに食らったらやばいですね」

重瞳——両目とも同じ色、または違う色で瞳術を発動する。

片目の時より威力は何倍も大きい波動の消費が激しく、両目と

も違う色の場合は実力が足りないと発動すらできない。

「こいつのおかげで俺ももうほとんど空っぽだ。鎖縛」

楔の言葉に応えるように鎖縛が短く吠えて鋭利が天月に向かって伸びる。

「疾風！」

疾風は低く飛んで天月の下へ向かい、天月は疾風の背中に飛び乗って鋭利を回避する。

「斬れる鎖つてのは危険ですね」

左、上、下、右、様々な方向から鋭利が伸びてくる。

それを疾風は掠ることなく避けきる。

「当たりませんよ」

屋上を旋回していた疾風が床に落ちていた鎖の上を通った時、その鎖が動き出す。

「っ！」

「忘れられた罌わすれられたわな」

鎖が天月と疾風を縛って動けなくなる。

——まさか罌を仕掛けていたなんて。

疾風の攻撃を受けた瞬間に身体が鎖になった術は攻撃を回避しただけでなく、この罌に繋がっていたなんて。

「俺の方が上手ってことだ」

巨大な鎖の槍を振りかぶって天月を突こうとする。

鎖が身体に絡み付いた状態では確実に避けられない。

「案外つまらなかったな」

俺に向かってくる巨大な鎖の槍。

天月は目を閉じ、頭の中で疾風に戻るように念じる。

疾風が光とともに消えて縛っていた鎖に余裕ができて緩む。

鎖はまるで生きているようで再び縛ろうとしたが天月は逃れて楔へ向けて走る。

直撃した天月の身体は霧散する。

「ちっ、鎖縛！」

空振って隙だらけの楔を護るように鎖縛の鋭利が楔を囲う。

「意味ないですよ」

小さな隙間を通して楔の背後に回る。

左手で左腰に納めた刀を、右手で右腰に納めた刀を握る二刀での抜刀術。

背中を縦に真っ直ぐ斬り上げる。

「な……に……？」

鎖は消え、鎖縛も光とともに帰った。

楔も力尽きたのか俯せに倒れる。

「……斬られたのに痛みがないのはどういうことだ？ その代わり波動がほとんど感じられない」

ごろんと回って仰向けになる。

楔は確かに斬られたのに出血どころか切り傷さえ全くない。

天月は無刃想を楔に見せる。

「この刀の名は無刃想。刃に波動を流して人や魔獣を斬ると身体は斬らずに波動を斬ります」

「波動を斬る？」

「つまり、斬ったダメージ分波動を減らすんです。相手に傷は与えずに」

「なるほど」

人を護るための武器、それが無刃想。

天月の仲間も敵も傷つけず護りたいという気持ちに伝えてくれる刀。

「まだ力を隠しているだろ？」

「……なんのことでしょう？」

「はっ、不気味なこった」

「つてやべ」

頭から血を流した状態で動き回ったせいでフラフラしてきた。

「大丈夫か！」

扉を縛っていた鎖も消えて、屋上に教師や生徒がなだれ込んでく

る。

天月は瀬津奈と千華が駆け寄って来る姿を確認し、倒れてしまった。

「起きなさい！」

「んなつ！」

「ちよつ、瀬津奈?!」

み、耳が――!

強制的に起こされたここは保健室?

ベッドに寝ていたようですぐそばに二人が座椅子に座っていた。

「鍵錠先輩は動けるのになんであんたは寝てるのよ!」

そりゃあ鍵錠先輩は傷はないからな。

波動が減つてもちよつと休めば動けるようになるからな。

頭部強打した俺より回復するのが早くて当たり前でしょ。

「無事でよかったよ天月。本当に心配したんだから」

目に涙を溜めて俺を見つめる千華。

それに比べて神無月は心配したというより怒っているようだ。

「起きたなら早く授業に戻るわよ!」

「もー、瀬津奈ったら本当は心配してくせに」。恥ずかしがりやなんだから」

「ちよつと千華あ!」

神無月も心配してくれてたのか?

だとしたらなんか嬉しいな。

まあ授業に戻る気はないがな。

「そついや鍵錠先輩は?」

「先輩なら先生に担がれて保健室に来ただけだね。すぐにどっか

行っちゃった」

「そうか」

まああの先輩凄い自由だしな。

「あゝ、血が足りなくて頭痛い」

「また授業サボる気？」

「少しは怪我人に優しくしようとか思わないんですか神無月さん」

「まあまあ、先生も家に帰って休めって言ってたじゃない」

なら堂々と休めるのか！

こうしちゃいられない、早く帰ろう！

「あつ、でももし大丈夫そうなら授業に出るだつて」

「うっ、急に貧血が」

「嘘つくな！」

「ごふっ！ わ、分かったから」

諦めてベッドから下りる。

まあ本当は一回寝てある程度回復してるけどな。

頭に巻かれた包帯も邪魔なんでもどく。

「ちよつと！ なに包帯取ってんのよ！」

早速怒鳴られました。

だって痛くないんだから巻いてる意味ないだろ。

出血だつて止まってるし。

「大丈夫なの？」

「治った」

「そ、そんなに早く治るの？」

「回復は早いんで」

二人とも納得してないみたいだが、治ったのは事実だ。

「ほら、行くならさっさと行こうぜ」

教室に戻る道中、授業中なのに何故か教室の中から廊下を歩いている俺たちの姿を見てざわついている。

俺たちというより俺を見てないか？

「な、なんで？」

「授業中にあれだけ派手に暴れたんだから学園中にあんたのことが
広まってるわよ」

「しかも相手はあの鍵錠先輩だからね。五重奏クインテットの一人を倒せば噂に
もなるよ」

「ま、まじかよ……」

ただでさえ悪目立ちしてるのにこれ以上目立つことになるなんて
また目をつけられるじゃないか。

「はあ……」

溜め息を吐きながら教室の扉を開ける。

教室中が一気に静まりこちらを見る。

うつ。今すぐ逃げたい。

「早く入りなさいよ」

「わ、分かってる」

教室に足を一歩踏み入れるとクラスメートたちが一気に騒ぎ出す。
授業そっちのけで俺に色々言ってくる。

質問からわりと失礼なことなど、やっぱり噂は広まってるみたい
だ。

ここまで態度が変わるのか。

「あー、うー、いや、あのー」

ギヤーギヤーと一気に色んなことを訊かれて対応に困る。

騒ぎに気付いたのか他のクラスの生徒も廊下に集まってきた。

先生も收拾つかなくて困ってるし。

なにか解決する方法は……そうだ！

「銀！」

「なんや〜？」

人の波でどこにいるかは見えないが、どこからかのんきな声が聞
こえた。

ここは銀の出番だ！

「たこ焼き不味いぞ！」

一瞬静まったあと、銀の顔が般若のように変わる。

「ぬわぁんやとわれきさむぁー！」

うん、素晴らしく巻き舌で怒ってる。

銀は普段温厚だけど大阪に関することを馬鹿にすると引くぐらい豹変する。

案の定みんな驚いて固まってるし。

俺の後ろの二人も固まってるからよほどのことだ。

俺は一度これを経験したからな。

「座れきさまらぁ！ おのれらに大阪の素晴らしさを語ったろうやないかい！」

みんな大人しく席に座る。

暴動は治まったが今度はこいつを抑えなければならない。

すでに大阪の歴史を話してるし。

「落ち着け銀」

「さつさと座らんかい！」

「大丈夫だ。大阪は良い所だ」

「ほんまに分かってるやるなぁ！」

「安心しろ、大阪はいつか東京を抜いて日本の首都になるさ」

「そ、そっやんなぁー！」

ぱっつと笑顔になる銀。

相変わらずこいつ馬鹿だな。

「じゃ、授業を再開しますか」

その日は一日中みんな大人しく授業を受けていた。

「派手にやってくれたんですね」

「あ？」

放課後の屋上、そろそろ帰ろうと思っていたところにわざわざ現

れる男。

「鍵錠君。これだけ派手に暴れて負けるとは困ったものですね」
「うるせえ」

波動が一気に無くなっているまだに身体が動きにくい。

まさか負けるとは思ってなかった。

「なんであいつを気にする？ あいつは無差別に暴力を振るうような奴じゃないだろ」

「珍しいことに生徒会長が彼に興味があるみたいですよ」

「あいつが？」

俺も手合わせしたことはあるが、間違なくこの学園で最強の存在だ。

教師たちでもあいつには敵わない。

「まあ、彼はまだ動く気はないみたいですけどね」

ならどうする？ と言おうとしたら先にその答えを言われた。

「彼を僕の世界に招待しますよ」

「お前が出るのか？」

「はい。風紀委員長として、クインテット五重奏の一角を担うものとしてね」

やまぶきしおん二年二組山吹紫苑。

呼称『世界は手の平の中に《マイワールド》』。

六話：何人たりとも縛るは敵わぬ強き志（後書き）

裏話その5

その5であります。

五話では裏話お休みしましたからね。

これからもうということあると思います。

それでは瀬津奈の名前の由来でも話しましょうか。

『瀬津奈』って名前は『瀬』って漢字なんかかっこいいな〜というところからきまして。

名前の響きのよさも合わさって『瀬津奈』となりました。

名字も秘密がありますがそれはまた今度〜♪

終わり方がバトル展開っぽいですが次はバトルじゃないですww
恋愛メインの話予定なのでww

あ、「このキャラが好き！」とか「このキャラの番外編が読みたい！」とかそういう意見お待ちしてます（*^|^*）

七話：おかしな二人、異常に積極的

「やつほー！」

「やあっほおー！」

山に登る前に叫ぶ人は初めて見たぜ。

このクラスはここまで馬鹿だったのか。

椿先生も叫んでる辺りが悲しくなる。

「遠足か」

五月も中盤、俺たち一年は遠足で登山に来ている。

高校生の俺たちには楽勝な小さい山だ。

最終的には山頂でカレーを作る。

疲れる上にいちいちカレーを作るのも非常にめんどくさい。

よって俺は全く乗り気じゃない。

「ほら天月！ 行くよ！」

俺の手を掴んで引つ張る千華。

俺とは対照的に千華は前からこの遠足を楽しみにしていた。

こういう千華の純粋で素直なところはいいと思う。

「鼻の下伸びてるわよ」

「伸びてねえ」

何故だか遠足でまで不機嫌な神無月。

神無月は千華が俺に触ると大抵不機嫌になる。

神無月の気持ちはよく分からないが、俺は漫画の主人公みたいに

鈍感じゃない。

千華の気持ちには気付いている。

大体「あたしは天月と結婚する！」なんて何回も言われれば気付くさ。

けれどとはつきりとした言葉で答えを求められない限り俺はなににも言わない。

「元気出していっくよー！」

「ちょ、千華！」

「千華！ 閨！ そつぢやないわよ！」

登山ルートはちゃんと道になっているのだが千華はそれを無視して険しい道に入って行く。

神無月も後ろから追いかけてくる。

「やつほー！」

「先生、もう他のクラス言ってますよ。いい加減叫ぶのやめて行きましょう」

椿先生は未だに叫んでいた。

あの人実はダメ教師じゃないのか？

その先生の姿も段々木々に隠れて見えなくなった。

「あの一、千華？」

「なにー？」

「ここどこか分かつてる？」

「え？」

俺の言葉にようやく立ち止まり、辺りを見回す。

どれだけ見回しても生い茂った木々しか見えない。

千華は結構早足で歩いていたので、ようやく神無月が追いついた。

「あ、あれ？」

「なにしてるのよあんたたちは！」

怒っているが神無月、俺は悪くない。

いや、千華を止めなかった俺も悪いか。

「さつさと戻るわよ！」

ついてきなさいとでも言うように俺たちに背中を向けて歩き始める。

これだけ自信満々なんだからついて行ってもきつと大丈夫だろう。俺たち二人は神無月について行って山頂を目指す。

「方位磁石くらい持って来たらよかったかなー？」

「携帯も圏外だしな」

「誰のせいだと思ってるのよ」

「ぐ、ごめんなさい」

「悪かった」

神無月本気で怒ってるな。

そりゃあ自分もこんなことに巻き込まれたら怒りたくもなるか。

「あ、謝ってほしくなんかいいわよ」

少し早足になって進んで行く。

なんか森が段々深くなっていったのは気のせいかな？

「きゃあっ！」

「神無月！」

なにかにつまずいた神無月を支える。

ちよつと距離が開いてたからなんとか間に合ってたよ。

げ、神無月顔が赤くなってる。

危険な兆候だ。

「あ、ありがとう……」

「へ？」

ありがとう？ あの神無月が？ こんなに素直に？ いつもは問

答無用で殴ってくるのに？

恥ずかしがって目を逸らしてる。

「いや……その」

やべ、恥ずかしがってる神無月かなりかわいい！

俺も顔熱くなってきた。

そうだよな。神無月普段は暴力的だけど美少女だもん。

「ほ、ほら、自分で立ってくれ」

離れようとする何故か神無月が俺の服を掴んで離れようとしな
い。

「あの、神無月さん？」

「う、うるさい！ 足が痛い気がするからもう少し支えてなさい！」

気がするってなんだよ。

やっぱりおかしいぞこの状況！

「天月」

ぴとつと背中につつつく千華。

今までもわりとボディタッチはあったけどここまでのものはなかったぞ？！

「え〜つと？ 千華？」

「て・ん・げ・つう」

背中に頬を擦りよせる千華。

頬が少し上気してる。

なんだこれ？

恥ずかしそうに目を逸らしてる神無月を手で支え、頬を赤らめる千華が背中にひつついてる。

二回目だがなんだこれ？

おかしいだろこれ。

「聞……」

支えられている状態から俺の首に手を回し、そつと体を寄せる神無月。

鼓動が一気に三倍速です！

「あんななんて嫌いなんだから」

俺の目を見てくる神無月のきれいな目。

少し寂しそうな目をしている。

「あたしは見てくれないの？」

背中に何か文字を書いている千華。

少しかがんでいるのか上目遣いだ。

「あーもう！」

この状況に耐えきれず俺は逃げ出す。

ヘタレと笑いたければ笑うがいい。

「あつ、待ちなさいよ聞！」

「あゝん、天月待つて〜！」

有り得ないだろこれ！

誰かこの状況を説明してくれ〜！

「先生、閨君と神無月さんと琴鳴さんがいません」

「え？ 本当？」

本当は結構前からいなかったのだが、椿先生のテンションが上が
りまくりで聞いてすらくれなかった。

しかし全然帰ってこないのでもいい加減まずいと委員長は判断した。
言ったところで椿先生がどうにかしてくれるとは思わないが。

「んゝ、あの三人なら大丈夫でしょっ」

やっぱり。

行動を起こそうとすらしない。

頼る相手を間違えた。

「なあ委員長」

「なに？ 万軸君」

珍しく銀が真剣な顔で委員長に白い紙を手渡す。

「昨日この山について調べてんけど」

渡された紙には少々汚い字でこう書かれていた。

『ひつじやま ひつじやま
均山、別名人死山。』

学生の遠足の目的地として有名だが、近年獣の凶暴化や植物の異
常繁殖などで危険な山と見られている。

森の中で危険視されているのは獣よりも植物である。

整備された道でも獣が見られたり、動く植物が見られたりする』

「……は？」

おかしい点があり過ぎて反応に困る。

今視界の端で毒キノコがスキップしているのが見えた気がする。

「そういえばこの山の森にはおかしな香りが漂ってるらしいで」

「おかしいって例えば？」

「女性にだけ効果があるらしいねんけど、みじかな男性に対して異

常なくらい積極的になるらしいで」

まさかあの三人森に入ったんじゃ？

まずい、学校行事で不純行為があつてはならない。

ここは一刻も早く探さなければ。

「万軸君！ 三人を探しに行くわよ！」

「ええんか？」

「当たり前でしょ！ なにか間違いがあつたらどうするのよ！」

「いや、それより椿ちゃん蝶々追いかけて森に入って行つたけど」

「はあ？！」

確かにさっきまで元気に歩いていたはずの先生の姿が見えない。

というよりもこの場には委員長と銀しかない。

「ああ……頭痛い」

「大丈夫か？」

「とりあえず私は先生を探しに行くから万軸君は三人を探してくれ
る？」

「任しとき。さっさと見つけてみんなで遠足楽しもうや」

すでに楽しんできたように笑う銀の顔。

その笑顔に胸が熱くなる。

「そうね」

委員長も精一杯の笑顔で返す。

一年六組学級委員長園橋日和、恋の予感——。

「待て！ 落ち着け！ 二人とも落ち着いてください！」

「落ち着いてるわよ。いいからじっとしてなさい」

「あたしは大丈夫だから。ね、天月」

にじり寄ってくる二人。

夜鷗や鍵錠先輩なんて目じゃないピンチに俺は今陥っている。
逃げようとしたら背後にそびえ立つ大木に逃げ道を防がれる。
オーマイゴッド。

「えーい！」

「大好き〜！」

「あ、ちょ、待って！」

右側から千華が、左側から神無月が抱きついてくる。

俺を掴んで離さまいとしている。

二人とも俺の方を見ているらしき目は焦点があっていない。

やべえ、絶対やべえよ。

俺だって健全な男子高校生だ。

美少女二人に抱きつかれているこの状況を嬉しく思わないわけがない。

もし間違いが起きても今の二人なら許してくれるかもしれない。
だからって二人とも正気じゃないんだからなにかあっていいはずがない！

そっちはお互いの了承があってこそで……って二人が顔を近づけてくる。

「二人とも顔近い！」

「う、うるさい！ あたしだって恥ずかしいのよ！ 大体なんであ
たしからのよっ？」

「あつ、確かに。ここは天月が男らしさを見せるところだよね」

「は？」

二人とも目を閉じてなにかを待ってる。

この構えはあれですよね？

俺の手を握っているから逃げれないし。

超絶がけつぷちです。

「は、早くしなさいよ！ 別に待ってるわけじゃないからっ！」

「あたしじゃダメなの？」

これ以上追い込まないでください！

なにこれ？ 俺にどうしろと？

悩んでいると足音が聞こえる。

「天月〱、どこや〱？」

「銀！ ここだ！ 早く助けてくれ！」

助かった！ 救世主だ救世主！

「万軸！ もしこつちに來たら地球の裏側まで吹っ飛ばすわよ！」

「万軸さん。こちらに來られたら琴鳴財閥の力で社会から消します」

「すまん天月」

「諦めはやっ！」

確かに二人とも怖いけど！

千華に至つては個人の力じゃねえし！

足音が小さくなつていく。

そして聞こえる女子の聲。

「万軸君！ どこ行くのよ！」

「俺には無理や！ 社会から消される！」

「なに言ってるのよ？！ この先にいるなら早く行きましよう！」

委員長ー！ 助かったー！

段々近付いてくる足音。

顔をのぞかせる委員長と銀。

委員長の顔が徐々に青くなる。

「閨君？ 君なにやってるの？」

「え？ いや、なにもしてないよ！」

「天月〱。積極的やな〱」

「ちがーう！」

「なに言ってるの、違わないわよ」

「そうだよ天月〱」

わ〱お、なんでこんなに集中放火？

「まあいいわ。閨君のことはあとで話しましょう。それより今はここを出ないと」

「そついや委員長、先生は？」

いや、もしかして先生も迷子？
ていうか俺が悪いの前提？

「一応見つけて道まで連れてったから山頂に向かってるんじゃない？」

「いやー、そうでもないみたいやで」

銀の視線の先には六組の元氣印がいた。

「あれー？ 君たちなにしてるの？」

「先生？！ なんでここに！」

「だってきれいな蝶々が」

「いい加減教師としての自覚を持ってください！」

「ご、ごめんね」

相変わらず委員長大変だな。

そして状況逆に悪くなってるやない？

「天月君。人前でそんなことする子に私は育てた覚えはありませんよ？」

「だから違いますって！」

いきなりそこにツツコむか！

「いいから山頂に行きましょう！」

「おー！」

「先にこの二人どうにかしてくれ！」

全然離れてくれないし。

むしろ痛いくらい掴んでるし。

「森出たら治るから急げ！」

「なんだよそれ！」

「やだ、天月大胆」

結局二人を抱き抱えて森を全力疾走、正氣に戻った二人と山頂まで走ることになった。

カレーの味？ 疲れてて覚えてない。

七話：おかしな二人、異常に積極的（後書き）

裏話その6

はい、七話です。最近頑張って書いてます。

それでは今回は千華の話を。

千華は最初『愛華』という名前の敬語で話すお嬢様キャラでした。一度高飛車な縦ロールお嬢様もいいな〜と思いました。そのキャラはまたいつか。

そしてなんだか子供っぽくなりました。

身長は瀬津奈とあまり変わらない設定ですけど。

あと八話はある限り押さえますが少々残酷な表現があるかも……まだ書いてませんし気をつけます。

以上、心臓検診に引っかけた風斬速斗でした（・o・）ゞ

八話：重なり奏でるゝ創られた世界ゝ

科学技術の発達していた世界に数十年前に発見された瞳の力。

その後さらに四つの力が発見されて五つ合わせて守護術と呼ばれるようになった。

まあこんなツマらん教科書を俺が読んでいるのはHRよりはまだまだだから。

「えー、今日こそ武道大会の参加者を決めたいと思います！」
内容は武道大会の代表決め。

武道大会は学校内で行われる武術を競うトーナメント形式の大会。
参加者は各クラスの代表が一名ずつ、つまり一学年に八クラスあるから二十四人。

推薦枠として各学年に二人ずつで六人。

教師が二人で合計三十二人。

二つのブロックに分かれて優勝を競う。

「絶対優勝よ！」

「……おー！」「……」

クラスがこれだけ盛り上がってる理由は代表者が優勝したクラスは一週間学食無料や琴鳴財閥の別荘に招待などその他様々な優遇が得られるからだ。

「盛り上がってるけど誰も立候補はしないんだよな」

プレッシャーが半端ないからな。

「あ、天月君は推薦枠で出場決まってるから。これで優勝確率も倍増よ！」

「はいっ?!」

今先生なんだって?!

俺が強制参加だと?!

「天月君は一年生の推薦枠で決ってるの。一年生の代表ってことだからその分注目されてるよ」

う、嘘だろ……

絶対鍵錠先輩のせいだ。

隣りで千華は目を輝かせてるし。

「頑張つてね天月！ 楽しみだなー」

これじゃ断れねえじゃん。

学校行事でまで闘いたくねえよ。

すると一人の女子が手を挙げる。

「私が出ます」

「瀬津奈ちゃんか？」

クラスがざわめきだす。

武道大会は当然男子の参加者の方が多いが、女子の参加も不利ではあるが認められている。

「よーし！ 天月君と瀬津奈ちゃんのタッグで優勝よー！」

「……うおおおー！」「……」

うわー、めんどくさ。

神無月と闘うことになったらどうしょ。

女子とは絶対に闘いたくないんだけど。

「じゃあ決めることは決めたしこれで今日は解散。掃除当番の人はちゃんと掃除して帰ってね」

ふー、やっと終わった。

帰ろうと鞆を持つと椿先生に呼び止められる。

「あ、天月君。小森先生が呼んでたよ」

小森先生は化学の先生。

そっいえばレポート取りにこいって言ってたな。

化学準備室に行くか。

「さてと」

教室を出て廊下を歩く瀬津奈。

武道大会に立候補したのには瀬津奈なりの理由がある。いつまでも閨に護られてられない。

せめて自分の身だけでも護れるようにならなくては。

そう思って武道大会の出場を決めた。

元々瀬津奈は身体能力も高く、瞳術も数種類扱える。

一年生の中で優秀な部類である。

それでも学校の成績は平均以下の閨には護られてばかりのことに負い目を感じていた。

「あたしだって闘えるってことを見せてやるんだから」

もう“あのとき”のような悲劇を繰り返さないですむように。

「それなら見せて貰いましょうか」

「え？」

背後から声が聞こえたと思ったら今度は急激な眠気が瀬津奈を襲う。

うつすらと廊下に漂うガス。

瀬津奈はガスを吸って眠ってしまう。

その瀬津奈を支えたのは風紀委員長である山吹紫苑であった。

メガネの奥の左目は紫色。

「手荒な真似をして申し訳ありません」

すでに意識を失っていると分かっているが、それでも礼儀正しい彼は謝罪する。

瞳の色が元に戻り、周囲に漂うガスが薄くなっていく。

「さて、あとは彼女を連れて風紀委員室に戻るだけですわね」

自分が呼びに行かなくても必ず来る、紫苑はそう確信して不敵に笑うのであった。

「失礼しました」

レポートを無事に受け取り（中途半端だったので書き直すはめに）、ようやく俺は開放された。

早く家に帰って寝るぞ！。

廊下の向こうから人が走って来る。

「閨君！」

「ん？ 委員長？」

もう帰ったはずの委員長が血相変えて走って来た。

「大変よ！ 神無月さんが風紀委員長さんにさらわれたわ！」

「え？」

いまいち言ってることが理解できない。

風紀委員長が神無月をさらったってどういうことだ？

「意識を失った神無月さんを風紀委員室に連れて行くって言ってた」

「それじゃあ」

委員長が嘘をつくとは思わない。

風紀委員長は五重奏の一人らしいし、鍵錠先輩の敵討ち、もしくは他に何らかの目的があって俺と親しい神無月をさらったのならつじつまが合う。

「確かに風紀委員室だな？」

「え？ うん…… って、ちょっと」

「教えてくれてありがとう」

俺は自分の鞆を委員長に預けて風紀委員室——神無月を助けるために走る。

こんな感情は久しぶりだな。

怒り。負の感情。

怒りで俺の中の闇が目覚めるかもしれないが、もう自分では止まれなかった。

「ん……」

どこかの部屋で目が覚めた。

教室と同じくらいの大きさの部屋。

床に敷かれている高そうな絨毯。

部屋の隅には観葉植物が飾られていた。

「目が覚めましたか？」

優しく掛けられた声。

声の主は高級そうな椅子に座っていた。

机に向かっていたが手を止めて立ち上がり、瀬津奈の前まで歩く。

「これ外して貰えませんか？」

瀬津奈は椅子に座っている状態で縛られていた。

身動きが全く取れない。

「閨君が来たらすぐに開放しますよ」

「また閨？」

自分のせいでまた闘うことになる。

あいつは闘いたくないのに。

「……なんで閨なんですか？」

俯いて、ボソボソと呟く瀬津奈。

紫苑は黙って聞いている。

「あいつ、本当は闘いたくないんですよ。それでも、誰かが危ないときは助けてくれる。今日だってきつと来る」

「なにが言いたいんですか？」

「閨はなににも悪いことしてないですから、お願いですから閨と闘わないでください」

「ふふ、残念ですがもう遅いですよ」

「え……？」

とてつもない轟音とともに、扉が突き破られる。

突き破った犯人は波動で出来た二本の刀を握っていた。

「僕が止まっても彼が止まらないと思いますよ」

「聞！」

「神無月……無事か？」

「う、うん」

「そうか。なら少し待っててくれ」

言葉遣いはいつも通りだが、怒りが全身から滲み出ている。

そんな天月を前にしても紫苑は笑みを崩さない。

「風紀委員長の山吹紫苑です」

「閏天月です」

余裕のある紫苑と比べて天月は今にも斬りかかりそうなほど余裕がない。

「それでは始めましょうか」

手の平を上に向けて手を前に突き出す。

手の平の上に丸い球体が浮かぶと俺の視界が一瞬で闇に包まれる。

今まで部屋にいたはずなのに違う世界に飛ばされたような感覚。

どこを見ても真っ黒でなにも見えない。

『どうですか？ 僕の世界は』

どこからともなく聞こえる声。

俺は思ったことをそのまま口に出す。

「気分は最悪です」

『正直ですね』

「それで俺はどうすれば？」

『そうですね。今君がいるのは僕の手の平の上。そう言ったら信じますか？』

「信じます」

この世界は恐らく幻術ではない。

幻術なら俺は見破れる自信がある。

普通の人間ではこんな世界作れないが、方法がないわけじゃない。

「空間は禁術ですよ」

『ふふ、どんな術も使い方次第ですよ』

その物言いならやはり空間の力だろう。

空間は瞬間移動などが有名だが、己が思った世界を作ることでもできる。

『それではルール説明をしましょうか』

「ルール説明？」

『まず第一にその腰に差した刀を抜くことは禁じます』

「次は？」

『なにか焦っているようですね。次に眼帯を外すことも禁止します』

「眼帯を？」

『大河内さんと東宝さんとの闘いは聞いていますよ』

二人とも瞳術を使って闘った相手だ。

完全に情報が漏れている。

『今言った二つを守れば君の勝ち。守れなければ君の負けです』

声が途絶え、なにも聞こえなくなる。

完全になにもない世界となった。

「聞」

「神無月？」

静寂を破ったのは神無月の声。

声は聞こえたが姿は見えない。

本当に神無月なのか俺には確かめようがなかった。

そして聞こえる銃声。

「うる……う」

「……え？」

人の倒れる音がした。

撃たれた？ 誰が？

「天月」

「その声は千華か？」

後ろから聞こえた聞き覚えのある声。

この世界で何が起きてるのか、この世界で起こっていることはどこまで真実なのか俺には分からない。

思考を張り巡らせていると誰かが俺に倒れかかってきた。暗くて見えないがドロツとした液体が顔や手に付着した。

「……血？」

「きゃー！ー！」

「だ、誰か！ 助けてくれ！」

悲鳴、叫び。銃声、人を斬る音。

飛び散る液体。

こんなところに長時間いたらおかしくなりそうだ。

「な、なんだこれは？」

頭を抱えて目を塞ぐと直接脳裏に浮かぶ地獄絵図。

「うがああああ！」

目を閉じれば地獄絵図が見え、目を開けば地獄のような叫びが聞こえる。

「うぐ……げほっ」

吐き気までしてくる。

平静を保てない。

——全て斬ればいいんだ。

俺の脳裏に響く声。

目覚めてしまったもう一人の人格。

「そんなことをしたら神無月が……」

——お前は護れてないじゃないか。

「黙れ……」

——お前の力じゃ護ることは出来ない。

「……るな」

——なに？

「お前は出てくるな！」

視界が元に戻り、目の前には驚いた表情の山吹先輩が立っていた。
「俺の勝ち……ですね」

「世界の本質をまさか破るとは」
せかいのほんしつ

手の平の上にあった球体は跡形もなく消えていた。

「一つ忠告しておきますよ、先輩」

「なにをですか？」

「世界は支配するものじゃない。自由に生きるものだ。自らの人生を自由に生きてこそ成長出来る」

俺が師匠から教わった言葉でいつも心に刻んでいること。

だから俺は何者にも縛られない。

茜色の空の下、並んで歩く二人の影。

さつきから二人は会話が全くない。

「その……えーっと……」

沈黙に耐えきれず、先に口を開いたのは神無月だった。

けれど少し暗い。

「助けてくれてありがとう」

神無月は顔を上げようとしない。

元氣のない声でお礼を言われてもあまり嬉しくないが。

「それと、あたしのせいで閨が闘うことになってごめん」

「はい？」

唐突によく分からないことを言われて聞き返してしまう。

なんで神無月が謝るんだ？

「だってあたしが捕まらなかつたら天月は闘わなくてすんだじゃない
い」

「え、それで謝ったの？」

神無月がそんなことを気にしてたなんて正直びっくり。

捕まったのは俺を呼び出すためだから半分俺のせいなのに。

「神無月が気にする必要ないよ。むしろ俺のせいで神無月が巻き込まれてるんだから謝らないといけないのは俺だ」

「……なんでそんなに優しいのよ」

「優しくなんかないさ。ただ仲間を護りたいだけだよ」

「なに恥ずかしいこと言ってるのよ」

そう言った神無月の表情は優しく、温かった。

最近考え方変わってきたな。

ほんの少し前までは仲間なんて欲しくなかったのに。

今じゃ当たり前のように仲間がいる。

その変化に俺は少しおかしくなった。

八話：重なり奏でる〜創られた世界〜（後書き）

裏話その7

今回は天月と瀬津奈の名字のお話です。

『閏月』、『神無月』ともに旧暦の異称です。

『閏月』は十三月のことで今は十三月なんてありませんけどね。そんな感じで最初は旧暦を名字に持ったキャラが何人か出る予定でした。

そして旧暦を名字に持ったキャラは強い、そんな設定で。

まあ他にも色んな設定のキャラが出るのでなしにしましたが、でもこの二人の名字はその設定の名残です。

次話は新キャラ（ヒロイン候補）登場です（・ω・）ノ

バトルは……あるか未定ですが、あっても三話までと同じ感じでちよっとあるくらいだと思います。

九話：翼が折れた迷子の小天使

多くの人が行き交いする休日の大通り。

雑踏の中、小さな体をさらに小さくして泣いている少女。

「ひつ……うつく……お父さん……お母さん……どこ……？」

いつも自分がいるのとは違う世界。

ほとんどが初めて見るもので最初は楽しかったのだが、はしゃぎすぎて両親とはぐれてしまった。

泣いている少女の前に立つ三人の男達。

「どうしたの君？ 迷子？」

体格のいい男が優しく声を掛ける。

不安でたまらない少女は男達を信用して頼ってしまう。

「お父さんとお母さんが……」

「よしよし、お兄さん達に任せなさい！」

「俺達もなんですか？」

少女は嬉しそうに笑ったが、端から見ればどう見ても怪しかった。しかし誰も少女を助けようとしなない。

この三人はこの辺りで有名な不良達で、この町、幸町（さいわいまち）の住人も迷惑していた。

この男はこの三人が有名だとは全く知らなかったが。

「ちよいとその危ない三人」

買利物袋を提げて後ろから声を掛ける。

「んん？ この大河内様に逆らうとは一体どこの誰……だ……？」

声を掛けられ、振り返って天月の顔を見ると同時に固まった。

天月は男が固まっていることを不思議に思っている。

「大河内さん、こいつは……」

隣りの二人も焦りを隠せない。

天月は三人の態度に首をかしげる。

「今日はこのぐらいにしといてやるぜ！」

「ああ、待つてくださいよ！」
慌てて逃げ出す三人。

天月も女の子もポカンとしている。

「大丈夫？ 怪我してない？」

天月は屈んで優しく接する。

女の子はおずおずと口を開く。

「えと……あの」

「あんな人達に自分のこと話したらダメだよ？」

優しく諭すように話し掛ける。

太陽の当たり具合で銀色に光って見える綺麗な長い髪を撫でる。
珍しい服を着た不思議な女の子。

小学生ほどの身長。

幼くて可愛い顔をしている。

「うん、ありがとうお兄ちゃん」

「お兄ちゃん？」

天月は流石に“お兄ちゃん”に疑問を浮かべる。

見知らぬ女の子にお兄ちゃんと呼ばれる意味が分からない。

「えと……ダメ？」

女の子は悲しそうに天月を見つめる。

透き通った目を向けられて天月はうろたえてしまう。

「いや、ダメじゃないよ」

天月は簡単に考えていたが、見知らぬ女の子にお兄ちゃんと呼ばせている変態と見られてもおかしくない。

「うん、じゃあ兄ちゃんだ」

今度はこぼれるような笑顔を見せる。

表情が次々と変わる。

感情がそのまま顔に出るようだ。

「それじゃあ一緒にお父さんとお母さんを探そうか」

「いいの……？」

「うん、ほら」

立ち上がって手を差し出す。

女の子は頬を赤らめて天月の手を握る。

この子もこの子の両親も不安だろうから早く見つけてあげよう。

天月はそう決心した。

「ふー、いい買い物したねー」

「そうね」

六月初めの休日、二人で買い物をした帰り道。

歩いて行ける距離にデパートがあるのはありがたい。

今日は服など色々買えて満足だった。

「このあとどうする？」

「んー、何か食べて帰ろっか」

「いいわね」

基本この二人は仲がいい。

瀬津奈は男子（九割以上が天月）に対して素直じゃなく、クラス
の女子とも馴染めていない。

千華は自分の素を出してから男女ともにさらに評判が上がった。

この相反する二人が仲良くなったのは天月の存在があるからこそ
だろう。

「え？」

「どうしたの？ 瀬津奈」

瀬津奈がある方向を見て固まる。

千華も瀬津奈の視線を追って固まる。

そこには天月が小さな女の子の手を握って楽しそうに笑っていた。

「閏……まさか変態だったのね」

「瀬津奈結論早いよ！ きっと何か事情があるんだよっ」

「事情って何？」

「いや、それは……その」

天月には妹がいない。

両親も健在らしいから義理の妹とかもあり得ない。

この近辺にそんな知り合いもない。

琴鳴の力で調べたことだから間違いがあるはずもない。

よって結論。

「天月が犯罪を?!」

急に慌てだす千華。

騒ぎすぎて周りの人の目が痛い。

瀬津奈はいたたまれなくなり、冷静な時の自分が見たら驚くようなことを言ってしまった。

「と、とりあえず心配ならつける？」

そして天月のあとを負のオーラ全開でつける美少女二人の姿があった。

「っ?!」

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「いや、なんでもない」

背中に悪寒が走り、後ろを振り返る。

何か負の感情を感じたが気のせいかな？

「それで、どこではぐれたの？」

「えっと……」

キョロキョロと辺りを見回しているがそれは親を探しているのではなく好奇の目であった。

「何か食べる？」

「ふえ、お、お腹空いてないから」

言葉のあとに聞こえる可愛い音。

見ると女の子は顔を赤くしている。

こっぴどい可愛いな。

「何がいい？」

「うっ……あれ……」

恥ずかしそうに指差した先には移動式のドーナツ屋。

うまいし財布にも優しい。

「それじゃあ買ってくるから待ってて」

「分かった」

一人にさせるわけにもいかなから急いで買いに行こう。

のどかわいたしジュースも買うか。

ドーナツと缶ジュースを買って女の子のところまで戻ろうとしたら、誰かが女の子に話しかけていた。

「あれは？」

遠目でいまいち見えないが、見たことがあるような。

その二人は俺に気付いて慌てて女の子から離れる。

走って戻ると女の子は目を輝かせる。

随分楽しみにしていたようだ。

「さっきの二人知り合い？」

「知らない」

「そう」

色々訊きたいこともあるけど、さっきからドーナツが気になって仕方ないみたいだから後にするか。

ドーナツの袋凝視してるし。

「公園の中で食べようか」

「うんっ」

俺は公園の中にあるベンチまで歩く。

女の子も後ろをついて来る。

動き一つ一つが小動物みたいでかわいいな。

「よつと。それじゃあはい」

俺は袋からドーナツを一つ取り出して隣りに座っている女の子に渡す。

温かくて美味しそうだ。

「ありがとうございます。いただきます」

小さな口で一口かじる。

咀嚼している女の子の顔が段々と明るくなる。

「おいしい？」

「おいしい……凄くおいしい」

「そうか、よかった」

おいしそうに食べている顔を見ているとこっちも嬉しくなるな。
しかし、ドーナツに対してここまで反応するか？

まあいいか。

俺も袋から取り出して一つ食べる。

うまいけど一つで十分だな。

「まだあるけど食べる？」

「いいの？」

一つ目を食べ終えてジュースを飲んでいた女の子は目を輝かせる。
自分で袋から取り出してニコニコと嬉しそうに食べる。

俺はこれ以上食べると胸焼けしそう。

「さてと」

食べ終わったらどこ探そうか。

とりあえずこの町適当に歩いてたら見つかるかな。

食べ終わったみたいだし行くか。

「それじゃあ行こうか」

「うん」

普通に歩いても女の子は小走りでないと追いつけない。

「つと、ごめんごめん」

俺が手を伸ばすと嬉しそうに掴む。

あー、このままじゃ社会的に危ない方向に目覚めそうだ。

気をつけないと神無月に消される。

「さ、行こう」

「うんっ」

「そういや名前聞いてなかったな」

「名前？」

女の子は少し考えてから口を開いた。

「フローレア・ブルーム・フレグランス」

「長い。フレアでいいだろ？」

フルネームを一蹴されて女の子——もとい、フレアは呆然として
いる。

「フレア……うん、フレアでいい」

納得してくれたようでよかった。

断られたらもう一つの候補である『F B F』になるところだった。

「って、急いで探さないと」

気付けば太陽は西に傾いている。

少し早足になって町を歩く。

今のところそれらしい人影は見えない。

「んー、どこにいるのかな」

流石に見つかるか不安になってきた。

フレアも表情が暗くなっている。

「大丈夫さ」

フレアの頭をゆっくりと撫でる。

不安を拭うように優しく。

フレアの目には涙が溜まっていた。

「俺がついてる。お父さんとお母さんに必ず会えるぞ」

「うん……」

このままだと見つからないな。

正攻法じゃ無理みたいだ。

「ちょっと待っててね」

手を繋いだまま神経を集中させる。

親子の波動は似ているものだから、フレアの波動に似ている波動を探せばきつと見つかる。

無刃想があれば楽だけど、今日は持っていない。
広範囲に薄く視認できない波動を流す。

「お兄ちゃん？」

目を閉じて神経を張り巡らせる。

引っ掛かるのは一瞬、気を抜けば見逃してしまふ。

「……見つけた！」

「きゃあっ！」

目を開いてフレアを抱き抱える。

驚いているが気にする暇はない。

突風を巻き起こしながら走る。

フレアは怖がって目をつぶっている。

「は、速いー！」

「もうすぐだからっ！」

急ブレーキをかけてフレアを下ろす。

恐る恐る開けたその目に涙が浮かぶ。

「お父さん！ お母さん！」

「フローレア！」

「ああ、フローレアちゃん！」

フレアは走って両親に抱きつく。

両親も涙を流してその手でフレアを抱きしめる。

「よかった…… 本当によかった」

「お母さんすごい心配したのよ」

感動的なシーンだし、部外者は大人しく立ち去りますか。
黙って帰ろうとするとフレアに呼び止められる。

「お兄ちゃんありがとう！」

おおつ。ここは格好よく帰らせてよ。

こういうのは黙って立ち去った方が格好いいじゃん。

「おお、貴方がフローレアを？ ありがとうございます」

「このご恩は感謝してもしきれませんわ」

「いえいえ、どういたしまして」

人を助けて感謝されるのは悪くない。

そう思うがお礼をさせて下さいとか言われたらめんどい。

視線を下ろすとフレアがそばにいた。

「ありがとうねお兄ちゃん。これお礼」

そう言って差し出されたのは一本の綺麗な純白の羽根。

「元気でね」

しゃがんで頭を撫でてあげるとフレアは少し寂しそうな顔をしたあと、顔を赤らめる。

頬には柔らかな感触。

「これもお礼。私のこと忘れないでね」

俺は微笑み、立ち上がって固まる。

いや、両親を捜す時に二人が近くにいることは気付いたけどね？

だからって怒られる覚えはないよ？

「聞、詳しく話を聞きましょうか」

「納得のいく説明お願いね」

二人とも笑ってるけど笑ってない。

後ろでフレアも怖がってるし。

ふう……今日歩いて帰れるかな？

俺は呆然とするフレアに見送られ、二人に引っ張られて説明を強要された。

開放されるまでに二時間かった。

この世で一番怖いものを俺は知ったね。

九話：翼が折れた迷子の小天使（後書き）

先日先輩方の大会の応援に行きました。

そのことは楽しかったからいいんですけどね、直射日光浴びすぎて寝込みました。

そのせいで録画していたアニメ（いつも早朝見てた）が見れませんでした。

拳句の果てに妹に消去されたし。

ああ……アニメオリジナルの話みたいだったのに。

明日も朝から練習で3、4日は先輩の応援ですし。

今後も高校生活頑張ります（、〇、ゞ

十話：Battle Festival

数日前の風紀委員室。

紫苑が風紀委員長に就任した時に作られたこの部屋に紫苑はいた。
風紀委員長としての業務を重ねるうちに五重奏と名乗ることを許された。

自分の力は特別な力。

自分の強さは異質な強さ。

自分の世界を創る能力。

相手を自分の世界に招待する能力。

敗因は分らない。

「悲観することはないさ」

「おや？ これはこれは珍しいお客だ」

「敗因はないよ。彼の意外性が君の能力を上回っただけさ」

同じ学年なのに会うのも久しぶりだ。

彼の真っ直ぐな瞳は紫苑の心を読む。

紫苑は苦笑いを浮かべる。

「しかし世界の本質を破るとは思ってもみませんでしたよ」

「僕はいつか負けると思っていたけどね」

いきなりそんなことを言われて紫苑は内心ムツとしたが、表情には出さない。

「いつもいつも全て分かったようなこと言いますね」

「君は挫折を知らないからね。挫折を知る人間は強さを持っているよ」

相変わらず彼は考えが深い。

紫苑も落ち着いているつもりだが、彼には敵わないと思っている。

「貴方だって挫折も負けたこともないでしょう？」

「そうだね」

言ってることが矛盾している。

彼は生徒会長で、紫苑と楔が二人がかりでも恐らく敵わない。

「僕は僕を倒せる人を捜しているんだよ」

クインテット

生徒会長で五重奏最強の存在、光波神宮。

「うはじんぐう」

呼称『絶対の脅威』メナス」。

いつも通り正門をくぐるともう一つ門が建っている。
その門には大きく『第65回琴鳴学園武道大会』と書かれている。
登校時はいつもポロシャツに学校指定のスボンだが、今日は体操服。

今日がめんどくさい武道大会です。

出場しない人は丸一日応援だって。非常にズルイ。

「あー、いやだ」

渋々学校に入る。

サボったら非難集中だからな。

「このバカ！ 遅いのよ！」

校庭に到着すると耳に響く高い声。

遅刻してないのに何故怒鳴る。

結構ギリギリに来たから人はかなり集まってるけど。

「天月ー！ こっちこっちー！」

満面の笑顔で手を振る千華。

なんだこの態度の差は。

「開会式パスしていい？」

「駄目に決まってるでしょ」

「出場選手は原則開会式には参加だよ？」

「えー」

「えー、じゃない！」

校長話半端なく長いもん。

炎天下の中に長時間立ちっぱなしは体に悪いと思うし。

「出場選手は集まりなさい！」

「ほら、行くわよっ」

「へいへい」

30人の出場選手が集る。

整列して校長の長い長い話が始まる。

やっぱり出場選手の中に女子は神無月しかない。

見た目強そうな人ばかりで嫌だなー。

気付けば校長の話も終わり、今日のルール説明をしている。

「使えるのは武術のみ。武具は手持ちの武具を使っているですが、波動を流せば失格です」

波動を流せば失格ってことは？

「あんたの刀使えないんじゃないの？」

「そだね」

後ろに並んでいる神無月に声を掛けられる。

波動を流してこそ真価を発揮する無刃想は今回の大会では全く使えない。

波動を流さないで斬ったら折れちまう。

「どうするかなー」

剣道部に竹刀借りに行こうかな。

「勝敗は両腕と両脚に巻いたベルト四箇所全てにある程度のダメージを与えること」

ベルトにはある程度ダメージを与えると微量な電流が流れるらしい。

電流が四回流れると負けてこと。

「それでは武道大会を開始します！」

観客の生徒達が盛り上がる。

いつの間にか保護者の人達など観客が増える。

出場選手も闘志を燃やしている。

「Aブロックの人は運動場、Bブロックの人は体育館です」

「俺どっち？」

「あんたはAブロックよ」

そう言つて神無月は体育館に向かう。

神無月はBか。いくらなんでも決勝までは上がつてこないだろうし、闘うことはないかな。

掲示されているトーナメント表を見ると一発目が俺じゃん。

しかも相手は先生だし。

「Aブロック予選一組始めます」

「あ、ちよつといいですか？」

「何でしょう？」

審判の人に大事なことを訊かなければならない。

この質問の答えによつては素手で闘うことになるからな。

「武具の貸し出しつてされてますか？」

「本部で申請すれば借りれますよ」

「それじゃあ借りてくるんで少し待つて貰えますか？」

「早くしてくれよ」

対戦相手である体育教師に急かされ、本部であるテントへ向かう。

「短刀二本ありますか？」

「はいどうぞー」

「ありがとうございます」

手早く武具を借りて戻る。

安物だがこの際しようがない。

「準備おっけーです」

係の人に手伝つてもらいベルトを巻き、戦闘準備完了。
内心やる気ないけどな。

「それではAブロック予選一組、始め！」

審判の合図で先生が日本刀を構える。

美しく反った白い刃。

日本刀はこの湾曲した刃が特徴である。

「ほら、来なさいよ」

余裕な態度の先生。

面倒なのでさっさと終わらせよう。

「じゃあいきます」

力を抜いた緩やかな動き。

一気に近付いて二本の短刀でベルト全てを攻撃する。

この短刀安全面を考慮して切れ味悪くしてるな。

四つ同時に攻撃したので一気に電流が流れる。

先生はあまりの刺激に叫んでいる。

おいおい、電流強くな？

「しょ、勝者、閏天月！」

観客はみな呆然としたあと、突如歓声が湧く。

観客の天月コールに気がよくなって、俺は息を大きく吸う。

「閏天月！ 優勝します！」

右手に握った短刀を空に向けて突き上げる。

拍手喝采、もう優勝するしかない。

「二組目の出場選手集まって下さい」

とりあえず少しは休めるし、のんびりしますか。

「なんてこつたい」

昼休憩をはさみ、いよいよ始まる決勝。

決勝は運動場で行われる。

決勝の相手と対峙した天月の第一声が今の言葉である。

Bブロックを勝ち上がったのは予想外に瀬津奈だった。

「手加減しないでよね」

天月は今まで全部手加減して、それでも無傷で決勝まで勝ち進ん

だ。

電流が強すぎて体が未だに麻痺^{マヒ}している生徒は数名いるが。

「そもそも君と闘いたくないんだよね」

天月の言葉が癪に障ったのか、瀬津奈の表情に怒りが表れる。

「あたしじゃ役不足ってこと？」

「そういう意味じゃない」

天月は首を横に振る。

それは呪いのようなものであつて絶対に破れない掟。

「出来れば棄権したいんだけどね」

「そんなこと許すわけないでしょ」

天月は溜め息を吐いて両肩の力を抜く。

短刀を抜かず、楽な姿勢で立つ。

「早く刀を抜きなさい」

「それは出来ないな」

「そう、なら覚悟しなさい！」

瀬津奈はそう言つて両手に握つていた円形の金属を構える。

「チャクラムとは渋いね」

チャクラムは真ん中に穴のあいた金属製の円盤で、外側に刃が付
けられている。

投げて攻撃したり直接斬ることで攻撃する。

瀬津奈は小型のチャクラムを片手に二つずつ重ねて握っていた。

「えー、それでは決勝戦始め！」

「いくわよ、“ガルダ”」

素早く天月に近付き、左手のチャクラムを天月の右腕に巻かれた
ベルトに向けて振るう。

天月はギリギリで攻撃をかわした。

そのつもりだった。

「っ！」

全身に電流が流れて座り込んでしまう。

かわしたつもりだったが、ベルトは見事に斬れていた。

微弱ではあるが、体が麻痺^{まひ}して動きづらい。

「やるじゃん」

「真面目に闘う気になった？」

「それとこれとは別かな」

立ち上がり瀬津奈の目を見る。

闘うことに迷いのない目。

そんな相手に失礼だとは思うが、天月は短刀を抜くことさえ出来ない。

瀬津奈は開いた距離を詰めて両手のチャクラムでベルトを狙う。

その隙のない怒濤の攻撃に観客が感嘆の声を上げる。

瀬津奈の攻撃を天月は先程のようにギリギリでかわすのではなく、余裕を持ってかわす。

天月はバックステップで距離を開く。

「さて、どう反撃するか」

天月が思案している間に瀬津奈は左手のチャクラムを一つ投擲する。

天月は右へ飛んでかわす。

空中で身動きのとれない状態でさらにもう一つチャクラムが飛んでくる。

天月はベルトに当たる直前で真ん中の穴に指を突っ込み止める。

「全く、危ないことこの上ない」

指に入れたチャクラムを回しながら呟く天月の余裕に瀬津奈は奇立ちを覚えた。

「いい加減反撃してきなさいよ」

「うん、そうする」

回したチャクラムを瀬津奈に投擲する。

瀬津奈はそれを簡単に止めてしまう。

その隙に天月は瀬津奈の後ろに回る。

「くっ」

瀬津奈は驚きながらも振り返りつつベルトを斬る。

左腕に巻かれたベルトは斬り、残りはあと二つ——瀬津奈は油断したつもりはなかったが、その一瞬が命取りとなった。

素早過ぎる両手の動き、気付いた時には瀬津奈のベルトは四つとも地面に落ちていた。

「え……？」

壊されたベルトを見て驚きの声を漏らす瀬津奈。

「俺の勝ちだな」

天月の一言と同時に観客がこれまでと比べ物にならない程騒ぎだす。

「優勝は一年六組、閏天月！」

歓声とも叫びとも区別のつかない声を上げ、盛り上がりは最高潮。瀬津奈は未だに呆然としている。

「あー、疲れた」

閉会式を逃げようとした天月だったが、これだけの盛り上がりを見せている観客が許すはずもなく、不満そうに表彰されていた。

「ん」

武道大会の熱気も冷め、人がいなくなり静寂な学校。

ベンチに寝転んで伸びを一つ。

さっきまで人に囲まれて家に帰れず、ようやく開放された。

疲れたのでしばらく休憩していた。

そろそろ帰ろうと体を起こす。

「お疲れ様、ハイ」

声とともに差し出された缶ジュース。

「ありがと。千華」

お礼を言つと嬉しそうに微笑み、俺の隣りに腰掛ける。

「今日はすごかったね天月。瀬津奈に勝ったあれどうやったの?」

「指でベルトを斬っただけだよ。指っていうより爪かな?」

ベルトの薄い部分を狙って素早く腕を振るえば難しいことじゃない。

「簡単に言うけど凄いことしてるね」

「そう?」

会話が途切れて二人とも黙ってしまう。

なんだこの展開。

よく考えたら二人つきりじゃん。

よし、さつさと帰ろう。

「じゃあそろそろ帰ろうか」

立ち上がろうとすると千華が急に抱きついてきた。

「ええっ!?!」

不意な出来事にバランスを崩して背中から倒れてしまう。

俺の上に乗るかかる千華。

「あのー? 千華さん?」

「いいでしょ? 天月……」

ヤベエ、何故だか襲われてる。

千華の目もマジだし。

俺ピンチピンチピンチ!

「今日のご褒美ってことで」

ゆっくりと顔を近付ける千華。

しかし千華の背後から聞こえた声に動きを止める。

「邪魔をして悪いけど、校内でそういう行為は止めて頂ける?」

諭すような声に千華は顔だけ振り返る。

「ありや、これは相手が悪い」

足に付いた埃を払って手を振りながら帰っていく千華。

てか結局どなた?

「君も今後は気をつけて」

しばらくして体を起こすとすでに声の主はいなかった。

十話：Battle Festival（後書き）

二週間以上更新空きましたが、覚えて頂けてるでしょうか？

最近びつくりするくらい忙しく、なかなか書けない状態です（＊

p
）

これからテストも入るし、来週大会だしでどうなるか分かりませ

ん
（＋――＋）

次がいつ更新できるか……なるべく早くしますので忘れないでいて貰えたら嬉しいです。

次話は新展開、十一、二話はバトル皆無の恋愛メインのお話です。
作中では一足早い夏休みとなりますが、ご期待ください（＊＾――

＾＊
）

十一話：恋する乙女、三巴の闘い！

蝉も盛んに鳴く七月末。

この時期の学生は夏休みという長期休暇にて日頃の疲れを養う。そして現役高校生である俺は、

「くくく……ふはははは！」

一か月もの間家から出なくてよい幸福にうち震えていた。

壊れたと思っていたければ思うがいい、危ない奴と思うなら逃げ出せばいい！

なんと素晴らしい、夏休み！

一日中寝てても問題なし！

しかも一人暮らしだから誰にも文句は言われない！

「はっはっは……笑い過ぎて腹が痛い」

腹を抱えて笑っている俺を哀れみの目で見ようと効果はないぞ。宿題は貰ったその日に全て終わらせて、一か月分の食材は先日買った。

これで家から出る必要はない。

「おっと、いかんいかん」

こんなことで無駄な時間を過ごしているヒマはない。

初日だしとりあえず寝て過ごそう。

自分の部屋に行こうと階段を上ると来客を知らせるチャイムが鳴る。

こんな朝っぱらから誰だよ。

玄関に向かい扉を開けて来客の姿を確認すると体が硬直した。しかしすぐさま気を取り直し、扉を閉めて鍵をかける。

この間わずか二秒。

「ふーっ、朝から幻覚が見えるとは」

胸を撫で下ろして居間に向かう。

あれはどう考えても幻覚だ。

いくらなんでもここからかなり距離のある所に住んでいるはずのリン姉が見えるなんてな。

「いきなり閉めるなんてひどいじゃない」

誰か夢だと言ってくれー！

両手を地面につけてがつくりとうなだれる俺の姿を見て不思議そうに小首をかしげるリン姉。

「ツキ君どうかした？」

なんで扉を閉めて鍵もかけたのに当たり前のようにソファに座っているんだ。

いつの間に瞬間移動を会得したんだ？

「瞬間移動なんて使えたら電車何本も乗り継いで来ないわよ」

「読心術まで?!」

と、とりあえず何をしに来たか訊こう。

もしかしたらすぐに帰るつもりかもしれない。

俺は希望を捨てないぞ。

「リ、リン姉？ 今日は何の用事で？」

「夏休みだとツキ君自堕落な生活をするからね。夏休み一杯見張りに来ました」

グッバイ俺の夏休み。

リン姉に監視されるくらいなら授業ある方がましだぜ。

リン姉はやっぱりかわいいから嬉しくないわけじゃないんだけど、生活態度に関してはかなり厳しい。

朝は七時に叩き起こされ、宿題が終わっていようと普段授業のある時間は勉強を強要され、料理はうまいがバランスを考えて野菜中心。

こんな生活がまた一か月続くだど？

ちなみに俺とリン姉の関係は幼馴染み。

昔リン姉の家の隣りに住んでいて、俺が中学に入学する時に引越した。

つまり小学校の頃は毎日リン姉の監視下で生活してきたわけで。

本来なら高二だが去年飛び級で大学を卒業した天才。

しかも天才だという自覚がなく、自分にできることは俺にもできると考えてるから大変で大変で。

「たまにはツキ君も帰って来たら？ お父さんも寂しがってるよ？」

「師匠が寂しがるわけないじゃん」

リン姉のお父さんは俺の剣術の師匠で異常に厳しかった。

リン姉もそういう厳しい部分は受け継いでいるわけで。

「朝ご飯食べた？」

「まだだけど」

「じゃあ作るからちよつと待ってて」

腹減ってるしいいや、朝食は任せよう。

「美味しいの頼むよ」

「そういうのが一番困るのよ」

ぶつぶつ言ってるけどちゃんと美味しいのができるから安心して待てる。

「ツキ君？ ちょっと」

台所に行ったリン姉から呼ばれる。

声色的に怒ってるみたいだけど。

リン姉は冷蔵庫の前で立っていた。

冷蔵庫って……あ、まずい。

「この冷蔵庫の中身は何かな？」

冷蔵庫を開けて中身を見せてくる。

その中身は惣菜やら大量の水やら一か月家から出ないために買い込んだ物で一杯だった。

表情は完璧に怒ってる。

「もう！ また夏休み家から出ないように買い込んで！ しかもバランスが悪い！」

こんなこと言ってるけど勿体ないからって全部使ったよね。

野菜も取り出してるからバランスのためにサラダか。

エプロンをつけて料理を始めるリン姉。

なんだか懐かしいな。

「どうかした？」

「別にー」

「もう、何なのよ？」

なんとなくリン姉も同じことを思ってる気がする。

二人で顔を見合わせて笑っていると再びチャイムが。

「ふふ、ツキ君おねがい」

「へーい」

玄関に向かい扉を開けて再び硬直。

あまりの衝撃に体が全く動かなかった。

「遊びに来たよんっ」

「千華がどうしても言うから仕方無く来てあげたのよ」

なんて最悪なタイミングで訪問してくれたんだ。

俺が困った顔で固まってる上千華があることに気付く。

「あれ？ この靴女物みたいだけど」

「台所からいいにおいしてるわね」

わーお。

見事に気付かれたよ。

冷や汗ダラダラですよ。

「ちよっと上がるわよ」

「おじゃましーす」

「ス、ストップ！」

二人とも上がってしまい、一気に台所まで行ってしまっ。

料理していたリン姉は振り向いて一瞬驚いたあとすぐに笑顔になる。

「あら？ 誰かと思えば……ええっと」

「琴鳴千華ですわ」

「神無月瀬津奈です」

三人とも笑顔だけど凄まじく怖い。

どうしたらこの状況から逃げられるんだ。

笑顔のままリン姉がテーブルに料理を運ぶ。

「一緒にご飯食べる？ 多めに作ったから大丈夫よ」

笑顔なんだけどね。

笑顔がキラキラ光ってるんだけどね。

まだ怒ってる方がましだ。

「それでは頂きますわ」

「私も朝ご飯まだなので」

「それなら運ぶわね」

いやいや、こんな空気で食べたくない！

何か回避する方法を考えてるとリン姉が料理を運んで来て三人とも座ってしまう。

小さく溜め息を吐いて座る。

「それじゃあいただきます」

「……いただきます」

四人もいるのに誰も話さず料理ばかり減っていく。

箸が進む進む。

料理の味も分らないぜ。

「ツキ君美味しくない？」

「え？ いや、美味しいよ」

俺の表情を見て不安になったのか、不安そうに訊いてくるリン姉。美味いはずなんだけどなあ。

俺の言葉を聞いて一応安心したのか、再び食べ始める。

よし、俺も無心で食べるとしよう。

「……」

無心で食べ続けた結果、気付くと完食していた。

すでに食べ終わっていたリン姉が俺の皿を下げてくれる。

「あ、ありがとう」

「ねえ天月。お昼はあたしに作らせて」

「え？」

突然なんなんだ？

「ツキ君はお昼も私のご飯食べてくれるよね？」

片付けを終わらせてリン姉がリビングに帰って来る。

またもめる気かこの人達。

「あたしだって天月に料理食べてもらいたいんですよ！」

「ならツキ君に食べ比べてもらおう？」

「何故にそうなる？」

食べ比べるってどっちが美味しいか選ぶってことだろ？

そういう損な役割は拒否したい。

「瀬津奈ちゃんはどうする？」

何でわざわざ状況を悪い方向にもっていかうとする。

今まで黙っていた神無月だが急に話を振られて慌てふためいてい

る。
「ふえ！？ あ、あたしはいいです！」

「えー？ 瀬津奈なんでー？」

「それはその……」

いつもの勢いが全くない。

しかも歯切れが悪い。

これはまさかの神無月が作った料理を食べると生命の危機に陥る
ルートだ。

俺はそのことを分かっているがらつい余計な一言を言ってしまう。

「神無月もしかして料理苦手？」

「ん な っ ……！」

「あー、なるほどね」

「え？ ちょっと……」

「料理苦手ならしょうがないよね」

「……わよ」

「え？」

「やってやるわよ！ 覚悟しなさい！」

涙目になりながらも意を決して料理することを宣言する。

涙目になるくらい嫌ならやらなくてもいいじゃないか。

そして料理を食べるのに覚悟が必要ってまずくないか？

「それじゃあ台所に行きましょうか。制限時間は一時間でいい？」

「問題ないわ」

「上等よ！」

「お前は闘いに行くのか」

本音が出てしまつて神無月に無言で睨まれた。

反射的に頭下げてしまった。

三人が台所に行ったのを見送り、時計に目をやる。

時間は十一時、とりあえず一時間ゆっくり待つかな。

台所にて、三人の少女たちは……。

「ねえ瀬津奈、本当に大丈夫？」

「な、なにが？」

「顔色悪いよ？ 瀬津奈ちゃんそんなに料理苦手なの？」

「母に料理することを禁止されてます」

「禁止されるレベル?!」

雑談しながらも、三人とも料理を作る手は止めない。

台所のスペースを三つに分けて同時進行中である。

凜鈴は慣れた手つきで素早い作業。

千華は……恐らく料理を作っている。

満足げな顔をしているから。

瀬津奈は試行錯誤しながらも上手く作れているようだ。

三人の料理は一体どうなるのか――。

「ツキ君お待たせ」

「出来たよ天月！」

「多分大丈夫多分大丈夫……」

三人がリビングに入って来る。

もう一時間経ったのか。

知らない内に寝ちまった。

神無月が自己暗示をかけてることが気になるけど。

「誰の料理から食べる？」

「あたしよ！」

千華が先陣を切るようだ。

やっぱり料理は温かい内に食べるのが一番だからな。

テーブルに置かれた皿には……料理？

動いている青紫色の毒々しい物体は果たして料理と呼べるのか？

「ベッタベタだな」

「え？ ベタベタじゃないよ？」

「そういう意味じゃない」

まさか自信満々にこんな物体を持って来るとは。

「よし、先に神無月の料理を食べよう」

「え？ なんで？」

こんな物体食ったら病院行きだから。

とは言えず適当に言葉を濁す。

一応納得してくれたみたいだけど後で食べないとダメかな。

逆に食われそうだし後でこっそり埋めるとしよう。

「じゃ、じゃあ……」

そろそろ机の上に置かれた皿には美味しそうな料理が盛り付けられていた。

「お、美味そうじゃん」

見た目は意外といいが問題は味だ。

警戒しながらも一口。

ってあれ？

「美味いじゃん」

「本当?!」

「うん、美味しい」

安心したように笑顔を浮かべる神無月。

前から思ってたけど怒った顔より笑った顔の方がかわいいんだからもつと笑えばいいのに。

勿体ないね。いや、これ以上モテたら大変なことになるか。

次はリン姉だけど大体分かるしな。

「て、天月？」

「ん？」

なんだか三人の顔が青ざめている。

一体何なんだ？

「ツ、ツキ君鏡……」

リン姉に差し出された鏡を見ると緑の生物が映っていた。

あ、エイリアン？

もしかしてこれ俺？

「何じゃこりゃああああ?!」

「もしかしてまたあたしやっちゃった?!」

今『また』って言ったぞ?!

前科ありかよ!

結局食べ比べ勝負はうやむやになり、肌の色は一時間後に戻った。元に戻って本当よかったです。

十一話：恋する乙女、三巴の闘い！（後書き）

更新遅れて申し訳ないです。

五月って三話しか更新してないんですね……。

高校がまじで忙しいんです。

今日も先輩の応援行つてましたし……。

一話の量減らした方がいいんでしょうか？

そういう意見も含めて感想よろしくお願いします。

あ、十話更新して数日後にPV一万アクセス突破しました（*^|

^*）

お気に入り登録も結構していただいて有り難いです。

今後も頑張ります（、´・`）ゝ|| 3

十二話：光の花咲く夏祭りの夜に想い募る

「ほら！ 早く行こうよ！」

手を引かれて雑踏の中を駆けていく。

「だからちよつと待ってって！」

凜鈴は他人の目も気にせず無邪気に走る。

様々な出店が賑やかに祭りを盛り上げる。

「あ、かき氷だよツキ君！」

「いや、このペースだと俺の財布が尽きるんですけど」

先程りんご飴を買ったところだった。

祭りの食べ物基本的には高いので考えなく買いまくるとあつという間に財布が空っぽになる。

「お願いツキ君」

「俺の話聞いてる？」

「お願いツキ君」

口喧嘩では天月に分がない。

諦めてかき氷を買おうと嬉しそうな顔をする凜鈴。

この笑顔に何度も騙されていた。

「ほらツキ君、あーん」

そう言ってスプーンの上に乗った赤色の氷を差し出す。

狙いが分かったため天月は凜鈴が傷つかないようにやんわりと断る。

「いや、俺冷たいものはあんまり」

「あーん」

有無を言わさぬ雰囲気天月は危機感を覚えたので大人しく口を開ける。

同じスプーンだから間接キスだとかは考えないようにする。

口に広がるいちご味の氷が恥ずかしさで赤くなった頬を冷やしてくれる。

「ツキ君顔真つ赤だよ」

冷やしてくれてなかった。

そついう凜鈴も顔が赤くなっていたので指摘すると、「だってツキ君と間接キスしちゃったもん」と恥ずかしそうにはにかむ。

人が意識しないようにしたのに言葉にしまった。

「ん？ そろそろ花火だつて」

「相変わらず耳いいね」

凜鈴は昔から耳がよく、天月がどんな小声で文句を言っても聞き付けて大変な目にあつた。

今もすれ違う人々が話していたのを聞いていたのだ。

「今の時代情報が最大の武器だからね」

凜鈴は得意げに言つた。

すると今度は天月に穴場を知らないのか聞いてきた。

「俺だつてこの祭りに来たの初めてだし」

「あ、そつか」

天月がこの町に引つ越して来たのが今年の四月だつた。

なのでこの町に住み始めてからまだ半年も経っていないかつた。

当然穴場など知らないが、高い所からなら見やすいだろうという単純な考えに至つた。

「ちよつとこつち来て」

「え？」

凜鈴の手を引いて人気のない所に連れていく。

このとき天月は夜更けに女の子を人気のない所に連れていくのが他人の目にどう映るか考えてなかった。

小さな林の中で歩みを止める。

「ここらでいいか」

高い所——つまり空を飛ぶため疾風を召喚しようとする。

「あ……」

凜鈴の感嘆の声と大きな音に顔を上げる。

空には光の花が何輪も咲き誇っている。

「ここが穴場だったんだ」

偶然か必然か、疾風を召喚するために連れて来た場所がベストスポットだった。

しばらくの間二人で花火を見てみると、唐突に凜鈴が口を開いた。

「ツキ君、話があるの」

その目は何かを決意していた。

「ふーん、今日夏祭りあるんだ」

監視されながらの勉強も一段落、リビングで休んでいると突如凜鈴が呟く。

その手には回覧板を持っている。

そんなこと知らなかった天月は興味なさ気に応える。

「へー、そうなんだ」

「教えてくれてもよかったのになー」

天月へ向けられた視線は何かを期待しており、あえて天月は気付かないふりをする。

絶対的な信念である『面倒な事は避ける』に誓って祭りに行かないで済むように思考を張り巡らせていた。

しかし凜鈴は直接的な誘いに出る。

「ねえ！ 一緒に行きましょうよ」

「断る」

すでに夏休みの大半を監視されて過ごしているのにそんな面倒なことはありえない。

そう思っていたが凜鈴には敵わなかった。

「じゃあ脱ぐ」

「どういう流れで脱ぐ事に?!」

言ってる間にも凜鈴は自分の服に手をかける。

天月の全身を嫌な汗が流れる。

「ツキ君つぶだからね」。目の前で私が服を脱いだりしたらどうなるかな？」

天月は免疫が全くないため、もしそんなことがあったら顔が真っ赤になつて数日戻らなくなる。

そして熱を出して倒れることになる。

「わ、分かった！ 行く！ 行きます！」

「うん、じゃあ着替えるから先に外で待ってて」

「着替える？ 何に」

「いいから外に行きなさい！」

「すみませんでしたっ」

追い出されるように外に出て来た天月は突つ立つたまま三十分待たされた。

日は落ちているとはいえまだ八月、外で待たされるのは辛い。

「あつ、天月ー！」

「おー千華、神無月」

二人とも浴衣を着ていて千華は嬉しそうだが瀬津奈は不機嫌そうにしていた。

「どうどう？ あたしの浴衣姿は」

「ん、似合ってる」

「エヘヘー、ありがとー」

淡い黄色に赤い花模様でいつもの千華よりも大人っぽく見えた。

身長は小さいが。

言葉遣いも若干幼児退行しているが。

「神無月も……き、きれいだと思う」

「う、うるさい。こっち見るな」

照れながらも憎まれ口を叩いた。

そして耳まで真っ赤にしてそっぽを向く。

桃色の布地に黄色の花模様。

普段下ろしている髪をアップにしている、雰囲気の違いに天月は戸惑ってしまう。

「あたしたち天月を誘いに来ただけど、一緒に行かない？」

「あー、悪いけど先客がいるんで」

「先客？」

タイミングを計ったように扉が開き、やはり浴衣姿の凜鈴が現れる。

「おまたせーって、瀬津奈ちゃんに千華ちゃんじゃない」

「あ、やっと来た」

花火の模様に青っぽい生地 of 浴衣で。

凜鈴も髪をアップにしており、瀬津奈以上に大人っぽく、気品に溢れていた。

「遅くなっちゃってごめんね」

「いや、いいよ」

中身はいつもの凜鈴なのだが外見のあまりの違いに動揺を隠すのに必死だった。

その天月の姿を見て二人の機嫌が悪くなったのは言うまでもなく。その様子にも全く気づいてない。

「ねえ、二人も一緒に行かない？」

「いいんですの？」

年上と話すときはどうもお嬢様口調になるようだ。

伺うように聞いているが実際断られようと一緒に行くつもりだった。

「もちろん。私はもうすぐ帰るしね」

凜鈴は寂しそうに笑った。

もうすぐ夏休みも終わるため、凜鈴は実家に帰らなくてはいいけない。

「あ、そうなんですか」

瀬津奈は名残惜しそうに言った。

夏休みの間何回か三人で出かけたりして仲良くなった頃にお別れ

だから無理もない。

天月はその誘いを毎回拒否してきたが。

「うん。だから盛り上がりすぎていいこう！」

元気な凜鈴を先頭に祭りの行われている神社まで向かう。

浴衣美人が三人も揃って歩いているから目立つことこの上ない。

すれ違った男は三人の姿に見とれ、天月を嫉妬の視線で突き刺す。

「ねえ、神社つてどっち？」

「もうすぐですよ」

賑やかな音が聞こえてくる。

空はとつくに暗くなっているがこの町はまだ眠りにつかない。

小さな町だから行事ごとには町民のほとんどが集まる。

心なしか四人の歩く速度は速くなり、しばらくすると神社が見えた。

「ほら、着きました」

都会に比べれば規模は小さいが、この町では大きめの祭りである。その様子を間近で見て凜鈴の目が輝く。

「よし！ それじゃあみんな行こう！」

凜鈴が先陣を切り、あとの三人がそれについていく。

凜鈴は明らかに浮かれているが、瀬津奈と千華も好奇の目で出店を物色していた。

「ツキ君りんご飴買ってくれる？」

「何で俺が」

「買ってくれるの？ ありがとう」

「話聞いてる?!」

言葉を捻曲げて解釈された。

弾んだ声が喜びを表しており、渋々代金を払う。

一度屈してしまえばそこから負の連鎖が始まるのだと後になって気づいた。

「じゃ、あたしは焼きそばで」

「あたしはカステラー」

「さも当然のように言うなよ！」

天月は結局払ったが。

早くも財布の中身が心配になっている。

「よし！」

「はい？」

天月は急に腕を掴まれ、引っ張られる。

腕を掴んだ張本人の凜鈴は振り向いて一言謝った。

「瀬津奈ちゃん千華ちゃん、ごめんね！」

凜鈴の謝った意味が分からず、天月はただただ引っ張られていた。

残された二人は呆然としていた。

一足早く正気に戻った千華は二人を追いかけてよとする。

しかしそれは瀬津奈に制止された。

「ダメよ千華」

「な、何で止めるの?!」

「凜鈴さんはもう帰っちゃうんだよ。だから最後くらいは二人つきりにしてあげよう？」

「でも、もしそれで二人が付き合ったりしたらあたし……あたし！」

「ふふ、やっぱり閨のことが大好きなんだ」

優しい微笑みで今にも泣き出しそうな千華を抱きしめる。

相当焦っている千華とは対称的に瀬津奈はいつも以上に冷静だった。

「あたしもそれくらい素直になれたらなあ」

千華の長い髪を撫で、瞳を閉じて呟く。

この小さな願いが叶うのはいつだろうか。

願いを叶えるためには過去を断ち切らなければならない。

「難しいなあ」

溜息混じりに吐いた言葉の真意は誰にも分からなかった。

「話って……？」

俯いたまま凜鈴は何も話さない。

いつの間にか花火も終わっていた。

待っているともごもご話し始める。

「その、うん、あのね」

またすぐに黙ってしまった。

かと思えばまた口を開く。

「私たち子供の頃からずっと一緒だったじゃない？」

「まあそうだな」

「中学生のときにツキ君が引越してすごく悲しかった」

天月が中学校に入学してからは長期休暇のときに天月が帰郷するくらいで。

二人はあまり会えていなかった。

「中学校も高校も大学も飛び級で卒業したのは大人になればツキ君と一緒にいれると思ってね」

凜鈴は自嘲気味に笑った。

元から頭はよかったが、飛び級するほどではなかった。

たゆまぬ努力の成果だと今さら天月は気づいた。

「馬鹿だよね私。恋は盲目ってホントなんだってあとから思ったよ」
凜鈴は天月を見据え、今まで胸の奥に秘めていた思いを吐き出す。
「好き。ずっと好き。ツキ君のことがずっとずっと大好き！」

言い切った凜鈴はどこかすっきりしたように見えた。

天月は自分の気持ちを伝えるべく凜鈴の言葉に応えた。

「リン姉の気持ちは嬉しい。でもその気持ちには応えれない」

「……そっか」

顔を伏せて悲しそうに呟く。

その様子に心を痛めたが、構わず続ける。

「好き……かどうかは分からないけど、忘れられない人がいるんだ」

「だ、誰?! 誰なの?!」

天月の言葉にすごい勢いで反応する。

今にもつかみかかりそうだが、天月はあくまで冷静だった。

「リン姉も知らない人だよ」

天月は今でも時折思い出す。

会ったことは一度しかない。

けれどその眩しい笑顔は忘れなかった。

凜鈴はそれ以上は何も言わず、笑顔を見せた。

それは、悲しい笑顔だった。

「高校生だもんね、好きな人ぐらい普通いるよね。あはは」

「リン姉……」

「ごめん、先帰るねっ」

「リン姉っ!」

追いかけようとしたが姿が見えなくなった途端、嗚咽が聞こえた。

——本当にごめん、リン姉。

今まで我慢していたのだろうか。

泣き声を聞いてしまい、天月はそこから動けなくなった。

十二話：光の花咲く夏祭りの夜に想い募る（後書き）

更新一ヶ月開きました。

忙しくてなかなか書けず……。

今回も電車に乗ってる時間以外ほとんど書いてませんから。
軽く泣きそうです。

更新楽しみにしていたいている皆様、本当に申し訳ありません。
七月もテストがあり、いつ更新するか分かりませんが出来たら七月中に更新します。

次の話からバトルパート、一勝の山場ですね。

自分自身書きたかったから楽しみです（＃＾ー＾＃）

十三話：理想のために 仲間のために

「うつ……畜生……」

夏休みが明けて数日が経ち、文化祭の準備で大忙しの生徒たち。今日は先日行ったテストが返却された。

宿題はしっかりしていたのに見事に数学で赤点を取ってしまった。

——こんなことリン姉に知られたら。

そんなことを思ってからふと気づいた。

「リン姉帰ったんだっとな」

あの後泣き止んだ凜鈴を連れて帰宅した。

そして夏休みの終わる数日前に凜鈴は実家に帰った。

夏休み前まで普通だった一人暮らしが急に寂しく感じた。

悶々と考えてるうちに家に着いた。

「ただいまーっ」と

「お帰りなさい貴方。お食事になさいます？ それともお風呂を一緒に？」

「すみません間違えました」

壊すつもりで扉を閉める。

何歩か後退してここが自分の家であることを確認する。

幻覚であることを祈りつつ扉を開ける。

「お帰りなさい貴方。お風呂になさいます？ それともおふ」

言い終わる前に千華はハリセンで後頭部を叩かれた。

後頭部を押さえて犯人の瀬津奈を睨む。

「せーっっな」

「誰もそんなボケ求めてないのよ」

「ボケじゃないのにー」

頬を膨らませながら文句を垂れる。

最近千華に対しての瀬津奈のツッコミがきつい。

それだけ仲が良くなったのだろう。

「いやいや、なんで？」

危うく流してしまうところだった。

立ち直った千華が笑顔で言った。

「凜鈴さんに頼まれてね。天月のことをよろしくって」

「けど勝手に家に入るのはどうかと思う」

「まあまあ。その代わり美味しいご飯を作るから」

千華の言葉を聞いた途端天月の全身から汗が吹き出す。
体の震えが止まらない。

実際二人はエプロンを着けていた。

「いや、料理なら俺がしますから」

「だーめ。だってこの前天月あたしの料理食べてくれなかったじゃない」

そもそも料理という前提から否定しなければならない。

青紫色の物体なんて食べれるはずもない。

瀬津奈の料理も体が変色するというありえないものだった。

しかし天月にとって一番ありえないのは二人が料理をしている状況だった。

「あの、許してください」

「大丈夫よ。多分」

瀬津奈は“多分”がどれ程の恐怖を持っているか知らなかった。

「そろそろ出来たんじゃない？」

「そうみたいね。それじゃあ閨、楽しみにしてなさい」

逃げようにも逃げられず、天月は数日間謎の腹痛に襲われるのだ。
った。

「いやー、腹痛やっと治った」

「随分根に持つわね。男のくせに」

「俺がどれだけ苦しんだと思ってるんだ」

三人並んで学校に向かう。

天月はようやく腹痛が治り、珍しく清々しい気分だった。

「天月あたしの料理食べてくれなかった」

腹痛の主な原因は千華の料理を一口食べたからだが。

青紫色の蠱く物体——千華曰くオムレツらしい——は身体が毒と判断したようだ。

瀬津奈の料理は味はいいのだが謎の副作用がある。

最近家は家に押し付けてきても天月が料理を作っている。

流石に命にかかわる事だから必死である。

「いちいち大袈裟なのよあんたは」

「そうだよ。食べれるんだから」

「食べれても身体には有毒だ」

下足ロッカーで靴を履きかえていると呼出しがかかる。

その内容は天月に校長室へ来るように、というものだった。

「俺は何も聞いてない。聞こえてない」

「そう言ってる時点で聞こえてるじゃない。でも天月何したの？」

「何もしたらん」

「いや、あんたかなり暴れてるじゃない」

「あ」

言われてみると夏休みまでの数ヶ月、望んだわけじゃないが闘つてばかりだった。

補習も何回か受けてるし心当たりはある。

「もしかして退学？」

千華の言葉に身体が硬直してしまう。

あまりに現実味があつて否定できない。

「……とりあえず行ってきました」

二人の視線を背中に受けて校長室へ。

校長室は二階にあるのですぐに来れた。

扉をノックすると入るように促されたので恐る恐る入った。

「失礼します」

中には気まずそうにしている校長と見知らぬ中年男性と初老の男性がいた。

何かただならぬ雰囲気以身構える。

その様子に中年男性は愉快そうに笑った。

「はっはっは。そう身構える必要はない。少し話があるだけだ」

「話？」

「自己紹介が遅れたね。私はこの学校の理事長代理を勤めている影^{かげ}山^{やま}だ」

「理事長代理ですか」

校長の気まずそうにしている理由がようやく分かった。

普段偉そうにしている分、自分が威張れない今の状況に慣れていないのだろう。

理事長代理は更に話を続けた。

「君には彼の計画に協力してもらいたい」

「嫌です」

めんどくさくて即刻拒否したが、聞いてないようだ。

どうにも嫌な予感がする。

「ここからの説明は人間^{いるま}さん、お願いします」

「俺の意見は無視ですか」

「そう言わずに話だけでも聞いてくれ」

人間と呼ばれた初老の男性が目の前に歩いて来る。

そしておもむろに口を開いた。

「初めまして閨君。ある施設で働いている人間だ。長くなるけど聞いてもらうよ」

「どうぞ」

警戒心は解けないが、話だけでも聞いてどうするかはそこから決めようと思った。

実際話を聞かないと解放してもらえないそうだ。

「先ずは——そうだね、君はこの世界をどう思う?」

「どう思うとは?」

「良いか悪いか、どちらだと思う?」

天月はその答えに悩んだ。

悩んだ結果頬を掻きながら答える。

「分かりません」

「ほう? 何故だい?」

「人によつては良いと答えるし悪いとも答える。俺には判断出来ません」

「なるほど。やはりそう答えますか」

予想通り、といったげな口調に天月は恐怖を覚える。

そして人間の考えに驚愕することになる。

「私はこの世界に失望している」

「失望……ですか」

「ああ。今から四十年前に瞳術が発見され、その一年後に四つの術の発見、しかし科学技術は廃れることなくそれどころか進歩した。何故だと思う?」

天月は無言で首を振る。

考えても分かりそうにないからだ。

「瞳術だけでは足りないからだよ。足りない分を科学技術が補う。いや、むしろ科学技術の発展を手助けしている。そうではないだろう」

一端言葉を切つてから人が変わったように意気込んで話し始める。

「私が求めている世界は違うんだよ! まだまだ守護術には隠された力がある! 私はこの腐った世界を変えるために生きている!」

天月は苦い顔をする。

すでに天月のことなど見えてないようだ。

「癒術があるのに医療施設がある理由は? 癒術を使える者が少なく、病気に対しては効果がないからだ」

確かに癒術を使える確率は百万分の一と極めて低い。

癒術は細胞の働きを活性化させるのみで、病気などに対しては逆に病気の進行が進んでしまう。

「他にも守護術には欠点がいくつもある！ その欠点を改善するためには多くのモルモットが必要だ！」

モルモット、その単語に天月は反応した。

今すぐ斬り捨てようかと柄を握る。

興奮している人間は収まらない。

「この学校の生徒様にもお世話になっていますよ。そして君が協力してくれば一気に計画の完成に近づく」

「お断りします」

この学校の生徒まで犠牲にしている時点でありえない。

しかし人間は不適に笑う。

「くつくつく。君が断れば君のお友達が犠牲になりますよ」

「っ！」

「神無月瀬津奈と琴鳴千華。正直物足りませんが我慢しましょう」

「ふざけるな！ そんなこと許されるわけないだろっ」

「許す許さないの問題じゃない。君が私の計画に参加してくれれば済むことだ」

天月は齒を食いしばった。

仲間を引き合いに出せば天月が断れないことを分かっている。

人間は喉を鳴らして笑った。

「どうして俺にこだわるんですか？」

「基礎、上級、禁断の十五種全ての瞳術を使える人間なんて貴重な存在だからね」

「……なんでその事を？」

誰にも言っていない筈なのに知られている。

これには自分の出生の秘密が関わってくるので天月はひた隠しにしてきた。

瀬津奈や千華に訊かれてもごまかしてきた事だ。

「私の情報網を甘く見ないでもらいたい。調べていて流石の私も驚

いたよ。なんせ君の両親は――」

「神無月、千華。聞き耳立ててないで入って来いよ」
入間の言葉を遮ると扉が開く。

見ると二人の少女が入って来た。

「何やってんの？」

「べ、別に覗いてなんかいいわよ！」

「そ、そうそう！」

「まあそのうち気づかれると思ってたけど」

こんな形になるとは思わなかった。

二人の姿を確認して再び入間が笑う。

「丁度いい。二人の前でどうするか決めたらどうだい？」

「少しお待ちください」

天月が口を開く前に理事長代理が言葉を挟んだ。

入間は不快そうに理事長代理を見る。

「差し出がましいようですが、閨君にチャンスをあげてはどうでしょう」

「ふむ、確かにこのままだと逃げられそうですね」

「我が校の生徒会が閨君と闘いたいと申しております。実力を測るためにもいい機会だと思います」

「ほう。それは面白い」

「俺一人で生徒会五人と闘うんですか？」

天月の疑問に理事長代理が答える。

「君一人では無謀だ。幾らでも人数を集めてきなさい」

「いえ、俺一人をお願いします」

「あたしも闘います」

「あたしだって天月のために闘いたい！」

天月の言葉を揉み消すように参加を決意する。

二人を危険な目にあわせたくない。

けれども迷いのない目を見ると何も言えなくなる。

「まったく。言っても無駄みたいだな」

溜息混じりに吐いた言葉を二人とも肯定する。

諦めよりも護ろうとする意志が固まった。

「日時は次の日曜日の十二時。正門前に集まってもらおう。詳しい事は当日説明する」

「分かりました」

一礼して部屋から退室する。

ふと右を見ると東宝夜鷲が立っていた。

「面白そうな事になったな」

「盗み聞きとはいい趣味してるな」

「人が足りないんだろう？」

「やる気満々じゃねえか」

強さとしては申し分ないがこれ以上人を巻き込みたくないのが本心だった。

渋っている千華が背中から顔を出す。

「東宝君強いんだし別にいいんじゃない？ 頼もしいと思うけど」

「んー……じゃあ頼むぞ」

「俺はやりたいようにやるさ」

言うだけ言って去ってしまう。

その後ろ姿には呆れて何も言えない。

「あ」

「どうしたの？」

無情にも授業終了を知らせる鐘が鳴った。

結局丸々一時間授業をサボってしまった。

三人は顔を見合わせる。

「……なかったことにしましょう」

瀬津奈の呟きに二人は無言で頷いた。

十三話：理想のために 仲間のために（後書き）

裏話その8

テスト週間挟んだため二週間空きましたf^| ^ ;
これでも急いだ方なんですよ……。

裏話久しぶりですね。

しょうもないことですが学校行事などは僕の学校を元にしてます。

校長室も多分二階にあると思いますww

いまいち教室の場所覚えてないんですよねー。

まあどうでもいいですね(o^・^) b

ネタが無いんですよww

次から五話程度バトル展開になると思います。

今月中にまた更新予定です(ノ><)ノ

十四話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ鈴の音響く風の手

「しかし文化祭前にこんなことやっていいのかねー」

「今更何言ってるのよ」

——日曜十二時に正門前へ集まるように。

そう言われて四人は集まったが、すでに十二時を過ぎている。

天月は欠伸を噛み殺した。

「相変わらず呑気ね」

「長所だからな」

「どう考えても短所でしょ」

「ほっとけ」

天月の心境は複雑だった。

闘いは避けたい。

けれど二人を護る義務感もあった。

結局気持ちの整理もつかないままだった。

「お待たせしました」

現れたのは高身長で真面目そうな女性だった。

千華は女性を見て何かに気づいたようだ。

「あら？ みつおが 光岡先生？」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、保健医で保健室にいつもいらっしゃりますわ」

「その通りです」

何度が保健室に行ってるのに顔も覚えてなかった。

口調が普段と違うのもあって分からなかった。

二人とも呆れたように天月を見ている。

そして今まで黙っていた夜鷗が訊いた。

「どこで闘うんだ？」

「こちらです」

光岡は正門前の川に架かっている橋の傍に立った。

橋の欄干に手を触れて波動を流す。

すると橋の中央が開き、下まで続く正方形の穴が見えた。

「一人ずつ降りてください」

それだけ言い残して光岡は飛び降りた。

「先に行くぞ」

「あ、あたしも」

夜鷗が飛び降り、追うようにして千華が飛び降りた。

「ほら、さっさと行きなさいよ」

「分かってるよ」

天月は飛び降り、周囲を見渡すと地上と変わらない住宅街が広がっていた。

「へー。地下都市ってわけねぐふあっ!？」

感心して見ていると上から瀬津奈が落ちてきた。

結果として天月は押し潰される事になる。

「いったくくく! 何ぼんやりしてるのよ!」

「い、いいからどいてくれ。重い」

天月の言葉を聞いて瀬津奈は立ち上がり頭を踏みつけた。

そして体重をかけながら笑顔で訊いた。

「だ・れ・が、重いのかしら?」

「ごめんなさい! 頭潰れる!」

「どうせ空っぽだからいいじゃない」

「痛い痛い痛い! ヤバいつて!」

「お遊びはそこまでですよ」

光岡の言葉で瀬津奈は足を退ける。

天月は踏まれた側頭部を押さえながら立ち上がった。

千華も体を強張らせる。

光岡の雰囲気気圧されたからだ。

ただ一人、夜鷗はいつも通り自分の心中を見せない。

「あなたたちは生徒会役員と闘うことがどういいうことが分かってますか?」

一拍置いて、光岡はこう言った。

「命の保証は無いんですよ」

「闘いはそういうものだ」

「俺がいる限り誰も死なせません」

夜鶴と天月の言葉に光岡は驚いた。

瀬津奈と千華も一瞬驚いたが、すぐに頬を緩める。

「呆れるくらい馬鹿なんだから」

「二人とも樂觀的過ぎ」

四人の様子を見て光岡は溜息を吐く。

本当は危険なのでこのまま帰らせたかったが、無理のようだ。

「分かりました。それではルールの説明を始めましょうか」

理事長の指示で作った“無人の地下都市”《アンダータウン》は幸町より一回りほど小さく、範囲は地下都市全てで制限時間は二時間であること。

町には人がいないし修復可能なので存分に暴れていいこと。

そして倒されない限りは何度でも闘っていいことを説明した。

「四人ともこれを着けてください」

そう言って腕時計を渡す。

腕時計には時間と四人の名前、生徒会五人の名前が表示されていた。

「敗れた者の名前は表示されなくなります」

「なるほど。それでいつ始まるんですか？」

腕時計を見て時間を確認する。

短針は十二、長針は六を指していた。

「もうすぐ合図が鳴ります。御武運を」

それだけ言い残して光岡は去った。

その数秒後に合図の鐘が鳴る。

「それでどうするの？」

「んー、相手は二時間逃げ切れれば勝ちなんだから隠れてるだろうし、しらみ潰しに探すしか——」

天月の言葉は途中で遮られた。

巻き起こった突風に。

天月は数十メートル先の家まで吹き飛ばされた。

「な、何なの?!」

「生徒会役員がそんな保守的な考えの筈ないだろう」

突風とともに小柄な少年が現れた。

鋭い瞳は吹き飛ばした天月を睨んでいる。

「生徒会庶務の一年、英田氷弥刀^{あかだひみと}だ。これで終わりじゃないだろう?」

瀬津奈と千華は氷弥刀に攻撃しようとしていた。

しかし天月の制止で踏み止まる。

「ここは俺に任せて早く行ってくれ」

吹き飛ばされた筈がそこに立っていた。

「だ、大丈夫なの?」

「大丈夫だつて。夜鷗ももういないし」

確かに既に夜鷗の姿は見えなかった。

口の中に溜まった血液を吐き出す。

「時間が勿体ない。早く」

「天月……また後で会おうねっ」

千華は迷いながらも走った。

瀬津奈も心配そうに見ていたが、目を背けて屋根まで跳んだ。

そのまま屋根を跳んで渡っていく。

「いつの間に瞬間移動を使っただんだ? それとも幻術かい?」

「どっちもハズレ。正解は——」

氷弥刀の視界から消えて背後に回る。

「——速さ《スピード》」

氷弥刀は振り返りながら手刀を振るう。

両目の色は緑色に変わっていた。

「風刃の太刀^{ふうじんのだち}」

真っ直ぐに飛ぶ少し反り返った風の刃。

天月の身体は風の刃で真っ二つになる。

そしてそのまま霧散する。

「霧霞」

天月は左腰に納刀した刀を右手で握っている。

その刀を一気に振り抜く。

氷弥刀はしゃがんで避ける。

ぱらぱらと黒い髪の毛が数本切れていた。
かさだま

「風玉」

右手の人差し指で小さく円を描き、手の平をかざす。

手の平の上に風が集まり、球状になる。

風が集まったことで高音が鳴り響く。

しゃがんだままで天月の腹部に球体を当てる。

「がはっ……」

球体が破裂して突風起こり、天月の身体は再び霧散してしまう。

「芸のない」

「お褒めにあずかり光栄です」

氷弥刀が振り返ると天月が左手で左腰の刀を、右手で右腰の刀を
逆手に握っていた。

刀を抜くところを視認できず、気づけば抜刀術を放った後だった。

「浅いか」

「かすっただけでも波動を結構斬られたな」

氷弥刀は天月の構えを見て反射的に後ろに下がった。

そのためそれ程ダメージは受けなかった。

「個人情報だだ漏れかよ」

「喋らないで背後から斬ればそれだけで終わっただろうぞ？」

「不意打ちは嫌いなんです」

「その割には背後を襲うの好きみたいだな」

氷弥刀は小さく笑う。

天月も笑い返した。

「癖なんです」

「馬鹿な癖だ」

氷弥刀は手の平を正面に向けて地面と平行に動かす。

そのライン上に風の粒が集まっていく。

「風礫^{かざつぶて}」

派手な音を立てて風の礫が飛んだ。

天月はそれを跳んで避ける。

「ふん、次行くぞ」

右手の人差し指で何重も円を描く。

手の平をかざすと風が集まる。

さつきとは違い集まる風の量が多い。

球体は風鈴のように綺麗な音を奏でる。

「風玉 風鈴^{ふうりん}」

「こいつはやばそうだな」

氷弥刀は正面から突っ込む。

天月もそれを迎え撃つように走り出す。

氷弥刀は右手を突き出す。

球体は破裂して轟音とともに暴風が巻き起こり天月は再び数十メ

ートル先の家まで吹き飛ぶ。

氷弥刀の腕は反動に耐え切れず、骨の軋む音がする。

「こいつはあまり乱発出来ないんだ。だから少し防御に入らせてもらうよ」

右目は緑色のまま、左目は青色に変わっていた。

左手の人差し指で幾つも円を描く。

氷弥刀を覆うように水泡ができる。

「薄膜の泡沫^{はくまくのうたかた}」

「色違いの重目とはレアなこった」

瞬間移動レベルの速さで一気に近づく。

左手の刀で突きを繰り出すと水泡が破裂して水飛沫が飛んだ。

さしずめ銃弾のようで、当たった箇所から血が流れる。

既に泡は再生していた。

「くそっ！」

軽傷とはいえ全身から血が流れており、出血量はかなりのものとなっていた。

——そろそろ決めないとまずいな。

そう呟いてから左手で左腰の刀を、右手で右腰の刀を逆手に握る。

「また抜刀術かい？ 本当に芸がない」

「そうとは限らないぜ」

目を閉じて脱力する。

ゆっくりと身体を前に倒し、目を見開いて一気に走り出す。

「何度やつても無駄さ」

手の平の上には風で出来た球体がある。

一瞬でも怯めば攻撃されるだろう。

「速真迅剣はやまのじんけん一ノ斬型いちのきるかたづつめ一爪」

左腰に差した刀を一気に振り抜いて水泡を割る。

水飛沫が飛ぶが天月は踏ん張って耐える。

膝は震え出す。

「終わりだっ！」

氷弥刀の右手が天月に襲いかかる。

今度は直接当てるつもりのようなうだ。

しかし天月はこれを狙っていた。

「双爪そうそう」

右手で刀を振り抜いて氷弥刀を斬る。

球体は形を留められず、風が天月の髪をなびかせる。

「馬鹿な……」

膝を折って氷弥刀は倒れた。

しかし天月の傷も浅くはない。

「月に祈りな」

腕時計が鳴ったので見ると氷弥刀の名前が消えていた。

時間は十五分経った。

「あと四人なんだよな」

空間に“隼”の文字を書く。

契約獣である疾風隼が召喚された。
「とりあえず適当に飛び回ってくれ」
疾風は翼を羽ばたかせた。

天井すれすれを飛んでいる三本足の鳥。たのす
その上に乗って夜鷯は地下都市を見つめていた。
腕時計が鳴ったのでディスプレイを確認すると、生徒会側の名前
が一人分消えていた。

「ふん。やっとか」

再び敵の探索を続ける。

夜鷯は強者にしか興味がない。

半端な強さではなく圧倒的な強さ。

強者と闘うために参加したのだ。

「……やっど一人目」

十五分飛び回ってようやく見つけた。

鳥を制止させ、空中で停止する。

この闘いに勝つことを優先するか、自分の闘いを優先するか。

少し悩んだ後、夜鷯は鳥に地上に降りるように指示した。

夜鷯には少し気になることがあった。

一気に下降して飛び降りる。

「あら、やっど来たのね」

「隠れてたんだろ」

「しょうがないじゃない。神宮に時間を稼ぐように頼まれたんだから」

対峙しているのは茶色の髪の少女。

平均的な身長でくりくりした大きな目をしている。

背中には巨大な剣を背負っていた。

「一応自己紹介をしておこうかしら。二年生徒会会計、御堂真珠^{みどうしんじゆ}よ」
「……その大剣は？」

「ん？ ウフフ、ナ・イ・シヨ」

そう言つて夜鷗に向けてウインクをする。

夜鷗は今すぐ斬りかかりたくなつた。

「落ち着きなつて。お姉さんかわいい後輩が負けてブロークンハートなんだから」

真珠は溜息を吐いた。

「嘘だろ」

「嘘じゃないわよ。あの子をいじめるの最高に楽しいのよ」

真珠は思い出してうれしそうな顔をする。

「貴方はどんな反応をしてくれるのかしら？ 本当に楽しみだわ」

真珠の笑顔に悪寒を覚えた。

——これは当たりかもな。

真珠も気づかない程だったが、夜鷗は少しだけ笑つた。

十四話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ鈴の音響く風の手（後書

裏話その九

久しぶりに一週間間隔で更新できました（＾＾）
もう夏休みですね。

十四話で初登場の氷弥刀ですが、最初考えてたキャラとは性格も能力も違いました。

考えてたのはもっとバカっぽい性格だったんですが気づいたらこんな性格にww

能力の方は個人的には気に入ってますのでいずれ使います（o^-

）b

次は夜鷲の闘い！

十五話：決戦の無人の地下都市《アンダータウン》 神宝模し巨大な剣

「来なよ」

真珠は余裕そうに言った。

夜鷺は懷からナイフを一本取り出す。

ナイフを投擲する瞬間には四本に増えていた。

ナイフが飛んできても焦らず背負っている大剣を構えた。

大剣を振ってナイフを弾く。

「今度はこっちから行くよ」

空を仰ぐように大剣を掲げる。

一気に振り下ろし地面を衝撃波が走る。

夜鷺は横に跳んで避ける。

「……大した威力だ」

地面には亀裂が走り、衝撃波は家を真っ二つに割ってようやく止まった。

夜鷺は真珠の持っている大剣を見た。

「神宝具の模造品レプリカか」

「あらま、もう分かっちゃったの？」

分類としては武具だが、武具を造る武具職人ぶぐしよくにんの腕次第では原型オリジナルに限りなく近づく。

真珠の大剣は模造品レプリカとしては最高レベルだろう。

これだけ完成度の高い模造品レプリカを夜鷺は見たことがなかった。

「ジュウユーズ……」

「おやおや、博識だね」

ジュウユーズ——フランク王国の王であつたシャルルマーニュが所持していたとされる剣である。

その名前は「喜びにあふれた」という意味を表す。

「まあ分かったところで関係ない、けど！」

真珠は走って距離を縮める。

両手で握り直し水平に大剣を振る。
夜鷲は後ろに下がって回避する。
そして右腰に差した黒刀を抜いた。

「……隙だらけだ」

「本当にそう思う？」

握っていた右手だけを離れた。

右目が茶色に変わり、親指、小指、人差し指、薬指、中指の順で
右手の指を少しだけ上に動かす。

「隆起する大地」
じゅうつきするだいち

地面が盛り上がって足が埋まる。

更に地面が一気に盛り上がり、両手の自由を奪う。

「しまっ……」

躊躇ちゅうちゆすることなく右肩に大剣を振り下ろす。

腕は斬れなかったが、鈍い音がした。

「峰打ちだけど骨の一本二本覚悟してね」

癖なのか、またウイंकをする。

夜鷲は俯いたまま顔を上げない。

「あれ？ もう終わり？」

術を解いても立ち尽くしていた。

すると全身が黒色に染まった。

真珠は知らない内に幻術にかかっていたと気づいた。

どんだん形を変えて最終的には自分と同じくらいの大きさな三本
足を持つ鳥になった。

「残念だったな」

振り返ると無傷の夜鷲が立っていた。

真珠は手に痛みを感じて見ると手の甲に小さな切り傷があった。

「ふーん、傷を幻術で隠してたんだ」

傷を舐めて笑っていた。

夜鷲は黒刀の切っ先を真珠に向ける。

刃が蠢き、獣の頭を模した形状になる。

獣の頭が伸びて噛みつこうとする。

真珠が大剣を獣の頭目掛けて振ると跡形も無く消えてしまった。

「模造品の長所は原型オリジナルにない能力を付加出来る所だよね」

滅多に表情を変えない夜鷺が驚きを隠せなかった。

あまりに付加されている能力が自分にとって不利なものだったからだ。

「私自信が幻術苦手だから注文するときにこの能力を付加してもらったの」

「金鷄きんし」

夜鷺が名前を呼ぶと超高音で鳴き出す。

真珠は反射的に大剣から手を離して耳を塞ぐ。

「み、耳が……」

夜鷺の左目が黄色に変わり、左腕が電気を帯びる。

左腕を前に突き出すと一気に放電した。

「なんちゃって」

真珠は大剣を握り電撃を斬る。

先程と同様電撃は跡形も無く消えた。

左目も元に戻る。

「この程度の騒音何ともないんだけどさ。耳障りだから止めてくれない？」

「……何で効かないんだ？」

「普段もつとうるさい環境にいるから」

何でもないように言い切った。

納得はしなかったが、言っても無駄だと悟った。

左腕を肩の高さに真つすぐ上げる。

突如左腕を黒い炎が纏まとう。

「分かりやすい幻術ね」

腕を前に突き出すと黒い炎が襲いかかる。

大剣を振ると黒い炎は消えた。

視界を遮っていた黒い炎が消えると四本のナイフが飛んできた。

焦らずに上に跳んで避ける。

「見かけによらずこの子軽いの」

「まだだ」

もう一度ナイフを四本投擲する。

着地してそれを難無く弾いた。

その間に夜鷗は斬りかかる。

「まずっ」

一瞬苦い顔を見せたが、この大剣に付加された機能を思い出した。柄を九十度回し、手前に引っ張ると大剣の刃の中から細身の剣が現れた。

夜鷗の斬撃をそれで受け止める。

「面白いでしょ？ 私が考えたんだから」

正確には細身の剣に大剣の刃を差し込んだようだ。

今の動作で外れる仕組みなのだろう。

夜鷗は一旦距離を取る。

真珠は大剣の刃を差し込んでいる。

「そろそろ終わりだ」

右目が紫色に変わり、人差し指で放物線を描く。

放物線は淡く光ると濃い霧が広がる。

真珠も霧の中に入り、完全に周囲が確認できなくなった。

「ありや、これじゃあ分かんないな」

「不可視濃霧」
ふかしのつむ

「君には私の姿が見えてるの？」

「まさか」

夜鷗は気配で位置を把握していた。

殺し屋時代に感覚神経を鍛えさせられたことが役に立った。

「まあ律儀に霧の中に居てあげることはないよね」

跳躍して霧から抜け出す。

両目が茶色に変わり、大剣を離して両手で拳を握る。

手を広げて瞳術を発動する。

「落岩石」
らくがんせき

辺り一帯を押し潰せそうな大きさの岩。
その岩が空中に浮いている。

夜鷲は真珠が霧の中から出たことを察知して霧の中から出ていた。

「……流石にまずいな」

夜鷲は強力な瞳術が使える訳ではなく補助系瞳術しか使えない。
とはいえ避けるには範囲が広すぎる。

何を思ったのか、黒刀を鞘に納めた。

「金鷲、帰れ」

光に包まれて金鷲は帰った。

金鷲を護ったのか、何か別の考えがあったのかは夜鷲以外誰も知らなかった。

岩は落下して、轟音が響き渡った。

「やり過ぎくらいで丁度いいって神宮言ってたし、生きてるよね？」

不安になったのか瞳術を解く。

両目の色が元に戻り、岩は消える。

夜鷲は俯せに倒れていた。

近づいてもぴくりともしない。

「あれ？ あれれ？」

全身からの出血が止まらない。

真珠の頬に冷や汗が一筋流れる。

「……残念だったな」

突然夜鷲は立ち上がった。

その立ち姿は普段通りだった。

「その出血量なら無理しない方が」

言葉の続きは出なかった。

真珠は自分の目を疑った。

確実に当たった筈なのに、出血は完全に止まっていた。

幻術としても、一体いつから？

「迷え……悩め」

夜鷺の言葉を聞いてしまった。

真珠は頭を抱える。

「気づいたときにはもう遅い。すでにあんたは俺の術中に嵌まっている」

「ぐうう、そんなもの！」

夜鷺を狙って大剣を振り回す。

しかし真珠の攻撃はすり抜けてしまう。

「な、何で?! 幻術なら斬れる筈よ!」

「あんたの目は何も見えていない。あんたの心は幻に支配された」
夜鷺は黒刀を抜いてその刃を見せた。

その色は全てを沈める色だった。

「黒紅闇夜幻、その刃を見し者の意識を全て沈めよ。闇夜の牙^{やみよのきは}」
黒刀は獣の頭に似た形状になった。

真珠はそれを見て震えが止まらなかった。

「ああ……あう……」

獣の頭がゆつくりと近づく。

真珠は腰が抜けて座り込んでしまう。

獣の頭が口を開くと真珠は気絶した。

そこで動きを止める。

「大分時間かったな」

地中から夜鷺が出てきた。

今までそこに居た夜鷺は幻覚だった。

実際には岩が落下する前に茶色の瞳術で地面に穴を空け、そこに入ったのだ。

後は幻術で穴を見えなくし、倒れた自分を作ればさっきの状況が完成した。

「……五月蠅いな」

腕時計は真珠が倒されたことを伝えるために鳴り続けている。

夜鷺は横たわる真珠を一瞥する。

「……幻術使いに心の際を見せた時点であんたに勝ちの目はなかつ

た」

それだけ言うと夜鷄は空間に“鳥”の文字を描いた。
契約獣である金鷄が光とともに現れた。

「金鷄、頼むぞ」

中々愉しめたが、焦りを見せた時点でまだまだ物足りない。
強者を求めて金鷄の背中に乗った。

「あ、腕時計また鳴ってる」

神無月瀬津奈は屋根の上で腕時計のディスプレイを確認する。

生徒会側の名前が消えていることに安心した。

「でも四十分過ぎてまだ二人だけってのは急がないと。あたし見つ
けてないし」

開始からずっと屋根の上を渡っている。

それでも全く見つからない。

「これだけ探しても見つからないなんて忍者かってツツコミたくな
るわね」

「忍者だよーん」

軽快な口調に驚いて後ろを振り向いたが、そこには誰も居ない。

誰も居なかったので前を向くと目の前に自分と同じぐらいの身長
の少女が満面の笑顔で立っていた。

「っ！？」

瀬津奈は素早く距離を取る。

その様子に少女は声を出して笑った。

「にはは、そんなに驚かなくてもいいのに」

「せ、生徒会役員ですか？」

「いかにも、生徒会書記の二年八組みづるゆづれん三十番美鶴優恋様だーっ！」

腕を組んで堂々宣言する。

組んだ腕のせいで豊満な胸が形を変えて男にとっては目に毒な、瀬津奈にとっては恨めしい光景である。

「それじゃあ覚悟してください」

顔を引き攣らせながら笑顔を作る。

懷からチャクラムを取り出した。

「おおっと、もうバトルパート？」

「時間がありませんから」

「あー、もう四十分経ってるんだ」

呑気にそんなことを言った。

こうして話している時間も無駄だ。

瀬津奈は焦っていた。

「でもねー、瀬津奈ちゃんが四十分跳び回ってたのは私のせいじゃないよ？」

名前を知っているのは恐らく事前に調べたのだろう。

「先輩が隠れてたんじゃないですか」

「隠れてにやいにやい。私はずっと瀬津奈ちゃんのことストーキングしてたもん」

「ス、ストーキング？」

「ずうっと近くに居たのに気づかないんだもの。笑いを堪えるのに必死だったよ」

「じゃあこのタイミングで現れたのは？」

「そういう段取りだお」

四十分も尾行されていたのに気づけなかった自分が情けなかったけれど今は悔やむより先にしなければならぬことがある。

「そろそろ始める？」

「あたしは準備出来てます」

瀬津奈はチャクラムを構える。

優恋も腰に巻いたポーチからクナイを一本取り出した。

「忍者って現代で言うスパイで闘うタイプじゃないんだよ」

「なら大人しく負けてください」

「それとこれとは話が別だにや」

仲間のためにも負けられない。

秘めた決意を胸に瀬津奈の闘いが始まる。

十五話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ神宝模し巨大な剣へ（後書

僕は陸上部なんです、先日地区総体がありました。

100mリレー、200m、400mリレーに出場しました。

結果三種目とも大阪に残りました（ノ><）ノ

200mは24位まで残れる内の23位でしたがf^|^; ;

400mリレーは走れるか分かりませんが、100mリレー、20

0mで頑張りますo（><）o

……うわ、数字ばっかで読みにくww

後書きで近況報告は今後自重します（ ; ; ）

十六話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ猥憑きし忍ぶ者

屋根の上で二人の少女は対峙していた。

神無月瀬津奈は指の部分が露出したグローブを装着する。

美鶴優恋は一気に遥か上空へ跳躍する。

そして瀬津奈へ向けて右手に持ったクナイを突き刺そうとする。

瀬津奈はそれを後ろに下がってかわし、クナイは屋根に刺さる。

両刃のクナイは急所に当たらない限り致命傷にはならない。

優恋はそれをふまえ、避けられること前提での攻撃だった。

「そりゃ」

体勢を立て直し、長い足を生かして上段の蹴りを繰り出す。

それを瀬津奈は腕を重ねて防御する。

「よつと」

更に小さく跳んで鞭のようにしなる左足で側頭部を打ち抜こうとした。

瀬津奈がしゃがんだので左足は空を切る。

しかし優恋はここまで避けられることを予測していた。

「これでどうにや」

優恋は右足を振り上げる。

制服のスカートを履いているため―今回の鬨いは全員制服着用となっている―中身が露になった。

瀬津奈は赤面して恥ずかしがる。

「ちょ、ちよつと先輩?!」

「女の子同士なんだから別にいいじゃんっ」

言い終える前に足を振り下ろした。

間一髪転がって避けた瀬津奈だが、危うく屋根から落ちるところだった。

「くっ、今度はこっちから行きますよ!」

立ち上がって右手に握ったチャクラムを一つ投げた。

波動を纏ったチャクラムだ。

「そんなの当たらないよ〜ん」
軽々と避けてしまう。

——ここだっ！

瀬津奈は強く右手を後ろに引いた。

すると真っ直ぐ飛んでいたチャクラムが空中で停止する。

「まさかの仕掛けだにゃ」

後ろからチャクラムがブーメランのように戻って来る。

優恋は上に跳んで避けるが、その速度に違和感を感じていた。
投げて戻って来るときの方が速い。

普通速度は段々落ちるものだろう。

「そついう術なのかにゃ？」

「見極めることも闘いの一つでは？」

瀬津奈の言葉はもつともだと思つ。

簡単に技の正体を明かすのは馬鹿のすることだ。

「もう一回見せてよ」

優恋は不適に微笑む。

その表情はもう一度見れば理解できるという自信の表れだった。

「行きますよ」

右手に握った二つを優恋目掛けて投げた。

「にやるほど、ワイヤーね」

宙に浮かぶ細い糸を見つけたようで、優恋は納得したようだ。

ワイヤーは瀬津奈の手元から伸びている。

しかし何処までも伸びるワイヤーに疑問を持つ。

「気づくのが少し遅かったですね」

「にゃ？」

二つのチャクラムは優恋を挟むようにして飛び、その背後で停止した。

ワイヤーにより身動きを封じられる。

「いたっ」

意外とワイヤーは鋭く、触れるだけで肉が切れた。

瀬津奈は仕留めるべく左手に握ったチャクラムを投げた。

「ワイヤーで切れるのを防ぐためのグローブね。今気づいたにや」

瀬津奈は右手を後ろに引き、今まで止まっていたチャクラムを操る。

ここまで精密な動きを見せるのはワイヤーに波動を流し、それを完璧にコントロール出来るまで練習しつづけた成果だった。

流石に避けることは出来そうにない。

「いい攻撃だよ」

優恋は慣れた手つきでポーチからクナイを取り出し、見えないはずの背後に投げた。

手首の動きだけで投げたそれはチャクラムに当たり、金属音を立てて地面に落ちた。

「当たったみたいだにや」

足を振り上げ、タイミングよく振り下ろしチャクラムを打ち落としました。

「チャクラムが戻って来るときワイヤーで切れて目茶苦茶痛かったんだけど」

確かにワイヤーには血がべつとりと付着している。

それを見て瀬津奈は優恋以上に痛そうな顔をした。

まるで痛みを共有しているかのような、そんな顔だった。

「ふむ。君のことが少し分かったよ」

その顔を見て何かに気づいたのか、優恋はにやりと笑った。

そして的確に瀬津奈のことを言い当てる。

「君は闘いたくない。正確に言うとな人を傷つけない。そうでしょう?」

瀬津奈は自分の心中を当てられ、その衝撃でかチャクラムを四つとも落としてしまう。

身体は小刻みに震えている。

「君は優しすぎる。その優しさは幸運も招くけど、今は不運を招く

ことになるよ」

優恋は音も無く一瞬で背後に周り、喉元にクナイを突き立てる。瀬津奈は動揺して微動だに出来なかった。

「人の命なんて簡単だよ。君の命は私次第なんだから」
身体の震えは止まらない。

その震えは優恋にも伝わった。

優恋は鼻で笑った。

「死ぬ覚悟もないのに闘うなんて笑えるね。闘いはいつだって死と隣り合わせだよ」

ここまで脅せば降参すると思っていた。

しかしそれは甘い考えだと気づかされる。

「……確かにあたしは死ぬ覚悟なんて持ってません。そんな物必要ありませんから」

更に言葉を続ける。

それは信頼の言葉だった。

「どこかの馬鹿がいる限り誰も死ぬことにはならないと、あたしは信じてますから」

入学式で会ったときは最悪だったけど。

今では支えてもらってる。

ずっと傍に居たい存在になってる。

どこか“あいつ”に似てるからかな。

いつの間にか震えは止まっていた。

「それから先輩、気づきませんか？」

「何に？」

優恋は険しい顔をしている。

左右を見渡すとチャクラムが四つとも浮いていた。

「あたしの技がワイヤーを引っ張って手元に戻す程度だと思ってましたか？ ワイヤーに波動を流せば自在に操れますよ」

四つのチャクラムが一気に瀬津奈の手元へ向けて戻ってくる。

優恋は舌打ちして瀬津奈から離れる。

「にゃんとまあ」

呑気な口調にまた戻った。

瀬津奈は畳みかけるつもりだ。

「はあああっ！」

四つとも右手で握り、上空に投げる。

優恋の真上で横一列に停止した。

その四つが物凄い速度で落下する。

「こいつあまずい」

優恋の両目が赤色に変わる。

人差し指で横に直線を描き、その直線と垂直に交わるよう三本の

縦線を描いた。

「燃え盛る火の粉」
もえさかるひのこ

直線は赤色に淡く光り、火の粉となって弾け飛ぶ。

ワイヤーに引火することを恐れて右手を後ろに引きチャクラムを

手元に戻す。

「結構冷静じゃにゃいか」

上空へ高く跳んだ。

舌を出して指で円を描く。

大きく息を吸い込む。

吸い込んだ息は舌に描かれた円によって口内で異なる物質に変化する。

地上の瀬津奈へ向けて炎を吐いた。

——炎塊豪火
えんかいこうか

「くっ」

巨大な炎の塊に怯んでしまう。

まるで太陽が近づいて来るようだ。

避ける術もなく炎の塊は全てを焼き尽くした。

「これは避けられなかったでしょ」

着地して依然燃え盛る炎を見ていた。

もしも炎の中に居たのなら、助かる見込は無いだろう。

しかし、優恋は注意深く炎を見ているとおかしな様子をしていることに気がついた。

まるで“風に煽られて揺らめいている”ように不自然な動きをしている。

そして突風が炎の塊を吹き飛ばす。

といつても小さな穴が空いた程度で、その穴から人影が飛び出して来た。

「ゲホッ、ゴホッ」

驚きは隠せなかった。

咳込んでいる人物は荒れた息を整えつつ優恋を見て笑った。

「流石に驚いてますね……切り札ですしもっと驚いてもらいたいです」

なるほど。予定ではとくに倒している筈が、かなり手強い。

ふざけるのは止めてこちら奥の手で対抗するしかないだろう。

「どうやったのかは知らないけど、これは防げないよ」

左手の甲に人差し指で“猫”の一字を描く。その行為がどんな意味を持つか瀬津奈は知らなかった。

描き終わると同時に優恋の身体が淡い光に包まれた。

瀬津奈は光の眩しさに目を細める。

光が消えたとき、優恋の姿は異質な物に変わっていた。

「何よこの姿……完全に獣じゃない……」

アンダータウン

無人の地下都市には住宅街の中心に巨大な時計台がそびえ立つ。

因みに天月たちが最初に居たのは住宅街の端である。

時計台の屋上は住宅街全てを見渡せ、中々の広さを誇っている。地下都市の頂きに生徒会長である光波神宮は悠然と立っていた。

「獸術、獸化憑依」

見渡せると言っても地上までかなりの距離があるため、誰がどんな風に闘っているかは見えない筈である。

しかし神宮はまるで瀬津奈たちの闘いを見ているように、何が起きたか理解している。

「己の身体に一字描き、契約獣を憑依させる。獣の力を得る代わりに失敗すれば魂を喰われるリスクがあるため、今じゃレアな獣術だ」

振り向いて更に言葉を続ける。

「美鶴が本気を出すとはかなりの強さだね。相手は誰だと思う？」

「俺と閨以外の二人だろう」

東宝夜鵒は金鵒を従え、その場に降り立った。

夜鵒は黒刀を抜いた。

「正直君たち二人しか警戒してなかったよ」

「……それは誤算だったな」

「嬉しい誤算だよ」

神宮は笑って足元に置いてある槍を拾い、天を突くように振り上げる。

蒼い柄、槍頭は透明な刃状の槍である。

「しかし君の行動は間違いだよ。他の四人を倒してから僕の所へ来るべきだった」

「俺が勝てばいい話だ」

「くく、君は面白いね。それじゃあ悪いけど後悔してもらおうよ」
そう言って神宮は槍を振り下ろした。

「さあ、手加減は無しよ」

細く鋭い目は瀬津奈のことを見ている。

鋭利な爪は人のものとは思えない。

そして今も意志を持つているように動いている尻尾。

猫なんて可愛いものではなく、恐ろしい化け猫にしか見えなかった。

音も無く一瞬で目の前まで近づく。

眼前の物体全てを薙ぎ払うように右腕を水平に振った。

「きゃっ！」

瀬津奈は防ぎ切れず、吹き飛ばされた。

衝撃で家は半壊してしまう。

「おっと、やり過ぎた」

優恋は崩れる前に別の家に移った。

空中で一回転して着地し、優恋の立っている家に跳んだ。

「そろそろ決着をつけませんか」

「そうだね。切り札を見せてよ」

「言われなくても、行きますよ！」

瀬津奈はゆっくり回転始めた。

両腕を水平に上げ、徐々に速度を上げる。

瀬津奈の周囲に電気が迸る。

「この電気は瞳術だろうけどその回転に何の意味があるのかな？」

——雷電独楽嵐。
らいでんこまあらし

回転の勢いそのままに渾身の一撃を打ち込む。打ち出される雷。

蒼い雷が優恋に向かって伸びる。

「しまっ——」

あまりの速さに正面から喰らった。

全身に電気が迸り、その威力に膝をつく。

「まさか……これ程の威力とはね……」

優恋は意識が飛びそうになるのを堪えて再び立ち上がる。

そして左目を押さえてしゃがんでいる瀬津奈を一瞥した。

「瞳術と武術の合わせ技……威力はかなりのものだけど相当無理し

たみたいね」

「元々……あたしは瞳術がそこまで得意じゃないし……これはまだ未完成なんですよ……波動の消費が多過ぎる……」

両目の色が黄色から元に戻る。

視界は霞んだままだ。

「残念だったね……あたしが獣化憑依で身体を強化して無かったら君の勝ちだったよ」

優恋は息を整えながらゆっくりと近づく。

瀬津奈は動けず、焦点の定まらない瞳で優恋の事を見ていた。

「これで終幕だよ」

優恋は腕を大きく振りかぶった。

しかしその腕が瀬津奈を攻撃することは無かった。何者かによって手首を掴まれたために。

「終幕には少し早いですよ、先輩」

瀬津奈の瞳は閏天月の姿を捉えていた。

十六話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ獣憑きし忍ぶ者へ（後書き

作者は感想を求めています。

このままでは亡霊と化します。

的を得ていれば酷評も受け付けます。

直すべきところがあれば教えてください。

自分の作品が面白いかどうかなんて自分じゃ主観が入って分からないので f ^ | ^ ;

何で瀬津奈の闘いこんなに長く続いたんだろう（ ;

天月主人公なのに一番短いし……。

瀬津奈の闘いもう少し続くので一端切りました（ ;

一話にまとめると更に更新遅れるので……。

無人の地下都市での闘いはまだ続きます（ノ>＜）ノ

十七話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ連なり爆ぜる弓矢へ

「へー。このチャクラム一部に布巻いてたんだ。しかもワイヤー付き」

地面に落ちていたチャクラムを空に翳^{かざ}して見ている。

一部に“特殊な材質”の布が巻いており、いつも瀬津奈はそこを握っていたんだろう。

布に手を当ててチャクラムを握ると全く痛くなかった。

「な、何でここが分かったの？」

瀬津奈の目はすっかり天月を捉えている。

二人を見て呆れたように溜息を吐いた。

「もしかして自分たちがどれだけ派手に闘ってたか分かってない？」

「うっ」

「まあそのお陰で見つけたんだけど」

瀬津奈の姿を確認する。

外傷は特に無い。しかし呼吸が荒い。

天月はまた溜息を吐く。

「ちよつと無理したみたいだな」

「こ、これぐらいっ」

立とうとしたが膝に力が入らず、尻餅をついてしまう。

膝は震えている。

「ほら見ろ」

「ねえ、そろそろ離してくれない？」

優恋は首だけ後ろを向けて言った。

獣のような鋭い目に少し怯む。

「まあまあ。意志確認くらいさせて下さい」

「意志確認？」

「神無月、どうする？」

「へ？ どうするって？」

急に話を振られて驚いている。

そんなことはお構い無しに話を続けた。

「闘うかどうか」

天月としては正直闘いたくなかった。

自分にはまだ出番が残っている事を直感で感じ取っていた。

そのためにも体力は温存しておきたい。

けれど今の様子を見れば任せられない。

元々自分が巻き込んでしまったという責任感もあった。

綻を破ることだって覚悟していた。

「……さつさと行きなさい」

瀬津奈は無理して笑顔を作った。

瞳の中に決意が宿っている。

「ん、任せた」

天月は手を離す。

そして空中に待機していた疾風の背中に跳び乗る。

「私が簡単に逃がすと思ってるの？」

優恋も天月と同じ高さまで跳び、右腕を大きく振りかぶる。

右腕に向かってチャクラムが飛んで来た。

ワイヤーが右腕に巻き付き、優恋は勢いを失い落下する。

「くっ」

「早く！」

「疾風っ、行くぞ！」

物凄い速度で疾風は飛んだ。

優恋は引つ張られる勢いを利用して突撃する。

瀬津奈はその手に握ったチャクラムで迎え撃つつもりだ。

「はあっ！」

振るったその腕はかわされてしまった。

優恋は瀬津奈の右肩に自分の左手を置き、自分の身体を少し浮かせて避けたのだ。

更にそのまま一回転し、瀬津奈の頭目掛けて足を振り下ろした。

「っ！」

瀬津奈はふらふらと数歩歩く。

頭を押さえながら小さく笑った。

「今の衝撃で頭おかしくなった？」

「そうじゃありません。もうあたしの勝ちです。降参して下さい」

「へえ。何を見せてくれるの？」

瀬津奈の両目が紫色になる。

左手の人差し指と中指で二本の縦線を同時に描く。

優恋の右腕に巻き付き、瀬津奈の手元まで真っ直ぐ伸びたワイヤ

ーの midpoint に小さな雷雲がぽっかり浮かぶ。

「雷導雲」

「これで終わり？」

「まさか」

瀬津奈の両目が黄色に変わった。

その小さな変化を見た途端、優恋はポーチからクナイを一つ取り出した。

ワイヤーを切ろうとしたが、切れずに伸びるだけだった。

「このワイヤー、もしかして？」

「気づきましたか？ およそ二百メートルの糸を凝縮した伸縮自在の糸、名家系織姫^{めいがかいとおりひめ}。このワイヤーは戦闘用に改造してもらった物です」

名家系織姫、その美しさは最高のもので、この糸を束ねて作った布は珠玉の光を放つと言う。

更に束ねた布はどんな弾丸も通さない強固さも合わせ持っている。

そのため戦闘用に改造されることもある。

「でも一本辺り相当高価でしょ？ それに造れる人間なんて世界に一握りじゃない」

「先輩、“バルカン”って知ってますか？」

「知ってるも何も、超有名じゃない。最高レベルの武具職人でしょ」

「あたしの父親がその一人だとしたら？」

「……なるほどね」

バルカン——最高レベルの武具職人に与えられる称号で、世界に五人としない。

その腕は人には造ることが不可能とされている魔宝具、神宝具に並ぶ武具が造れる。

「全て合点がいったよ」

「さあ、ファイナーです」

左手を勢いよく振り下ろす。

——電光石火^{でんこうせっか}

瀬津奈の手元から電流が迸り、雷雲まで到達する。

雷雲は電流を増幅させた。

激しくなった電流は優恋に襲いかかる。

「きゃああああっ！」

目を背けたかったが、背けてはならない気がしてその様子を見つめていた。

瞳の色が戻り、電流は収まった。

ワイヤーを手元まで戻すと優恋は倒れた。

「……闘いのあとつて苦いね」

瀬津奈の弦きは勝利を告げる腕時計の音に消された。

「あらら、優恋も負けたのね」

二年の生徒会副会長、屋敷祈羽^{やしききはね}は塀に腰掛け、溜息混じりに言葉を吐いた。

腕時計が示す時間は一時間を切っている。

「ねえ、もう負けを認めたら？ あなたじゃ私には勝てないわよ」
琴鳴千華は息も絶え絶えになりながら、ゆっくり言葉を紡いだ。

全身傷だらけでもう倒れてしまいそうだ。

「その言葉……何回目ですの……？」

「うーん、五回から数えるの止めちゃったわね。でもこれが最後よ」
祈羽は巨大な弓を携えていた。

反り返った漆塗りのそれを祈羽は労うように手で優しく撫でる。

「わざわざ家宝の扇射まこいりを持ち出さなくてもよかったわね」

千華は悔しそうに唇を噛み締めた。

実力差があり過ぎる。

「武道大会以来の再会がこれとはね」

塀から降りるときにブラウンの髪がふわりとなびいた。

左目が赤色に変わり、波動が矢の形状に放出される。

「爆蓮の破魔矢はくれんのはまや」

弓を引き、矢を放つ。

傷だらけの身体では避けようにも身体が動かなかった。

「くっ」

千華の右目の色が桃色に変わる。

一回転しながら自分を中心にして右手の人差し指で円を描き、両手を合わせた。

千華を護るように花びらが舞い踊る。

「舞い散る花吹雪まいちるはなふぶき」

視界を覆うように花びらが前方に集まる。

仄ほのかに赤い矢は花びらに命中すると爆発する。

一枚残らず花びらは爆発で吹き飛んだ。

「きゃっ！」

「あら、加減し過ぎたわね」

千華は爆風で尻餅をついてしまう。

祈羽は容赦なく次の攻撃に移る。

射法八節しやほうはっせつ、弓道における基礎動作を行う。

「疾！」

先程と比べられない速度で矢は放たれた。

千華は手の平で地面を触った。

手の平を下に向けて右手を振り上げる。

触れていた地面からは既に芽が出ている。

芽から離れると直ぐに成長し、数秒で大木がそびえ立つ。

——護身大樹。ごしんたいじゆ

矢の爆発は大木をかなり揺らしたが、何とか堪えてみせた。

「今になって粘るわね」

再度爆発が起き、大木は折れてしまう。

もう一発矢を放ったのだらう。

千華の方へ倒れて来る。

動こうと思っても動けない。

「しまっ……」

倒れた大木は地面を震わせる。

祈羽は小さく息を吐き、空を見上げた。

「その出血量で動いて大丈夫なの？」

「……人の心配をする前に自分の心配をしたらどうだ」

「あら、そんな身体で私に勝つつもり？」

切り傷だらけの東宝夜鷗が千華を抱え、何も無い空中に立っていた。

無表情ではあるが、息が少し荒い。

「東宝……あんたこんな傷……何であたしを助けたの？」

「……さあな」

足元が徐々に黒くなり、金鷄が現れる。

現れる、と言うより認識が可能になったと言った方が正しいだろう。

金鷄へ降りるように命令し、ゆっくりと下降する。

「立てるか」

「え？ う、うん」

千華を下ろして夜鷗は右腰に差した黒刀を抜いた。
そしてすぐさま駆け出す。

祈羽は既に弓を引いていた。

「お得意の幻術かしら？」

放たれた矢は夜鷺を捉えた。

爆発で夜鷺がどうなったかは分からない。

「っ！」

背後から殺気を感じて振り返ると、夜鷺が黒刀を振るうとしていた。

「黒妖」

刃が舞うように襲い掛かる。

しかし全ての斬撃を弓で受け止めた。

「一撃一撃が軽いわね」

「ふん」

距離を取りナイフを四本投擲する。

だが放たれた矢の爆発で弾かれてしまう。

夜鷺は接近しようと脚に力を込めた。

しかし、

「ぐっ」

痛みが走り、座り込んでしまう。

立とうとしても膝に力が入らない。

夜鷺は苦い顔をした。

「東宝！」

「……ちっ」

「このまま闘えば命の保証は無いわよ。光波君に負けたんでしょう？ その切り傷を見れば分かるわ」

夜鷺は齒を食いしばる。

ここまで感情を露にするのは珍しい。

「君はここまでよ」

祈羽は弓を引き、外さないようにしっかりと狙いを定めた。

夜鷺には幻術を使う体力どころか動く体力も残ってなかった。

「くそ……」

千華は座り込んでいる夜鷗の後ろ姿に記憶の中にある少年の姿を重ねていた。

何年前の事かと思い出せないし、少年と会ったのもその一度きりだ。

重ねる理由も分からない。

気づけば夜鷗を庇うように立っていた。

「お前……」

「女性に対してお前とは野蛮ですわね」

「お前じゃ敵わないぞ」

「大丈夫ですわ」

両目の色が桃色に変わる。

右腕を突き上げ、左手を手首から肩まで滑らせて腕に文字を纏わせる。

文字が桃色に淡く光ると様々な植物が右腕を覆い、斧のような形状になった。

「草花の戦斧^{くさばなのはせんぶ}。これがあたしの切り札です」

「草で出来た斧に威力が期待できるの？」

「できますよ」

花が咲き、色鮮やかな斧は淡く光る。

瞳術を発動するときの人工的な光では無くてもっと自然な光だった。

「まさか、太陽光？」

「その通り」

祈羽の顔に焦りが浮かぶ。

太陽光が凝縮された斧の一撃なんて計り知れない。ただじゃ済まないだろう。

「いいわ、出し惜しみは無しよ」

祈羽の右目も赤色に変わる。

波動が放出され、矢が形成される。

先程までと違う点は何本も矢が形成されている。

その全てを構え、弓を引いた。

「行くわよ」

矢を放とうとしたそのとき、

金鷄が祈羽の目の前で飛び回る。

「くっ」

「今の内だ」

「ありがとう、東宝！」

千華が射程距離まで十分近づいた所で金鷄は祈羽から離れた。

祈羽は一瞬迷いを見せたが、覚悟を決めて矢を放った。

——爆蓮の破魔矢^{つらなり}連。

「はあああつ！」

千華は叩きつけるように斧を振り下ろす。

矢は斧に命中し、爆発した。

「なっ……おい！」

煙が晴れ、夜鷗が駆け寄ると二人とも倒れていた。

腕時計は再び鳴り出す。

「相打ち、か」

それだけ眩き、夜鷗は膝から崩れ落ちた。

残り時間三十分で戦闘可能者は閏天月、神無月瀬津奈、そして光波神宮の三人である。

十七話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ連なり爆ぜる弓矢へ（後書

夏休みももう終わりますね。

宿題やべえ（：|；）

頑張らねば。

もうすぐ大阪総体、ベストが出るように頑張ります（ノ><）ノ

……ってか陸上部って言ったことありましたっけ？w w

短いですがイマイチ思い付かないんで、これくらいで終わるときま
す。

もうすぐ学校始まるし、八月中にもう一回更新できたらいいなーと
思ってます。

十八話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ脅威飛び交う神の槍

神無月瀬津奈は闘いのあと、契約獣である白い虎に乗っていた。街を横断していると瀬津奈の耳に大きな爆音が届く。

今まで何回か聞こえていた小さな爆音とは桁違いの大きさだ。

「な、何?!」

音がした方を見ると煙が昇っていた。

煙を目指して走るように指示する。

「^{びゃくが}白牙! 急いで!」

白牙と呼ばれた虎は全速力で駆け出す。

瀬津奈は何故だか嫌な予感がした。

これ程大きな爆発だとともに喰らえばただじゃすまないだろう。

煙が晴れたとき、瀬津奈の腕時計が鳴り始めた。

恐る恐るデイスプレイを確認すると、三人の名前が消えていた。

「千華と東宝が……」

視界が一瞬霞んだ。

生徒同士の闘いだ、死人は出ないだろう。

でも。もしも。万が一。

あんな爆発をまともに喰らったとしたら可能性がある。

「お、落ち着いて……」

荒くなり始めた息を必死に整える。

主人の様子に気づいて白牙は足を止めた。

心配そうにこちらを見る白牙に対し、瀬津奈は少しだけ笑った。

「大丈夫だから。出来るだけ早く」

白牙は再び走り出す。

爆心地へはすぐに辿り着いた。

「千華! 東宝!」

速度を緩めた白牙から飛び降りると、すぐさま二人の元へ駆け寄る。

胸に耳を当てると一定のリズムで心臓の音が聞こえた。

瀬津奈は胸を撫で下ろす。

「二人とも死んではないでしょ」

倒れていたもう一人、屋敷祈羽が身体を起こす。

瀬津奈は警戒しながらも首を縦に振った。

「警戒しなくてもいいわよ。もう降参。闘えないわ」

祈羽は両手を上げて溜息を吐く。

自分の弱点を見抜かれたのだ。

「完全にその子たちの作戦がちね」

爆蓮の破魔矢は近距離で射れば爆発に自分も巻き込まれる。

距離を取って闘っていたのに最後の最後で接近され、矢を放たずにはいられなかった。

「東宝君だってあの位置なら巻き込まれてもおかしくないのに、少しも逃げようとしなかったわ」

その言葉は瀬津奈にとって意外だった。

仲間意識が夜鷲にあるとは思わなかった。

そんなことを考えていると生徒会の三人が姿を見せる。

「屋敷先輩、大丈夫ですか？」

「これぐらい平気よ」

「祈羽、ごめんなさいね」

「謝ることなんてないわ。この子たちは十分強かったもの」

「それでどうするの？ 祈羽ちゃん」

「勿論見に行くわよ」

立とうとする祈羽を氷弥刀が支える。

祈羽は瀬津奈を見た。

「あなたも限界みたいね。勝負はお互い大将に任せましょうか」

瀬津奈は優恋との闘いで波動の殆どを使い切っていた。

今生徒会長と闘っても勝ち目が無いことは分かっている。

「——何で私たちがここまで必死に闘ったか分かる？」

「え？」

急に話を振られて瀬津奈は間の抜けた返事をしてしまう。
考えてもみなかった。

この闘いは生徒会にメリットが無い。

それでもここにいる四人は全力で闘っていた。

「屋敷先輩。その話は……」

「口止めされてるけど、これ以上黙ってる必要も無いわ」

祈羽の口から出た言葉に驚きを隠せなかった。

「私たちが負けたときはあなたたちの代わりとして計画に協力することになってるの」

「そ、そんな……」

「あなたたちに言えば闘おうとしなくなるから黙ってたのよ」

嫌な汗が身体を伝う。

ここまで力に固執する人間に対して、それを認める学園に対して怒りが湧いてきた。

しかし四人とも表情に焦りは見えない。

「それじゃあ行きましょうか。時計台へ」

四人は信じていたのだ。

神宮の勝利を。

アンダータウン

無人の地下都市で激闘が繰り広げられている最中。

風紀委員室には山吹紫苑の姿があった。

いつも書類でいっぱい机には小型のテレビが置いてある。

このテレビには地下の映像が写っていた。

そして鍵錠楔も腕を組み、不機嫌そうに画面を睨んでいる。

「何で俺じゃなくて生徒会があいつと闘ってたんだよ」

「まあまあ。閨君と光波の闘いなんて面白そうじゃないですか」

「あいつじゃ勝てねえよ」

「あいつとは誰のことですか？」

「ふん」

それから二人の間に会話は無かった。

二人とも想像を絶する闘いに目を奪われたのである。

「……もう隠れててもしょうがないってか」

天月はこの地下で一際高い時計台を見上げていた。
そこから強力な波動を感じ取れる。

「いやに血の臭いがするな」

再び疾風の背に乗ると、一気に時計台の屋上まで飛び上がる。
屋上の光景を見たとき、天月は絶句した。

「遅かったね。待ちわびたよ」

屋上には神宮が槍を握り立っていた。

その顔に薄笑いを浮かべて。

「……何ですかこれは」

「まあ激闘の跡って感じかな」

一面に広がる赤い跡。

神宮は無傷だから、これは仲間がやられた跡だと考えた。

この出血量だと生きているかも疑わしい。

「生きてるさ。凄かったよ彼」

「夜鷗が先輩と……」

「先に仕掛けて来たのは彼だよ。確かに僕もやり過ぎたって反省してるけど」

神宮は自分と夜鷗との闘いを語り始める。

夜鷗が一方的にやられたと聞いて驚いた。

「止めを刺そうとしたら彼が時計台から落ちてね。逃げたと思った
ら彼の契約獣が空中で待機してたよ」

最初から負けたときを考えていたのか。
先を見据え、それでも闘うとは。

「その上隠れてないで副会長と闘ったんだからさらに驚いたよ」

「だったら、俺は勝つしかありませんね」

天月は気を引き締めた。

神宮は小さく笑う。

「それじゃあ始めようか」

天月は目を閉じ、呪文のように唱えた。

「我は天高く浮かぶ月。淡く光り、大地を照らす。疾き翼で天を翔
け、実体無き二刀で魂を、斬る！」

一瞬で神宮の背後に回り、左腰の刀の柄を左手で握る。

——速真迅剣一ノ斬型。

逆手で振り抜いた刀は空を斬る。

神宮は受け止めようとせず、体を反らして刀を避けた。
しかし、それは判断ミスだった。

「っ、二段構えか」

「当たり前です」

右腰に差した刀を右手で握っている。

天月は渾身の抜刀術を放った。

「一爪双爪」

二発目の抜刀術は完全に神宮を捉えた。

筈だったが、何かに遮られてその刃は神宮に届かなかった。

「見えない武具とは無茶苦茶ですね」

刃が遮られたときに聞こえた金属音。

文刻も行っていないので瞳術ではなく、そういう性質を持った武
具だと考えた。

「素晴らしいだろう？」

天月は待機させていた疾風に合図を送る。

疾風は両足で天月の肩を掴み、天月ごと空中に飛ぶ。

そして天月は左目を隠す眼帯を外した。

「もう眼帯を外すのかい？」

「出し惜しみ出来る相手じゃないので」

天月の左目が黄色に変わる。

文刻を行おうとした瞬間、神宮は天を突くように槍を掲げた。

神宮が槍を振り下ろすと、疾風の翼から何かが刺さったような音がした。

「キイイイイ！」

「疾風?!」

突然の痛みに甲高い声で鳴いた。

両翼からの出血は激しく、今にも落下してしまいそうだ。

「まずい……っ！」

疾風は光とともに消え、天月は地面に着地した。

天月は正面から何かが迫って来るのを感じ取り、自分の視界全てを覆う程の連続突きを放つ。

二回だけ手応えがあり、突きを止めると神宮は少し驚いた顔で天月を見ていた。

「確かに見えないと防ぐのは困難だけど、そんなやり方で防ぐとはね」

「それより、そろそろ先輩の武具について教えてもらえますか？」

神宮は不適な笑みを浮かべる。

槍の先端を天月に向けた。

「神宝具、ゲイボルグだよ」

ゲイボルグ——ケルト神話に登場、クー・フーリンが所持した魔槍。

一度投げれば三十の鏃やじろとなり、一度突けば三十の棘とげとなる。

「神宝具ですか。それで特性は？」

「見えない刃の遠隔操作だよ。今も君の周囲に八つの刃が浮いている」

「なるほど。槍を振って操るんですね」

「それだけじゃないよ」

神宮は右手の人差し指を天月へ向けた。

風を斬る音が聞こえ、何かが天月の身体に突き刺さった。

「がはっ！」

天月は血を吐き、片膝をついた。

腹部から血は流れているが、天月の身体を刺した何かは消えていた。

「指の動きだけで操れる刃は二つ。不意打ちみたいになっただけごめんね」

天月はふらふらと立ち上がる。

傷は思ったより深い。

最初からこの傷はかなり不利だ。

「その身体だとあまり動けないだろう？ 無理するなよ。君に勝ち目はない」

「まだ終わってませんよ」

「強情だね。どうなっても知らないよ」

神宮は槍を地面と水平に振った。

六つの刃は天月の右半身に突き刺さる。

しかし、天月の身体は霧散した。

「逃げてても無駄だよ」

「逃げたわけじゃありません」

天月は神宮の真正面に現れ、抜刀術の構えをとっていた。

右手で左腰に差した刀を一気に振り抜く。

見えない刃でその一撃は防がれた。

さらに左手で右腰の刀を振り抜く。

今度は槍の柄で防がれた。

「残念、二段構えでも僕には届かな——」

神宮が言い終わる前に天月は右手で握った刀を振り下ろした。ぎりぎり指を動かし、二つの刃で刀の動きを遮った。

次は左手に握った刀で突きを放つ。

神宮は受け止めようとせず、槍を使い攻撃を受け流した。

「くっ、これは……」

神宮は距離を取ろうと後退したが、天月も前進して距離を詰める。左右の刀で連続して繰り出される技に神宮は押されていた。

——速真迅剣三ノ斬型。

その猛攻はさらに防ぐことも避けることも出来ない速度まで増した。

——遊戯武曲。

「ぐ、おおっ……」

槍と二つの刃では防ぎ切れず、いくつも傷が出来ている。

神宮の右目が茶色に変わり、右手の人差し指を下から上へ動かす。天月の足元に亀裂が走り、先端の尖った土の柱が地面から飛び出した。

「おっと」

天月は後ろに跳んで避ける。

神宮の右目の色が元に戻り、土の柱も地面へと沈んでいく。

天月は刀を鞘に収めた。

「くく、嬉しくなるね」

空間に左手の人差し指で“前”と描き、右手の人差し指で“後”と描いた。

光とともに二匹の獅子が現れる。

「吠える前門、喰らえ後門」

前門と呼ばれた紅い毛並みの獅子、後門と呼ばれた蒼い毛並みの獅子は同時に叫んだ。

その咆哮に天月は少したじろいだ。

「さあ、まだまだこれからだよ」

神宮の言葉に気を取られていると、前門が目の前で前足を天月目掛けて振り下ろそうとしていた。

「なっ、いつの間に?!」

紙一重で避けたが、腹部に痛みが走り、血を吐いてしまった。

「げほっ、ごほ……」

「隙だらけだよ」

後門は口から水弾を飛ばした。

巨大な水の塊をまともに喰らってしまふ。

「がはっ」

吹き飛ばされた空中には前門が待ち構えていた。

容赦なく天月を打ち落とす。

地面に激しく叩きつけられ、骨が数本折れる音がした。

「天月っ！」

白牙の背に乗り、瀬津奈は屋上に現れた。

気絶はしているが、千華と夜鷲もその背に乗っていた。

「あら、もう終わったかしら？」

「お疲れ様、みんな。一足遅かったね」

生徒会役員も集結し、役者は揃った。

神宮は倒れたままの天月を一瞥した。

「もう限界みたいだね。よく頑張ったよ」

「……あー、くそ」

「なにっ?!」

限界を超えた身体をゆっくりと起こし、天月は立ち上がった。

ふらつきながらもその目は神宮をしっかりと捉えていた。

「もう立ってるのも限界ですよ。身体もほとんど動きませんから」

天月は右手で首にかけている銀の十字架を握り締めた。

その様は祈りを捧げているようだ。

「発動、天人の翼^{てんてんのつば}」

天月は銀の十字架を外した。

十八話：決戦の無人の地下都市へアンダータウンへ脅威飛び交う神の槍へ（後

随分空いてしまいすみません……。

さらに現在テスト期間ですf^|^| ^ ;

新作も投稿したいんですけどね。

しばらくは難しいかな。

そろそろ一章も佳境です。

二章はバトル多めになるかと。

休んでる間に感想もいくつかいただき、非常に嬉しかったです（#

^ ^ #
）

同時に書いてないことに罪悪感を感じましたが……。

今後よろしくお願いしますm（・・）m

十九話：終幕の無人の地下都市へアンダータウンへ飛び翔ける天空の翼

「なるほど、それが君の正体か」

身体から濃密な波動が溢れ出す。

瀬津奈と生徒会役員全員が目を見つめた。

そこに立っているのは天月だが、その姿は人間ではなかった。

「人間と天人のハーフってところかな？」

「御明答」

天月の背中からは一対の翼が生えていた。

純白の翼は淡く光っていて、どこか神々しさを感じる。

全身の傷も回復していた。

「本当に君は面白い。ここまで楽しい闘いは初めてだよ」

前門と後門が二匹同時に襲い掛かる。

しかし、二匹の身体は突然動かなくなる。

呻き声うめをあげるも、ぴくりともしない。

「一体何を……まさか！」

「その通り」

「本当に禁断瞳術を使えるというのか?!」

「そんなに驚かなくても、人間から話は聞いてるんじゃないんですか？」

天月は右手で前門の頭を、左手で後門の頭に触った。

天月の手から波動が放出され、二匹は簡単に吹き飛ばされる。

「前門！ 後門！」

二匹は光とともに消えた。

契約獣は本来契約者の意志でしかはじまりの森に帰らないが、危険を感じると防衛本能で帰ってしまう。

自分の命を守るためだから自然なことだと天月は考えている。

「つと、そつだ」

天月は空間の瞳術を使い、瀬津奈の真正面に瞬間移動する。

瀬津奈はひどく驚いたようだ。

「な、なんなの?！」

「ちよっとこれ預かってて」

「は?」

そう言つて天月は銀の十字架を手渡した。

瀬津奈は困惑しながらもそれを受け取る。

「うん、ありがと」

「随分と余裕じゃないか。敵に背を向けていいのかい?」

「おっと、これは失礼」

天月は神宮の方へ身体を向けた。

神宮の両目が白色に変わる。

右の手の平で円を描き、円の中に人差し指で十字を描いた。

「終わりにしよう。これが僕の切り札だ」

十字が交わる点に光が集まる。

その光は天月へ向けて放出された。

——白導砲。はくどうほう

その攻撃範囲の広さと後ろに瀬津奈達が居ることから天月は避けれないと判断した。

「仕方ない」

天月は放出された光に右手を伸ばす。

伸ばした手の前の空間が歪みだした。

光は空間の歪みに吸い込まれるように消えてしまった。

「これが切り札何ですよね?」

「ぐっ……このお!」

力任せに槍を振り下ろす。

天月は一瞬で刀を抜き、鮮やかに振る。

見えない刃を六つとも打ち落とした。

「身体能力も限りなく上昇してます」

神宮が指を微かに動かすのも見逃さない。

天月は右を向いて手を伸ばした。

「くそお！　なんで動かない?!」

「今度は時間ごと止めましたので」

天月は刀を納めた。

ここまで追い込めば降参してくれる。

その考えは甘かった。

神宮の目はまだ諦めてない。

「これだけ力の差があっても闘いますか」

「まだ終わりじゃない」

真剣に闘っている相手に対して失礼だな。

思い直した天月は自分の周囲に白い球体を創造する。

二つの白い球体は天月を中心にゆっくりと回っている。

「これは……波動石^{はとうせき}?」

「その通り。使用者の波動を増幅させる、この世界では希少な石です」

波動石は白色に発光し、光が天月の身体に流れ込み消えてしまう。

天月の左目が白色に変わり、右手の人差し指と中指を立てて横、

縦、横、縦と直線を引いた。

神宮は淡白い光に包まれる。

「月に祈れ」

——光の世界。

神宮の姿が見えなくなるほど強烈な光。

その光は激闘の決着を示していた。

「光波君っ!」

光が収まると生徒会役員は四人とも神宮の元へ走り出した。

天月は左目を押さえながらその様子を眺めている。

力を使いすぎたと少し後悔した。

「お疲れ様」

瀬津奈が近寄り優しく声をかけた。

穏やかな笑みを浮かべながら銀の十字架を天月の手に握らせる。

「これ大事な物なんですよ?」

「ん、ありがとう」

背中の翼は羽がバラバラと落ちて無くなってしまった。
地面に落ちた羽は風に吹かれて空を舞う。

「翼、無くなっただけど大丈夫なの？」

「わりと平気」

「僕たちの完敗だ」

倒れていた神宮が目を覚ましたようだ。

上半身を起こし、小さく笑った。

「久しぶりに楽しい闘いだっただよ」

「でもでも！ このじゃ私たち……」

「君達は何も心配しなくていい。計画には僕だけが参加する」

「駄目よ光波君。そんなの納得いかないわ」

「一体何の話？」

生徒会役員のただならぬ雰囲気にかあつたんだろっと思う。

瀬津奈はかい摘まんて説明してくれた。

「簡単に言つとそんな感じよ」

「そうか。本当に最低だな」

『そう言ってくれるなよ閨君』

地下都市全体に放送が流れた。

その声に怒りが込み上げる。

「人間、今すぐ出てきたらどうだ」

『何故君が怒りを覚える？ 君は計画に協力しなくてすんだのに』

「ふざけるなっ！ その代わり生徒会が巻き込まれるなんておかしいだろっ！」

『君はどうして他者を犠牲にできない？ 今まで赤の他人だった生徒会役員がどうなろうと君に関係無いだろう？』

「関係無いわけないだろ！ もしそんな事になったら俺があんたの計画をぶつつぶす！」

「閨……」

「君が憤る事じゃないよ」

瀬津奈はここまで激昂している天月を初めて見た。

神宮もその豹変ぶりに驚いている。

『いいだろう。そこまで言うなら今回は諦めるとしよう』

また会おう、その言葉を最後に放送は途絶える。

二度と会いたくないね。心の中で天月はそんな言葉を吐き捨てた。

「ありがとう、閨君」

天月は照れ隠しに笑う。

「神無月、悪いけど後は任せた」

「え？」

天月はそれだけ言うと倒れてしまった。

目を開けるとぼんやりと白い天井が映る。

独特の臭いからここが病院だと分かった。

起き上がるうとしても力が入らない。

「倒れて病院に運ばれたのか」

上半身を起こすとあることに気づく。

椅子に腰掛けた少女は寝ているようで、ぴくりとも動かない。

「神無月？」

名前を呼んでも全く反応しない。

その寝顔はまるで天使のようだ。

しばらくの間寝顔を見ていると瀬津奈が小さな声で喋った。

「んっ……このニートが……」

「ぶっ、どんな寝言だよ」

天月が笑っていると目を覚ました。

「んー、聞きたの？」

「おう。おはよう」

「今何時？」

「それは俺が聞きたい」

「あつ、そうね」

ようやく頭が回ってきたようだ。

部屋のカーテンを開けると日差しが差し込む。

「あれから丸一日寝てたんだから」

それだけ長時間寝てしまったのは天人の翼を発動した反動だろう。そんな事より天月は気になる事があった。

「夜鶴と千華は？ 生徒会はどうなった？」

「東宝も千華も治療は終わってるわ。命に別状は無いけどしばらく入院ね」

瀬津奈の言葉を聞いて天月は胸を撫で下ろす。

二人とも生きてて安心した。

「副会長は入院しなきゃいけないみたい。他の四人は入院の必要無いって」

「そうか。それで神無月は？」

「あたし？ 見た通りよ」

「うん。皆無事でよかった」

「無事ではないけどね」

瀬津奈は楽しそうに笑った。

その笑顔に心が癒される。

天月はふとある事を思い出した。

「神無月俺のこと天月って呼んだよな？」

「ふえ？ いや、その、あのえつと……」

瀬津奈は顔を真っ赤にした。

いつもならここで拳が飛んで来るが、もしもじして言葉に詰まる。「そつ、そうよ、呼んだけどいいじゃない別に！ 千華だって天月って呼んでるし、だからその……」

段々言葉に勢いが無くなった。

その様子に笑いが込み上げる。

「確かに何も問題無いな、瀬津奈」

名前を呼ばれて再度頬を赤く染める。

天月もなんだか恥ずかしくなった。

それからしばらく沈黙が続いたが、口を開いたのは瀬津奈だ。

「あんだなんで全ての瞳術を使えるの？ それってやっぱりあんたが人間と天人のハーフだからなの？」

「んー。関係あるような無いような」

天月は言葉を濁す。

真実を話すべきか迷っているのだ。

少しして、話すことを決意した。

「瀬津奈は瞳術のルーツを知ってるか？」

「ルーツ？ 瞳術が発見された時期なんて小学生でも知ってるわよ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

瀬津奈は不思議そうに天月を見る。

天月は淡々と語り始めた。

「瞳術は正確に言うとな術てんぎゅつの劣化バージョン、人間が自ら作った術だ」

「天術って何よ？」

「ああ、天人が使う術だよ。瞳術とは比べることすら出来ない程のな」

瀬津奈は困惑の表情を見せる。

こんな不可思議な話をされれば誰だって戸惑うだろう。

実際天月も最初にこの話を聞いたときは理解出来なかった。

「その天術を基盤として瞳の色の变化、文刻を行い初めて人間に使えるのが瞳術だ」

「ちょ、ちよつと待って。何を言ってるか全然分らないんだけど」

「一回で理解する方が無理」

「大体どうしてあんだがそんなことを知ってるの？ そんな話全く聞いたことないわよ」

「まあ俺は本人から直接聞いたから」

「本人？」

「瞳術の開祖、閨天下^{てんか}。俺の父親だ」

今度は呆然としている。

見てると面白いな、そんな事を思っているとまだ疑問があるようだ。

「じゃ、じゃあお母さんは？」

「内緒」

「ええ？！　なんでよ！」

「内緒」

「ううっっ」

瀬津奈は悔しそうに唸る。

なんだかいつもより女の子らしいな。

いつもの怒っている姿とは違う、この姿が瀬津奈の自然体なんだと分かった。

「普段は無理してるのか」

「え？　そ、そんなことないわよ」

急に慌てる瀬津奈。

目を逸らし、罰が悪そうにしている。

やがてぼつりぼつりと心中を話し始めた。

「あたし心のどこかであんたを恨んでたと思う。あたしの大切な人はこいつに奪われたって」

天月はその言葉を否定も肯定もせず、ただ黙って聞いている。

「あんたが話してくれないから分からないけど、何か事情があるんだって今なら思える」

「……いつか必ず話すよ」

「うん、信じてる」

ようやく瀬津奈は笑顔を見せた。

天月もつられて笑う。

「ありがとう」

「は？　何が」

「いや、昨日の事も、今までの事も」

「うーん。よく分からんな」

「ふふ、じゃあいいわよ」

瀬津奈は窓の外を見る。

茜色に染まった空は、日暮れが早くなった事に気づかせる。

「もう夏は終わりね」

「そうだな」

ふと二人の目が合う。

見つめ合う二人。

夕陽のせいか、瀬津奈の頬は赤い。

「あたし、多分天月のことが――」

「お兄ちゃん！」

「うがあっ！」

扉が勢いよく開き何かが天月に突撃した。

小さな女の子は天月に抱きついて離れようとしなない。

「フ、フレア?! なんでここにっ」

「やっぱりツキ君の知り合いだった」

凜鈴は呆れ顔でその様子を見ている。

天月は凜鈴の姿を確認してさらに驚く。

「リン姉まで、どうしたんだ？」

何故だか急に騒がしくなってしまった。

完全に機会が失われ、瀬津奈は小さく溜息を吐く。

瀬津奈は舌を出して呟いた。

「あたしからはもう無いんだからねっ」

十九話：終幕の無人の地下都市へアンダータウンへ飛び翔ける天空の翼へ（後

またまた更新遅くなつてしまい申し訳ありません（*|*）
最近同じ内容で謝つてばかりですね……精進しますf^| ^；

もう一話で一章は終わりです。

二章はちよつと短いかも……。

学園を出て暴れるのでお楽しみにp(^ ^)q

まあまだ次話は学園ですがww

新作を書きたいんですがキャラ名が全く思い付かず。

この作品の更新がただでさえ遅いので、年内に投稿するかは未定（

！ ; ）

二十話：合間の休息、たまには二人でも

校舎に飾られた各クラスの劇の垂れ幕。

それを見ればどのクラスが何の劇をするか一目で分かる。

垂れ幕を見上げて溜息を吐いた。

「疲労が残っててだるいんだけど」

「文化祭に来れない二人の分も頑張ろう、とかならないの？」

千華と夜鶴、それから屋敷祈羽は入院中のため文化祭は欠席している。

不満そうにしていた千華だが、こればかりはどうしようもないので最終的には諦めたようだ。

「模擬店で何を頑張るんだよ」

瀬津奈に引きずられ、無理矢理文化祭に連れてこられた。

天月のクラスは模擬店をする予定だ。

「あー、身体が重い。疲れてるって」

「ふん、むしろ憑かれてるわよ」

「はあ？」

首を後ろに向けるとフレアが背中にしがみついて寝息を立てている。

朝から重いと思ったら理由はこれか。

「フレア、起きろ。てか離れろ」

「ふみゆうー」

隣の瀬津奈の目が怖い。

両親と遊びに来たフレアは天月に会おうと探し回っている内に迷子になったらしい。

困っていると凜鈴に会ったから病院まで連れて来てもらった。

凜鈴も見舞いに行くとところだったからちょうどよかったと。

そんな話を数日前に聞いた。

「フレアもお兄ちゃんと行くのー」

「いやいや、そんな事言われても」

「いやー！ 行くのー！」

「そろそろ教室行かないとまずいわよ」

「でも連れては行けないだろ」

「私が面倒見てるよ」

先程まで感じていた重みが無くなった。

凜鈴はフレアを地面に降ろし微笑む。

「全く、仕方ない子ね」

「むー」

頬を膨らませるフレアを優しく宥める。

不本意ながらも諦めてくれたようだ。

凜鈴は笑顔を見せる。

「じゃあまたあとで」

「う、うん」

あの夏祭りの夜以来、天月は必要以上に凜鈴を意識している。
今まで異性として見てなかったが、あの日以降魅力的な女の子に
見えてしまう。

「よし、とりあえず手を離そうか瀬津奈」

「うるさいバーカ。鼻の下伸びてるのよ」

「誰が伸びてるか」

「引きちぎるわよ？」

現在天月の左耳は瀬津奈によって限界まで引っ張られてるわけで
その気になれば本当にちぎりそうだ。

「ごめんなさい」

「ふんっ、全くあんたは」

手は離してくれたけど機嫌が悪い。

こちらを見向きもせず先に行ってしまう。

「だから悪かったって」

何が悪かったかはわからないが。

追いついて横に並ぶも依然怒っている。

「おい、瀬津奈ー」

「さっさと教室行くわよ」

「もしかして拗ねてる？」

「す、拗ねてる訳ないでしょ！ 頭おかしいんじゃないの？！」

顔を赤くして怒鳴り散らしたあと、完全に先へ行かれてしまう。
取り残された天月は小さな声で呟く。

「俺が悪かったのか？」

天月の疑問は空に消えた。

「遅いわ天月。何日も休んで、サボりか？」

「色々あったんだよ」

退院してもすぐには身体は動かず、動けるようになるまで学校は休んでいた。

そのまま文化祭も休むつもりだったが、瀬津奈に引きずり出された。

「ああ、女の所にお泊りか？」

「はいはい、そうですよ」

教室に着くと万軸銀はバカなことを言ってるが、適当にあしらう。
教室を見回すと、瀬津奈と目が合った。

すぐさまそっぽを向かれてしまう。

「まだ機嫌治ってないのかよ」

一旦席に座ると、銀が大声で喋り始める。

「はい注目！ とりあえずこれで全員やつ。琴鳴がおらんのは寂しいが、皆で盛り上げるぞー！」

教室中から「おーっ！」と帰した。

いつの間にこのクラスはこんなにノリが良くなったのだろうか。

天月は少し頭が痛くなった。

それは学級委員長である園橋日和も同じようだ。

「皆静かにつ！ 盛り上がるのはいいけど、自分の仕事はしっかりこなしてよ！」

流石委員長、クラスの志気を落とさないよう考えられた注意だ。

盛り上がりつつも気を引き締める。

「それじゃあ体育館に移動よ」

その言葉を合図に全員一斉に駆け出す。

天月はどれだけ急いでも始まる時間は変わらないと言いたくなかった。

のんびり席を立つとあることに気づいた。

「今逃げれるんじゃない？」

教室には誰もいないこの状況。

文化祭が始まれば逃げるのは無理だろう。

今しかない、そう思った。

「よし、屋上で寝よう」

廊下に出てふと右を見てしまう。

激しい後悔に襲われたが、もう遅かった。

計られたのである。

天月が逃げることを想定して、瀬津奈は廊下で待っていた。

「バカねあんた」

天月は再び連行された。

「いらっしやいらっしやい！ 一年六組、春風椿はるかぜつばきのめちやくちや美味いタコ焼きや！」

体育館での校長やら文化委員やらの長い話も終わり、ようやく文

化祭が始まった。

銀が先陣を切って呼び込みをする。

ちなみに春風椿はクラスの愛称みたいなもので、もちろん椿春風の考案だ。

「あつつ、あつつ。うん、美味しい」

「ちよつと椿先生！　なんで一番最初に食べてるんですか！」

「美味しそうだったからつい」

「つい、じゃありませんっ！」

天月は少し離れた位置から椿と日和のやり取りを見ていた。金券を受け取る係なので、客が来るまでは楽なものである。

「相変わらず委員長大変だなあ」

「あたしも誰かさんの見張りで大変だけど」

「……ごめんなさい」

何故か同じ係の瀬津奈に溜息を吐かれた。

素直に謝ると意外そうに目を見開いた。

「ようやく反省した？」

「や、全然」

思いつきり足の小指を踏まれた。

「み、見えない箇所を攻撃するとは……」

「油断大敵よ」

そうこうしている内に最初の客が見えた。

瀬津奈はとびつきりの笑顔を見せる。

「いらっしやいませーっ」

作り笑顔とも気づかず、男性は頬を赤らめる。

隣に立っている女性は不機嫌そうだ。

男性はそのことに気づきそうもない。

苦笑いしていると不意に小突かれた。

お客に聞かれないよう小声で話す。

「ほら、あんたも笑顔っ」

「そんな作り笑顔出来るか」

「い・い・か・ら・や・れ！」

強要され、天月は渋々従う。

気持ち悪いってお客に引かれなかなど、そんなことばかり考えてしまう。

お客から金券を受け取る。

そのとき天月は渾身の作り笑顔を見せる。

「ありがとうございますっ」

時が止まったように、辺りは静まった。

女性は頬を赤く染めて動かない。

右を見ると瀬津奈も顔が真っ赤だ。

「なあ、これで良いのか？」

天月に声を掛けられ、動きが戻った。

朱色に染まった顔を横に背ける。

「ま、まあまあ良かったわよっ」

「そりやどーも」

女性は男性に手を引かれ、タコ焼きを受け取って行った。

今度は何故だか男性が不機嫌だった。

後ろには既に何人が並んでいる。

「いらっしやいませー」

作り笑顔を基本に客を捌いていく。

客足は増える一方だ。

「やばいで！ もう午前の分って用意してた材料がなくなりそうや！」

「うそ、もうっ？！」

「追加購入部隊に緊急連絡お願い！」

「わかった！」

「てか銀、まだ一時間くらいしか経ってないのに凄いな」

「天月と神無月のお陰や！」

不思議そうに天月は首を傾げた。

瀬津奈も銀の言葉の意味がわからない。

作戦としてはルックスのいい二人が受付をしていることで、客は引き寄せられる。

二人を受付に指名した日和の作戦は予想以上にはまった。

「まだまだ儲けんでーっ！」

「儲けは全部学校側に回るんだけどって、聞いてないわね」

正直目が回るほど忙しい。

しかし今は抜ける状況じゃない。

仕事を続けていると見覚えのある客が。

「お兄ちゃんっ」

「へー、真面目に仕事してるじゃない」

「珍しくは余計だけどね」

「そうじゃないでしょ！」

「おっと、いらっしやいませ」

天月の作り笑顔に凜鈴は吹き出した。

フレアも不思議そうに見ている。

「あはは！ ツキ君無理してるー！」

「ほっといてくれ」

「お兄ちゃん変なのー」

「フレアちゃんにも見抜かれたね」

天月は恥ずかしさから赤面する。

だからやりたくなかったんだ。

そんな言葉を呟いた。

「お兄ちゃんはい！」

「あ、ありがとうございます」

「ツキ君笑顔は？」

楽しそうに笑いながら聞いてくる。

もう本気で止めたくなってきた。

「ツキ君仕事の交代はいつ？」

「あと二時間くらいだけど」

「じゃあ昼からはみんなで回ろうね」

今度はからかうような笑顔ではない、優しい笑顔だった。

天月は小さく頷いた。

「お兄ちゃんまた顔赤いよー？」

「ほら、タコ焼きもらって行こう」

銀からタコ焼きを受け取り、二人は模擬店を後にした。

二人の姿が見えなくなっってから天月は溜息を吐く。

瀬津奈は面白くなさそうに天月を見た。

「今度は何だ？」

「別に何でもないけど？」

明らかに嘘だろう。

誰がどう見ても不機嫌だ。

それっきり瀬津奈は一言も話さず、気づけば交代の時間だった。

「もうこんな時間。二人とも交代ね」

「委員長は？」

「私がここを離れると万軸君の暴走を止めれる人が居ないから」

そう言うものの日和はどこか嬉しそうだ。

それなら遠慮することはないと、受付の仕事を代わってもらう。

そして瀬津奈に声を掛けた。

「ほら、一緒に行こうぜ」

「凜鈴さんとフレアちゃんが待ってるわよ」

「ちよっとくらい二人で回ろう」

「……は？」

天月の言葉を聞き瀬津奈は目を見開いた。

次第に頬が赤く染まっていく。

「な、何であたしがあんだと二人で回らないと行けないのよ！」

そっぽを向いて一人で行こうとする。

しかし天月もめげずに瀬津奈の手首を掴み行かせようとしなない。

「な、なに?!」

「いいじゃん、たまには」

「う、う……わかったわよっ」

ついに瀬津奈は折れて、天月と二人で回ることを決めた。

実際瀬津奈は二人で回ることが嫌なのではなく、ただ恥ずかしかっただけだ。

こういうとき自分の素直じゃない性格が恨めしくなる。

「それじゃあどこから行く？」

「あんだと二人ならどこでもいい」

「へ？」

「な、何でもない！ 早く行くわよ！」

瀬津奈は左手で天月の右手を握り、目的も決めず人混みの中をひたすらに歩き続ける。

天月は全く逆らおうとせず、心の中で密かにガッツポーズをした。また知らない間に機嫌が悪くなっていたので機嫌取りのために無理矢理誘ったが、何とかうまくいったようだ。

胸を撫で下ろしていると背後から「お兄ちゃん！」と叫びながら突撃された。

「いだっ！ ちょっ、背骨が……」

「あれ、ツキ君仕事終わり？ お疲れ様」

二人が現れると同時に瀬津奈の機嫌があからさまに悪くなる。その様子を見て天月はついつかり口を滑らせてしまった。

「せっかくうまくいったのに……あ」

気づいた時にはもう遅い。瀬津奈の視線が鋭く天月に突き刺さる。瀬津奈も天月があまりに積極的だったことに違和感を感じていたが、その一言で全て納得がいった。

瞳術を使ってもないのに全身から電流が迸しっているように見える。

地面に沈む程力を入れて左足を踏み込み、腰の捻りを加えた渾身の右ストレートを放った。

「こんのバカがああっ！」

見事に鳩尾へ決まり、天月の身体は十数メートル吹き飛んだ。それは文化祭のパフォーマンスとして扱われ、生徒から招待客の

間で伝説と謳われるようになった。

二十話：合間の休息、たまには二人でも（後書き）

裏話その十

あれ？ もう二十話なのに裏話はまだ十？（「」；）
……まあいつかww

凜鈴はそこまで性格は考えてなくて、成り行きに任せてたらこんな感じに。

凜鈴の口調で気をつけているのは大人のお姉さんにならないこと。控え目で明るい同級生、みたいなイメージを作者は抱いてます。個人的にこういう性格は好きですね。

今後出番は増えて行きます。

失恋しても凜鈴は強いので、まだまだ負けませんよ（ノ><）ノ

次回からいよいよ新章突入！
マジ更新急ぎます！！

二十一話：不穏な音立て齒車廻る（前書き）

二章 施設被験者編

始まりはいつも突然に。人の命を弄ぶ実験に少年たちの怒りは収まらず、救うため、止めるために被験者たちと闘う。

二十一話：不穏な音立て齒車廻る

自分の姿以外何も見えない、何も無い空間に少年は立っていた。しかし少年は戸惑うことなく自分がどこにいるのか理解している。少年の目の前に“太陽”があるから。

赤く、紅く、朱く紅炎こうえんが燃え盛り、その勢いは何千年経とうと収まりそうにない。

その光は人間を照らすためではなく、自己を主張するために輝いていた。

他者を寄せつけない圧倒的な熱にはどこか冷めたさを感じる。

よく見れば太陽を背にして当たり前のように立ち続けているもう一人の少年が居た。

太陽に引けを取らないほど鮮やかな唐紅からくれなゐの衣を羽織り、冷ややかな笑みを浮かべている。

「折角の再会なんだから少しは嬉しそうにしたらどうだ？」

口角を吊り上げ、愉しそうに笑う。

もう一人の少年は更に言葉を続ける。

「あれから二年と半月、優秀な駒も集めた。漸く行動に移れる」

容姿は瓜二つだが正反対の二人。

少年にはもう一人の少年が何を考えているのか、何が目的なのか全く分からなかった。

「次に会うときを楽しみにしてる」

そこで世界は途切れた。

暖かな日差しが差す本日、琴鳴学園では体育祭が開催していた。

先程まで校庭から聞こえていた大歓声が聞こえなくなつたので、もう午前の競技が終わって昼食の時間なのだろう。

そんなことは関係ないと、校舎の壁にもたれて眠っている少年が一人。

もう秋風も吹く季節だが、閏天月は気にせず眠り続けている。

本来ならこんなところで寝ていれば瀬津奈や千華が飛んで来そうだが、天月は午前に幾つも競技に出て活躍した。

三学年をクラスで分けた天月たちの団、『ORANGEROCK』は僅差で一位を取っている。

その功績から天月はしばしの休息を認めてもらっていた。

しかしその時間も終わりのようだ。

肩を叩かれ、目を開けるとそこには優しい微笑み、恥ずかしそうな赤い顔、無邪気な笑顔が見えた。

その後ろから明るい笑みが顔を覗かせる。

「ツキ君、一緒にお昼食べましょう？」

「ちよつと作りすぎちゃったから分けてあげる！ 感謝なさい！」

「おい、天月！」

「お兄ちゃん、フレアも手伝ったんだよ！」

「ん……じゃ、皆で食べるかー」

四人全員、フレアまでもが溜息を吐いたがこれこそ自身の身が安全な策だろう。

瀬津奈と千華の料理に対してはトラウマもあるが、寧ろ腹痛を起こせば昼から休めると軽い気持ちだった。

「じゃあ行きますか」

天月は腰を上げ、適当な木陰を探す。

木陰はすぐに見付かつて、凜鈴が手際よくシートを敷き場所を確保する。

凜鈴は先に腰を下ろすと自分の隣を左手で軽く叩いた。

「ほらツキ君、こっち」

天月が座ってその左隣りに瀬津奈、天月の前に千華が座る。

フレアはいつの間にか寝てしまっていた。

「ありがとリン姉」

「……ねえ、そのリン姉ってさあ」

「ん？ 何かおかしい？」

何に対して不満があるのか口を尖らせ、天月を軽く睨んだ。

天月には何が悪かったのか分からない。

「その呼び方だとお姉ちゃんって感じがして嫌なんだけど」

「つまり俺はどうすれば？」

「名前で呼んでほしいなー、なんて」

それだけ？ と、つい聞き返しそうになったが、あまりに凜鈴の目が真剣だったので自然と頷いた。

当然瀬津奈には二人の世界が面白くない。

我慢出来なくなったのか胡座をかいた天月の足を抓る。

「痛いっ！」

「さっさと“あたしの”弁当食べたら？」

「は、はい……ん？ 千華どうした？」

「え？ な、何でもないよ。何でも」

学校に来るのが久しぶりだから調子が上がらないのか、何か気になることがあるのか。

その真意は天月には分からなかった。

「さ、さっさと食べなさい！ 今度こそ成功したと思うから」
言葉の勢いが段々無くなり、後半はほとんど聞こえなかった。

俯いて不安そうにしているが、ちらちらと天月の様子を窺^{うかが}っている。

その様子が可愛らしくて後のことも考えずに瀬津奈の弁当へ箸を伸ばし、綺麗な焼き目の付いている卵焼きを口に運んだ。

「うん、美味い」

「ほ、本当？」

「本当だって。後で身体が緑色になってもいいぐらい美味しい」

「それって褒めてる？」

憎まれ口を叩きながらも表情はどこか嬉しそうだ。

無意識の内に箸が進むので、弁当の中身が順調に消化される。

ふと右を見ると凜鈴が頬を膨らませて自分の弁当を食べていた。

頬が膨んでいるのは拗ねてるからか？ 相変わらず子供っぽいところがあるな、なんて思ってしまった。

「凜鈴の弁当も食べていい？」

「！ り、凜鈴……はう……」

名前で呼んでほしいと言われたので呼んでみたが、凜鈴は赤面し、フリーズした。

いくら声を掛けても揺すぶっても反応が全く無い。

肩を叩かれ、叩いた本人——瀬津奈の方を見ると林檎以上に顔を赤くして、箸で摘んだウインナーを差し出していた。

「あ、ああああ、あーんっ」

「ええ?!」

「ほら！ 口開けて！」

命令のように言われて口を開けるとウインナーを放り込まれた。

照れながらも満足したようで、次はご飯を摘み咀嚼そしゃくするのを待っている。

しかしそこで全員グラウンドに集合するようにと放送が入った。

「つと、グラウンド行くか」

「そ、そうね、うん」

瀬津奈はどこか残念そうだが、大人しく弁当を片付け始める。

凜鈴もようやく回復したようで、フレアを起こし観客用のシートに向かった。

回りを見渡し天月はあることに気付く。

「千華はどこ行った？」

「あれ？ そう言えば」

周囲に見当たらないしどこに行ったか分からないので、捜しようもない。

仕方ないので二人は並んで歩き始めた。

「あ、天月。お疲れ様」

「こんなところに居たのかよ。もう体育祭終わったぞ？」

「あー、だから皆片付けしてるんだあ」

体育祭も天月たちの団が優勝を飾り、幕を閉じた。優勝が決まったときの三年生の盛り上がり様は凄まじいものだった。

今までの天月なら優勝しようと思わなかっただろうが、その瞬間には自発的に喜んでしまった。

すぐさま冷静になり、瀬津奈の方を見ると口を押さえて笑いを堪えていた。

本当に迂闊だったと反省している。

「それで？ 何があったんだ？」

天月は千華の隣り、つまり屋上の柵に背中を預けて座った。

今更ながら屋上が解放されているとは自由な学校だと天月は思う。

「えーっと、それはまあ……」

何やら言いにくそうに千華は言葉を濁す。

話したくないなら話さなくていい、聞いてほしいなら話せばいい。俺は誰かに喋ったりしないから。

天月の言葉を聞いて安心したようで、ぽつりぽつりと話し始める。

——それは、十年程前の話。

いまいち覚えてないんだけど、あたしが子供の頃親の別荘に旅行してさ。

散歩してたら一人の男の子が足を怪我してうずくまっていたの。

何とかしなきゃって思って、持ってたハンカチを傷口に巻いてあげたんだ。

男の子はありがとって言うてくれてね。

そのときの笑顔は今でも忘れられない。

それから二人でたくさん遊んだよ。

二人で山にも登ったし海で夕陽も見た。野原で寝転がってお昼寝もした。

今思えば短い時間だったけど、あたしにとっては楽しくて大切な時間だった。

その日は男の子が洞窟を探険しようって言うて、親からは洞窟に入ることは止められてたんだけど、彼が居れば大丈夫って決め付けたの。

本当あたしって昔からバカだよな。

それで二人手を繋いで洞窟を探険してたら案の定獣に遭遇しちゃって。

男の子は逃げるの一言だけ残して、あたしの手を離して獣に向かって突進したの。敵うはずもないのに。

あたしは脅えて何も出来なかった。怖くて恐ろしくて、背中を向けて逃げただけ。

前が見えなくなるくらい泣きながら走り続けてようやく洞窟を出れた。

親は何回もこけて泥だらけのあたしを見て驚いてたけど、あたしは必死に説明したよ。

あたしも親も皆で捜したけど結局男の子は見つからなかった。

でも死体すら見つけれなかったから、どんな形でもきつと生きてるよね――。

「えっと、これで終わりだよ」

「あ、ああ。そうか」

偶然ではないだろう、依然聞いた話との関係に天月は衝撃を受けた。

東宝夜鷲と琴鳴千華。

この二人がまさかこんな形で繋がっていたとは思ひもなかった。

しかしそれだと少し腑に落ちない点、矛盾している点がある。

「って、よく考えたら今の話と千華の悩みに何の関係があるんだ？」

天月の質問には答えず無言で立ち上がると千華は空を見上げた。

茜色に染まり、白い雲が所々に浮かんでいるあの大空を。

その表情は吹っ切れたような、諦めたような複雑なものだった。

「今まで自由に生きてきて、大切な友達もできたし居場所もできた」

「……千華？」

一体何を言いたいのかわからないが、天月にとって別れの言葉のように聞こえた。

「あたしを助けてくれた男の子に逢ってお礼を言えなかったのは心残りだけど、もう時間も無いんだよね」

「さつきから一体何を——」

「好きだよ天月。例えこの想いが届かなくても、二度と逢えなくなっても」

真剣な面持ちで真つすぐ天月の目を見据える。

けれども天月にとっては告白自体よりも千華の意味深な発言の方が気になってしまう。

千華は微笑むだけで、言葉の意味を追及する前に扉へ向かって歩いていく。

追いかけるため立ち上がると、タイミングを見計らっていたかのように扉が開いた。

綺麗に切り揃えられた髪は風になびいている。

年齢はあまり離れていなさそうだが、一目で分かるほど高級そうなスーツを着こなすその姿は大人っぽく見える。

目鼻立ちの整ったその男は不自然なくらいニコニコと笑い、その場に立っていた。

「捜したよ千華。早く行こう」

「そうですわね」

「待てよ。誰だあんたは」

千華を連れて行こうとした男を呼び止めると、不快感を露にして

こちらを振り向く。

先程までの笑顔とは違い、冷酷とも言える笑顔だった。

「やれやれ、なんだい君は。千華の語学友かい？ そうだとしても君の出る幕じゃない」

「どういうことだ？」

「あたしこの人、十種宝玉とくさほうぎょくさんと結婚するの」

「……は？ ちょっと待て！ そんなこと初めて聞いたぞ！」

あまりに唐突過ぎて動揺してしまう。

それでも十種宝玉は表情を少しも崩さず、諭すような口調で話し始めた。

「分からないか？ 君と僕たちの生きている世界は別物だ。富有る者はさらなる富を追い求め、家同士の繋がりを深める」

「つまり政略結婚ってことか？ 今時そんな両者の意志を無視した行為が許されるか！」

「違うよ天月。あたしが自分からこの結婚を承諾したんだ。あたしにはこんな形でしか家族に孝行出来ないから」

「う、嘘だろ？」

「もう諦めなよ。行こう、千華」

天月は止める気力も無くなり、黙って二人の背中を見届ける。

ふと十種宝玉は足を止め、こちらを振り向き最初に見せた不自然な笑顔を貼り付けた。

「そうだ、結婚式は来週の土曜日だから是非とも来てくれよ？」

二十一話：不穏な音立て歯車廻る（後書き）

裏話その十一

更新を待ってくれていた皆さん、お待たせしました。

本当は昨日更新したかったんですが宿題とか宿題とかが……。

モバゲー止めたのに更新ペースが上がらないf^_^| ^_^;

夜鵜は最初名前を夜夜（読みは同じ）にしようかと考えてましたが、結局今の方に変更。

変更して良かったですねww

正直無口なクールキャラは難しい（…；）

今でも夜鵜をクールに見せれているか不安です。

そういったことについても意見を頂ければありがたいです。

現在もう一本書きたいなー、と画策中。

今の更新ペースで？　なんてツツコミは受け付けません（。　。）

来月中旬からテストなのでそれまでに更新します。

二十二話：嬉しい余計なお世話

「何なんだよくそつ！ 納得いくか！」

行き場の無い怒りを口から漏らす。

何も出来ない自分の惨めさと悔しさ。このままでいいはずがない。

「夜鵜、聞いてたんだろ？」

「……ふん」

何もない空間が円形に黒く染まって、そこから夜鵜が姿を現した。夜鵜の身体が完全に出ると空間は元通りに修復された。

一見黒色か空間の瞳術と思えるが、瞳の色は変わっていないので幻術だろう。

普段と同じ無表情だったが、無理に表情を作っているように見える。

「前に聞いたあの話……女の子って千華のことだったんだな」

「俺だって確信は持ってなかった。今もまだ信じられない」

「だがいまいち分からない部分もある」

「獣に襲われたって部分か。それは俺の記憶が飛んでいたんだろう。いつできたのか覚えてない傷が後頭部にあるからな」

恐らくその衝撃で千華を逃がしたという記憶が抜けたんだろうと。天月が気になった部分を簡潔に説明した。

「それで？ これからどうする？」

「何の話だ」

「惚けるなよ。あの二人は気付いてなかったが、あんた殺気を隠せてなかったぞ」

天月はずっと夜鵜が襲い掛かるのではないかと心配していた。闇夜鵜の名が泣くぜ？ などとからかって一切反応が無い。

しばらく二人の間に沈黙が続く。

不意に夜鵜が口を開いた。

「……結婚式当日、動くぞ」

「やっと決心したか」

正直一人では踏ん切りが付かなかった。

仲間を助けるため、仲間を支えるためならば迷うことなく動ける。たとえ“二人”だろうと、やらなければならぬこともあるのだ。「やっぱりここにいた！ 捜したわよ！」

酷く焦った様子で瀬津奈が屋上に飛び込んで来た。

蹴破られた扉は何か持ちこたえたが、今にも外れそうだ。

何があつたか尋ねる暇も無く瀬津奈はまくし立てた。

「さつき千華が男の人と歩いてて、その人が婚約者だって！ さよならって言われて、千華は哀しそうな顔で笑ってた！ 千華はきつと結婚を望んでない。好きでもない人と結婚するなんておかしいよ」瀬津奈は感情が一気に爆発したのか、言い終わると涙を零した。天月も夜鷗も悔しいし納得も出来ないが泣く程ではない。

友達の為に涙を流す。このことがどれだけ素晴らしく、美しいか。

「千華を助けるぞ」

「ぐすつ、え？」

「このままじゃ二度と逢えなくなる。瀬津奈はそれでもいいのか？」
「だ、駄目に決まってるじゃない！ 千華はあたしを初めて受け止めてくれた友達よ！ 助けるためなら何だってする！」

天月はにこりと笑い、頷いた。

“二人”じゃない、“三人”だ。

三人とも仲間の為に命を懸けられる、不思議と天月はそんな気がした。

「それで？ 何か策はあるんでしょう？」

「それは参謀の役目だろ？」

天月は瀬津奈から目を逸らさず言い切る。

途端に顔を赤くして震え出した。

何故だろう。嫌な予感がする。

「な、何でそれぐらい考えてないの？！ 人任せって無責任すぎよ！」

「そんなすぐに考え付くわけないだろ！ てか夜鷯逃げたな？！」
気付かぬ内に夜鷯の姿は無かった。
そして友好的話し合い——言い負かされた瀬津奈の殴る蹴るの暴行あり——の結果、天月が作戦を考えることとなった。

いよいよこの日が来てしまった。

この目の前の扉が開けばそこで終わる。いや、始まるのだろうか。自分から言い出したことなので文句も言えず、準備に追われて時間だけが過ぎ。

幸町の隣町にある結婚式場。琴鳴千華は複雑な心境で淡い桃色のウェディングドレスに身を包んでいた。

派手過ぎず、地味過ぎないそのドレスと気品を漂わせる薄化粧が合わさってどこから見ても上流階級の女性に見える。

頭部には燦然と黄金の輝きを放つティアラさんぜんを付けていた。

「浮かない顔だな」

隣にはフロックコートを着ている十種宝玉が笑顔を張り付かせて立っていた。

千華は無理に笑おうとしたが自分でもいびつな笑顔になったことが分かった。

「そんなこと、ありませんわ」

「これは君が選んだ道だ。たとえ名家琴鳴家の会社の経営を立て直すためでもね」

「……そうですわね。十種の会社とパイプを持てば私も親孝行が出来ます」

「まあ何でもいい。行くぞ」

遂に扉が開かれた。

視界に広がるのは富豪の客人たち。

その中に一人、顔を俯せ、こちらを見ようとしない少女の姿が。

「瀬津奈……」

隣に居る宝玉すら聞こえない声で呟いた。

来てしまった。来てほしくなかった。逃げてしまいたくなる。

——誰か、助けて。

二人で神父の元へ歩き神父の言葉を待つ。

「……？」

どれだけ待っても神父は口を開かない。

流石に全員不審に思い始める。

あまりに長すぎる沈黙に耐え切れず、宝玉が口を開いた。

「神父さん、どうかしました？」

「思ったより時間がかかったな」

「えっ？」

貫禄ある神父の姿からは似つかない聞き覚えある若い男の声。

突然扉が突き破られ、そこには黒刀を構えた夜鷲が立っていた。

「と、東宝？　なんで？」

「式は終わりだ」

夜鷲が黒刀を振り下ろすと参加者たちに闇が襲い掛かり、一瞬の内に意識を奪う。

そちらに意識を取られていると身体が後ろに引かれ、抱き寄せられる。

「あたし作戦変更聞いてないんだけど？」

「まあ気にすんなって」

「瀬津奈、天月！」

神父の姿が霧散し、天月が現れた。

千華と宝玉の間に立ち天月は無刃想の柄を握る。

「千華、どうする？」

「え？」

言葉の意味が分からず、聞き返した。

天月は千華の方に振り向き、真剣な表情でその言葉の真意を告げる。

「千華が助けてほしいなら俺たちは全力で助ける。助けてほしくなければ諦める」

「あ、あたしは……」

天月たちは真摯な面持ちで、宝玉は自信を含んだ笑みで千華の言葉を待つ。

俯いている顔を上げ自らの心中を告げる。

瞳に涙を浮かべ、ぽつり、ぽつりとその心の中を告げた。

「これはあたしが自分で決めた道。天月たちには関係ない。余計なお世話だよ」

鼻を鳴らし、宝玉は勝ち誇ったような顔で天月たちを見た。

天月たちは眉一つ動かさない。

「分かったかい？　これが千華の答え——」

「——ただ、そんな余計なお世話があたしには嬉しい！　自分で決めた道だけど、心の奥ですつと助けを求めてた！　あたしはもっと皆と一緒に居たい！」

顔を涙でぐちゃぐちゃにしながらも千華は自分が本当に思っていたこと、自分のしたいことを告げた。

言い終わってからすつきりしたようで、ようやく明るい笑顔を見せる。

「なんだとっ？！」

余裕の笑みは驚愕の表情に変わる。

今まで崩れたことのないプライドが、音を立てて崩された。

「ははっ、決まりだな！」

「そんなの当たり前よ！」

「仕方ないな」

天月と瀬津奈は自然と笑みを零し、夜鷗もどこか嬉しそうに見える。

宝玉の正面に天月と夜鷗は立ち、瀬津奈と千華は距離を取った。

右目を押さえて宝玉はまるで狂ったように豹変し、大声で笑い出した。

「くくく、あつひつひつひつ！　よくも俺の顔に泥を塗ってくれたな！　絶対に許さん！　今更後悔しても遅いぞ！」

「うわ、壊れた」

宝玉の身体から灰色の煙が噴き出した。

毒の煙というわけではなく、濃度も薄くある程度周囲は認識できる。

「完全にキレたな、気を付けろよ夜鷗」

「こちらの台詞だ」

天月は足元から冷気を感じ後方に跳んだ。

その一瞬あとに地面から氷の柱が貫く。

氷の柱は避けたが自分の背後に土の柱があり、それより下がることは出来なかった。

さらに土の柱から草が芽を出し、伸びて天月の身体に巻き付く。

「っ、しまっ」

前方を見ると宝玉らしい人影が腕を突き出し、一筋の雷電が顔面に襲い掛かる。

首を右に傾け回避したが、少し掠ったのか紐が切れて眼帯が地面に落ちた。

「ちっ、世話の焼ける」

夜鷗は黒刀を振り、天月に巻き付いていた草を斬り落とす。

そして懷からナイフを一本取り出し、宝玉に向かって投擲する。

取り出したの是一本だけだったが、投げた本数は四本に増えた。

しかし盾のような物が宝玉の手元に現れ、ナイフを弾くときに金属音が聞こえた。

次いで火炎が眼前を覆う。

「ええい、二刀両断！」

刀を振り下ろし炎を吸収したが、水の奔流が天月を押し返す。

水の奔流から跳んで脱出し、着地するとほぼ同時に突風が煙を吹き飛ばした。

「どうだ？ 俺の力は」

宝玉の右目は九つに等分され、それぞれが赤、青、緑、茶、桃、黄、紫、縹、金と色が付いている。

「しかし俺の力はこんなもんじゃねえ！ 昇れ、そして墮ちろ！」
宝玉の左目が白と黒の二色に変わった。

天月の真上を闇が蠢き、夜鷺の真上に光が集まる。

収縮した光と闇は円柱の形となり、二人目掛けて落ちた。

「ぎやはははは！ 不様だなあ」

額に手を当て大笑いしている隙に。

攻撃を避けた天月は右から、夜鷺は左から挟み撃ちで宝玉を斬り捨てた。

「不様なのはどっちだか」

「余裕ぶるからそうなる」

膝から崩れ落ちた宝玉を一瞥する。

死んでないはずだがぴくりとも動かない。

「まだ終わりには早いぞ」

「！ またあんたか、人間！」

声の聞こえた方を見ると人間が呆れたような顔で立っている。

天月の予想は的中した。

普通の人間なら基礎瞳術全種と上級瞳術を使いこなせるなんてありえない。

使いこなせるとしたら自分のような別種族の血が流れている人間が無理矢理力を覚醒させるしか方法は無い。

「刀を納めたまえ。今ここで私を斬ったところで何が変わる？」

「少なくとも今後犠牲者が出なくなる」

「犠牲者？ 馬鹿なことを言うな」

先程まで倒れていた宝玉は平然と立ち上がる。

少し落ち着きを取り戻したようで天月を睨むとさらに言葉を続け

た。

「施設長のお陰で俺たちは力を得たんだ。自ら望んだ力を」

「そんなやり方で力を得て何になる?! あんたたちは何も分かってない!」

「偉そうに説教を垂れやがって。この世界は力が無ければ何も出来ない、そのことを教えてやろう」

「待て。いくら彼等が生徒会との闘いで強くなったといえお前が全力を出したら話にならない。ここは引こう」

「……仕方ありませんね」

不服そうだが撤退することに同意した。

他者を見下す態度のまま天月たちに言葉を吐き捨てる。

「俺のプライドに傷を付けたお前たちは必ず始末する。そして千華。お前は未来永劫俺の物だ」

「三秒以内に消える。さもなくば首を飛ばすぞ」

夜鷲の言葉に反応を示さず、一瞬で二人の姿は消える。

これで目標は達成した……が、これだけで話は終わらなかった。

二十二話：嬉しい余計なお世話（後書き）

裏話その十二

本日はテスト二日目でありんす。

高校のテストって土日跨ぐから f ^ | ^ ；

鍵錠楔の元キャラは鎖で死人しひを操り、『死人狩り部』なんて部活の部長でした。

今残っているのは鎖を使うという点だけ……。

若干キャラが薄い気がしてなりません（：|：）

でも元キャラの能力はどこかで使いたいなー、と思ったりします。

先日タイトルを弄ったり、生徒会編とかで二章を間に入れたりと結構いじりましたが、最終的には元に戻しました。

やっぱりこの方がすっきりしてますね w w

さて、次の更新はいつになるだろうか。

予定ではコメディ寄りの話にするつもりです（# ^ ^ #）

二十三話：罪裁く暴風の牙と初恋の髪留め

「千華、大丈夫か？」

「もう自分を犠牲にしちゃ駄目だからね」

「うん、本当に皆ありがとう」

千華は満面の笑みを見せた。

目は赤く晴れてしまっている。

天月は肘で夜鷗を小突き、訴えかけるような視線をぶつけた。

「……無事でよかった」

「え？」

思いつ切り吹き出した天月を夜鷗は殺気全開で睨み、瀬津奈と千華は不思議そうにしている。

何とか笑いを堪えて顔を上げ、右目に溜まった涙を拭った。

その顔を見て瀬津奈はあることに気付く。

「あんたそういえば眼帯どうしたの？ それに左目開いてないわよ」

「ああ、眼帯はさっき紐が切れた。あと左目は元々潰れてる」

「は？ あんた左目見えてたじゃない」

「俺と闘ったときも瞳術が使えてただろ」

「瞳術を使つてるときも左目は何も見えてない。今は瞳術すら使えないから開かん」

瀬津奈と千華は驚きを隠せない。夜鷗でさえ驚いているようだ。

何故今は瞳術が使えないのか、そのことを聞かないでくれたのは助かった。

「とりあえず疲れたし帰ろうぜ」

「えーっと、この現場はどうするの？」

「夜鷗、俺たちが出たら幻術を解いてくれ」

「あれ？ あたしの言葉は無視かな？ おーい天月くん。聞いてますかー？」

天月は一先ず現実逃避に走った。

改めて考えればこれはテロだ。通報されれば確実に捕まるだろう。

「あれ？ 何か聞こえない？」

「……まずいな」

「やっぱり囲まれてるな。しかもこの音は軍事警察の第一軍戦闘部隊だ」
ぐんじけいさつ だいいちぐんせんとうぶ

軍事警察とは世界の統治機関である大連隊の指示を受け、法を犯した人間を裁く正義の機関だ。
だいいれんたい

戦闘部隊に属している人間の戦闘力は一般人の比ではなく、元々実力のある人間が更に訓練を続けているため、大半の悪人は抵抗すら許されない。

そして世界中に支部があり、どこへ逃げようと悪を見張っている恐ろしい機関だ。

「第一軍って言えば全十二軍ある中のトップじゃない！ なんで日本にいるのよ？！」

「まさかあたしたちを捕まえに第一軍が出てくるなんて、どうしたら……」

「少し外でやり過ぎたか」

「やっぱり作戦変更なんてしないで俺が外行けばよかった……。どうせあんた斬ったり派手な幻術使ったんだろ」

「否定はしない」

「せめて否定してくれよ！」

結婚式場の扉が開かれた、否、壊された。

恐らく原因はこちらに向かって銃を構えている女性が蹴破ったんだろう。

「武器を捨てて手を挙げる犯罪者。生きて牢獄に入りたいだろう？」

「どうして扉を壊したんですか。修理費は隊長の給料から引くときますので」

「うそっ！ 許してかんちゃん！」

「何でここにいますかふたりとも」

「って、あーっ！ 天月くん！ 私に会いに来てくれたの？！」

肩にかかるかかからないかぐらいの黒のショートカット。

童顔で身長もそれ程高くない見る限りには中学生だが、実年齢は全くの不明。

それが嵐山虎荒。
あらしやまこあら

「何故貴方がここにいるか私は説明を要求します。 閏天月」

そしてこの堅苦しい口調の少女は雨傘簪あまがさかんざしと言う。

色の抜けた長髪をツースイドアップにしており、結び目には銀色の簪を刺している。

その冷やかな目は射る者全てを凍らせてしまいそうで。

どこか幼さの残る顔だが身長も天月と大差なく、発育も中々のものだ。

「むしろこっちが聞きたい。 どうして第一軍が出動してるんですか？ おばさん」

天月は再会が久しぶりということもあり、その単語が禁句だといふのを忘れていた。

虎荒は音もなく背後に回り天月の首を右腕で締め上げる。

左手には銃を握っていて、それを天月のこめかみに当てて引き金に指をかけた。

「よく聞こえなかったからもう一回言ってくれない？ コアラ“お姉ちゃん”に」

「ど、どうしてこんな所にいらっしゃるんですか？ コアラお姉ちゃん」

「そうは言ってもここには結構なお偉いさんがいるからね。 日本には第一軍の次に第十軍しかいないし」

ようやく虎荒は腕を放し、天月から離れて簪のそばへ戻った。

軍事警察の本部なのに二つしかないのはそれだけ第一軍が優れているのだろつ。

千華と瀬津奈はあまりの急展開に付いていけないのか、呆然としている。

「コアラおば……お姉ちゃんは俺のおば……父さんの姉だ」

天月がおばさんと言い掛ける度に笑顔で銃口を向けて来るから危険過ぎる。

虎荒と天月の関係を聞いて二人は驚きの声を上げた。

「ええっ?! 凄い若いじゃない!」

「どう見ても姉にしか見えませんわ」

二人の正直な感想に虎荒は破顔する。対称的に天月と簪は呆れ顔だ。

ひとしきり喜んだあと、真剣な表情で天月たちを睨む。

その視線は鋭く、先程までとは纏う空気から全くの別人だ

「さて、未来ある少年少女たちよ。君たちの行いはれっきとした犯罪だ。我々に大人しく捕まってもらおうか」

「そのことだけど、俺が二人に勝つたら見逃してほしい。俺たちは仲間の為に動いただけで間違ってるつもりは一切ない」

天月は闘う意志を示し、仲間たちを巻き込まないように数歩前に出る。

「なるほど、よからう」

「隊長、本当によろしいのですか?」

「構わんさ。天月よ、貴様に第一軍の隊長と副隊長を一度に相手することがどれ程無謀か教えてやろう」

そう言つて虎荒は懷から綺麗な緑色の波動石を取り出す。

拳大の汚れ一つ無い球体は虎荒の手から離れて宙に浮かんだ。

その様子を気を取られていると、簪が自分の身長より巨大な鎌をその手に握っていた。

柄の部分が紅く、刃も非常に長い。

「久しぶりに会ったが大きくなり過ぎだろ」

「成長期なので」

簪は音も無く接近すると右上から大鎌を振り下ろす。

姿勢を低くしながら天月は左に避けた。

流れるように、舞うように大鎌が全方位から襲い掛かる。

天月は刀を二本とも抜いて大鎌の猛攻を防ぎ、流す。

速度は天月の方が上だ。しかし反撃せず守勢に回っているため押されていた。

「っ！」

流石に防ぎきれなくなったので弾かれたように下がる。

追撃するために簪は低く真つすぐに跳び、大鎌を振りかぶった。

天月の耳に静かだが、はつきりとした声が届く。

「さあ。『防げ』、攻撃を」

大鎌を刀で受け止める。すると前触れ無く天月の左肩から血が噴き出す。

突然のことに驚き膝をついた。

今攻撃されたのではない。いつの間にか仕掛けられていたのだ。

「ぐっ」

息を抜く隙も無く大鎌が振り下ろされる。

天月は刀で受け止め、今度は何ともないことに安心した。

簪は攻撃の手を止めないが、それを防ぎながら虎荒の周辺におかしな点があることに気付く。

「気を逸らしすぎ」

大鎌で真つ二つに一閃されるが、天月の身体は霧のように消えた。波動石の傍に天月の身体は現れる。下から上へ、二刀を波動石目掛けて斬り上げる。

「無駄だ、『攻撃するな』」

刀が波動石に触れる寸前に両の手の平から勢いよく血が噴き出した。

急激な痛み顔に顔を歪め、刀を手放してしまふ。

「やっぱりこの波動石か」

「その通り。今お前の体内には風が渦巻いている。私の合図一つで風はお前の身体を突き破り、吹き抜ける」

天月は悔しさで歯を食いしばる。

これが世界トップクラスの實力。否、これでも全力には程遠いだろう。

今の自分では届かない高み。

後ろではずつと二人が心配そうにこちらを見ている。夜鷲は何を思っているか分からないが、強く見続けていた。

「お前は罪人だ。私がとどめをさそう。簪は闘う気がないようだな」

「た、隊長。私は……」

「黙れ。任務に私情を挟みおつて。罪無き人々を護るため、私たちは立ち止まるわけにはいかないのだ」

今さらながら身体中を風が駆け回っている感じがする。

瀬津奈と千華が何かを叫んでいるが、風の音がうるさくてよく聞こえない。

虎荒は右手を天月に向け、口上を唱えた。

「我は罪を裁く暴風なり。我に従いし風たちよ、暴れ狂い罪人の身に罰を与えよ」

風は体内で吹き荒れ、肉体は損傷に耐え切れず赤黒い血液が辺りに飛び散った。

全身から大量の血が抜けた天月の身体は、重力に任せてゆっくりと倒れていく。

しかし、

「がはっ！ げほっ、ぐっ……ごはっ」

右足を一步踏み出し何とか身体を支える。

口の中も血だらけでいくら吐いてもきりが無い。

虎荒は目を見開き驚いている。

「な、何で立ってられるの？」

「……はぁ……ごほっ、自分でも分からん」

驚きながらも今度こそ倒すために右手を天月に向ける。

目に涙を溜めながらも瀬津奈と千華が天月を護るよう間に立った。

「邪魔よ」

「これ以上はさせません」

「もう我慢の限界ですわ」

天月の条件を飲んだ以上この二人に手を出すべきか一瞬迷ったが、自分の信条が迷いを振り払った。

虎荒は懷に手を入れるが、首に黒刀を突き付けられて手を止める。自分が気付かない内に接近されて信じられなかったが、相手を見て納得した。

「確か闇夜鴉だったか？ 組織が潰れて君も死んだと思っていたが生きていたか」

「生憎な」

三人が虎荒と対峙している中、大量出血のせいで天月の意識は飛びそうだった。

駄目だ、もう倒れる。

そんな天月を見てられず、簪は支えるために抱きしめた。

その手には髪を留めるための簪が握られている。どうやら何らかの術で簪が大鎌に変形していたようだ。

鼻をくすぐる甘いにおいと温かい感触で姿を確認しなくても天月には誰か分かった。

「簪…… 血で汚れる……ぞ」

「そんなこと構わない。私は貴方の初恋の相手で、貴方は私の初恋の相手よ」

簪の言葉に瀬津奈と千華は凄い勢いで振り向く。しかしながらさらなる衝撃が二人の目に飛び込んで来た。

天月の両頬に手をそつと添え、顔を少し上げさせる。そして目を閉じゆっくりと自分の顔を近づけ、唇を重ねる。

「ん……っ」

簪は目を少し開けると天月の体内に波動を流し込む。

甘い吐息を漏らし、簪は唇を離した。

依然致命傷ではあるが、天月の出血は止まっており顔色も少し回復している。

二人はあまりの衝撃に開いた口が塞がらない。

「隊長。私は彼を軍事警察内の病院まで運びますので。それでは」

「ちょっと待つてよかんちゃん！　そういうことなら私も帰るつ。

天月くん大丈夫？」

気を失ったようで返事は無い。

我にかえった二人は追いかけようとするも虎荒の声に立ち止まる。

「安心してよ、天月が意識を戻したらすぐ帰らせるから。私は手を出さないし」

「こちらを見ながら“は”を強調して言わないで下さい。そして私と天月は運命的に結ばれているので手を出す必要がありません」

その言葉を最後に、嵐山虎荒と雨傘簪は結婚式場を後にした。

二十三話：罪裁く暴風の牙と初恋の髪留め（後書き）

裏話その十三

やりましたよ！

鬼久しぶりの一週間更新！

しかも新連載の一話書いて一週間！

じゃあ今まで何してたんだよとかは聞きません！

今週テストだったとか、だから英語欠点取るんだとか忘却します！

皆様気付いているでしょうか？

十二話から三人称進行に変更していることを。

これが気付かれてなければ僕の実力不足でしょうか（：|；）

さらに二十話、四ページ目の最後の方から一文辺りの文字が増えたこと。

それまでは出来る限り一文で収まるように調整してましたが、今は逆に文字を増やそうとしてますww

二十二話の後書きでコメディっぱい話と書きましたが、思いつ切りバトルにf^_^；

次の更新は未定！

内容もいまいち考えてません（|_；）

二十四話：雨降りの中差し出された傘

「う、うーん……」

ぼんやりとした意識の中、重たい瞼まぶたを開けると最初に白い天井が映った。

こんなこと前にもあったなー、ならここは保健室か？ などと現実逃避を試みる。

勿論保健室ではないので、何故眠っていたか思い返すことにした。千華を助けに結婚式場へ乗り込み、助けたはいいが軍事警察の第一軍が現れ、虎荒と簪の二人と闘って全身血だらけになって……。

そして左目には眼帯を付けてない。

思い返すと自分の無謀さと情けなさに泣くどころか呆れた。

冷静に考えると第一軍の隊長と副隊長を相手取ればどうなるかわからないのに。

「こんなところで寝ててもしょうがないか」

身体を起こそうとするも全く動けない。痛みでという訳ではなく、何かが左腕に抱きついていて動けない。

その何かがこの部屋まで運んでくれたのだろうか、ようやく回ってきた頭で考えてもどうしてこの状態なのだろうか。

恐らくここは簪の部屋だ。机とクローゼット以外何も置いておらず、年頃の女の子としては殺風景な部屋だ。

天月たちが寝ているのはこの部屋にある物だから、普段簪の寝ているベッドだろう。

「あー、めんどいな」

諦め半分に首を左へ傾けると、簪は気持ち良さそうに寝息を立てていた。

その両手は天月の左腕に絡められており、予想通り過ぎて頭が痛くなる。

どうするか悩んでいると不意に視界が暗くなり、唇に柔らかい感

触が。

——こいつ、いつの間に起きてた？ てかキスする前に状況説明だろ！

唇を塞がれていて声も出せず、両手首を握られていて抵抗も出来ない。

数秒間そのまま、ようやく唇を離れたかと思うと、簪は焦点の定まっていない目で天月を見ており、背筋に悪寒が走った。

「お、おい簪、どうした？ というか俺的には何でこうなったか説明してほしい」

「それは、私が天月を好きだから？」

「そうじゃない！ 違うこともないが、何故俺はここにいるか教えてくれ！ そして俺の上から退け！ そんな目で俺を見るな！」

渋々ながら簪は天月の上から退く……と見せかけて頭を天月の胸にのせた。

丁度覆い被さるような形なので、今誰かに見られようなら完全に終わりだ。

「ところで簪、この部屋には誰も入って来ないだろうな？」

「大丈夫、お母さん以外入って来ないから」

「どこが大丈夫？！ 寧ろそれが一番危ねえんだよ！」

絶対にこんな状況を見られてはまずい。

簪を溺愛していて親代わりである虎荒に見られれば、責任を取れだの既成事実なので結婚させられるかもしれない。

因みに簪は仕事で虎荒のことを隊長と呼んでいるが、普段はお母さんと呼ぶ。

引き離そうとしても腕を天月の腰に回して中々離れない。
「覚えてる？」

不意にさっきまでとは違い寂しげで、不安そうな上目遣いで見てくる。

流石にそれだけでは何のことか分からないが、簪のヒントでようやく分かった。

「十二年前」

「あー、俺たちが会ったときのことね」

「天月の見たことから、感じたことからあのときのことを話してほしい」

何が不安なのだろうか、縫^{すが}るように見つめる簪の頭を優しく撫でてやる。

少しだけ安心したのか目を細めたが、それだけでは納得しないようだ。

やれやれ、たまには昔語りもいいだろう。

ゆっくりと天月は記憶を紐解いた。

残暑が厳しい秋の夜。

雨降りの日、五歳の閏天月は当時まだ結婚していない閏虎荒と歩いていた。

一本の傘を差し、二人手を繋いで虎荒の家へ向かっている。

天月の父親が用事のあるため、虎荒が天月を預かることになったのだ。

「ねー、おば……お姉ちゃん。なんで相合い傘なの？ 僕傘持つてるよ」

「とりあえずあなたのお父さんの教育が悪いとして、あとで殴りましょうか」

天月は不思議そうに首を傾けて虎荒を見上げる。

その姿が可愛くて思わず抱きしめたくなったが、妄想で止めておいた。

「天月くんは私と相合い傘いや？」

「ううん。うれしい」

嬉し過ぎて叫びそうになったが、それこそまずいので我慢する。
家に帰ったら抱きしめよう。虎荒は密かに決心した。

「あれ、どうかした？」

雨に濡れるのも気にせず足を止めたかと思うと、天月は見ていた
方向に走り出す。

水が跳ねて履いていたズボンが汚れた。

慌てて天月を追うとその場に立ち尽くし、雨空を見上げている小
さな女の子がいた。

二人が傍に来て全く気付かず、空を見上げる目は光の無い寂し
い物だった。

天月が開いた傘を差し出してようやく少女はこちらを見る。

訝しがる少女に天月は声をかけた。

「雨に濡れるよ」

「別に大丈夫」

「何でこんな所にいるの？」

「あなたには関係無い」

「そんなことないよ。僕は君を見付けた。お節介でも僕は君を助け
るよ」

「だから私は別に——」

言い終わる前に少女の右手を握った。冷え切ったその手を温める
ように優しく。

少女の目から涙が零れたが、全身ずぶ濡れで天月は気付かなかっ
た。

「いいよねおば……お姉ちゃん？」

「うん、家においで」

虎荒はしゃがんで目線の高さを合わせ、にこりと微笑む。眉はぴ
くりと動いたが。

少女は俯いて涙を堪えている。

その様子を見て虎荒は小さく笑い、二人に元気よく声を掛けた。

「さっ、それじゃあ行こう！」

歩き出しても二人は手を離さない。天月は少し傘が差しにくそう
だ。

それから暫く歩くと二階建ての小さな軒家が見えた。

虎荒が鍵を開けて家に入る。少女は立ち止まったが、天月が入る
とそれに続いた。

「ほら、二人とも身体が冷えてるでしょうからお風呂入って来なさ
い」

「はい」

少女の手を引っ張り風呂場へ向かう。

慌てて天月についていく少女の姿を見て、虎荒は何かしたいと
思った。

天月のパジャマと少女のパジャマ代わりに虎荒のＴシャツを用意
して、脱衣所にある棚へ置いた。

流石に下着は無いので洗って後で乾燥機に入れておこう。

とりあえず今は先にしなければならぬことがあると思い、居間
の椅子に座って携帯電話を取り出す。

携帯電話からは若い男の声が聞こえた。

「もしもし隊長？　ちよつと身元不明の女の子拾ったから私が育て
るね？」

『何自己完結してるんだ？！　そんな簡単なことじゃないぞ！』

「いやー、そうは言ってもその子記憶喪失っぽいだよね。多分だ
けど」

『いくら第一軍の副隊長でも認められん。とにかく身元を調べるか
ら俺の所に連れて来るんだ。分かったな？』

「嫌です」

『なっ、お前何言っ——』

電話を切り携帯電話を仕舞うと、二人が風呂から上がって来る。

そこで少女の髪が二カ所簪で留められていることに気付いた。

「あれ？　その簪どうしたの？」

「……この子に貰った」

「その年で女の子にプレゼントとは天月やるねー」

からかわれて天月は顔を赤くした。

簪は元々虎荒の物だが別にいいかと思えるくらい似合っている。

虎荒は良いことを思い付き、居心地悪そうにしている少女に笑顔で声をかけた。

「ねえあなた、自分の名前は分かる？」

「……分かんない」

少女は哀しさや困惑、様々な感情の入り混じった表情で首を横に振る。

——やっぱり記憶喪失か。大丈夫、私がこの子を立派に育ててみせる。

「それじゃあ今日からあなたは雨傘簪。雨降りの中傘を差し出した天月に感謝ね。名前の簪は頭のそれが似合ってるから」

「私の、名前……」

「よろしく簪。僕の名前は閏天月だよ」

「閏……天月」

「よしっ！ それじゃあご飯の用意するから二人とも待っててね」

「……ねえ天月、起きてる？」

「んー。起きてるよー」

「ありがとうね」

そのとき、簪は虎荒の家に来て初めて笑った。見とれてしまう程の可愛い笑顔だ。

夕食を食べ終わり、天月と簪は寝室の同じ布団に入っていた。

隣りに敷かれた布団では虎荒が爆睡しており、時折寝言が聞こえる。

お互いの顔しか見えない暗闇の中、二人は寝転んだまま向き合っていた。

「何が？」

「あなたが今日助けてくれなかったらどうなってたか分からない。本当にありがとう」

「ん。どう致しまして」

「私には、これぐらいしか出来ないから」

そう言っつて簪は顔を近付け、天月と唇を重ねる。

数秒間の二人だけの時間は天月がゆっくりと唇を離して終わった。簪は名残惜しそうに小さく声をもらした。

その様子が愛おしく、次に唇を近付けたのは天月から。

簪も当たり前のようにそれを受け止め、二人はそれから何度も唇を重ねた。

「明日には家に帰るけど、君のことは忘れない。また会おうね」

「うん、約束」

再会を誓うように二人は唇を重ねる。

これが僕の初恋だ。

これが私の初恋。

その言葉を最後に二人は眠りに就いた。

「覚えててくれたんだ、嬉しい」

心の底から喜んでいいのか、簪は満面の笑みを見せる。

今でも勿論可愛いと思う。しかし昔のように胸が高鳴るといってはいない。

しかし簪は今でも天月のことを思い続けている。
暫く会わない内にすれ違っていたのか。

「早く解放してくれ」

「むー」

不満そうに頬を膨らませながら、簪は天月の上から退いた。

天月は簪の頭を撫でてベッドから出ようとする。咄嗟に簪は天月の手首を掴んだ。

「私は今でも天月のことが好き。でも、天月は私のことを好きじゃないでしょう？ それは分かってる。けど私はまた会いたい」

「そんなこと心配するな。お互い生きてればまた会えるさ。必ずな」
それだけ告げると簪の頭を軽く叩き、部屋を出た。

廊下には案の定、虎荒が壁に背中を預けて立っている。

どこからそこに居たのか聞くのも怖い、今は礼を述べるのが先だ。

「夜鷗たちを見逃してくれてありがとうございます」

「ふん。そのせいで私はさっきまで説教三昧だったんだ。責任は取れよ」

「何なら今から俺を捕まえますか？」

「アホ言え。今さらそんなことをするか。責任の取り方なら簪を嫁に貰え」

「今は恋愛する余裕なんて無いですよ」

「全く、カンちゃんみたいないい子を選ばないなんて。親に似てたらししたこと」

「残念ながらお婆……お姉さんも父さんと同じ血が流れてるんですよ」

憎まれ口を言いながらも虎荒はどこか嬉しそうだ。

そんな虎荒に見送られ、天月は軍事警察本部をあとにする。

広過ぎるので出口まで案内してもらう。

その道中に依然は無かった左目の十字傷について訊かれたが、適当にごまかした。

「今度は敵としてじゃなく、嫁と姑として会いに行くわね。孫の顔も早く見たいし」

「一々発言がおばさんくさい……あ」

その後天月が虎荒の手でボロ雑巾のようにされ、蹴り出されたのは言うまでもない。

二十四話：雨降りの中差し出された傘（後書き）

裏話その十四

本日はクリスマスですね。

まあクラブ以外予定なんてありませんが（：|；）

日本のイベントは非リア充に厳しい（*|*）

二十三、四話は元々プロットに無い話でした。

本当はコメディーっぽい話にしたかったけど……。

という訳で簪と虎荒も即興で考えましたww

しかしながら名前もキャラも結構気に入ってますので、主要キャラ
まではいきませんが、出番は今後もある。かな？

これからはプロットに忠実に進みます。

暫くバトルばかりですが、ご了承ください。

勿論同時進行中の恋愛物も執筆中です。まだ二話ですけどf^| ^；

……短編でも描いてコメディーに挑戦しようかな（ノ><）ノ

二十五話：全てを支配し飲み込む漆黒の太陽

琴鳴学園から少し離れた位置にある森では野生の獣たちが潜んでいた。

本来ならその森へ侵入した者を喰い尽くすことが仕事だが、今は一匹も動いてない。

四肢をもがれ、全身から血を流し横たわっている夥しい数の死体。獣たちの命を奪った張本人——見た目は天月そっくりの少年。ただし眼帯はしておらず十字傷は外気にふれている——は返り血を一滴も浴びず森を闊歩かつぽしている。

何かを探すように辺りを見回していると思えば足を止め、その場にしゃがみ込んだ。

左目が茶色に変わり、右手で地面に触れると、崩れて下の空間が見える。

飛び降りると白の半袖半ズボン、全員同じ格好をした集団に囲まれた。

「陰気くせえ所だな」

血走った目で狂うように襲い掛かって来るが、少年の身体から溢れ出た波動に吹き飛ばされる。

壁や天井、地面に叩きつけられ、一瞬で戦闘不能になった。

何ごととも無かったように階段を見付け、倒れている人間たちを踏み越え進む。

階段を下り辿り着いた空間には幾つも牢屋があり、その中では怪しく目が光っている。

「あ？ 何だこの階。まあいいか」

今は無視して先へ行こうとすると階段の前に一人の青年が立っていた。

スーツに身を包み少し不満げな顔で少年を睨んだ。

「施設長が呼んでいる。ついて来い」

「それは有り難い。雑魚を漬すのも面倒だからな」

ぴくりと眉を動かしたが、あくまで冷静さを装い、階段の傍にあるエレベーターに乗り込んだ。

少年もそれに続くと扉が閉じ、ゆっくりと地面の底へ下りていく。扉が開いたその階は地下七階だった。

「こんな地下深くに引きこもって何してんだか」

「口に気をつける。その地下深くから出られなくするぞ」

「はっ。やれるもんならやってみろ」

青年は目の前のドアをノックし、中に居る人に対し声をかけた。入ることを許可されドアを開くと、やけに明るい部屋に一人の老人が座っていた。

広めの部屋に豪華過ぎる家具。当たり前のようにその場に居ることからこの老人が施設長なのだろう。

少年の姿を見ると老人は目を丸くし、気になったことを尋ねた。

「似ているが、別人なのか？」

「誰に似てるかは知りませんが、別人なので勘違いのないように」

「まあいい。ご苦労宝玉」

宝玉は小さく頭を下げた。

少年が老人の向かいにある椅子に腰掛けると、老人は少しだけ笑みを零した。

——なるほど、見た目は同じだが中身は全くの別人だ。

「私はこの施設の長である人間だ。君の名前を聞こうか」

「断る。と言いたいがそれでは話が進まないからな。閨陽火だ」（つひやうか）

「閨？ やはり彼と関わりがあるのか？」

「そりゃあ俺はあいつで、あいつは俺だ」

陽火の不可解な言葉が理解できず、人間と宝玉は眉をひそめる。

二人の様子を見て楽しんでいるのか陽火は喉の奥を鳴らし言葉を続けた。

「簡潔に説明すると俺はあいつの能力の一部だ。瞳術の力を司るな」
「ならば君がいないと閨君はどうなる？」

「今のあいつは瞳術が使えない。ついでに言うと俺は瞳術しか使えない。身体能力はあんたにも負けるよ」

そう言つて陽火は宝玉の方に顔を向けた。

宝玉は彼の底知れない雰囲気気圧に気圧されてしまふ。

人間の方に向き直し、足を組んだ。

そして右手の人差し指を立てて人間の方に突き出した。

「俺がここに來た理由は一つ、閨天月を潰してほしい。間違えた、潰せ」

「ほう、中々面白いことを言つね。私に協力しろと？」

「カハハッ、あんた面白いな。自分を優位に見てるな？ 俺は協力

“させて”やるんだ」

「ふん、小僧が。あまり調子にのるなよ」

人間の言葉に口の端を吊り上げたかと思うと、左目が黒色に変わった。

それと同時に手の形をした真つ黒な物質に人間は胸倉を掴まれる。陽火の肩から伸びている二つの物質は外すことも出来ず、そのまま持ち上げられた。

「何をしてるんだ！」

宝玉は怒声を上げ、陽火に殴りかかる。

しかし陽火に一睨みされ、宝玉の身体は動かなくなった。

「か、身体が……」

「まあ落ち着けよ。とりあえず今日は友好的な交渉に來たんだからよー」

目の色が元に戻り、真つ黒な物質は風に吹かれた砂のように消える。

宝玉の身体も縛りが解けた。

侮蔑を含んだ目で陽火は人間を見ている。

「さつきも言つたが俺は能力そのもので肉体が無い。今は適当な人間の肉体を借りてるが少し壊れてきてるんでお前のモルモットを一匹よこせ」

「ゴホツゴホツ。そ、そんなこと出来んな」

「あとこの施設の戦力を教える。今言った二つの条件を受ければ協力させてやる」

「いい加減にしろ貴様！　こちらが不利な条件を受けてその上協力しろだと?!」

「そう熱くなるなよお兄さん。俺はこれでも破格の条件を出したんで、断られちゃったらショックであんたらの脳をいじっちゃうかもよ」

二人は驚愕で言葉が出なくなった。

あまりにも理不尽だ。

逆らうことも許されず、選択肢すら与えないこの男の言葉に、行動に、思考に逃げ出したくなる。

「わ、わかった。協力しよう」

「施設長?!　私は賛成出来ません！　何なら私がこいつを倒して――」

「協力しようねー。まあいいか。それなら俺が出した条件を受けろ」

「地下二階に実験を繰り返したせいで使い物にならなくなった者たちがいる」

「俺にゴミを押し付ける気か」

「し、しかし実験途中の者たちはお主が全員殺したからおらんぞ」

陽火は溜息を吐いてからゴミでいい、と投げやりに言った。

その言葉に不満はあるが、仕方なく人間は二つ目の条件について教える。

「現在施設に居るのは地下二階の牢獄に幽閉されている者たちが五十数人。そして実験成功者がここにいる十種宝玉を含めて四人だ」

「ああ？　それだけかよ、少ねーな。本当にそれだけか？」

「ふん、私の計画がどれだけ崇高にして難解かも知らぬくせに言ってくれる」

「うわっ、生意気だな。お前の計画なんてどうでもよすぎて知りたいたいと思わねえよ」

怒りを露にした人間の表情を見て気分がよくなった陽火はこんなことを言った。

「そう怒るなよ。何ならあいつを潰したあと身体を実験してもいいから」

「……ほう？」

「どれだけ実験しようと思わないが絶対に殺すなよ。生かしたままが条件だ」

「ふむ。わかった」

「交渉成立。じゃあよろしくな」

口の端を吊り上げて笑うと椅子から腰を上げた。

ドアの傍まで歩くと振り返りもせず後ろの二人に言い放つ。

「ま、あいつはおびき出してやるから何とかしろよ。最悪この施設ごと潰すからリックスして頼むぜ」

ドアは閉じ、廊下からエレベーターの開く音が聞こえた。

——与えられた力はお前の物だ。従うことなく己の力を解放しろ。そんな言葉を囁かれた気がするが、宝玉は聞こえなかったことにした。

「落ち着け瀬津奈！ 何もなかったからチャクラムは仕舞ってくれ！」

「だーからー。あたしはあの可愛い女の子に何をしたかって聞いているのよ」

「何もなかったって言ったんだけど！ それにどうして俺がしたと言いつ切る?!」

軍事警察本部から家に帰ると日曜日の夕方だったので、宿題をして夕食を済ますとすぐに寝てしまった。

朝起きて携帯を確認したらメールと着信の件数が恐ろしいことに百越えに七十越えとは信じられない。

そして学校へ行き教室に着くといきなり瀬津奈に屋上へ強制連行された。

今は柵を背に追い詰められている。

「OK、わかったわ。遺言はそれでいい？」

「何でそうなるーっ！」

「こんな所に居たのか。搜したぞ聞」

「あれ、柏原先生？」

獣術担当の教師である柏原がそこに居た。

契約獣の召喚以来担当から外れたので二人にとってこの教師と会うのは久しぶりだ。

柏原の登場に瀬津奈は慌ててチャクラムを仕舞うが、柏原は特に気にしていない。

「あまり遊んでる暇は無いぞ」

「は？」

「どつという意味ですか？」

「琴鳴千華が誘拐された」

唐突過ぎる言葉を理解出来ず、二人は一瞬反応が遅れた。

柏原の話によると、屋敷の使用人が夕食のため千華を部屋まで呼びに行くと、姿が見えなかったという。

屋敷に何者かが侵入した形跡は無く、夜通しで搜索中だが犯人は見付かっていない。

「内部の者の犯行という線も無いらしい。屋敷に居る人間は理事長本人が厳選した人たちらしいからな」

「なるほどね。しかし先生はどうしてそこまで詳しく知っているんですか？」

「直接話を聞きに行ったんだよ。そんなことより聞、痛々しいから冷静になれ」

「そう言うなら千華がどこに居るかの情報を教えて下さいよ。わか

ってるんでしょう?」

天月は今にも飛び出しそうな気持ちを抑えている。

そのため右拳を強く握っているので血が流れていた。

「ここから南西の位置にある九門くもんという森、その地下に入間の施設がある」

「やっぱり人間が絡んでいるんですか」

「止めても聞かねえだろうから止めんが、人間は人体実験のエキスパートだ。狙われてるお前がわざわざそこに行くのがどういうことか、わかってるのか?」

「関係ありませんよそんなこと。仲間を助けるためならね」

「やれやれ。詳しい場所はこのメモに書いてある。学校側には話は通しておくからさっさと行け」

大袈裟に肩を竦め、天月に小さなメモ用紙を手渡す。

メモ用紙の中身を確認したあと、人差し指で空間に“隼”の一字を描く。

契約獣である疾風隼が光とともに現れると瀬津奈の方を見て尋ねた。

「どうする?」

「勿論行くわよつ。連れて行きなさい!」

「けど疾風には二人も乗れないし、ちょっと待っててくれ」

天月は空間に次々と文字を描き並べ、その文字を音読し始めた。

あまをかけひしちしするりやばさひろげはてまでのぼたいくつのなのもと
「天駆飛翔竜、翼広果迄昇、大空名元」

その空間一帯が光に包まれ、現れたのは巨大な西洋の竜。

身体の表面は翠玉すいぎよくの鱗に覆われており、瞳は翠色に輝いている。

地面に降り立てば校舎以上の大きさで、今は翼を羽ばたかせ滞空していた。

口からは長い牙が二本伸びていて、全身に神々しい光を纏っている。

神聖獣であり名をギータと言う。

「契約獣を二体従えてる人間はたまにいるがまさか神聖獣とはな」

「ド、ドラゴン……」

「怖がらなくていいよ。普段は大人しいんだこいつ」

「だ、誰が怖がつてるのよ！ 怖くなんてないんだから、早く乗るわよっ！」

顔が青ざめ、全身が震えている瀬津奈の手を握る。

ギターは乗りやすいように頭を下げ、二人はその上に立った。

「さあ行こうか、ギター」

『主の仰せのままに』

「じゃ、喋った？！」

「ドラゴンは知能が高いからな。それじゃあ柏原先生、行つてきまーす」

「ままま待って、まだ心の準備がつて、きゃあああああー！」

大泣きしながら天月に抱き着く瀬津奈の姿は小さくて可愛く見えた。

二十五話：全てを支配し飲み込む漆黒の太陽（後書き）

裏話その十五

今年最後ということので急いでみました。

もう一作の三話書いてまさかの一週間切り（。。；）

やれば出来るねww

風紀委員長の山吹紫苑は、名前は『紫苑』を使いたいなから始まり、苗字は……覚えてないから即興かな？

メガネクール＋敬語で喋るキャラは中々ありと思ってます（…；）
クインテット
五重奏に共通して言えることですが、出番少ない……。

今後増える予定です。

能力も皆こつてるしね

次の更新はいつだろうか？ 年明けて……はい、未定ですf^_^；

次からバトル展開入っていきます。

まだ先ですが、五重奏最後の一人も二章で登場予定！
クインテット

今後のヒトロクをお楽しみに（#^ ^#）

……あつ、12月26日の時点でユニークアクセスが一万を突破しました！

これからも全力で頑張りますので応援よろしくお願いします！！

二十六話：異様な姿と侵入する者たち

「ふぐううう、ま、まだ着かないの？」

「まだ。それより離れてくれない？」

「べ、別にいいでしょ?!」

二人はギータの頭の上に座り空を飛んでいた。

飛び始めてからまだ数分だが瀬津奈は天月の腕に抱き着いて離れない。

腕に当たる感触については気にしないようにしているがいつまで理性を保てるか。

天月は地上を眺めているが瀬津奈は目を開こうともしない。

そして疾風はギータより低い高度で飛び、九門の森を探している。

「なあ瀬津奈、そろそろ着くと思うから離れてくれよ」

「だ、駄目、怖いよお……」

「怖い？」

「お願いだから。こうしてないと不安なの」

ようやく目を開けたかと思うと、涙を溜めつつ上目遣いでそんなことを言ってきた。

普段とのギャップに天月でも戸惑ってしまう。とはいえ腕に柔らかいものが当たり非常に恥ずかしい。

ここでふと思った疑問を口に出す。

「昔何かあったのか？」

「え？ どうして？」

「異常に怖がるから」

「……ドラゴンに襲われたことがあるの」

天界道に住まう神聖獣は魔獣同様に獣とは比べ物にならない。

光の力を受けて育つと言われ、その知力は人の言葉を理解する程度だ。

見た目も恐ろしいドラゴンに襲われたのなら仕方ないだろう。

「そんなことも知らなくて悪かったな。今からでも疾風に乗るか？」
「別に謝ることないでしょ？ それにあ、あんたがいるから大丈夫よ」

「ん、そうか」

瀬津奈の言葉に天月は顔を赤くする。言った本人も耳まで真っ赤だ。

気まずいので二人とも顔を背けていると疾風が戻ってきた。

見ると下には緑が広がっている。

「ありがとう疾風。ギータ、俺たちを下ろしてくれるか」

『任せよ』

段々と重力が軽くなっていき、二人は空中に浮かんだ。そのままゆっくりと森まで下りていく。

突然のことに瀬津奈は泣き出す。その悲鳴は周囲にこだました。

「う、うわああああんっ！」

「ど、どうしたんだ？！」

「怖いよーっ！ 天月助けてーっ！ もうやだ帰りたいよーっ！」

「大丈夫だから落ち着けてー！」

瀬津奈に抱き着かれたまま天月は無事地面に降り立った。

ギータはまばゆい光とともに天界道へ消えた。

着地しても瀬津奈は泣き止まない。天月は落ち着かせようと頭を撫でていた。

しばらくそうしていると嗚咽は収まった。

「ん、天月……」

「もう大丈夫だった」

「ほ、本当に？」

「安心していいよ」

「そう……って、きゃあああ！」

「今度は何だよ」

自分が抱き着いていることに気づき瀬津奈は大きく飛びのいた。先程までの自分の行動を思い返すと口をぱくぱくと開閉し、目を

回し始めた。

頭に血も昇り混乱してくる。

「グルルルウ！」

「は？」

そのとき、猪のような体型をした全身真っ黒な獣が血走った目で二人を睨んでいた。

今にも突進してきそうな獣を前に天月は溜息を吐いた。

「夜鵒、あんた何してるんだ？」

「……やはり気付いたか」

どこから声が聞こえたかと思えば獣の身体が黒い煙になって消えていき、そこには夜鷺が立っていた。

天月に真意はわからないが、その表情は何故だか不満そうだ。

「もしかして言うの忘れてたこと怒ってるのか？でも来れたんだから許してくれ」

「ちっ……ちっちと行く、ぞ?」

「あの、瀬津奈さん？ 身体から電流が漏れ出してますよ？」

天月も夜鵲も瀬津奈の様子のおかしさに嫌な汗が流れる。

両目は黄色で（焦点が定まっていない）独り言を呟き続けている。二人が若干引いていると瀬津奈が急に笑い出したあと、大声で叫んだ。

「ふふふふふふ、全部全部全部全部全部、消し去る消し去る消し去る消し去る消し去る消し去ってやるううう！」

「うわー！ 瀬津奈が壊れたー！」

「あはははははーっ！」

瀬津奈が大笑いすると電流が迸り周囲の木は焼かれ焦げていく。

勿論天月と夜鶴の二人も例外ではない。

二人の悲鳴と瀬津奈の笑い声が周囲に響き渡る。

瀬津奈が正気を取り戻したとき、辺り一面跡形もなくなっていたのだ。

「う、うつん……」

どこからか聞こえた大きな声で目を覚ました。その場所は何も置かれていない薄暗い部屋だった。

意識が覚醒してようやく自分の手首に手錠をはめられていることに気付いた。

何故部屋に居た筈の自分がこんな所に居るのだろうか。

琴鳴千華のそんな問いに答えるように部屋の扉が開いた。

「おや、起きたのかい？」

「十種宝玉！ やっぱりあなただったのね。早くあたしをここから出して！」

「やれやれ、落ち着きなよ。ここへ連れて来たのは僕じゃない。閨陽火の部下だ」

「閨、陽火？」

「ああ、君は知らないのか。簡単に説明すると閨天月の別人格らしい」

宝玉の説明一つ一つに千華は驚きを隠せなかった。天月の能力の秘密に、天月との性格の違いに。

呆然としている千華を見て宝玉は小さく鼻を鳴らした。

「しかしもう閨天月のことを気にする必要は無いよ。君は僕の物だから」

宝玉は千華の正面に腰を下ろすと手で顎を上に向かせた。顔を近付ければ唇が触れ合いそうだ。

「い、いや、離れてください」

「ふん、生意気だな。どうせ僕の物になるんだから構わないだろ？」
「ふざけないでください！ 私にはあなたよりも大切な仲間が居るのです！」

千華の言葉に顔をしかめたがすぐさま笑顔を張り付け、手を放し立ち上がる。

そして千華の顔を思い切り蹴った。千華はその衝撃で倒れてしま

う。

「っ……」
「君のお仲間三人がここに侵入している。だが僕は全力で彼らを潰す」

「て、天月たちがあなたに負ける訳がない」
身体を起こし強く言い切ると気に入らなかったのか、宝玉は何度も千華を踏み付けた。

しばらくそうしたあと気が済んだのか宝玉は部屋を出ようとする。扉を開け振り返り冷たい目で千華を睨む。

「利口にならないと今すぐ殺すよ。大人しくしておくんだね」
扉が閉まったかと思えばゆっくりと凍り始めた。

自力での脱出は無理だろう。

千華は身体を起こし、涙を堪えながら小さな声で呟いた。

「天月、瀬津奈、東宝……助けて……」

意識を失っていた天月は左目の痛みで目を覚ました。

無意識に左手で目を押さえたが天月の中にある疑問が浮かん

だ。――まさか、近くに居るのか？

疑問に心えるように痛みは増していったがしばらくすると収まった。

もし相対したら、そのとき自分はどうするだろうか。

「決まってる。なあ陽火」

身体を起こして周囲を見回したとき自分の目を疑った。

隣では夜鷺が起きて天月のことを半眼で見ている。その視線は天月のせいだと暗に言っているようだ。

「一応言っとくけどお前のせいだからな」

「ふん。知るか」

「なんでだよっ！」

「ふ、二人とも大丈夫?!」

瀬津奈が慌てた様子で二人の元へ走って来る。どうやら落ち着いたようで、二人は密かに胸を撫で下ろす。

気を取り直し二人は立ち上がった。

「よし、行くか！」

「無駄な時間を食ったな」

「う、ごめん」

地面の崩れた部分から三人は下りると、誰も居ない殺風景な場所だった。

特に何も無いようなので階段を見つけ地下二階へ下りた。

そこには牢屋が幾つも並んでいた。

「中に誰か入ってるな」

「今は先を急ぐぞ」

夜鷺の言葉は最もだと思い階段に向けて進もうとすると突然階段が見えなくなった。

シャッターが下りて階段が遮られたのだ。

そしてそれは前だけでなく、三人が先程使った階段の方もシャッターが下りていた。

その途端三人は身体に違和感を感じた。

「な、何これ、身体が重くなった?」

「多分原因はこれだ」

「あっ」

天月は左腰に差した無刃想を抜いたが刀は変化しなかった。

その様子を見て瀬津奈は今この場所で何が起きているのか理解した。

「シャッターが下りてきてこの階は閉鎖された。あとは癒術で境界を張れば波動を使えないようにすることぐらい出来る」

『相変わらず聡明なことだ』

どこからかまたあの不愉快な声が聞こえてくる。

その声を合図に牢屋の錠が開き、中から白の半袖半ズボンで統一された男女がゆっくりと出て来た。

全員が足枷を引きずっておりその目は怪しく光っている。

『察しの通りその階は波動を使えない。そして君たちの相手は彼らだ』

急に全員の身体が震え始めたかと思えば肉体が異様に変化していく。

足枷は壊れある者は鋭い牙を生やし、またある者は身体が鱗に覆われていた。

その獣のような姿に驚きを隠せない。

「死人か。しかしここまで変化するとは」

「美鶴先輩と同じ？ でも様子がおかしいような」

「獣化憑依とはまた別だな。完全に魂が獣に喰われてる」

『簡単なことだ。彼らは実験に失敗した者たち。そして使い物にならなくなったので獣の死魂を憑依させた』

「……くそ」

人間に対し怒りが沸くものの波動が使えないせいで闘うことの出来ない悔しさが込み上げてくる。

すると一人の男が天月の傍に近づき右腕を振り上げた。反応は一瞬遅れたがそれでも右へ一歩動き攻撃をかわす。振り下ろされた右腕は地面を激しく揺らした。

動きの素早さ、力強さは並ではない。

「ちっ」

夜鷲は一本のナイフを握り振りかぶって投擲した。

投擲する瞬間四本に増えており、全て当たったが男の身体には刺さらず弾かれ、血の一滴も流れない。

『言い忘れていたが彼らの肉体は強化してある。大抵の攻撃では血も流れんよ』

「血が、流れない？」

人間の言葉に何故か瀬津奈は反応したがそれ所ではない。

今の状況は天月にとって限りなく不利だ。

相手は普通の人間を越えた集団で自分は波動を使えない。

「こいつは厳しいな」

「さがってる。俺がやる」

「夜鷲、あんたも幻術は使えないだろ。無理するなよ」

夜鷲の実力を支えているのは幻術だ。武術だけで全員を倒すのは困難だろう。

それは本人もわかっているようだ。

「ならどうするんだ」

「あたしがいるわよ！」

高々と宣言し瀬津奈は一步前が出る。

懷からチャクラを四つ取り出し、闘う準備は万端のようだ。

天月がその後ろ姿を眺めているとちらりと自分の方を振り向いた瀬津奈と目が合う。

その目に迷いは無い。

「いつも闘ってるのはあんたたちばかりだからね。たまにはあたしに任せなさい」

「ん、わかった。任せる」

「なっ、おい」

「大丈夫だ。瀬津奈だって強くなってる」

「よし、行くわよ！」

敵の中心へ向けて瀬津奈は跳んだ。

二十六話：異様な姿と侵入する者たち（後書き）

裏話その十六

二週間も空いてしまいました。

理由は冬休みの宿題と小説を読んでいたことでしょうか？

冬休みの間に10冊読みましたよf^_^；

生徒会長である光波神宮は名前は『神宮』の一発で決まりました。

苗字もそこそこ悩みましたが『光波』が結構合ってる気はしますね

ww

槍のゲイボルグは本文中でも触れてますが神話から。有名ですよ？

今後も神話の武器は出てくる予定です。

因みに今の予定では二章神宮の出番は少ないかもしれませんが……。

その辺りもこれからのヒトロクをよろしくお願いします。（。）

/

二十七話：死して踊る魂と燃える円輪

「頼むわよガルダ」

空中で瀬津奈はチャクラムを四つとも手放す。さらに指の部分が露出したグローブを両手にはめた。

名家系織姫を掴み伸ばすとチャクラムを一系列に並べ、敵の集団目掛けて薙ぎ払う。

おおいたち
「大威断！」

何人かがその一撃で吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。そして空いたスペースに瀬津奈は着地した。

自分の前後、人の居ない一直線上にチャクラムを二つずつ真つすぐ投擲した。

前に投げたチャクラムが一つ止まり、後ろに投げたチャクラムもタイミングを少しずらして止まった。

飛び続けていた二つのチャクラムも前に投げた方が先に止まり、そのすぐあとにもう一つが止まる。

くっりん
「空輪！」

瀬津奈はその場で一回転し糸とチャクラムが円の範囲内に立つ死人全てを切り裂いた。

全員浮き上げられたがすぐ地面に落ちた。

と言っても誰にも出血は無い。

チャクラム四つを手元に引き戻すと近くの敵に向けて駆け出した。一人に対し腹部を重点的に十数発入れてようやく相手は倒れた。

「がああああつ」

「つと」

背後から鋭い牙を剥き出しに噛み付こうとしてくるのを避け後頭部を突いた。

チャクラムを片手に二つずつ装着しメリケンサックの様に用いている。

腕力は低いがそれを速度で補っていた。

しかしこの人数を相手にこのペースで闘っていれば体力が切れるかもしれない。

そんなことを気にする隙も無く、ゴリラの容姿をした腕の太い死人が襲い掛かる。

頭上で両手を組み、ハンマーのように振り下ろした。

瀬津奈はそれを左に動き、振動を避けるため小さく跳びながら右腕で顔を突いた。

その衝撃で反らした頭のこめかみを蹴りで打ち抜く。

相手が倒れると同時に着地した。

「いつつ……！」

蹴ったのは自分なのに身体が硬過ぎて足が壊れそうになる。

痛みを訴える隙も無く、かなりの人数が跳び上がり瀬津奈に向かって落下してくる。

チャクラムを四つとも手放し、糸を掴み一列に並べ、死人の塊を薙ぎ払う。

殆どがその威力に耐え切れず吹き飛ばされ天井に衝突したが、何人かは耐えた。

後方に跳びながら投げたチャクラムは見事命中し顔に減り込む。

それでも出血はせず倒れるだけだ。

瀬津奈は着地したあとしゃがみ込んで息を整えている。

「つて、全然数が減ってない？」

半分以上倒したつもりだったが改めて全体を見渡すと数はあまり変わっていない。

嫌な予想が頭の中に浮かぶ。

「うおう！」

背後から聞こえる吠えるような声に振り向くと先程倒した筈の死人が悠然とそこに立っていた。刃のような爪で瀬津奈の身体を切り裂こうとする。

瀬津奈は左手に握ったチャクラムを横薙ぎに振り爪を根本から折

る。そして跳び上がる勢いを加えた突きで顎を打ち砕いた。

死人の集団は身体を改造され、回復力まで人間を超越しているのだ。

瀬津奈は絶望を感じ始めていた。

「……心配ならお前も行けよ」

「俺が行ったところでどうにも出来ないからな。それよりもなんで俺たちには死人が襲って来ないんだ？」

瀬津奈が死人たちと闘っている喧騒の外で天月と夜鷺は立っていた。

見た目は冷静さを装っているが、天月は拳を握り締め我慢している。

天月の問いに夜鷺は手の上に乗せている蓋の開いた小瓶を示した。中には薄い青色に染められた、透き通った液体が入っている。

そこで初めて嗅いだことも無いような香りが周囲に漂っていることに気付いた。

「酔^{すい}という特殊な薬で、こいつの放つ香りは嗅いだ生物の五感を狂わせる」

「どういうことだ？」

「つまり香りの発信源を視覚、嗅覚、聴覚、味覚、触覚で認識出来なくなる」

「よくわからんが、俺たちは今誰にも気付かれてないってことだな？」

天月の言葉に夜鷺は黙って頷いた。

最初からわかりやすく説明してくれればとは思うが、夜鷺の性格上仕方ない。

しかしこの薬を使う意図が天月にはさっぱり見えなかった。

「今の内にここを突破する方法を説明する」

「あー、なるほどね。って説明？」

天月が納得していると夜鷺は死人たちの向こう、地下三階へ繋がる階段への道を塞いでいるシャッターを指差した。

「この手の結界は対象の存在する空間を閉鎖してこそ完成する。だからあれを壊せば」

「本当あんたは頭いいな」

「貴重な薬だからもう蓋を締めるぞ。お前は神無月に今の話を伝えて傍で盾になれ」

「誰が盾になんかなるか！ まあ動いていいならありがたい」

「ふん。えらく待ち侘びていたようだな」

夜鷺が小瓶に蓋をすると死人たちの何人かはこちらに振り向いた。それを気にすることなく天月は走り出すと跳躍し、死人の一人の頭を踏んでさらに大きく跳んだ。

天井に両手を着き、見下ろせば瀬津奈へ突進しようとしている死人の姿が。

「させるか！」

両肘を一気に伸ばし、重力に速度を加え死人へ向けて落下した。死人の頭は踏み潰されコンクリートの床に沈んだ。

「駄目、切りが無い……」

油断していた瀬津奈は正面から突進してくる死人の動きに反応出来なかった。

気付いたときには死人の姿は消えていた。

正確に言うと上から飛来してきた人物に押し潰されたのである。

「やっぱ任せっ切りは悪いんで」

「て、天月っ」

頭を踏んでいた足を退けるとシャッターを指差しこう言った。

「夜鷺曰くこの階は閉鎖されているから結界が張られていて、シャッターを壊せば結界も崩れるらしい」

「その役をあたしが？」

「今あれを壊せるとしたら瀬津奈だけだ。俺たち二人は瀬津奈を援護する」

二人が話している間も敵は攻撃しようとしていたが、死角から夜鷺のナイフが飛んできて思うように動けない。

天月の言葉に頷くと瀬津奈はシャッターに向けて走り出す。

当然死人は立ち塞がる。しかし天月が瀬津奈の前を走りつつ敵を蹴り上げ、蹴り倒し、蹴り飛ばして道を作る。

「意外と刀無しでも闘えるのね」

「もし刀が使えない状況になっても闘えるようにって師匠から教えられたからな」

「それなら最初からあんたも闘えばそれでよかったんじゃないの？」

「こんな集団と闘ってたら先に俺の足がいかれるって。シャッター壊した方が早い」

瀬津奈の背後から攻撃してくる敵には夜鷺がナイフを投げて動きを止める。

シャッターまであと少しというところで全身が鱗に覆われたトカゲのような死人が奇妙に呻きながら道を塞ぐ。

先手必勝とばかりに天月は死人の腹に膝蹴りを入れたが微動だにせず、膝の骨からミシミシと音がした。

「いつてー!!」

「情けないな閨」

最初からその場に居たかのように自然に現れた夜鷺は左足を前に態勢を低くし、重心を右足に乗せて右腕を後ろに引く。

その右手に握られているのは夜鷺の魔宝具である黒刀黒紅闇夜幻。

黒刀を前に突き出すと目の前の死人は他の死人を巻き込みながら吹き飛ぶ。

普通の人間には突きの回数は一回に見えるだろうが、実際には三回突きを放っている。

かすりでもすれば幻術をかけられる夜鶴には珍しく威力の高い技だ。

「黒刺突」

「ありがとう夜鶴。今ので道が開いた」

道が開いたのを確認すると瀬津奈は一気にシャッターまで走り出した。

その手前で止まるとチャクラムを握り直しゆっくりと回転し始め徐々に速度を上げる。

シャッターとの距離が近いのでチャクラムは何十回も擦り付けられ、動摩擦による摩擦熱が発生した。

「火炎独楽嵐！」

勢いそのままに炎を纏ったチャクラムの一撃を打ち込む。

チャクラムから乗り移った炎の波はシャッターを溶かし、その向こうの床や壁まで燃やしていた。

それを見て瀬津奈は冷や汗を流し引き攣った笑みを浮かべた。

「うん、やり過ぎだな」

「あ、あはは、まさかここまでとはね」

ともあれシャッターが壊れたことにより三人とも身体が軽くなつたような感じがする。

死人たちも体内の波動が暴走しているのか全員が完全な獣に変化していく。

その内の一人が天月に襲い掛かるが天月は焦らず右手で左腰に差した刀の柄を握り、鞘に滑らせ振り抜いた。

勿論放出された波動が刃となっている。

「これでようやく先に進める」

「ぐ、があっ」

どれだけ肉体が頑丈であっても、どれだけ回復力が高かろうと波動を斬ってしまえば関係ない。

天月は左手で右腰に差した刀の柄を握りながら駆け出し、一回の抜刀術で三人斬った。

天月が闘っているのは別の場所でも獣と化した死人たちが次々と口から泡を吹いたり頭を抱えたりしていた。

「ようやく墮とせる」

その中心には黒刀を右手に握り、左手にはナイフを四本握っている夜鷺が立っていた。

投げられたナイフは的確に一人一本ずつ身体をかすめ、幻術に墮とす。

自分の周囲の敵を倒し刀を鞘に納めた天月が夜鷺に声をかけた。

「さて夜鷺、そろそろ決めるぞ」

「お前に指図されなくてもな」

天月は右手で左腰に差した刀を振り抜き敵を斬ると、続けて右腰に差した刀を左手で抜刀し敵を斬った。

右手に握った刀を振り上げ、左手に握る刀で相手を突き、さらに右手で握った刀で相手を斬り捨てた。

——速真迅剣三ノ斬型、遊戯武曲。

獣と化した死人を斬っていく天月に負けじと夜鷺は妖しく舞い続ける。

一見でたらのめようだが、実際には鮮やかな太刀筋が死人たちを倒していく。

舞いながら空いた手でナイフを投擲し、距離を取っている死人たちに攻撃する。

——黒羽妖。
くろはねあやし

「あたしの苦労って何だったの？」

瀬津奈が呟きたくなるほど二人は圧倒的にそして瞬く間に敵の数を減らしていく。

回復も間に合わない程で、既に立っている死人はごく僅かだ。

「これで！」

「終わりだ」

二人が同時に最後の二体である死人を倒し全滅させた。しかし立ち上がるうとしている者も少なくなき、急がなければならない。

さらに問題は残っている。

「さて、あの炎はどうしようか」

「あたし青色の瞳術は使えないわよ？　悪いんだけど」

「夜鷗は？」

「……青色の瞳術は使えんが方法はある」

右目が茶色に変わり、右手を前に突き出し地面と水平に動かす。

その軌跡は文字となり淡い茶色に光ったあと砂に変化し、炎を揉み消していく。

床や壁は黒焦げだが壊れてはいなかった。

「なるほどね。まあこれで行けるな」

天月と瀬津奈は階段を下り始めた。

しかし夜鷗は茶色の瞳術で石の壁を創り死人たちが下りられないようにした。

今は倒れている死人たちが起きて追って来る可能性もあるからだ。

「うん、アフターケアも万全だな」

「……ふざけてると刺すぞ」

「叩いていい？」

「じよ、冗談ですよ？」

階段を下りた地下三階、部屋の中には一人の男が立っていた。

二十七話：死して踊る魂と燃える円輪（後書き）

裏話その十七

ちよつと急いでみました。

1月中にあと二話更新目標です。

もう一作の六話目も書きたいけど（*―*）

そもそも生徒会は『棚』とか『椅子』とかそういう家関係の単語を入れようと思い（呆気なく挫折）その名残が屋敷祈羽副会長なのです。

名前は他と被らないようにと考えた結果この名前に。中々あつてると思つてますww

性格も深くは構想してませんが生徒会全員お気に入り（＃＾＾＃）ちなみに武具の『扇射』は「何となく祈羽のイメージは弓矢だな。

弓矢と言えば那須与一？ 那須与一と言えば扇の的を射る……扇射だ！」という流れがあつたとかなかったとか（…；）

次の更新も一週間切れるよう頑張ります（ノ><）ノ
久しぶりに登場の二人が闘います！

二十八話：狂い壊れる男と世界と鎖と

地下三階の部屋の中央、そこには白の半袖長ズボンの上に全身を覆い被さる程大きな黒いジャンパーを着た男が立っていた。

俯いたままこちらを見ようとしませんが、くぐもった小さい声で何かを呟いている。

「消せ盗む苅る刺す斬れ従え食え寝る埋める絶える千切れ渴く止まれ噛む蹴る射れ惑わせ軋め憑け壊す負ける打つ押す結ぶ割る燃やせ墮とせ吸え燻れ裂く滅ぼす崇める荒らす侵せ終われ狙う削る切れ狂え犯す噴く穿つ締まれ煙れ砕く霞む叩く呪う枯らせ殺せ潰せ破れ狩る撃て腐れ圧す喰らえ絞れ変わる閉ざせ熱す突け弾け失う塞げ呑む崩せ断つ貫け殴れ縛る落とせ」

言い終わると同時に男は天月たちに突進してきた。走りながら振りかぶっている左腕は袖で隠れて見えないが、中で鈍く光った気がする。

天月は前に出て刀を抜き攻撃に備える。

袖の中から伸びてきた左腕は金属と化しており、指は鋭く尖っていた。

「っ?!」

刀を十字に交差させ、その交差させた点で腕を止めた。その衝撃で飛ばされそうになるも踏ん張ることなどでなんとか耐えた。

二刀で腕を払うと男は弾かれるように後ろへ跳んだ。

改めて顔を見るとどこを見ているのかわからない虚ろな目、明らかに手入れのされていない髪と容姿からも異変さが漂っている。

「なーんかやばそうだな。瀬津奈は手を出すなよ」

「は？　なんでよ」

「さっきの闘いで疲れてるだろ。ここは俺と夜鷗に任せて身体を休めとけ」

「む……」

不満そうではあるが疲れているのは事実のようで、大人しく下がった。そんな会話をしている間に男は天月の傍に立っており、左腕を振り上げていた。

すぐさま振り下ろされたが天月は時計回りに回転しながら左に避け、右手に握った刀で首を狙う。

男は右手を天月に向けた。かと思うと突風に吹き飛ばされてしまう。

「うわっ」

突然の強風に耐え切れず身体は壁に向けて一直線に飛んでいく。壁に衝突することを覚悟したが、床から砂が盛り上がりそれに受け止められ助かった。

正確に言くと埋もれて、だが。

砂の山の傍では右目が茶色に変わり、手の平を地面に付いた夜鷺がしゃがんでいた。

「ぶはっ、ありがとう夜鷺、ってまさか抜けない？　ちよつと夜鷺、手を貸してくれ」

「不様だな。自力で出ろ」

「え、ひどくね？」

砂から足が抜けなくて夜鷺に助けを求めたが、鼻で笑われた。男が俯いて動かないのを確認し、夜鷺は立ち上がり冷静に分析を開始する。

「あの男は目の色を変えずに瞳術を使えるようだな。腕が金属や風に変化した」

「しかし瞳術で自分の身体を変化させるなんて出来ないだろ。せいぜい出来るのは形成した物質を纏うくらいだ。第一目の色を変えないと瞳術は使えないし」

「それこそあの男が実験体として得た力みたいだな」

「はー、気分が悪い」

右目が茶色のままの夜鷺は右手を親指、人差し指、中指、薬指、小指と順に動かした。

コンクリートの床はゆつくりと動き始め、砂の山よりも高い壁ができた。夜鷺はコンクリートの壁を叩き硬度を確認する。満足のいったようだ。

「生徒会の女に嵌められた術だが自分で使ってみると中々難しいな」
「女って、先輩じゃないの？」

その言葉への返答はなかったが、夜鷺は天月の方を見た。

「俺があいつの注意を引き付けておく。お前は壁の上から跳んであいつを斬れ」

「わかった、わかったから助けてくれ」

「よし、行くぞ」

「だから抜けれないって言ってるだろ！」

天月の叫びを聞くこともなく夜鷺は壁の向こうに出て行つた。

もしかしたら冗談に聞こえたのかもしれないが、動けば動く程砂に埋まっていく。困っていると瀬津奈が自分を見て溜息を吐いていることに気付いた。

「あんた何やってんの？」

「いや、遊んでる訳じゃないです」

「説得力が皆無ね」

「わかってるから助けて」

瀬津奈は再度溜息を吐くと天月の腕を掴み引つ張り出した。

砂のから抜け出すと天月は壁を見てから砂の山を見てこう言った。
「結構高いなこれ。ならこうするか」

膝の屈伸を使い跳んだ天月は砂の山を蹴って壁に跳び移るつもりだった。

ただしそれは砂の山に足がはまり達成出来なかったが。

腕の自由が利く内に刀で砂を斬り抜け出した。着地して瀬津奈に哀れまれてしまう。

「凄く残念ね」

「やかましい！」

自分の脚力だけで壁の上に跳び乗ると夜鷺と男が闘っているのが

見える。黒刀を幻術で大きな獣の頭に変化させ、男を攻め続けている。

天月は一步足を前に出し、落下する前に壁を蹴って弾丸のように跳んでいく。

「伏せる夜鵒あ！」

天月の叫び声に反応し夜鵒は身を屈める。

男もそれで自分の方へかなりの速さで接近して来る天月に気付いたが、既に遅かった。

右手で左腰に差した刀の柄を握り、左手で右腰に差した刀の柄を握る。

——速真迅剣四ノ斬型。

右手に握った刀を左から右へ地面と水平に振り抜き、左手に握った刀を下から上へ地面と垂直に振り抜いた。

——十字閃光。じゅうじせんこう

勢いを止めれず地面を滑るようにしてようやく止まった。刀を納め、振り返り男を見ると、膝を折り天井を仰ぎ見ながら何かを呟いていた。

「出ない出ない出ない血が出ない。なんでなんでなんでなんでなんだ？」

首を半回転させ天月を見る。形容することが出来ないくらいに嫌な目で。

あまりの不気味さに天月と夜鵒、そして二人と離れている瀬津奈でさえ悪寒がする。立ち上がり首を一気に元へ戻すとゴキン、と気味の悪い音がした。

「おかしいのかお前は？ どうしてお前は斬れる刀を使わない？ どうしてオレは斬られたのに身体から血が出ない？」

「お、俺は仲間を護るために闘ってるんだ」

雰囲気は吞まれそうになるが、ここで吞まれたら終わりだ。そう思い天月は男の目を強く見返す。

「護るう？ 闘いに命を懸けないだと？ ふざけるなあ！」

男の怒号を合図にその肉体は炎と化した。
身体が発火したのではなく、肉体そのものが炎に変わったのだ。

地下七階には実験に耐えた者たちに与えられる部屋が幾つかある。
現在宝玉は勿論、それ以外に三つ部屋が埋まっている。その中の一室、宝玉の部屋には二人の人物が鬨いに備え休んでいた。

一人は十種宝玉、もう一人は銀色の長い髪に碧い瞳、フリルを多くあしらった胸元の大きな赤いリボンが目立つ、黒を基調としたドレスに身を包んでいた。

「ねー、ほーぎょくー。あの変態と仮面はなんで居ないの？」

「侵入者の討伐に出向いているよ。今は八尾万はちのおよろずが鬨っているけど君も地下四階で待っておくべきだよ、クープ」

クープと呼ばれた少女は嘲笑するとソファの上で飛び跳ねた。全く急ぐそぶりを見せないが、宝玉もそれ以上しつこくは言わなかった。

「大体クープの出番があること自体ありえないのよね。ここで役に立たなくてどうするのかしら。キャハハハハ」

「あまり品の無い笑い方をするなよ」

人形と見間違えう程の容貌だが、その言動からは味方への気遣いは見えない。

飛び跳ねたことでずれた力チューシャを直すとクープはソファから下りた。立つと本当に小さく椅子に座っている宝玉と背丈は殆ど変わらなかった。

「あの変態じゃ無理だろうし、そろそろ行ってくるわね。お土産に首を揃えて持って来るから楽しみにしててね。キャハハハハ」

「ああ、いつてらっしい」

クープが一步前に進むとその姿は消えた。
部屋には特徴的な幼く高い笑い声が響いている気がした。

「死をもたらす力、これがオレの能力“マッドマン 狂い狂う男”だ」

肉体は完全な炎に変わり、目と口があつた部分には黒い穴が空いている。服は焼け焦げて床に落ちた。

天月は刀の柄を握る。不気味な能力だがここで引く訳にはいいい。

夜鷲はナイフを一本取り出すと頭目掛けて投擲した。投げた瞬間四本に増えたが、そのどれもが頭をすり抜け炎を纏いながら壁に刺さった。

「そんな攻撃無意味。が……さっきのお前の技で波動が一割は無くなった」

「い、一割だと？」

抜刀術を磨き鍛えた天月にとって十字閃光は速真迅剣の型の中では得意な型だが、一割しか波動を斬れていない。

嘘かもしれないがその言葉に驚きを隠せなかった。舌打ちが聞こえて音のした方を見ると、夜鷲が黒刀の切っ先を向けていた。

「動揺するな。闘いの最中隙を見せれば真っ先に命を落とすぞ」

「あー、そうだな」

瀬津奈の方を見ると心配そうな目で自分のことを見ていた。心配ないという意味も込めて天月は笑顔を作ると刀を二本とも抜き構える。

「行くぞ！」

天月は駆け出すと左手の刀を万目掛けて振り下ろす。万は一步下がって避けるが、天月は左手を返し両手の刀で挟むように斬った。

身を拭ったことで左肩への軽傷で済んだ。

「浅いか」

「……ちっ」

目の前から万の姿が消える。後ろから気配を感じて振り返ったときには既に万の腕が顔に迫ってきていた。

腕と顔の間にギリギリで刀を滑り込ませるが、威力に負け弾かれた。右腕に炎が移るも無刃想で払い炎を吸収する。制服の上着の一部が焦げてしまった。

しかしそれよりも重要なことがある。

「くっ、変わるのは炎だけじゃないのか？」

万の両脚は雷に変わっている。雷による速度で背後に回ったのだ。常人なら雷の速度で動いたりすれば身体が砕け散るが、肉体を持たなければ耐えられるのだろう。

「当然だ。“マシトマン 狂い狂う男”の能力は炎に、水に、土に、風に、草木に、雷に、氷に、金属に、煙に変化可能だ」

「……厄介だな」

「あんたは援護に回ってくれ夜鵄。俺の無刃想ならこいつに届く」
「仕方がない、か」

夜鵄が納得したのを確認し天月は二本の刀で突きを繰り返す。両脚が雷の方には避けることも背後を取ることも簡単だった。

今度こそ仕留めるために腕を振りかぶると頭上には獣の爪のような黒い物体が。それは夜鵄の黒刀が幻術によって変化したものだが万にはわからなかった。

「邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔だ」

全身が炎から風に変わり黒い穴三つでしか居場所を確認出来ない。振り下ろされた獣の爪をすり抜けると風そのものとなり空中に浮かび上がる。

ジグザグと曲がりながら天月に接近し、両手を先端の尖った金属に変えて貫く。

しかし天月の身体はすぐさま霧散し、万の背中には鋭い痛みが走

る。

「霧霞」

「面倒だ面倒だ面倒だ面倒過ぎる」

身体の輪郭が土と石の入り混じった実体のあるものに変わり、右肩から下が紫色の煙に変化している。さらに身体の一部を風に変えてこの部屋を毒の煙で充満させるつもりだった。

予定外の闖入者さえ来なければ。

「なんだ？」

天井には亀裂が走りそれが広がり続け最後には壊れてしまった。コンクリートの塊とともに鎖が集まり形成された巨大な金鎚が降ってきた。

万は身体を水に変化させたが、押し潰されて周囲に飛沫が飛んだ。
「鎖って、まさか」

「面白そうなことになってんじゃないか」

「鍵錠先輩！」

鎖が消滅してようやく五重奏クインテットの一人である鍵錠楔の姿が確認出来た。

しかし増援はそれだけではなかった。

「遅くなって申し訳ありません」

「山吹先輩まで、どうしてここに？」

声に反応して振り返ると階段から下りてきたのは五重奏クインテットの一角を担う風紀委員長、山吹紫苑。

考えもしなかった二人の登場に天月たちは呆然とする。中指の腹で眼鏡を押し上げると微笑を浮かべて説明し始めた。

「生徒会長から頼まれましてね。ここは僕と鍵錠君に任せて早く行ってください」

「で、ですが」

「少し前に着いて君たちの闘いを監察し、彼の能力は見極めましたから」

さあ、早く、と促されて三人は階段に向けて走り出す。

その後ろ姿を見送ってから水滴が一箇所に集まり、身体の輪郭が形成された万を一瞥する。間近で見てもやはり人知を越えた有り得ない存在だ。

その得体も知れぬ存在と闘うことに不安を覚えている紫苑とは対照的に、楔は好戦的な目をしていた。

「さあ、始めようぜ」

「やれやれ、元気ですね」

「……潰す潰す潰す潰す原形すら残さない」

二十八話：狂い壊れる男と世界と鎖と（後書き）

裏話その十八

どうも、改名しました二百野速斗です。
最近アクセス数が伸びません（：|；）
感想も来ませんし……。

今回は生徒会メンバーの一人、御堂真珠について。

名前は閃いた感じですかね（…；）

性格も即興。でもこういうキャラはお気に入りww

武具の『ジュウユーズ』は本文中でも触れた通り神話の剣です。

ちなみに模造品レプリカを造ったのはバルカンという隠れ設定あり。

生徒会は二章で出番があるか微妙ですが……。

皆魅力的だからもっと登場させたいですし、番外編でも描こうかな？

280

今回はいつもより長くなりました（万の台詞を抜いたらいつもと大して変わりませんが）。

でも自分の考えてたベストな所ですので。

次の更新は一月末予定（# ^ ^ #）

二十九話：弱き牙は強き肉を食らう

楔は両目を金色に変えて右手を前に突き出す。現れた鎖は腕に巻き付き、真つすぐに伸びて万を突き刺した。水と化した身体を貫き辺りに飛沫が飛び散る。

床に落ちた水滴は植物に変わり、異常な速度で育ち人間の輪郭を取った植物が何体も完成した。頭の上には牙のように棘の並んだ口を開閉させている花がある。

植物が身体を反らし頭を振ると首が伸び、口を大きく開いた花々が楔に襲い掛かる。

楔は両手の人差し指を立てて右手は左下の方向へ、左手は右下の方向へ垂直に交わるよう動かす。

「鎖の防壁」

鎖が幾重にも交わりドーム状に楔を囲う。植物は鎖に頭をぶつけ、花は鎖を食い破ろうとしているが楔がただそれを待つ筈もない。

防壁の隙間から鎖が伸びて植物を貫き潰していく。楔が手を上げると防壁となっていた鎖が手の上に集まり先端は細く鋭い、段々と太く巻かれた槍が創られる。

「くらいな！」

腕を振り下ろすと回転を加えられた槍は人間の輪郭を取った植物目掛けて飛んでいき、一体残らずその餌食となった。

ばらばらに裂かれた植物は一箇所に集まると再び人間の輪郭を取って立ち上がった。次いで植物が紫の煙に変わる。

しかし煙と化した万の眼前に拳大の黒い球体が現れ、拡大し万を飲み込む。楔はその様子を見て溜息を吐いた。

「風紀委員長さんよお、こいつは俺が闘ってるんだから邪魔は止めてくれねえか？」

「邪魔とは失礼ですね。第一ここであまり時間を食っている暇はありませんよ」

紫苑は手の甲を下にして腕を伸ばし、掌の上には黒い拳大の球体が浮かんでいる。

「これでどうでしょう。絶対支配空間^{ぜったいしはいくうかん}、世界の本質」

球体の内部には別の世界が創られており、内部の人間を精神的に追い込む。以前学校の風紀を乱した人間に使い再起不能寸前まで追い込んでしまったことがある。

別段これで万を倒せると思ってないし、時間を稼いで作戦を練ろうと考えていた。

だがその目論見は早くも崩れる。

「くだらないな」

「なっ?!」

紫苑は数分もつと予想していたのに僅か数秒で球体は砕け、全身を氷と化した万は外気に触れた。

さすがに自分の瞳術がここまで効かないと悔しさが込み上げてくる。だが楔には関係なく、むしろやる気が増したようだ。

「楽しくなってくる、ぜ!」

鎖の束を両手に握ると身体を左向きに捻って右足を踏み込み、鎖の束を振るう。避けようとしなかった万の身体は細かく砕け散った。

氷の破片が鎖に付着し、それが鎖全体に拡がっていく。楔は手を離し瞳術を発動、鎖はまるで生きているかのように動き丸まって床に落ちた。

万の立っていた場所に散らばっている氷の破片は溶けて水になり、それが動いて人の輪郭を取ると今度は金属に変わった。

「次から次へと忙しい奴だな」

「貴様ごときでは話にならんがな」

「ああ?」

風と化した両脚で目の前に移動すると、指先を尖らせ楔を貫こうとした。

幾本か右腕に巻き付いていた鎖の本数を更に増やし盾の代わりに

なつて万の攻撃を防いだ。万の全身は金属から風に変わり天井付近まで浮かんだ。

楔は追撃しようとしたが鎖の異変に気付き腕への巻き付きを緩め床に落とした。よく見ると鎖にはゆっくりと紫色が侵食している。

「紫色の毒か……指の先端だけを変えていたのか？」

「段々追い込まれてきましたね」

紫苑は思ったことを述べただけなのだが楔にはその言葉が気に入らなかったようだ。

不満を全開にして睨まれていることに気付くと紫苑は苦笑しながら眼鏡を中指の腹で押し上げた。

「残念ながら事実ですよ。今も押されてますし彼の波動の量は桁が違う。長引けば長引く程君の方が不利です」

「ならどうするんだよ？」

「もう少し時間を稼いでください。出来る限り波動の消費量を抑えて」

「あー、面倒なこつた」

そう言うつと楔は右手の人差し指で“戌”の文字を描く。文字が光り出し鎖を身体中に巻き付けた目付きの悪い大型犬が現れる。

身体を炎に変えて着地した万目掛けて楔は両腕に巻き付いた鎖を相手の逃げ道を塞ぐために上下左右様々な方向へ伸ばす。

鎖は万の身体を縛るが炎の熱によって熔け始める。それでも一瞬動きを止められた。

その隙に大きく開いた鎖縛の口から先端に小型の錨が付いた鎖が飛び出して万の身体を貫き、鎖は角度を上げ錨が天井にぶつかり減り込む。その勢いに引つ張られ万も宙に浮いた。

しかし鎖は既に熔け始めている。

「忘れられた罌、それからぶつ飛ばせ、螺旋鉄槍！」

鎖は万の身体に触れていない、熔けていない部分も全て万の身体に巻き付いた。勿論炎の熱には敵わない。

楔は万の真下に回ると右腕を下から上にゆっくり動かし金色の瞳

術を発動する。先端は細く鋭く、肘に向かって段々と太くなる円錐状の槍を纏う。

力を込めるように右腕を引き数秒制止したあと、万目掛けて突き上げる。

鉄槍は天を貫くように飛翔し、万の身体に巻き付く鎖ごと打ち上げ天井を突き破った。

「鎖縛！ 鋭利だ！」

短く吠えた鎖縛は自分の身体に巻き付いている斬り裂く鎖、鋭利を伸ばし万に追撃を加える。

鎖縛は鋭利を切り離し錨付きの鎖を口の中に引き戻すと、万が――熔けて原型を留めていない鎖が身体中に付着している――床に落ちてきたが、何ごとも無かったかのように立ち上がる。

その様子を見て楔は息を荒くしながら舌打ちをした。

本当に不満があるのは自分の方なのに。そう思ったが言葉にはせず、代わりに紫苑は溜息を一つ吐いた。

「僕の言葉は聞こえてなかったようですね。途中で波動が切れても知りませんから」

「その言い方、準備は出来たみたいだな」

「あなたのお陰ですよ。それでは。絶対支配空間、天の邪鬼^{あまのじゃく}」

紫苑が手の甲を下にして左腕を伸ばすと掌の上に白色の球体が浮かんでいる。球体を通して向こう側が見えるくらい透明で、注視しなければ気付かぬ程微かにしか色は付いてない。

それはゆつくりと膨張し始め、紫苑本人や近くに居た楔と少し離れた万の身体をすり抜けその拡がりには部屋全体にまで行き渡る。

球体が身体をすり抜けた瞬間紫苑と楔は身体が軽く、万は身体が重くなるのを感じた。

「貴様、一体何をした？」

「この部屋に居る三人の力関係を逆転させただけです。今の力関係は僕、鍵錠君、あなた順番です」

「俺の方が弱いと判断されてるのは気に入らねえな」

「雑魚が雑魚が雑魚が雑魚が口を開くな」

全身を水と化し、水の奔流が紫苑に向かって押し寄せる。紫苑は左目を紫色に変え、左手の人差し指でハの字を描く。

「水雲^{みずぐも}」

紫苑の目の前にぽっかりと浮かぶ小さな白い雲は水の奔流を吸収して大きくなる。

一気に収縮した雲は水を吹き出し、万の攻撃とは比にならない程の激流が襲い掛かる。

万は自分の攻撃が受け止められたこと、返されたことに驚いたが身体を水から氷に変え激流を凍らせようとする。

一部を凍らせることは出来たが能力が思うように発動せず、激流に飲まれてしまう。

「ゲホッ、ゴホッ」

「まだ休憩には早いぜ！」

右腕に纏った螺旋鉄槍を頭に振り下ろす。紫苑はまた身体が碎けダメージを受け流すと思っていたが、氷にヒビが入るだけだった。

呻きながら頭を押さえようめいている万が手で押さええている部分からは赤黒い血が滲んでいる。

「ふむ、そういうことですか」

何かがわかったように紫苑は呟いた。力関係が逆転しても攻撃が効かないようならお手上げだった。しかし相手も所詮同じ人間なのだ。

楔が右腕を引き、突いたときには万の姿は消えた。床に視線を落とすと雷が落ちたように一部が焦げている。

「身体が変化しているだけで実体が無くなる訳ではない。力の差があり過ぎて攻撃が効かなかったのですか」

「隙だらけだ——！」

全身を雷と化した身体で紫苑の背後に回り両の腕を金属に、指の先端を毒に変えて貫くつもりだった。

紫苑の背後で鎖縛が口を開いて構えてさえいなければ。

先端に付いた小さな錨は万の鳩尾に当たり鎖がそのまま伸びて壁に衝突する。身体は雷だが骨の軋む音は聞こえ、口の位置に空いている黒い穴からは血が流れた。

「僕は守護術だけで闘える実力はありませんから。経験則で相手の動きを読み、策を練り自分よりも強い敵を倒す。それが風紀委員長である僕の闘い方です」

「この、くそがあああああ！」

「それじゃあ終わりといこうぜ」

楔は左手の人差し指で右手の甲に小さく円を描き両手を組む。楔の手に鎖が集まり、楔の身長くらいの金鎚が形成された。

身体を左向きに回転させ振りかぶる。

錨付きの鎖は鎖縛の口の中に戻った。「破碎鎚^{はかいつち}」

右足を一步前に踏み込み渾身の一撃を叩き込む。骨の砕ける音が辺りに響き、壁には亀裂が走る。

瞳術を解き鎖が消えると全身から血を流している万が膝から崩れた。

勝敗が決したことで絶対支配空間は解除される。その途端楔の身体が悲鳴を上げた。

「いつ?! か、身体が…… どういうことだ山吹…… っておい?」

痛む身体を動かし紫苑の方に身体を向けると四つん這いになった紫苑が苦しそうに痛みを堪えている。

「ぐ、うああああ! はあ、はあ…… 自分の限界以上の動きをしていたんです、解除すればその反動は来ますよ。それがこの術のリスク…… がはあっ!」

「お前それ大丈夫なのか?」

自分と比べて苦しみ方が尋常じゃない。顔は青ざめ全身から発汗し、小刻みに震えている。

「っ、もう闘うことは無理ですね。三人の中で僕は守護術の総合能力が低過ぎた」

紫苑は己の身体に鞭を打ち立ち上がる。歩く程度ならなんとか出

来そうだ。

どうみても休んでいた方がいいが、本人の意志で動くのなら楔は止めない。

「三人を追いましょう。“彼女”ももうすぐ来るでしょうし」

「あー、本当にあいつ来るのかよ？」

楔は頭を掻き明らかに嫌そうな顔をした。偉そうなことを言っているが楔も限界は近いので援軍は正直ありがたい。

「来てもらわないと困りますよ。クインテット五重奏最後の一人として」

「その前にこいつ縛っとくぞ。捕縛の鎖」

楔は倒れている万を見下ろし掌を前に突き出した。現れた鎖は万を縛る。もし起きたとしてもこれでは動けない。

「それでは行きましょうか」

「へーいよ」

「まあ。わたくし私を待たずに先へ行こうとするなんて、どういふことでしょう？」

およそ半年ぶりに聞いた声に二人が振り向くと予想通りの少女がそこに立っていた。

「お久しぶりです」

「ちっ、出やがったな珍獣使い」

クインテット五重奏最後の一人咲舞凰妃。さくまおうひ

呼称『クランプリンセス獣姫』。

二十九話：弱き牙は強き肉を食らう（後書き）

裏話その十九

ぎりぎり1月更新……結構厳しかったです。
少し書き方を変えましたがどうだったでしょう？

今回は明るい忍者の美鶴優恋。

元キャラはいますが誰もわからないので止めておきます。僕の過去作品のキャラなんでf^_^；

優恋は生徒会の盛り上げ役として明るくおバカです。バトルパートではしっかり忍者ですがww
名前は少しとキャラと合わないかと思いましたがギャップで逆にあり？

いよいよ五重奏最後の一人が（名前だけ）登場しました！
クインテット

活躍は次の次かな？

もうしばらくバトルは続きます（#^_^#）

連載開始から一年まで二ヶ月を切りました。記念に番外編を書こうと画策中。

番外編の読みたいキャラがいればご報告ください（ノ><）ノ

三十話：次元を旅し鎌を振る幼き少女

階段を下りた先の地下四階には誰も見当たらなかった。隠れているという訳でもなさそうで、完全に無人の部屋だ。

「誰も居ない？」

「居ないならさっさと行こうぜ」

そう言っただけで天月が部屋に一歩足を踏み入れると瀬津奈と夜鷗の視界を何かが遮った。次いで聞こえる金属音によりその何かが天月を攻撃したとわかった。

どこから現れたのかわからないその少女は甲高い笑い声を上げて、自分の身の丈を遙かに越える大鎌を天月目掛けて振り下ろしていた。天月は最初からそれを予測していたのか、振り返って左腰に差した刀を抜き大鎌を受け止めた。刀を押し返すと少女の姿は消え、背後から人を馬鹿にしたような笑い声が聞こえてくる。

「キャハハハハ！ おっしーい！ もう少し気付くのが遅かったら首をはねれたのに」

「やっぱり罠だったか」

少女は地面につきそうなくらい長く艶やかな銀髪を払いながら碧い瞳を細めて笑っていた。フリルが多く幼い印象を持たせる黒のドレス、胸元には赤色で大きなリボンが目立っている。

頭のカチューシャを付け直すと、漆黒の長柄に一枚刃の大鎌を再び構えた。

「私の名前はクープ。綺麗に首をはねたいから動かないでね。キャハハハハ」

「ガキが、今すぐ堕とすぞ」

瀬津奈は黒刀の柄を握る夜鷗の一步前に出て制止する。夜鷗が止まったのを見て懷からチャクラムを四つ取り出した。

「天月、東宝。あんたたち先に行つて」

「一人で闘う気か？」

「あんたは女の子相手じゃ戦えないでしょ。大体千華は誘拐されているのよ？ 早く助けに行きなさい」

彼女の目には少しだけ焦りの色が浮かんでいた。友達が誘拐されて気が気でないのだろう。天月はその意志を汲み一度頷くとクープの横を通り過ぎ夜鶯と二人で階段の方へ駆け出す。

「キャハハハハ！ い、か、せ、な、い」

見逃すのかと思ったがまばたきをする間もなくクープの姿は消え、天月の傍に突然現れて大鎌を振りかぶっていた。

大鎌が天月の首をはねる。と思いきや無刃想を抜いて防御の構えを取った天月よりも早く瀬津奈が大鎌の軌道に入りチャクラムで防いでいた。

「キャハ？」

「さっさと行きなさい、よ！」

チャクラムで大鎌を弾くとクープの姿は消えて、部屋の中央に悠然と立っていた。その隙に二人は階段を駆け下りていく。

——気をつける瀬津奈。こいつは空間の瞳術、瞬間移動テレポーションの能力に長けたタイプだ。

瀬津奈は天月が去り際に残した言葉を頭の中で反芻しチャクラムを握り直した。空間の瞳術使いを相手取る初めての闘いに覚える不安を振り払うように。

「キャハハハハ！ あの眼帯鋭いのね。でも空間の瞳術ではあるけど瞬間移動テレポーションとは全くの別物よ。私は“次元の旅”ディメンションシフトと名付けたわ」

「別に聞いてないけどね。それじゃあ行くわよガルダ！」

瀬津奈が走り出すのを確認してクープは一步動き瀬津奈の視界から消える。立ち止まり気配を感じたので振り返るとクープが大鎌を振りかぶっていた。

しゃがんで大鎌が自分の頭上を通り過ぎると立ち上がって右足の蹴りを腹部にお見舞いした。壁まで吹き飛ばかと思っただが途中で姿は消えた。

すると目の前に現れ地面と水平に大鎌を振るう。チャクラムで受

け止めようとしたが刃の部分は消えてしまふ。視線を落とせば地面すれすれを動く刃があった。

「何も私だけじゃないのよ」

足首が切断される寸前に小さく跳んで避けると瀬津奈はチャクラムを握った右手でクープの身体を突いた。当たる直前にその姿は消えたので空振りではしたが、瀬津奈は密かに安堵していた。

「あんた闘う気あるの？」

上から声が聞こえたので見上げると重力を感じていないようにふわふわと浮かんでいる少女の姿があった。

その碧い瞳は瀬津奈の本心を見透かすように鋭く、つい萎縮してしまった。

「もしかしてあんた相手が怪我しないように闘ってる？ 私に手加減して勝てると思ってるの？」

「手加減なんかじゃないわよ。ただあたしは友達や仲間を助けるために闘ってるんだからあんたを傷つけたくない」

「キャッハハハハハ！ そんなくだらないことを考えて友達や仲間を助けられなかったらどうするのかしら？ 死にたくなる程後悔させてあげるわよ！」

クープの姿は消え、瀬津奈の目の前に大鎌が迫ってくる。それを掴んでいるのは小さくて雪のように白い両手で身体はなかった。

驚きながらも大鎌を弾き返すとクープの身体が現れた。

「“次元の旅”ディメンションシフトはただ空間を移動するのではなく、今私たちの居る空間と狭間狭間はと呼ばれる空間を行き来する」

「空間を行き来するなんて、そんなことが可能なの？」

「可能だから刃だけが消えて別の場所に現れたり、両手だけが現れて大鎌を振ったり出来るのよ」

思っていた以上に厄介な能力の上、全て実験の成果だと考えると胸の底から何とも言えぬ苦々しい感情が込み上げてくる。思わず目を伏せてしまった。

「それでも」

目を開けて部屋を見回せば少し離れた位置にクープは立っており、大鎌を振りかぶっていた。投げられた大鎌は床と水平に、回転数を維持しながら瀬津奈目掛けて飛んだ。

瀬津奈が左に跳んで避けると今さっきまでクープが居た場所には誰も居なかった。

回転しながら飛ぶ大鎌の空気を斬り裂く音が止まったから横目で見ると、少女が大鎌を掴んで振り上げていた。

「キャハハハハ！ 押し潰れる！」
「ぐっ」

振り下ろされた大鎌の刃がチャクラムに触れた瞬間、瀬津奈の細腕では受け止められない衝撃が襲った。正確に言うならば衝撃ではなく“重力”が。

腕だけでなく胴体、足を通り床にまで重力は伝わっていき、このままでは崩れてしまいそうだ。

耐え切れず瀬津奈の身体は床に埋もれるように押し付けられた。見下ろすクープは幼い声で嘲笑した。

「キャハハハハ！ ほんつとにくだらないわね。あれだけ偉そうなことを言って不様に負けるのかしら」

「……なんでなの」

瀬津奈は身体を起こし悲哀に満ちた、本当に哀しそうな目で少女を見据えた。

「キャハ、何か言った？」

「なんであなたみたいない子供が闘わなくちゃいけないの？ 実験台になって、人を殺める武器を振り回してまでどうなりたいの？」

今まで愉しそうな顔をしていたクープが初めて無表情になった。生気を感じられない冷え切ったその顔は完全に別人だ。

抑揚のない喋り方で自らの過去をゆっくりと語り始める。

「ここは世界に幾つもある研究施設の一つって話は聞いた？」

「聞いてないわ」

「そう。私はフランスで産まれたの」

こんな施設が世界に幾つもあるなんて信じたくないがここで話の腰を折る気はない。それに施設とフランスに産まれた話の関連性がわからなかった。

「私の両親は貧乏だったらしくて、生後間もない私を売ったの。フランスにある施設のリーダーにね。丁度実験台が足りなかったから両親は多額の礼金をもらったみたいよ」

この時点で涙が出そうになる。自分よりも年下の少女がこんな不遇の目に合っているなんて予想だにできなかった。

もう止めてほしかったがクープの話はまだ続くようだ。

「一番最初の記憶が暗い部屋で冷たいベッドに眠っていた。それから過度の実験で毎日のように倒れてたわ」

「も、もういい。わかったから」

瀬津奈の赤みを失った頬にはうつすらと雫の流れた跡があり、両手で口を覆い身体は小さく震えている。

「実験に耐え能力に目覚めてからは力試しに人殺しを命令されてね。それから私は大鎌で多くの人間の首をはねてきた。血の臭いは染み付くと中々取れないのよ。知ってる？」

瀬津奈は両目から涙が溢れ前が霞んで見えなかった。感情を移入し過ぎだとは自分でも思うが自力で止められない。

「それからここの施設長の要請で来たってだけよ。キャハ、涙を拭きなさい」

ようやく笑い声が聞こえたので瀬津奈は涙を拭き、改めてクープの顔を見た。強気な表情も作っているように見えてしまい戦意は限り無く削がれたが、千華が誘拐されたことを思い出し何とか自分を奮い立たせる。

「あんたもう闘えないんじゃない？」

「闘わなくちゃ何も護れないからね。友達も仲間も。それにあなたもね、クープ」

「っ、私を護る？ やってみなさいよ」

クープの姿が消えて次に現れたときには両手に一本ずつ大鎌を握

っていた。

「やってみせる」

瀬津奈の両目は黄色に変わっていて、全身に迸る電流が漏れ出し
ている。クープはそれを見て何かがわかったのか納得したように頷
いた。

「それがあの動きの正体ね。あまりにも速過ぎて普通じゃないと思
ってたのよ」

「さっきの闘いで両脚を雷に変えて移動するのを見て試しに使った
んだけど、結構うまくいったのよね」

全身に電流を流し筋肉を活発化させる。それが瀬津奈の移動術の
正体だ。

瀬津奈は消えるように目の前へ動き腹部を突こうとしたが、その
前にクープの姿が消えていたので動きを止めた。

「キヤハハハハ！」

独特の笑い声に振り返ると空中で二本の大鎌を今まさに振り下ろ
そうとしていた。しかし今の瀬津奈に当たる筈がなく、難無く避け
ると背後に回った。

クープの姿が消える前に全身を迸る電流を強く放電した。攻撃と
しては微弱だが相手の動きを鈍らせる分には問題無い。

「クツ、所詮小細工よ！」

「そのつもりよ！」

距離を取るクープ目掛けてチャクラムを四つ投げる。雷を纏って
いるので速度はかなりのものだが、四つともクープが動かなければ
当たりそうもない。

「はっずれー！ どこをねらっ？！」

チャクラムがクープの横を通り過ぎる瞬間クープの身体を纏って
いた雷が焼き斬った。幾筋も傷跡は付いたが、それでもチャクラム
で直接斬られるより傷は浅いだろう。若干身体に痺れは残るが。

「キヤハハハハ、やるじゃない。でもそう簡単に勝たせはって、あ
れ？」

クープは目を丸くした。その視線の先には膝をつき辛そうな瀬津奈の姿があった。それを見てクープは一つの仮説を考えた。

——まさか、体力が尽きた？

元々波動の量も多くない瀬津奈は地下二階での闘いに体力を消耗し、全身に雷を迸らせる、つまり常に波動を放出し続けて波動も底を尽きた。

限界なんて既に突破していたのである。

「キャツハハハハハ！ 何よそれ？ まさか体力切れでお終いなんて、笑い話にしかないわね！」

「くっ、あと少しでも……」

瀬津奈は悔しそうに言葉を吐き捨てた。両目の色が元に戻っていることから余力は殆ど残っていないのだろう。

クープは荒く息をしながら自分を見上げている瀬津奈に近付いて大鎌を二本とも振りかぶった。

「残念だけど、サヨウナラ」

大鎌は振り下ろされた。

三十話：次元を旅し鎌を振る幼き少女（後書き）

裏話その二十

昨日頑張って何とか一週間更新f^_^；
そしてようやく三十話\(^。^。)

……ペース遅ww

今回は生徒会唯一の一年生英田氷弥刀くん。

苗字は自分の地区にある中学校から拝借。

名前は直感？ お気に入りww

氷弥刀はもつとおバカ全開のキャラだったのに気付けば影が薄く…

…で、でも能力も気に入ってますよ？(…;))

能力も少し違いましたが使う予定があるので今は伏せて起きます。

いよいよ次話はあの人が！

さらに次の次ではあいつが闘う！

……今月末テストなので更新ペースは崩れると思いますが(…)_
)

三十一話：あなたには護るために力を

四肢をバラバラに斬り刻まれて敗北し、千華を助けることなく命を絶たれる。そんな避けようのない事実から逃げるように瀬津奈は目を閉じた。

しかしいつまで経っても大鎌の刃が瀬津奈の身体に届くことはなかったので恐る恐る目を開いた。

一番最初に目に飛び込んできたのは生きているかのように動く壁だ。生きているかのようにではなく実際に生きていて、それは巨象の鼻だった。固い皮膚で刃を止めている。

「な、なんでこんな所に象が？」

「キャハハハハ、そのあんたでしょ？ 私の邪魔をしたのは」

クープは大鎌を手元に戻し部屋の入口を見た。瀬津奈も釣られて見た先には紫苑と楔の他に琴鳴学園の制服に身を包んだ見知らぬ少女が立っていた。

よく手入れされた黒い髪、左耳の少し上の位置に青いリボンが付けられている。何故か不機嫌そうな目の下のほくろで更に大人っぽさを増している。鳥の羽が飾られた扇を開いて口元を隠している姿は非常に魅力的であった。

同じ学生と思えない程他者を圧倒するスタイルを誇っており、お嬢様然とした雰囲気の中にも妖艶さが隠れている。

「礼儀を知らない愚民ですわね。とはいえ一応名前くらいは言っておきましょうか、私は咲舞凰妃と申しますわ」

「咲舞凰妃、さん？」

「もしかしてその琴鳴学園の生徒らしき愚民は私のことを知らないでも？」

「は、はい、すみません」

瀬津奈の言葉に目を不機嫌そうに細めると扇を閉じて右隣りに立つ楔に突き付ける。突然のことで楔も意味がわからなかった。

「全く困ったものですわね。いくら愚民でも私がイギリスに短期留学している間に私の偉大さを後世に伝えるくらいできなくて？」

「て、てめえーふざけんなよ。珍獣使いの分際で偉そうなこと言いやがっ?!」

怒りで赤くなつた顔の中央部に扇が減り込み、強制的に口は閉じられた。犯人は澄ました顔で楔の方を見ようともしない。それどころかキョロキョロと周囲を見回し楔の顔に減り込んだ扇を見つけてこう言つた。

「私の落とした扇を拾ってくれるのはありがたいですけど、わざわざ顔で受け止める必要はございます?」

「このクソアマーっ!」

「二人とも落ち着いてください」

紫苑は溜息を吐きつつ二人を嗜めたが二人とも聞く耳を持たない。クープも瀬津奈もどうしたらいいのかわからず立ち尽くしていた。

凰妃が言いたい放題文句を言つて楔がそれに対し怒りの咆哮、紫苑は無駄だとわかりつつも二人を抑えている。そんな状況をしばらく眺めていた瀬津奈はようやく我に返つた。

「ちょ、ちよつと先輩方、何遊んでるんですか?! 遊びに来たなら帰ってください!」

「そう焦らなくても大丈夫ですわ。それより邪魔なのでお下がりもらえます?」

「じゃ、邪魔?!」

瀬津奈が文句を言おうとしたら巨象の鼻が身体に巻き付き持ち上げられ、軽々と紫苑たちの方へ投げられた。

悲鳴を上げながら宙を舞い、落下地点に居た紫苑が瀬津奈を受け止めた。

「すみませんが彼女は僕の言うことなんて聞きません。ただ五重奏の一人でもありますし、かなりの実力者です」

「ありがとうございます、って、あの人^{クインテット}が五重奏?」

「そうですよ。僕たちの代で一番最初に五重奏になつたのは彼女で^{クインテット}

すしその優秀さから短期留学の権利が与えられたんですから」

瀬津奈を下ろして微笑む紫苑の目は彼女を信じきっているようで、言い争っていた楔も彼女が闘うことに文句はなさそうだ。

いい加減痺れを切らしたのか、クープは象の傍まで歩いてきた凰妃目掛けて左手の大鎌を投げた。

巨象は鼻を振り下ろしたが、大鎌が消えて床を叩いただけだった。凰妃が後ろを見ると大鎌は自分と対峙していた筈のクープの手中に納まっている。

大鎌を振りかぶるクープを見て凰妃は懷から一枚の札を取り出した。長方形の白い札は細かい文字が羅列されており、中央のスペースに“大蛇”の二文字が描かれている。

札が光ると固い鱗に覆われた大蛇が現れ大鎌の軌道を防いだ。その鱗は金属音がする程固く、蛇特有の動きで大鎌に巻き付いた。

「なっ?! 何よこいつ!」

牙を剥き出しにして迫ってくるのでつい恐怖心から大鎌を手放してしまう。大鎌は落ちて大蛇が足首を噛もつと床を這う。

クープが消えて目的を見失った大蛇は光に包まれ凰妃が手に持っている札に吸い込まれた。更に巨象も光に包まれもう一枚の札に吸い込まれる。

凰妃から離れた位置に現れたクープは初めて見るそれらの行為が理解出来なかった。

「我が咲舞家は獣と闘い、獣を従え、獣と生きてきましたわ。その中で契約獣の召喚方法を独自に発見しましたの」

そう言つて凰妃は中央に“雀蜂”の二文字が描かれた札を掲げる。札が光り何十匹ものスズメバチが現れた。

「札にあらかじめ文字を描き、あとは波動を流すだけで召喚出来る。咲舞家ではこれを獣調けものしらべと呼んでおります。獣調を使うことが出来れば一人で何匹もの獣と契約可能ですわ」

凰妃は懷から明らかに十枚以上あるであろう、様々な文字が描いてある札の束を取り出す。扇で口元を隠しつつ勝ち誇ったような目

でクープを見た。

「キヤハハハハ、ペットを何匹も飼ってるから何になるのかしら。全部駆除してあげる」

一端姿が消えて再び現れたのは床に落ちた大鎌の傍、それを広い振り回した。しかし凰妃はおるかスズメバチの一匹たりとも当たりはしない。

あまりにも避けられるのでクープはいらつき始め、大鎌の振りも乱暴なものになっていく。

「この害虫め！　なんで当たらないのよ！」

「あらあら、お見苦しい程頭に血が上っていますわね。そんなことですから自分の頭上も見えないのですわ。ただでさえ小さいのに」

「え。頭上？」

天井を見上げれば一匹の黒く小さな蝙蝠が羽ばたき飛び回っていた。開かれた口からは自発的に耳を塞ぎなくなるような音を出している。

ピタリと動きを止めると音がどうかもわからないような超高音が部屋中に響き渡り、凰妃以外の全員が耳を塞いだ。

「いやああああ？！」

「このクソアマ俺を巻き込むんじゃねえ！」

「騒がしい愚民たちですわね」

凰妃は平然とした様子で立っており、憐れみを含んだ目で他の四人を見ている。しかしうずくまっている姿は彼女にとって他者とズレた感覚を与えるようだ。

扇で口元を隠しているので楔たちからは見えないが、クープの位置からは緩みきっている凰妃の口元がしっかり見えた。

「さて、残念ではございますがこのままですと愚民たち^{スレイブ}が壊れてしまうので終わりにしましょう」

「頭の中バグってんのか！」

「冗談ですわ。二割は」

凰妃が札を掲げると蝙蝠を光が包み込み、姿が消えて札の中央に

は“飛鼠”の文字が浮かんだ。スズメバチも光に包まれ札に吸い込まれた。

超音波は止まったが紫苑たちは衰弱しており、律儀にツツコミを入れていた楔に至っては既に虫の息まで追い込まれている。

クープはすぐに立ち上がった。

「キャハハハハ、そういう無差別攻撃、私は好きよ。でも肝心の私が平気じゃあ意味ないわね」

「それだけ膝が震えていて平気と仰るなんておめでたいですわね。もしや失禁していらっしやることにもお気付きでないのですか？」

「なっ？！ お、お漏らしなんてするわけないでしょ？！」

「ああ、失礼致しました。それは今から数分後の、未来の話でしたわね」

嫌らしく歪む口元を扇で隠し、懷から一枚の“獅子”の二文字が描かれている札を取り出す。札が今まで以上に一際強く輝き純白の毛皮を持つライオンが現れた。

光の届かない地下でも煌めくたてがみと威厳を持った佇まいはクープに恐怖を与えるには充分過ぎた。クープの顔は青ざめ、無意識の内に後退りしてしまう。

「さて、どこから食いちぎりましょうか」

「ふ、ふざけてんじゃないわよ！ いますぐその首をはねてやるわ！」

クープの姿が消え、凰妃の背後に現れる。同時に右手の大鎌を右上から左下に、左手の大鎌を左上から右下に、十字に交わるように振った。

大鎌が斬り裂く寸前に凰妃は振り返りつつ扇を閉じ、床と水平に薙ぐと大鎌の刃は二本とも根本から折れた。

「え……」

「私は自分で契約する獣を探しに行くのですけれど、牙を折られた獣は逃げるか私に服従しますわ。愚民はどうするのでしょうか？」

「ふ、ふざけるなああああ！」

刃の折れた大鎌を投げ捨て叫ぶと同時に部屋の重力が異常に重くなった。立っていられない程の負荷がかかり、床の軋む音が聞こえる。クープは甲高い声で笑い続けているが、ふとあることに気付いて笑うのを止めた。

凰妃と彼女の契約獣であるライオンは重力など関係ない、といった具合に立っている。

「な、なんで立ってられるのよ？ 普通の人間なら圧死するぐらいの重力よ？」

「そんな動揺されても、私にとっては重力の変化なんて感じないので困りますわ」

「か、感じない？」

「貴女が無意識に逃げているのですわ。本来ならば逆らうことすら許されない強者を前にしてね」

「逃げてる？ そんな筈ない！」

「語気を荒げるのは心当たりがあるからではなくって？ それに早く諦めて頂かないと私の愚民^{トイ}が使い物にならなくなりますわ」

ライオンが口を開くだけで小さく悲鳴を上げながら尻餅を付き、重力も元に戻った。歯をガチガチと鳴らし全身を震わせ、凰妃が一步足を踏み出すだけでクープの絶叫が部屋中にこだまする。

「あらあら、脆い心ですわね。私への無礼な発言もございましたし、少し調教しないとけませんわね」

「…… 本当最低な女だな」

楔の呟きを無視する程凰妃の感情は高ぶっており、その目は完全に危ないものだ。正直紫苑も楔も引いている。

扇で隠した凰妃の口元が最高に歪みもう一步踏み出そうとしたとき、クープをかばうように瀬津奈が凰妃の前に出た。

「愚民が愚民をかばって何のつもりでしょうか？ まさか邪魔するおつもり？」

「この子はもう闘えません。それにまだまだやり直せますから、もう止めてください」

「甘言ですわね。もし今後その愚民が再び牙を向けたら貴女はどうするのですか？」

「そんなことにはさせません。あとその『愚民』って言うの止めてください。皆が先輩と同じ人間なんですから」

瀬津奈は振り返って床に膝をつく、未だ震えているクープを優しく抱きしめた。次いで少女が安心するように優しく耳元で語りかける。

「あなたはもうこんな所に居る必要はない、命を奪うために力を使わなくていい。あなたには人を護るために力を使ってほしい」

「でも、私はずっと人を殺すために力を使ってきたんだよ。そんな私が人を護ってもいいのかな？ 私に護れるのかな？」

少女の頬に涙の筋が出来る。その涙はとても温かくて、瀬津奈の心もなんだか温かい。瀬津奈はクープの頭を撫でて頷いた。震えはいつの間にか止まっていた。

「あなたなら出来るわ、クープ」

「キャハ、キャハハハハ、結局あんたの言う通り護られちゃった」

「たまには護られてもいいのよ」

「う、うわあああああん！」

クープはついに我慢出来なくなり瀬津奈の胸に顔を埋め大声で泣いた。

その二人の様子を眺めている凰妃は溜息を吐き、紫苑は微笑み、楔はもらい泣きしていた。

「鍵錠君は意外と涙脆かったんですね」

「うるせー、あんなの見せられたらしょうがねえだろ」

楔は後ろを向いて天井を見上げた。ツボに入ってしまった涙が止まらないのである。

凰妃は再度溜息を吐き扇で口元を隠しながら呆れ顔で紫苑を見た。
「なんて甘いことでしょう。あのようなお方たちに貴方や生徒会は負けたのですか？」

「確かに甘いですが、それが彼らのいいところですよ」

「ふん、私の言葉遣いを注意するなんて思ってもみませんでしたわ。少しばかり興味が沸きますね」

「僕も彼らが今後どんな風に進むのか興味があります」

しかし、と紫苑は繋ぎ地下五階への階段を見た。クープには勝ったのだから自分たちは進むべきだ。

「彼ら、特に閨君は甘過ぎる。その優しさが今回は裏目に出るでしょうね」

心配だと言いつける瀬津奈がクープを無理矢理連れて五人で階段を下りた。

そこには――。

三十一話：あなたには護るために力を（後書き）

裏話その二十一

ちよつくら一週間切ってみましたww
テスト近いからためとかないと……

今回はキャラについての話はお休みして作品の書き方についてです。
地の文の書き方をまたちよつと変えてみました。
自分では詰まって読みにくい、なんてことは思わないのですがどう
なんでしょう？

あと最近某週刊誌で連載中の漫画の影響を受けまくってる気がします。

あの原作が有名な小説家様の作品です。

今後登場予定のキャラの能力考えていいの閃いたと思ったら、
その漫画のキャラの能力ともるかぶりf^_|^；

無意識にかぶってました（；；）

いよいよ登場の凰妃様。暴走が足りないでしょうか？

まだ出番は残ってますがね（――）

次はあいつが闘います！

三十二話：銀色に輝く千手の武具

「よく来た、待ち侘びたぞ」

階段を下りて着いた部屋の中央には天月や夜鷺たちと同じくらいの身長に、琴鳴学園の制服を着用している少年が立っていた。

「今度はえらく堂々としてるな」

「顔を隠している時点で堂々とはしてないがな」

声はどこかで聞き覚えがあるけれども、顔は銀製の仮面に隠され、硬い印象を受ける口調のせいで正体はわからない。

天月は無刃想を抜くと目だけを右隣りに居る夜鷺へ向けた。天月が何を訴えているかに気付き、夜鷺は自分が闘うつもりだったのに肩透かしを食らった気分だ。

「そんな不思議そうな顔をするなよ。囚われた姫の王子様は俺じゃなくあんただよ。さっさと姫を助けに行きな」

「……ちつ、余計なことを」

そう言いながらも夜鷺は部屋の奥に位置する階段へ走り出す。行かせないために立ち塞がるのかと思いきや、夜鷺は少年のすぐ隣りを走り抜けることが出来た。夜鷺はちらりと後ろを見たが、すぐさま視線を戻し更に地下へと下りて行く。

「へー、邪魔しないのか」

「俺はお前との闘いを望んでいるからな。閏天月よ」

「やっぱり俺のこと知ってる訳ね。学園の生徒みだいだし、あんた何者？」

「答えは闘いの中にある」

仮面の少年が左手を肩の高さに上げると、淡い光とともに反りのない刀身が真っ直ぐの直刀ちよくとうが現れ、その柄を握り感触を確かめるように振り回している。

満足出来たのか振り回すのを止めると切っ先を正面の天月に向けた。

「俺の名はG^{ジイ}。俺の能力は創造だが名前は付けてない」

「名前を付けてないのか？　なんでだよ」

「わざわざ疎ましい能力に自分で名付ける必要はないからな」

「なるほど。そりゃそうか」

天月が駆け出すとGは直刀を一端後ろに引くと一歩踏み出して突きを繰り出す。天月は体勢を低くして突きを避けると左手の刀をG目掛けて振り上げた。

Gは手の甲を下に向け右腕で刀を受け止める。金属音がして当たった感触も人の身体ではなく金属そのものだった。

「また身体を金属に変えるとか？　それとも何か仕込んでるのか」
「残念ながら後者だ」

Gが直刀を振り下ろしたので天月は右手の刀を右から左へ薙ぎ直刀の刀身を折った。別段気にしないようでGは柄を放り後ろに跳ぶとブレザーを脱ぎ捨て、ポロシャツの袖を捲る。

袖の下には仮面と同じ銀製の、どこか古めかしいガントレットを装着している。

「俺が創り出せるのは武具や防具だけだ。ただし制限は無い」

Gが左腕を前に伸ばすと三本の斧が現れ、初めはゆっくりとした縦回転だったが、次第に回転速度を増し天月に襲い掛かる。

無刃想を一端鞘に納め、左腰に差した刀の柄を左手で握り、右腰に差した刀の柄を右手で握り抜刀する。斧を三本とも両断したとき初めて天月は派手な装飾のナイフに囲まれていることに気付いた。

八本のナイフは八方向から微妙にタイミングをずらし飛んでくる。
「つと」

天月が跳ぶとナイフは互いにぶつかり合い金属音がした。そのときGが両手の平を合わせた。

「万力獄門^{まんりきくもん}」

天月から少し離れた左右の空間が激しい音と光を放ち鬼の顔が表裏にある巨大な門、一面には太い針が尖っていてその一面が天月を挟むようにして現れた。一對の門は最初から悍ましい速さで天月で

迫る。

「くそっ！」

天月は空中で回転して天井を蹴り、門同士の衝突をかわした。針は相当頑丈なのかかなりの速度だったのにひびすら入っていない。巻き込まれなかったことに安堵して着地点を見ると色々な業物が切っ先を天井に向けて山のように集まっていた。

そして門は重力に従い落ちていく。

「ちっ、借りるぞ夜鷲」

身体を回転させ、刀は舞い踊り業物の刃を折りながら天月は落下していく。着地したとき既に業物はほとんど原形を留めていなかった。息吐く隙もなく天月はGに向かって刀を十字に重ね突進した。

門が壊れた武具を押し潰す轟音が響き、無刃想とガントレットが激突する。

「あの連続攻撃でも仕留められないか」

「負けられないんで」

「それはこちらと同じだ」

腕で天月を弾くと左腕を前に伸ばす。左腕に光が集まりその光は次々と武具に変わっていき前方へ伸びていく。天月が下がるのに追いつく速度で武具は現れ続ける。

全身が武具に貫かれた、かと思うと天月の身体は霧散した。武具が床に落ちて消えると霧が集まり天月は姿を見せた。所々に切り傷があり血が滲んでいる。

「対峙者にまるで無数の手が迫ってくるかのような錯覚を感じさせる無双の刃、それが千手無双だ」

「はっ、全部斬り落とす」

天月が無刃想を納刀すると同時にGは右手を前に伸ばした。また同じ術かと思ったが、そうではないことがすぐにわかる。

刀が一本、鎌が一本、太刀が二本と様々な武具が天月の視界を覆っていく。最終的には向こうが見えない程の武具の壁ができた。

「おいおい、嘘だろ？」

武具の壁は崩れることなく進行方向にある全ての物体を飲み込もうと前方へ進む。人が通れる程の隙間は無く避けることは出来ないだろう。

「これで終わりだ」

武具の壁がどんどんと進み部屋の壁ともうぶつかる——そのとき、武具の一部が吹き飛び一人が通れる程度の穴が開けられた。その衝撃で壁は崩れ始める。

壁を壊した犯人は崩れきる前に穴から走り出てきた。

「力技もあるんだな」

「速真迅剣を甘く見ない方がいいぜ」

天月は膝の屈伸を使って大きく跳びGに近付くと落下の勢いも加えて二本の刀を振り下ろした。Gはまたガントレットで防ぐが耐え切れず、二筋の亀裂が走った。亀裂が幾筋にも広がりガントレットはバラバラになって床に落ちる。

しかしGは何ごとともなかったような顔で天月の頭を鷲掴みにし、床に叩き付けた。

「がっ」

後頭部に鈍い衝撃が走り、一瞬意識が飛びそうになったがなんとか堪える。更に掴んで離さない左腕に光が集まっていく。

「今度こそ最後やな」

「……やっぱりお前かよ、銀」

仮面から覗く目が僅かに動き、左腕に集まり始めた光も消えてしまい、右腕で仮面を外して部屋の隅へ投げた。

仮面の下のは正体は予想通り同じクラスの万軸銀、彼の弾けるような笑顔だった。

「いつから気付いとったんや？」

「最初から怪しいとは思ってたよ。顔を隠しただけだし喋り方がぎこちない」

天月の指摘に銀は恥ずかしそうに笑いながら右手の人差し指で頬を掻いた。

「まあ自分でもおかしいとは思ってたしな。けど気付かんかった方が闘いやすかったやろうに。天月が動揺せんようにって仕事用の仮面付けててんで？」

「はっ、人を生死の瀬戸際に追い込んで何を言ってるんだよ」

「あはは、そりやそうやな。じゃあホンマに逝ってもらうわ」

銀の左腕にまた光が集まり出したので、天月は右手に握っている刀の柄頭で脇下を突いた。その衝撃で銀は左手を離しよろめきながら後ろに退いた。

「ぐっ、げほっ、ごほっ」

「脇下は神経が集中してるから軽い衝撃でも結構効くだろ」

「ごほっ、ただじゃあやられんか」

刀を一端鞘に納め、咳き込んでいる隙に近付くと左手で左腰に差した刀の柄を逆手に握り振り抜いた。銀は上体を反らし刃を避けたが天月の右手の位置を確認して自分のミスに気付いた。

——速真迅剣一ノ斬型 一爪双爪。

右手は右腰に差した刀の柄を逆手に握っており、一步踏み込んで抜刀した。銀が左腕で刀を受け止めると金属音が鳴り響く。

「惜しい惜しい」

「まだまだ」

両手とも刀を握り直しますず左手の刀を振り下ろす。左に動いてかわされたが、身体を時計回りに回転させ右手の刀で薙ぎ払おうとする。しかし体勢を下げられたことで刀は空を斬ったので、左手の刀の切っ先を地面に付け一気に振り上げた。

流れるような連続技、銀は難無く避けているように見えるが実際は紙一重、天月はじわりじわりと追い込んでいく。

——速真迅剣三ノ斬型 遊戯武曲。

「あーもっつ、これでも喰らえや！」

銀と天月の顔の間に釘が数本現れ、その釘全てが天月目掛けて飛んだ。顔の前で両手を交差させ致命傷は防ぐ。一本だけ頭を掠め、眼帯の紐が切れ床に落ちた。

距離を取り腕に刺さった釘を抜いていると露になった左目が痛み始めたので反射的に目を押さえる。

「おいおいどうしたんや、別に刺さった訳でもないのに痛そうな顔して。痛いのは俺の心やつてのに」

「またまた笑えないご冗談を」

「冗談な筈ないやろ。ホンマはお前たちと闘いたくなかったしこんなところに来てほしくない、俺のこんな姿も知ってほしくなかった」

声の調子は変わらないが淋しげに語る銀に天月は率直に思ったことを伝える。

「……そんなことを考えてまで俺と闘うなんて何か理由があるんだろ？」

「相変わらず変なところで鋭いな。まあさっきも言っただけど、答えは闘いの中にある」

銀は右手に全てが銀製の打撃部分は球状で棘の備えられた柄頭と長柄を組み合わせた朝星棒^{モーニングスター}を、左手に片手で扱える自動式拳銃^{オートマチック}のデザートイーグルを握った。

デザートイーグルの銃口を天月に向けて容赦なく射撃した。素早く右に動き避けると勢いそのままに走り出す。銀は扱いに長けているのか、反動など関係無しに連射している。

天月は真っ直ぐに近付かず銀を中心として円を描きながらゆつくりと近付いていく。銃声が止まり弾切れを確認すると一気に接近し二本の刀で突きを繰り出した。

デザートイーグルは役目を終えたためか手中から消えた。朝星棒^{モーニングスター}を両手で握り、振りかぶると全力で振り下ろした。

天月の身体が霧散したので空振った朝星棒はコンクリートの床を砕き、光に包まれ消えた。両手に伝わる衝撃に顔をしかめている間に天月は背後に回り銀の背中を二本の刀で十字に交わるよう斬り裂く。

肉体を斬り裂いた筈だったのに斬ることが出来たのは彼の制服とその下に着込んだ銀色のメッキを施した薄いアーマーだけだ。

「そう簡単には斬られんよ」

天月が数歩後退すると銀は振り向き子供のような無邪気な顔で笑いながらそう言う。その笑顔は命懸けで闘っている相手に対するものではなかった。いつもの教室で休み時間に談笑しているかのような、こんな状況には相応しくないもの。

何が銀をここまで駆り立てるのか、不謹慎ながら興味が沸き始め、内容によっては助けたいと思える。

——違う、どんな内容でも俺は必ず銀を助ける。俺に出来ることなら、出来そうにないことでも何だっしてやる。何故なら、

「今は闘ってるが俺たちは友達だ」

クラスに馴染む気の無かった天月に初めて声を掛けた銀。初めはうつとうしかったが彼のお陰でクラスに溶け込めたのだ。心の片隅では感謝すらしている。

天月の言葉が聞こえたからかはわからないが、銀の瞳は動揺の色に揺れるのだった。

三十二話：銀色に輝く千手の武具（後書き）

裏話その二十二

ネタに困ってきた裏話ww

本当は昨日更新したかったけどちょっと厳しかった……。

今回意外な登場をした万軸銀です。

名前に意味はありません。完全に即興です。

てか名前即興多いなww

能力は結構前から練ってたのでいい感じかなーとは思ってます。

ちなみに生徒会戦で正体を隠して登場させる案もありました。勿論

天月側で。結局はボツになりましたけどね（；；）

彼がどうして被験者となったのか、今後も注目お願いします（ノ>

<）ノ

いよいよ今日からテスト週間ですf^_^；

今回は頑張りたいので更新どうなるかわかりません。

二月中にもう一回は更新すると思いますが。

あとテスト終わったらまた短編を描く予定です。色々と案が浮かんでるので。

そろそろもう一作も続き描かないと……。

とにかくそれでは、次にまた（#^ ^#）

三十三話：why do you battle？

「……友達って言うてくれるんか」

「ああ。友達だからこそ全力で闘ってあんたを助ける」

「やってくれや！」

銀は大きく身体を反らし、正面の天月から見えなくなるように両手を振りかぶると身体のパネも加えて両手に握った刃渡りの長い出刃包丁を投げた。

駆け出した天月は回転しながら飛んでくる出刃包丁を無刃想で弾くと更に加速し一気に距離を縮める。銀が右腕を前に伸ばしたのを見て天月は銀の頭を跳び越えた。空中で頭が下の体勢で両手を交差させ銀の首を狙って刀を振るう。

振り返った銀は攻撃を避けるため後ろ向きに跳んだが間に合わず掠ってしまふ。波動の少し減る感覚がしたが、そのことを確認している場合ではなかった。

天月は空中で体勢を整え足から着地すると高速回転しながら銀に向かつて低く跳んだ。銀は両手の手中に切っ先から柄頭が真つ二つに割れたような形状の双剣を現せると、回転の勢いそのままに襲い掛かる天月と刀を交える。

しかし銀が剣術で天月に叶う筈もなく、押され続け双剣を打ち上げられた。回転を止め足を着いた天月は二本の刀を平行に振り上げた。銀はそれを左腕に装着したガントレットで受け止める。

「はああああつ！」

天月が力技で振り切ると銀の身体は空中に浮された。ガントレットは衝撃に耐え切れず割れて床に破片が落ちていく。

天月が追撃するために跳ばうとしたら切っ先を床の方に向けた槍が上空を埋めている。重力で加速し文字通り槍の雨が降り注ぐ。

範囲が広く避ける隙がないので天月は二本の刀で連続して高速の突きを繰り出す。次々と現れる槍を突いて弾くことで天月には届か

なかった。しばらく続けると槍の雨が止んだので天月も突きを止めると、銀は鎖に繋がれた巨大鉄球を投げた。

鉄球を跳んで避けると鉄球はコンクリートの床に激突した。銀を見ると彼の前に七本の矢が浮かんでおり、七本が同じタイミングに飛んだ。

二本の刀を七回振るい矢を全て叩き落とした天月が着地するとは同時に銀も着地、二人は目を合わせる。数秒か数分か、二人は睨み合っていたが先に銀が表情を崩した。

「このままやと勝負決まりそうにないな」

「そうだな」

「まっ、俺は奥の手を残してるからな。お前もそうやる？」

「ああ。今から一つ見せてやるよ」

「そいつは楽しみや」

銀は両手に一本ずつ銀製の片方が尖った小さな棒、棒手裏剣を持つと天月目掛けて左手の棒手裏剣を投げた。右手の棒手裏剣を投げる間に左手の手中に棒手裏剣を現せるなど、次々と投げていく。

それらを弾きつつ天月はどんどん銀に接近する。攻撃が止まったので走り出すと銀の手には長柄に不格好な鉄の塊を無理矢理差し込んだような鈍器があった。

「ホンマにわかりやすい、な！」

振り向きながら銀は自分の方へ走ってくる天月に鈍器を振り下ろす。しかし天月の身体は鈍器が触れた瞬間霧散した。

驚きつつも長柄から手を離し振り返ると鞘に無刃想を納めた天月がすぐ傍まで近付いていた。

右手で左腰に差した刀の柄を握り、左手で右腰に差した刀の柄を握り抜刀すると、太刀筋が垂直に交わり十字を描くように右手の刀で薙ぎ払い、左手の刀を振り上げた。

——速真迅剣四ノ斬型 十字閃光。

走っていた勢いは地面を滑るようにしてようやく止まった。無刃想を鞘に納めると何かが落ちる音がしたので、振り向くと銀の足元

には彼が今まで装着していた銀製のアーマーがあった。

「ようやく全部剥いだか？」

「ああ、もう防具は全部剥がされたわ」

「ならもう一押しだな」

「それは無理かもな。奥の手その一や」

銀がそう言つて天井を見上げると視線の先の空間が激しい光と音を放っている。天月はあまりのまばゆい光に目を閉じてしまい、光が収まってから目を開けてその目に飛び込んできた物体に驚愕した。「俺が創造するのは武具や防具やけど、それは何を基盤として創つてると思う？」

「ど、どういうことだ？」

「知識や見た物を頭の中で想像し、その想像した武具や防具を創造する。それが俺の能力の正しい説明や」

「なるほど、それでこんなのが」

天井付近に浮かんでいるのは球状の機械から四つの砲身が伸びている兵器だった。それぞれが自律して動き、二つの砲身が天月と銀を捉えて止まった。

「ホンマは砲身が百あるねんけど大きすぎるから縮小バージョンや。奥の手その一、百火煉磨^{ひゃつかれんま}」

「っ、ここまでいくと笑えねえぞ」

「笑わすつもりもないからな」

自らの頭上に浮かぶ兵器を再度見て天月は顔を引き攣^つらせる。もし撃たれた砲弾が爆発などしたらこの部屋どころか施設ごと木っ端微塵だろう。

その不安を掻き消す程明るい笑い声を上げると、銀は天月の疑問に答えるかのように天月が不安に思ったことの説明を始めた。

「安心しいや、飛んでくるのは鉄の塊で爆発なんてせえへん。それにこの部屋は施設長の結界が張られてるから壊れへんよ」

天月は自分の考えていた最悪の事態にはならなそうで安堵したが、続く銀の言葉に戦慄を覚えた。

「ただしこいつは一旦照準を決めると一人に残るまで無差別に砲撃し続ける。この場合俺がお前のどちらかが倒れるまで、な」

「な、なんだよそれ！」

二つの砲身が同時に火を噴き、球状の砲弾が飛んでくる。銀は最小限の動きでかわしたが、天月は大きく動いて避けた。彼らの立っていた位置を通り砲弾が床に減り込む。天月は爆発を危惧して大きく動いたが、火薬が仕込まれてないのか爆発はしなかった。

一発目の砲弾に気を取られている内に二発目は放たれ、避けたときには三発目、四発目と既に放たれていた。いつの間にか天月には爆発や部屋の心配をする余裕もなくなり、ただひたすらに砲弾を避け続けることとなる。

「本当につ、ふざけやがってっ」

四つの砲身は無差別に、そして絶え間無く二人を狙い続ける。砲身の動きを見てどの軌道で砲弾が飛んでくるか予測して避けている天月に対し、銀は天月の動きを確認できる程落ち着いて避けている。「ほれほれ、隙だらけや」

銀は二つ同時に飛んできた砲弾を三步下がり避けると身体を天月の方に向け、目の前に現した幾つもの画鋏がひょうを右手に握る木槌で打って飛ばした。

「いつ?!」

自分に向かつて襲い掛かる画鋏に天月は驚きの声を上げると、焦ってつい跳んで避けてしまった。跳んでから気付いたがもう遅く、身動きの取れない空中で砲身の一つが天月を捉えた。

撃たれた砲弾は天月の腹部に命中し、骨の折れる嫌な音が銀の耳まで届く。口から血を吐き出しながらも身体を捻り砲弾ごと床に激突する事態は回避した。あまりの衝撃に力が入らないのか体勢を立て直すことなく床に落ちた。

天月が倒れたからか砲身は四つとも動きを止め、銀も仕留めたと思ったので術を解除しようとした。

しかし天月は立ち上がり口元に付着した血を手の甲で拭った。再

び砲身は動き始め天月に向かって砲弾が一つ飛んでくる。天月は揺れるように動いて砲弾をかわすと一気に駆け出しその勢いで大きく跳んだ。

百火煉磨のすぐ横まで跳び上がり銀が辛うじて見える程度の速さで無刃想を振り抜きすぐさま納刀した。刀を鞘に納めきつた瞬間、四つの砲身も球状の機械もバラバラに斬り裂かれ爆発した。天月は着地したとき身体に力が入らず床に膝をついてしまった。

「大人しく寝てたらよかったのに、あんまり無理せん方がいいで」

「あー、そうはいかないさ」

「なんならそのネックレスを外して天人になりいや。傷も回復するんやろ？」

「……相変わらずの情報網だな。悪いけど天人にならなくてもあんなに勝つさ」

「この状況でよく言えるな」

左腕を天月の方へ伸ばすと光が集まり始め、銀は術を発動しようとしたが階段を駆け下りる足音が聞こえ、左腕を引いた。

「天月！」

何故だか天月には懐かしいような気がする声に、聞こえた方を見ると瀬津奈と五重奏の三人、そしてクーブが階段を下りてきて部屋の入口に立っていた。

「ずっと凄い音がしてて階段で音が止むのを待ってたんだけど、大丈夫な……え？」

瀬津奈の視線は銀に向いている。その視線に気付くと銀はいつも通りの明るい笑顔を見せ、呆然としている瀬津奈に声をかけた。

「やっぱりお前も来たんか、神無月。まあ来るとは思ってたけど」

「な、なんで万軸がここに？ まさか天月と闘ってるの？」

「お知り合いかも知れませんが、現実を見なさい。どう考えても闘ってる最中ですわ」

凰妃は広げた扇で口元を隠しつつ銀を一瞥し、次いで顔だけを自分たちの方に向けている天月を見ると小さく溜息を吐いた。何かを

訴えかけるような目で隣の紫苑を見たが、彼は苦笑して肩を竦めるだけだ。

「今は追い込まれてるみたいですが、そんな簡単に判断するのは早いですよ」

「まあ見せてもらうとしますわ」

「あ？ 何の話だよ」

「お黙りなさい愚民^{フール}」

「ああ?!」

また揉め始めた五重奏の三人を天月は呆れ顔で眺めていた。^{クインテット}

改めて瀬津奈を見ると彼女がクープと手を繋いでいることに気付いた。ずっと黙っていたので気付くのが遅れたが、それは銀も同じのようだ。

「なんやクープ、仲良く手なんか繋いでもうて。施設は抜けるんか？」

「そうね。私はこれから新しい生き方を見付けるつもりよ。何か文句でも？」

「全然、ホンマによかったな。やっぱりお前みたいなちっちゃい女の子が施設長の言いなりで闘うんはおかしいからな」

銀はクープが施設を抜けることを聞いて嬉しそうに破顔した。

銀自身も人間の為に闘う人間ではないと天月は感じていた。そんな彼を縛り付けている物を断ち切らなければ助けることは出来ないだろう。そう思い直し天月は膝に力を込めてゆっくりと立ち上がった。

「だ、大丈夫でしょうね？」

「もう立ってるのも限界やろ。折角援軍が来てくれたんやから大人しく任しいや」

「援軍？ そこにいる五人は俺があんたを助けるのを見に来た観客だよ」

天月の言葉に楔と凰妃は眉をひそめ、紫苑は笑みを零し眼鏡を中指の腹で押し上げた。

クープは勿論、瀬津奈も文句はないようで静かに頷いたのだが銀は一瞬悲しそうに目を伏せすぐに天月と視線を交わした。

「強情やな」

「瀬津奈は勝ってその女の子を護ったんだから俺も頑張らないとな」「自分で自分を縛ってどうすんねん。いつか耐えられへんようになるぞ」

「あんたに言われたくないね」

珍しく相手を挑発するようなことを言い嫌らしく口元を歪める天月を見て、乱暴に頭を掻くと銀は今まで見たことない真剣でいて淋しい目をして天月に言った。

「これだけはやりたくなかってんけどしゃあないな、奥の手その二や」

三十三話：why do you battle?（後書き）

裏話その二十三

今日からいよいよテストf^|^; ;
前のテストよりは勉強してるけど……。

今のところ登場回数は少ないですが今後重要なキャラになってくる、フローレア・ブルーム・フレグランスことフレアについて。

子供キャラはほしいなーという考えから登場した彼女ですが、名前に關してはあだ名のフレアが先に決まっていた。

本名（即興で適當）をフレアにしてもよかったんですが、なんとなくあだ名にww

本格的に物語に絡んでくるのはまだまだ先ですが、同じタイミングでもう一人のヒロインも登場予定です（#^ ^#）

二月ももう終わるので次の更新は来月かな？

テストじゃなければ書けるのに（:|;）

ただあとテスト終われば春休みなんで一気に二章を終わらします（ノ><）ノ

三十四話：騎士の武装を破るは轟砲なり

「これで終いやで。奥の手その二、ガラハッド“完全武装の騎士”や」

銀の全身が光に包まれ、全身を覆う薄い銀製の金属板でできたアーマーが現れる。さながら西洋の騎士とでも形容するべきか、右手には長柄の先端に円錐状の尖った金属が付いた槍を現していた。

「時代錯誤に国も間違ってるな。馬に乗らないと機動力に欠けるだろ」

「機動力まであつたら勝負にならんやろ。これでもお前には充分過ぎる装備や」

槍を突き付けられた天月はさっきまで闘っていた銀とは別人のような威圧感に彼がとうとう本気になったことを悟った。無刃想を二本とも抜き気を引き締める。

「先手は譲るわ。来いや」

「それじゃあお言葉に甘えて！」

目にも留まらぬ速さで駆け出して懷に潜り込み、二本の刀を床と平行に構え胴部のアーマーに一撃を斬り込むも、びくともしない。

回転しながら背後に回りその勢いで斬ろうと足を踏み込んだが、銀もその場で回転し槍を振るつたので膝を折り体勢を低くして攻撃をかわす。刀二本を平行に構え斬り上げるも激しい金属音がするだけでアーマーには傷一つ付かず、天月は効果がないと知って距離を取った。

「やつぱり動きは鈍いな」

「確かに。でもアーマーのお陰で防御力はまず上がるとし、わざわざ防御せんでもいいから思いつ切り攻撃出来る」

「残念ながら当たらないや意味ねえよ」

ジグザグに走って距離を詰め、槍を振り上げる銀の手に装着されたガントレット目掛けて左手の刀を薙ぎ払う。その攻撃も無視して振り下ろされる槍を天月は刀を十字に重ねて受け止める。衝撃が床

に伝わりひび割れる程の一撃に天月は耐え切れず、弾けるように後方へ跳んだ。

距離があるからと高を括っていると、銀が前に伸ばした左腕に光が集まっていく。

「千手無双」

その光が武具を形成し、次々と現れ天月に襲い掛かる。右に大きく走って避けると幾千もの金属の手が天月を追うように迫り来る。垂直に跳び身体を回転させて天井を蹴り素早く着地し、三度走り出す。

武具を全て消して槍を構え直し、近付いてくる天月に向かって銀は槍を突いた。天月は跳んで槍の上に着地し腕を交差させ、二本の刀で槍を斬るように振るう。槍なら斬れるかと思っただが思惑通りに行かなかった。

「くそつ、槍まで硬いのかよ」

「残念やった、な！」

銀が槍を大きく振り回したので、天月は槍から振り落とされ身動き出来ない空中で顔を蹴り飛ばされた。予期せぬ痛みに顔を押しさえしていると、銀は槍を右手から左手に持ち替え柄の短い槍を現せる。

大きく振りかぶりそれを投げると天月に向かって真っすぐ飛んだ。あまりの速さに座り込んでいた天月は避けることが出来ず身体を倒すだけで、槍が左肩を掠めた。掠っただけだが肉はえぐれ血は噴き出す。

「天月っ！」

「っ、大丈夫だから大声出すなって。あと絶対に出てくるなよ」

心配そうに叫び声をあげる瀬津奈に声を掛けて立ち上がると右手の刀を左腰に差した鞘に納めた。もう一本の刀は左手に握ったままだ。銀は天月が一刀流でも闘えるなんて情報を持っていないので少し警戒した。

天月は真っすぐに突進すると、左手の刀でアーマーの胸部を突いた。さらに刀の切っ先がアーマーに触れた状態で振り下ろす。今度

は手を返し右手で刀を押して斬り上げた。

突いて斬って斬ってもアーマーの銀色が落ちることはない。悔しそうな顔をし何故だかしゃがみ込む天月を見て銀は呆れたように溜息を吐いた。

「なんのための一刀流やねん。いつきに腕落ちたんちゃうか。遊んでんのか？」

「誰も一刀流だと力が上がるなんて言っていないだろ。俺の奥の手はこれからだ」

「偉そうに、そんなもん待つてられるか！」

銀は槍を両手で握り振りがざすと、天月の右肩に突き刺した。天月は微動だにせず右肩から鮮血が飛び散った。

「て、天月！」

たまらず瀬津奈は天月の傍へ駆け寄ろうとしたが手を繋いでいたクープに引き止められる。瀬津奈の双眸には涙が溜まっており今にも溢れ出しそうだ。

「邪魔しないでクープ！ このままじゃ天月が！」

「駄目よ、今は二人の闘いなんだからあんたが行くべきじゃない」

「落ち着いて下さい神無月さん。彼がただ攻撃を喰らう筈ありませんし何か考えがあるのでしょう」

クープと紫苑の言葉に落ち着きを取り戻すと瀬津奈は涙を拭い、

二人の勝負を見守る覚悟が出来た。

しかし驚いたのは瀬津奈たちだけではないようで、銀もあからさまにうつろたえている。

「な、なんで避けへんかってん天月。お前なら簡単に避けれたやろっ」

当然避けると思っていた銀は槍やアーマーに血液が付着したことよりも、敵として闘っている友の身体を心配した。彼の言葉に天月は笑みを漏らすと、右手で左腰に差した刀の柄を握った。

「ちよつともお前の痛みを、苦しみをわかるためにはこれしか思い付かなかったんで」

「なっ、お前そんなことで——」

銀の言葉は途中で途切れ、否、強制的に止められて吹き飛ばされた。アーマーも意味をなさない程の威力で壁に激突し、銀の身体は動かなくなる。見ていた五人は何が起きたか理解が追い付かず、攻撃を喰らった本人でも何となくしかわからなかった。

天月は左手の刀を左から右に薙ぎ払い刃が腹部に触れる瞬間、右手に握った刀を抜刀し左手の刀の峰に当てると押し込んだのだ。左手の刀の刃がアーマーに減り込み、左手の刀を薙ぎ払う力に抜刀術の速度を加えて銀を吹き飛ばしたのだ。

壁を支えに銀は何とか立ち上がるも膝は震えており、アーマーも腹部は無惨に砕けていて、背部も壁との激突で輝きを失っていた。たまらずヘルムを外した銀の口からは血が流れている。

「アホやるこの威力、こんな技隠してるなんてふざけてるわ」

「一ノ斬型が“柔”に二ノ斬型が“剛”、三ノ斬型の“技”に四ノ斬型が“速”と極める点が異なる、それが古式刀術、速真迅剣だ」

天月は刀を二本とも鞘に納めると左手で出血の激しい右肩を押さえながら少しだけ舌を出してみせた。それに応えるが如く銀も破顔する。

「今のが速真迅剣二ノ斬型 轟撃大砲だ」
こうげきたいほう

「ははっ、俺の完敗……やな……ごめんな……桃世……」
ももせ

「桃世……？」

銀が身に纏っていたアーマーが光とともに消えると力尽きてその場に崩れ落ちた。天月は彼の下に駆け寄ろうとしたが足元がふらつき立っていられず、しゃがみ込んでしまう。

「やっば、血を流し過ぎた」

「今更気付いても遅いわよ！ 何が痛みをわかるためによ格好付けて！ それでこんなにふらふらなんてばっかみたい！」

「おおっ、まさかここまで目茶苦茶に言われるとは思ってなかったぜ」

言い返したいという気持ちがない訳でもないが、自分を心配して

走ってきた瀬津奈の瞳にうつすらと浮かぶそれを見てしまつてはそんな気持ちも吹き飛んでしまう。心配をかけた謝罪の意味も込めて、血の付いてない右手で瀬津奈の頭を撫でた。

「んなつ?! な、なんのつもりよ! あんたそんなことしてる余裕無いでしょ!」

「まあ確かに結構やばいかも」

「全く、これではどちらが勝ったのかわかりませんわね」

「えーっと、あなたは?」

扇を開いて溜息を吐いた口元を隠し、しゃがみ込んでいる二人を見下ろす凰妃の目はどこか嬉しそうだった。彼女は懷から中央に“猪突”の文字が描かれた一枚の札を取り出すとその札に波動を流す。短い足に寸胴な身体、立派な毛皮に二本の牙が勇ましい猪が現れ、牙で天月と銀を器用に持ち上げて自身の背中に乗せた。いきなりのことの意味がわからず、猪から下りようとしたが凰妃に閉じた扇を突き付けられ動きを止めた。

「私は琴鳴学園二年生の咲舞凰妃ですわ。クインテット五重奏の一人でして呼称は『クラウンプリンセス獣姫』です。以後お見知りおきを」

「は、はあ。えっと、咲舞先輩、とりあえず扇が怖いんですけど」

「あら失礼、ですがあなたはこれ以上動かない方がいいですわ。あまり動くと更に血が流れてしまいますわよ」

「お気遣いありがとうございますが、多分下の階でも無理しないといけないので下りてもいいですか?」

「まあ、折角の私の善意を断るとは、出血多量で倒れても知りませんわよ」

不機嫌ではあるが一応許可をもらえたので天月は猪の背から飛び下りた。着地のときに足の力が抜けてしまい倒れそうになったが、楔に支えてもらい倒れずに済んだ。

「ちっ、やっぱり大人しくしといた方がいいんじゃないか?」

「ありがとうございます。でもここでリタイアする訳にはいけませんです」

「確かに地下七階には宝玉が居るから、先に行ったお仲間の心配をするのはわかるわ」

クープの言葉に首を振ると楔から離れ部屋の出口に向かって歩いていく。

瀬津奈にはどうして天月がここまで自らの足で先へ進むことにこだわるのがわからなかった。

「あつと、そうだクープ。さっき銀が言ってた“桃世”って誰のことかわかるか？」

急に天月は止まって振り返りクープへ気になったことを尋ねたが、クープは小首を傾げて唸るだけだった。しかし記憶を探ってみると一つだけ思い当たる節があった。

「そういえば銀が入間の実験を受け始めた理由は他の被験者を助けるためらしいわ。その被験者が誰なのかはわからないけど」

「それが“桃世”かもしれないってか」

「さあね。本人に聞くのが一番じゃない？」

クープは肩を竦め嘆息すると猪の背で穏やかな寝息を立てる銀を見た。天月も釣られて見たが（闘っていた本人が思うのもおかしい話だが）、さつきまで死闘を行っていたようには到底見えない。

階段を下りて辿り着いた地下七階、そこで広がる光景を目の当たりにし初めて瀬津奈たちは天月があそこまでこだわっていた理由がわかった。しかしそれはまだ始まりでしかなかったのだ。

——時は少しだけ巻き戻る。

夜鷗は天月に銀の相手を任せて階段を駆け下りると最後の部屋に到着した。部屋の中央へ歩を進めて行くと、コンクリートの部屋には不釣り合いな木製の椅子に腰掛けた小綺麗な青年と、夜鷗たちと

同じ琴鳴学園の制服に身を包んだ少女がうなだれ膝をついていた。少女、琴鳴千華は足音に顔を上げると両目に涙が浮かび始める。すぐにその涙は溢れ出し痣の出来てしまっている頬を伝い膝に落ちた。

「とう、ほう……来てくれたんだ……」

「おやおやおやこれは意外、まさか君が来るとはね。閨君を見捨てて来たのかい？」

十種宝玉は笑顔を張り付け椅子から腰を上げると数歩前に進んだ。夜鷺は宝玉の言葉には応えず腰に差した黒紅闇夜幻の柄を握ると鞘から引き抜き、切っ先を宝玉に向けた。

それを見た宝玉は喉を鳴らして笑うと下手な芝居で恐がり両手を上げた。

「おお怖い怖い。元殺し屋の君がそんなに正々堂々と宣戦布告してくるとは、よっぽどお冠だね。仲間の一人でも死んだかい？」

「……闘う前に一つ聞いておく」

夜鷺の全身から黒い波動が迸り、夜鷺を中心として渦を描きながら天井へと揺らめいて昇っていく。宝玉は少しだけ反応したがすぐ右目を手で押さえた。

「琴鳴千華に怪我させたのはお前か？」

「他に誰が居る？」

手が退けられて見開かれた右目は九等分にされ九色に変わっていた。

「ちょうどいい、こいつを試すか」

夜鷺の言葉に呼応するように黒い波動は更に周囲へ噴き出した。

三十四話：騎士の武装を破るは轟砲なり（後書き）

裏話その二十四

ちよい遅くなつたのはテストだったんで許して下さいf^| ^ ;
基準は平均を越えるか……春休み頑張らないとな。

今回はThe・悪役の人間さん。

……特になしww

だって名前も即興だし性格も「悪役ってこんな感じかな？」ということだけを意識しましたし……。

いや、手抜きじゃないです(。。(;)

ただ彼は二章の最後では……。

それは今後のヒトロクでf^| ^

もう春休みなんでちよつとは更新ペース上がる予定です。

もう一作は八話まで書いてるんですが一話と最新話では書き方にちよつと差が……まあ書き始めて二ヶ月経ってますし(;)

そんなこんなで、また次回ぐ(＊・・・・＊)

三十五話：纏う衣は闇より黒く十一の色も飲み込む

夜鵒が身に纏う漆黒の波動を宝玉は馬鹿にしたような目で睨んだ。
「はっ、そんな低俗な幻術で俺が怯むとでも思っているのか？」

「どうだろうな」

「残念ながら答えはNOだ」

宝玉の眼前で炎が燃え上がったかと思うと炎が弾け大小異なる火の粉全てが様々な軌道で夜鵒に飛んでくる。

夜鵒は左方向に大きく跳んで避けたものの火の粉は壁や床を焦がしていく。コンクリートを焦がした火の粉の温度よりも術の発動速度の方に驚いた。

宝玉は夜鵒の着地点に向けて走り出すと金色の瞳術で現した無骨な刀を両手に握り振り下ろす。

夜鵒は膝を折り曲げ刀を受け止め、膝の屈伸も使い刀を打ち上げた。宝玉が後ろに退くと彼の足があった床が淡い縹色に光った。

ゆきふぶき
「雪吹雪」

放射状に粒の細かい雪が天井に向けて舞い上がり夜鵒を襲う。すぐに吹雪の範囲内から出るも体温が一気に下がってしまい身体が痙攣している。

この機を逃すまいと宝玉は大きく息を吸い右手の人差し指と親指をくつつけ筒のようにして口元に当てると、身体を反らした勢いも利用して空気の矢を放った。肉眼でもはつきりと見える程に圧縮された空気は咄嗟にしゃがんだ夜鵒の頭上を越えてコンクリートの壁を貫く。

かいふうきや
——風吹矢。

目だけで後ろを見て丸い穴が綺麗に空いているのを確認すると嫌な汗が背中に浮かぶ。しかし連続して空気の矢が放たれるのでその場に留まる余裕も無く右に左と忙しく動き回り、一瞬攻撃が止んだ隙に懐からナイフを一本取り出し振りかぶった。

「黒羽」

投げた瞬間ナイフは四本に増えており、四本全てが寸分狂わず宝玉目掛けて真つすぐに飛んでいく。そして夜鷺は宝玉とナイフの延長線上から外れるように少しだけ動いた。

飛んでくるナイフを空気の矢を放ち撃ち落とすと、宝玉は下品としか言えない大きな声で笑った。

「無駄だよ無駄無駄！ 文刻を行わずとも瞳術を発動出来る俺に死角は無い！」

「ふん、それも実験の成果って訳か」

「その通りだが何か問題でも？」

「与えられた力を無茶苦茶に振るいさも自分の実力のように錯覚する。おめでたいな」

「ガヤハハハ、そういう偉そうな物言いは俺に勝ってからにしようれ！」

宝玉の足元、床を突き破って植物の蔓が何本も姿を現し夜鷺へ向かって伸びていく。

身体に蔓が絡み付く寸前で黒刀を舞うように妖しく振るい次々と斬り刻む。植物が消えると夜鷺は挟まれていることに気付き垂直に跳んだ。

——光と闇の闘争。ひかりとよみのたたかひ

宝玉の左目が白と黒の二色に変わり、夜鷺を挟んでいた正体、光が集まり球状になっている塊と闇が集まり球状になっている塊から高密度に圧縮された光と闇が放出され、丁度夜鷺が立っていた場所でぶつかり互いを打ち消しあう。

喰らったらひとたまりもなかったと避けたことに安堵する夜鷺だったが、勝ち誇ったように笑う宝玉を見てそれすらも囷だったと気づき、襲い掛かる一閃の蒼い稲妻を夜鷺は空中で動きかわした。

その動きは空中を自在に飛び翔ける鳥そのもので、黒い波動のせいで見えにくいのが彼の背中からは一對の黒い翼が広げられていた。明らかに大型鳥類の翼ではあるが、その姿は悪魔のようにも見える。

「な、なんだその翼は？！ お前ただの人間ではないのか？！」

「ふん、簡単に動揺しやがって。低俗な幻術には怯まなくても低俗なトリックには怯むんだな」

「ま、まさかつ」

もう一度蒼い稲妻を放つも夜鵒には軽々とかわされ、そのまま翼を羽ばたかせ宝玉に向かつて飛んでくる。体勢が変わったので背中をよく見ると三本の足の爪で夜鵒の背中を掴み、金色の目を鋭く光らせている鳥が居た。その正体が夜鵒の契約獣である金鷄だと気付いたときには、既に宝玉との距離は縮まっていた。

黒刀が黒い波動を纏い巨大な刀となる。その刀を振りかぶり薙ぎ払うも宝玉には跳んでかわされた。黒刀に纏った黒い波動はすぐに消え、夜鵒も床に足を付く。

宝玉が床に目をやると大きく深く割れており、その跡は幻術によって大きく見せた刀の一太刀ではありえない程で、宝玉は頭の中で考えを改めた。幻術でないとすると考えられることは一つしか無い。

「闇夜の牙」

黒刀の刃は獣の頭に似た形状を取りゆつくりと口が開き角も生えていく。夜鵒が突きを繰り出すと獣の頭は伸びて余裕の笑みを浮かべている宝玉に襲い掛かる。

幻術だと思い込んでいたがかなり接近してきたところで角が光っていることに気付き咄嗟に身体を反らした。しかし反応が遅れたのでスーツの左袖が少し斬れた。獣の頭はそこで動きを止め夜鵒の手元へ戻っていったが、角と重なり見えなかったナイフはそのまま飛んで壁に突き刺さる。

「あと零コンマ一秒気付くのが遅かったら左腕に刺さっていたな」

「……クク、どうやら貴様は単なる幻術使いではないようだな」

一拍置いて目玉が飛び出そうなくらい両目を見開き、対峙する夜鵒が耳を塞ぎたくなるような大声で叫んだ。

「ほんの少し悪知恵が働きほんの少し幻術の使える青二才が！」

夜鵒を包むように光が集まっていき、その光は宝玉から夜鵒の姿

が見えない程強く眩しくなる。その様子を見て宝玉は手で顔を押さえても堪え切れず部屋中に笑い声が響く。その笑い声に応じるように上の階で大きな地響きが聞こえた。

「と、東宝？」

「ビヒヤハハハハ！　そういえばお前は閏天月と闘ったときにこの“光の世界”で負けたらしいな。どうだいこの大事な闘いで俺に同じ術で負ける感覚は？　それに今の音は上の階で閏天月がボロボロに負けているんだろうなあ！　お前も一緒に負けちまえよ！」

「ふん、間に合ったか」

光が収まると宝玉の表情は驚愕に、千華の表情は安堵の色に染められた。夜鷺は当たり前のように立っていて、彼の周囲には量は少し減ったが依然黒い波動が揺らめいている。

ここまでできてようやく黒い波動が何なのかわかった、正確に言えばわかつてはいたが認めたくなかった宝玉は苦虫を噛み潰したような表情をした。

「やはりそれは黒色の瞳術か」

「その通りだ。実戦で試すのは初めてだから完全に能力が発動するまで時間が掛かった」

「くつ、黒色の瞳術を使えるなんて施設長からは聞いてないぞっ」

「数秒前に俺が言った言葉を聞いてなかったのか？　それに情報に頼らないとお前は満足に闘うことも出来ないのか」

「ほざけ若僧！」

叫んだあと大きく息を吸い一旦動きを止めて溜めると、前方に濁流を吐き出す。何かが邪魔しているのかと思ってしまう程左右に広がらず、波立ち夜鷺を飲み込んだ。

濁流がゆっくりと消えていけば夜鷺は相変わらずの無表情で一步も動かずその場に立っていた。また黒い波動は量が減ったが夜鷺の身体から一気に噴き出し大幅に増加した。右目を手で覆い隠し手を退けたときには右目が黒色に変わっていた。

「たとえば目の色が変わってないように見せる低俗な幻術でも少しぐ

らい警戒するべきだったな」

「ぐ、がああつ。なんだその術は！ 見たことも聞いたこともないぞ！」

「非常識な実験を受けているくせに常識にこだわるな。触れた物体を飲み込むこいつを俺は“黒鬼の纏衣”^{ブラッククロース}と呼んでいる」

「ならばより純度の高い黒色の瞳術をぶつけなければどうなる！」

左手の平を床に付けると触れた部分が黒く濁り始め、闇が地を這って進み途中で爆発するように立ち昇り、夜鷺の全身を飲み込もうとする。

しかし黒い波動が宝玉の放った闇を難無く飲み込んでしまう。かなりの闇が自分の周りで蠢いている状況でも夜鷺の顔に不安の色は見えず、それどころか自信に満ちているようだ。

闇の中心に居る夜鷺の姿は殆ど千華からは見えないが、僅かな隙間から覗く夜鷺の迷いの無い目が見えて無意識に呟いた。

「凄、い、こんなに東宝が強いなんて」

「何を言ってるんだい千華。俺よりこんな詐欺師が強い筈ないだろう？ お前は俺の物なんだから他の男に目移りするんじゃないよ」

「っ、いや、いや！」

千華の拒絶に宝玉は額に青筋を浮かべ千華に近付くと、左手に金色の矛を現し眉間に突き付けた。身体を震わせ息を飲む千華の姿に宝玉は自身の興奮を隠せなかった。

「無惨に堕ちろ」

夜鷺の声に反応して宝玉が右を向けば夜鷺が黒い波動を纏ったまま黒刀を引いて突きの構えを取っていた。突き出される黒い刃は身体を捻ってかわしたが、左耳に僅かな痛みが走る。左耳に触れれば生温かい液体が手に付着した。

普段ならこの程度の軽傷宝玉は気にも留めないが人間から情報を得ているため、自分の軽薄さが面倒な事態になることに気付き小さく舌打ちした。しかしそんなこと全く思っていないように笑顔を貼り付けると、千華をかばうように立つ夜鷺を見て首を傾げた。

「おやおやおかしいなキミ。その黒い波動は自律しているんじゃないのかい？　どうして千華を飲み込まないんだ？」

言われてから千華も疑問に思ったが、確かに千華と夜鷗の距離はかなり近いのに黒い波動は千華を飲み込もうとするどころか彼女を飲み込まないように避けていた。

そのことを指摘されると夜鷗は珍しく饒舌になって説明を始めた。
「この術は“暴食の黒衣”^{ショウキウノクロイ}という瞳術を基盤に改良を重ねて未だ能力の発動に時間が掛かるなどの問題点も多いが、こいつを制するためには俺は先ず条件を一つ定めた。最初に黒い波動を放出している間おれが殺意を一定時間向けられると能力は発動、殺意を向けられた対象の波動が近付けば自動で飲み込む。勿論人間が近付けば肉体ごと飲み込むがな」

「まるで“時間を稼ぐため”のように長く丁寧な説明をどうもありがとう」

「……何のことだか」

「お前は自分の魔宝具、黒紅闇夜幻の斬られた相手が幻術にかかる能力さえ発動すれば勝てると思っているな？　傷が小さいから時間が掛かるんだろうが幻術だけで俺に勝てるんでも？」

夜鷗は否定も肯定もせずただ押し黙っているだけだった。それは幻術をかけるために時間を稼いだのは事実だが、幻術だけで勝てるとも思っていないということを示したかったのだが、宝玉はそのように読み取ってくれなかった。

「なるほど、そんなふざけた態度で俺に勝てるなんて馬鹿げてるな。なら俺も本気でお前を潰すでしょう、磨き足りない原石よ。^{ダイヤ}“金銀モント財宝”」

三十五話：纏う衣は闇より黒く十一の色も飲み込む（後書き）

裏話その二十五

春休みなのに生活リズムが正しすぎる……。
ただ宿題は進まない（；；）

ついに夜鵒と宝玉の闘いが始まりました。

今回出てきた夜鵒の新瞳術“黒鬼の纏衣”の『クロノス』は神様の名前です。これは結構有名な？ とあるマンガの組織名にも使われています。

ちなみに銀の“完全武装の騎士”の『ガラハッド』は円卓騎士の一人です。

これは誰の名前を使うかなり悩みましたf ^ | ^ ；

あともう少して二章も終わりますし月末には合宿もありますし全力全開で頑張ります（ノ＞＜）ノ

三十六話：石が導く二人の再会（前書き）

僕は近畿在住なので地震の被害は全くと言っていいほど受けてません。

地震が発生したとき練習中で帰ってきてから地震や津波で大変なことになるのと知りました。

自然災害だから防ぎようのないことはありませんがもしかしたら自分も被害に遭っていたかもしれないことや、今も行方不明の人や死者の人数を聞くと心が苦しくなります。

亡くなった人は本当に残念で仕方ありません。怪我で身動きが取れない人や家族と離れ離れになった人、何かを心の支えにもう少しだけ頑張ってください。

少々真面目な話をしましたが本文は続きですのでどうかお楽しみください（＃＾　＾＃）

三十六話：石が導く二人の再会

「ダイヤモンド 金銀財宝」

宝玉の周りにそれぞれ十一色に色付いた十一の光が現れ、光が収まると大きさが手の平を広げたぐらいの正八面体の金剛石が姿を見せた。黒と白の金剛石は不規則に宝玉の周囲を動き回っているが、それら以外は宝玉を軸に円を描くように反時計回りに回っている。

「それでは楽しい愉しいショーの始まりだ」

九個の金剛石が動きを速め、速度を落とし止まったとき宝玉の正面には青色の金剛石があった。それが自ら光を発したかと思うと、水の奔流が夜鷺に向かって空中を迸る。

「金剛石の中にあるのは発動を待ちわびている瞳術そのものだ。その瞳術を操り俺の意志で発動する、それこそが“ダイヤモンド 金銀財宝”の能力！」

黒い波動が水の奔流を飲み込むと夜鷺は垂直に跳び上がった。金剛石は再び宝玉を軸に回っており、縹色の金剛石が宝玉の正面に止まった。金剛石は光を発し冷気の光線を避けられた光線が放出される。

金鷄が翼を広げ飛んで冷気の光線を避ければそのまま宝玉に接近する。夜鷺が黒刀で突きを繰り出すと宝玉と夜鷺の間に白色の金剛石が割って入り突きを止めた。

宝玉が両目を閉じると同時に金剛石が強烈な光を発したので、夜鷺は目を開けることが出来なくなった。

「アビヤハファファ、隙だらけだ！」

「くっ」

金鷄が翼を羽ばたかせ上空に飛び上がり距離を取ると、黒い波動が動いて目の開かない夜鷺を護るように球状になる。しばらくそうしていても黒い波動に動きが無かったので宝玉は攻撃しなかったらしく、目が開くようになってから見ても、黒い波動の隙間から覗く宝玉は自分を見上げているだけだった。黒い波動が離れた瞬間、全

身に鋭い痛みが走る。

「がつ?!」

「ギーッツイッヒツヒ! 不様だなあ!」

夜鷺の背後には桃色の金剛石が浮かんでいて、そこから無数の棘がある蔓が伸びて後ろから夜鷺の身体に絡み付いた。すぐさま黒い波動は蔓を飲み込んだが、それでもかなりの傷を負った。出血と激しい波動の消費で息も荒くなっていた。しかし夜鷺の目から闘志が消えたりはしない。

その目が気に入らない宝玉は目玉が飛び出そうな程に見開き不満の声を上げた。

「ちっ、なんだその目は! 何故そこまで千華を助けようとする! どうして“闇夜鴉”として名を馳せたお前がこんな女にそこまでこだわる!」

二人の闘いを泣きそうな顔で見ている千華は自分と深い関わりのない夜鷺がどうしてここまで傷だらけになっても闘い続けるのかわからなかった。理由を考えれば考える程、何故か自分を逃がすために敵う筈もない獣に立ち向かった少年と夜鷺の姿が重なる。

「も、もういいから……」

遂に千華は堪え切れなくなり、両目から涙を零しながら震える声で精一杯叫んだ。振り向きもせず、ただ背中であくまで黙って彼女の訴えを受け止める夜鷺に。

「もういいから! あたしなんかのために東宝が傷付く必要なんてないよ! 今からでも遅くないから闘うのを止めて!」

千華が叫び終わると夜鷺は黙って金鷄に合図してゆっくりと着地した。振り向きはしないが千華へ向けて心から自分の気持ちを伝える。

「こんな女だとかあたしなんかのためにだとか変な言い方するな。特に自分ではな」

「え?」

「必要があろうとなかろうと、理由があろうとなかろうと、どんな

敵からでもどんな獣からでもお前は俺が護る」

「あ……ああつ！」

千華は両手で口元を覆い隠した。涙はとめどなく流れるが、それでも夜鷺の姿は少年の姿と重なりはつきりと見えた。一度わかつてしまえば思い当たる節は幾つもあったが今はそんなことどうでもよかった。千華の心を埋めるのは喜びだけだ。

「あ、あのときの男の子は東宝だったんだ。生きて、ただね。本当によかった」

「ふん、気付くのが遅い」

いつもと同じぶつきらばうな口調だが、千華はその口調がどこか嬉しそうであることに気付き微笑んだ。そして立ち上がり制服のスカートを手で払うと夜鷺の隣りに並び、耳まで真っ赤な夜鷺の顔を見た。

「あたしも闘うよ。少しでもあのときの恩返しをしたい、東宝を助きたい」

「……好きにしろ」

「いやー、素晴らしいね」

それまでの明らかに侮蔑を含んだものとは違う穏やかな声色で二人の注目を自分に引き付けると、宝玉は大抵の女性が騙されそうな笑顔を貼り付けて夜鷺と千華のやり取りに拍手を送った。

しばらく手と手の叩き合いで鳴る乾いた音だけがこの部屋に響いていたが、その音が止んだ一瞬の静寂のあと、宝玉の表情は笑顔のままなのに恐ろしく冷めた印象に変わった。

「君たちの運命的な再会に敬意を表し、千華は東宝夜鷺君に返そう。ただし、死体でね」

宝玉の正面にあった黄色の金剛石が光を発し二筋の雷が二人に襲い掛かる。夜鷺は右、千華は左に跳んで避けたが、夜鷺は今の攻撃のねらいが自分と千華を離れさせることだと気付き、急いで千華の

傍へ行こうとする。

しかし茶色の金剛石が光を発し、縦は天井まで届く高さで、横幅も縦以上の長さがある巨大な土の壁が床を突き破りせり上がった。宝玉も千華も壁の向こうと夜鷗は完全に分断されてしまった。迂回するにも少し走らなければならず、そんな僅かな時間も今の夜鷗には惜しかった。

黒刀に黒い波動を纏わせると柄を両手で握り直し、左から右へ水平に薙ぎ払った。黒い波動を纏った黒刀は土の壁を両断した上に、斬っていない部分まで黒い波動で飲み込んでしまう。

大部分を失い崩れた土の壁を跳び越えたときには赤色の金剛石が光を発しながら千華に向かって飛んでいくところだった。

千華は人差し指を立てた右手を前に突き出してその場で一回転し文字を刻む。その文字が淡く光ると薄い桃色の花びらが現れ千華の前で盾となった。

「舞い散る花吹雪」

赤色の金剛石は花びらの盾に近付くと一際強い光を発して爆発した。正確には金剛石自体が爆発したのではなく金剛石の中にある炎が弾けて強烈な爆風を起こしたのだ。

「きやつ！」

千華は最初から防ぎ切れないとわかっていたのか両手を顔の前で交差させていたが、案の定花びらは全て吹き飛ばされてしまい千華の身体も後方に飛んだ。着地点を確認するつもりで目だけで後ろを見ると今の軌道で飛べばぶつかるのであろう位置に紫色の金剛石が浮かんでいた。

金剛石からは一見すると槍のようだが、先端の尖った太く長い針が突き出ており、毒々しい紫色に染まっていた。

「君は毒でのたうちまわって死ぬのが希望なのか！　ならば望み通りの方法で殺してやろう！」

避けようにも空中では身動きが取れないので千華は恐怖から両目をつむった。毒の針に貫かれるかと思いきや誰かに身体を受け止め

られた。誰かなんて千華には当然わかっていた、首を回して後ろを見ると全身から血の気が引いた。

右の脇腹を毒の針に貫かれ、口から血を流している夜鷺だった。

「べボロロロ！ 身を呈して惚れた女を護るとは最高の喜劇だね！」

「ぐ、ごほっ」

「東宝！ しつかりして！」

夜鷺は毒の針を抜くと手と膝を床について苦しそうに咳込んだ。

口から吐き出る血は赤黒く、血を吐く度に身体から力が抜けていくような、そんな気がした。しかしそれこそが容赦なく猛威を振るう毒の効果だったのだ。

全身が痺れてきて四肢に力が入らず指一本動かすこともままならない。神経毒だと悟った夜鷺は必死に脳に働き掛けてようやく目を閉じられた。

「毒も効いてきたようだし絶体絶命だね。どうせなら今から泣いて謝ってみるかい？ 無駄だけどね」

「結構だ」

ゆっくりと両目を開き夜鷺は立ち上がって黒刀を握り直した。その表情は無理をしているようには見えないが身体は小刻みに震えている。

すぐ傍に居る千華からすれば夜鷺が無理をしているように見えるのだが、距離の離れた宝玉にとっては自分の術が効いていないように見えた。だが目を凝らしてよく見れば夜鷺が冷や汗を流していることに気付き笑みを零す。

「なーるほどね、身体が動くよう自分自身に幻術をかけてるんだ。

いや、この場合は自己暗示とも言うのか？ けどそんな無茶をしたらあとが大変だよ？」

「勝負はもう決まるから問題ない」

「やっぱりクソ生意気、だ？」

自分の周囲に広がる光景、前後左右のどこを見ても夜鷺しか見えない景色に宝玉は目を疑った。そのとき不意に左耳の傷が痛んだこ

とで自分も幻術にかかっていることがわかった。

困惑している宝玉をよそ目に全員の夜鵒が黒刀を振りかざした。その黒刀が揺らめきそれぞれが広がってどんどん繋がり、最終的には光が閉ざされた地下を更に暗くする程に天井を黒い塊が埋め尽くした。

突然一筋の亀裂が走り、その亀裂が音を立てて開き切って口となり、二つの血走った大きな丸い目玉が見開いた。

宝玉は青冷めた顔で小さく叫んだ。幻術だと頭ではわかっているも、明かりの少ない空間に見渡す限り同じ人間が存在する異常さが加えられて恐怖を隠せない。

黒い塊が口を大きく開いてその下にある物体を吸い込もうとした。夜鵒たちはその場に平然と立っているが、実際には物凄い風が巻き起こっている。

金剛石は全てあつという間に黒い塊の中に吸い込まれ、宝玉も必死に耐えたがこんな状況で力をもつ筈もなく、宝玉も悲鳴を上げながら黒い塊の中に吸い込まれた。

黒い塊が口を閉じると夜鵒は一人ずつ消えていき、一人消える度に黒い塊は段々と縮んでいく。本物の夜鵒とわけがわからずしゃがみ込んでいた千華の二人だけが残ったときには黒い塊は小さな黒色の球体になっていた。

それからきっかり三十秒、間を置いて夜鵒は黒刀を振り下ろすと黒色の球体は一気に膨張して破裂した。

突然のことに千華は驚きで目を閉じてしまい、そろそろと目を開けると痙攣している宝玉が俯せに倒れていた。

「終わりだ」

「え、え？ 何をしたの？」

「それは――」

「う、ウギヤろゴわアああア！」

何を言っているかもよくわからない叫び声とともに宝玉は立ち上がるが、目は虚ろで口もだらしなく開いており、背筋も曲がってそ

の姿は全くの別人に変わっていた。

「ひっ?！」

「時間の流れる早さが六千倍に感じる、およそ五十時間何も無い闇の中に居たんだから無理もない。すぐに立ったのは立派だが心は折れかかっているようだな」

「プギいひひヒ、俺がこの程度の幻術で心を折られる訳ないだろ」

「さっさと堕ちろ」

「いやあ、まだまだじっくり闘おうぜ」

宝玉は大きく息を吐くと身体と心を立て直し正常な状態に戻った。彼は心の底から嫌らしい笑みを浮かべると両手をぴったり重ねて手の平を二人に向けた。

三十六話：石が導く二人の再会（後書き）

裏話その二十六

……前書きでも書きましたが呑気に小説なんて書いていいのでしょうか。

一人でも多くの命が助かるように心の底から祈っています。

今回は施設での最初の強敵、八尾万についてお話ししましょう。

名前の由来は八尾万の神から。ただ苗字の読みはそのまま過ぎてもあれなんで変えました。

最初の台詞は彼の異常さを表したかったんですが長くなり過ぎた：

…なんかぽんぽん言葉が出て来て……（…；）

能力も頭の中で一番最初に考えてたのとは（いい意味で）変えましたが上手く表現出来たでしょうか？

来週末から合宿なので更新急ぎます（*ー*）

最後に近畿に住む僕に出来ることは限られますが、一日も早く地震の被害に遭った町が復興し、被害に遭った人々が平和な生活を取り戻せたらと思っています。

三十七話：月と太陽は地の下で相対す

「じつくり闘う？ 心身ともにぼろぼろのくせして何言ってやがる」
「お前こそ幻術が切れかかって息が荒くなってるぞ。お互い長期戦は好ましくない、だからこそ」

宝玉の周囲に再び現れた金剛石の内五つが夜鷺と千華を囲むようにそれぞれ等間隔の距離となる場所まで動いて止まった。同じようにその場に留まっていた内、五つの金剛石は止まっている金剛石の少し外側の場所まで動いて止まる。最後に宝玉と夜鷺の間に黒色の金剛石が動く。

「根競べとしようじゃあないか。二重^{にじゅうごてんけつちゅう}五点結柱」

黒色以外の金剛石が淡い光を発し波動が溢れ出す。波動は拡大して繋がり、五つの金剛石を頂点とした正五角形が二つ完成すると、床と天井に接地する長さまで波動は伸びる。淡白い二重の結界は中と外とを完全に分断した。

波動の結界の中に居るのは夜鷺と千華に黒色の金剛石、結界の外に宝玉とこれから何が起こるのか安易に読めるこの状況に、夜鷺は自分たちが崖っぷちまで追い込まれたことを悟った。

「ルールは簡単、俺の合図で今から黒色の金剛石が砕けて中の黒色の瞳術が結界内で充満する。お前はさっきの黒い波動で飲み込み続けて耐えればいい」

「それでは俺が一方的に波動を消費し続けるだけで根競べとは言えないな」

夜鷺は懷からナイフを一本取り出すと振りかぶり宝玉目掛けて投げた。投げた瞬間ナイフは四本に増えていたが、四本とも宝玉に届かず結界に弾かれて床に落ちた。

最初に結界が発動した時点で夜鷺はこの結界の強固さはなんとなくわかっていたが実際に試してみると予想通りだった。

「この状況でお前に拒否権があると思っっているのか。なんなら耐え

ながら結界を攻撃してろよ」

宝玉が指を鳴らすと黒色の金剛石にヒビが入りばらばらに砕け散った。中の黒色の瞳術が溢れ出し、実体無き闇となって地を這い空中を覆い夜鷺たちに襲い掛かる。

夜鷺は千華の腕を掴み自分の傍に引き寄せしやがむと身体から黒い波動を放出し、二人を護るように黒い波動を操作した。この術を夜鷺はただ自動で敵の波動を飲み込むだけでなく、自分の意志でも動かせるように改良していた。

「おっと申し訳ない、未だその黒い波動の能力は発動してないのか」
「一度“黒鬼の纏衣”^{ブラッククロノス}の対象とすれば二度目はすぐに能力が発動するから安心しろ」

「そうか、ならば遠慮なく、喰い尽くそう」

黒い波動が反応する範囲のぎりぎり外で止まっていた闇は宝玉の合図で一気に動き出した。純度は黒い波動の方が上なので闇を飲み込み続けているが、かなりの量なので夜鷺は攻撃するどころかその場から動くことすら出来ない。

闇と闇がぶつかり合う結界の外に居る宝玉は勝利を確信しているのか余裕の表情で中の様子を見ていたが、しばらくの間何も変化がなかったのでつい退屈になって欠伸をし目を閉じてしまった。

涙を指で拭っていると宝玉は左肩に鈍い痛みを感じた。視界の端に映ったのは様々な種類の植物の葉、茎に蔓、蕾や花が合わさってきた斧だった。それが左肩に食い込み細胞が潰されていくような感覚に陥る。

「ぐ、があ……っ?!」

斧が引かれたので振り返るとそこには右腕が植物に覆われ、それが斧の形状となっている千華が悠然と立っていた。

今でも二人は結界の中に居る筈なので幻術だと思っただが、左肩の激痛も目の前で自分を見つめる千華も到底幻術とは思えない。しかし結界を破ってもいないのに出てこれる筈がないのだ。などと頭の中で必死に情報を整理していると、何故か悪寒がした。

振り向けば結界の中はさっきまで黒一色に染まっていたのに今は頭頂部が天井に付きそうな程に巨大な漆黒の獣の頭が結界の中を埋め尽くしていた。そして宝玉からは見えないが、結界の端には黒刀の柄を握る夜鷲と獣の後頭部を見上げ呆然としている千華が居た。

メリメリと音を立てながら口を開ける動きだけで宝玉に恐怖を与えるには充分だった。大きく開いた口の中からこれまた巨大な黒刀が伸びてきて結界を突き破り、獣の頭は崩れ落ちてきた結界の破片も飲み込んで消してしまう。

「な、なああつ?! じゃあやはり!」

千華の身体から剥がれ落ちた黒い鴉の羽が空中で集まり、三本の足を持ち金色の目を光らせる夜鷲の契約獣、金鷄となった。金鷄は翼を広げると主人である夜鷲のところへ飛んだ。

「あれだけ黒色の瞳術を利用すれば術のリリティもかなり増すな」
獣の頭から黒い煙が昇っていき大きさはどんどん縮小し、しばらくすれば黒刀の刃だけが残り、刃から漏れ出した黒い波動が夜鷲を中心に円を描き渦巻いている。

夜鷲はその場で黒刀を斜めに一度だけ斬り下ろすと、ゆっくりとした歩みで驚愕によって表情を崩した宝玉に近付く。

「自分で打ち鍛え、研ぎ澄まし続けた刀と他人から譲り受けたことで満足し、錆び付いたままで放置した刀とでは切れ味に差が出るのは当然だ。俺の黒い波動はお前の闇を侵食しその力を飲み込んだ」

「な、なるほどな。だが勝負はまだ決まってるぞ」

「もう止めておけ。心の折れたお前に勝機はない。これ以上幻術にかかれば二度と立ち直れなくなるぞ」

「はっ、それがどうした。力無くては敗者となるこの時代、何の力も持たず産まれた俺に力を与えてくれた施設長のため、俺は心が死のうとも肉体だけで貴様を潰す! “金銀財宝”^{ダイヤモンド}っ!」

宝玉は天を仰ぎ能力の発動を宣言した。しかし金剛石が現れるどころか何も起こらないので宝玉は血相を変えて目玉が飛び出しそうなくらいに両目を見開き、夜鷲を指差し叫んだ。

「何をしたんだ貴様あ！　どうやって俺の能力を封じた？！」

「俺は何もしてない。貴様の心が俺を恐れてしまい能力を発動出来なくなっただ。肉体だけ生き残った結果がこれだ」

「う、ぐぐぐ……ひ、ひぎやあつ？！」

宝玉は夜鷺の背後に鬼を見た。鬼と言っても黒い波動が集まった顔の部分に丸くくり抜かれた穴のような目、横一文字に大きく開かれた口に二本の長い腕があるだけの姿で、見ただけで悲鳴を上げるまでの恐さはないのだが、心の折れてしまっている宝玉には髪を逆立て恐ろしい形相で自分を睨み、今にも喰らおうとしている鬼神に見えた。

「や、止めるお、来るなあ！」

「何を恐れているんだ。まだ勝負は決まっていんだらう？」

夜鷺が一步踏み出した刹那、夜鷺の背後に集まっていた黒い波動は後方から飛んできた闇の塊に撃ち抜かれ、闇の塊はそのまま壁まで飛んでいき、壁に大きな穴を開けた。

夜鷺が振り返ると見覚えのある、しかしその鋭い目付き——左目だけが黒色に変わっている——にどこか違和感のある、燃えているように赤い唐紅の衣を羽織った少年が地下七階に続く階段の傍に立っていた。

「誰だお前は？」

「う、閨陽火！　助かった、早く俺を助けてくれ！」

「閨？」

宝玉の言葉に改めて夜鷺と千華は少年の姿を確認した。目付きや左目に傷が無いこと、雰囲気などの違いはあるものの、その容姿はあまりにも天月に似過ぎていた。

助けを求める宝玉に対し陽火は蔑んだ目で彼を見ると言葉を吐き捨てた。

「はあ？　あれだけ偉そうなことを言っておいていざ自分が負けそうになるとプライドを捨てて助けを乞うのか」

「な、何でもいい！　いいからその二人を殺してくれ！」

「あーあ、輝きを失った宝石は醜くしょうがねえな。ところで俺は最近芸術に興味があるんだが」

「は？　それがどうし……ぎゃああつ?!」

宝玉の足元、凍り始めた床から伝わる冷気により足、胴体、腕、頭と全身が凍らされていく。身体が徐々に凍っていく間宝玉はずつと悲鳴を上げており、全身が凍ったとき、凍り付いた顔は恐怖に歪んだ表情で固まっていた。

左目の色が縹色に変わっている陽火は腕を組み全身が凍った宝玉の姿を眺めていたが、溜息を吐いて顔を伏せ、顔を上げたときには左目の色が赤色に変わっていた。

「氷像はいまいちだな。やり直そう」

宝玉の全身は突然何の前触れもなく発火し青色の炎に包まれた。氷は一気に蒸発、宝玉はもがき苦しみ、のたうちまわりながら叫んだ。

その様子を見ていた千華はあまりにも衝撃的で残酷な展開の連続に、恐怖で顔を青ざめ身体を震わせていた。たまらず吐きそうになり口を押さえたが、夜鷗に手を握られどうにか持ち直せた。

陽火は宝玉の段々と鈍くなってきた動きも目に入らず、力の無くなってきた声も耳に入れないで何かを考えていたが、閃いたのか両手の平を合わせて音を立てた。

陽火の左目は茶色に変わっている。

「そうだ、次は砂の塔にしようか」

力尽きて動けなくなった宝玉の真下、コンクリートの床が円形に深く凹んだ。重力に従い身体が落ちそうになった瞬間、凹んだ穴から大量の砂が噴き上がり、宝玉の身体を包んでいた青色の炎を消して砂の塔が完成した。

宝玉の身体は埋没してしまい、片手が砂の塔の真ん中から出ているだけだった。片手は力無く垂れ下がっており、微動だにしないので宝玉は既に息絶えているのだろう。

「あー、シンプル過ぎてつまらないな。やっぱり俺に芸術は向かな

「いみたいだ」

陽火は左目を閉じ、開けたときには金色に変わっていた。

砂の塔が崩れて砂は落ち、その代わり落ちてくる砂の流れに逆らい掻き分け、鋼鉄の扉が天井に向けて上昇していった。砂の流れ落ちる音に隠れて鉄と肉体のぶつかる音がしたかと思えば、鋼鉄の扉と天井が衝突し赤黒い血の雨が部屋中に降り注いだ。砂は全て穴の中に落ち切り、鋼鉄の扉からは血が滴り落ちている。

陽火の左目の色が元に戻り、鋼鉄の扉が消えて宝玉は凹んだ穴の中へ落ちていく。凍らせられ焼かれ砂に埋められ、最終的には押し潰された宝玉の身体はひどく無惨なもので、その分千華の目には鮮明に映ってしまった。

「ひい……っ、い、いやああああっ！」

「落ちて着け千華、俺がついてる」

「う、うん……」

あまりの恐怖に叫んだ千華の手を強く握り締め、夜鷗は彼女の前に立つ。

名前を呼ばれ手を握られた、たったそれだけなのに何故こうも安心するのか、何故こうも胸がときめくのか、千華には自分自身の想いがわからなかった。

自分を睨む夜鷗に陽火は笑いながら拍手を送ると、宝玉のように不気味な張り付けた笑顔とは違う自然な、しかし見るのも恐ろしい笑顔でこう言った。

「いやー、かつこいいねー。俺も一度はそんな台詞言ってみたかったぜ」

「何者だお前は？」

「そう恐い顔をするなよ。とりあえず今日はお前たちに手を出す気はないさ。顔見せに來ただけだしな」

地下七階に繋がる階段の方へ顔を向ける陽火に釣られて夜鷗もその方向を見ると、小柄な男と何かを担いでいる大柄の男が二人部屋の出口に立っていた。

陽火が「遅かったな」と声を掛けたのに対し、陽火たちより少しだけ小柄な男が返事をした。

「この男が予想外の抵抗を見せたからな。だが一度心を砕けばあとは脆かったぞ」

裾が燕の尾のようになっていている燕尾服と両側に太い線の入った黒のスラックスに身を包み、信念を持った強い目に黒髪を後頭部で一つに括った、異性を引き付ける容姿をしている。

その独特の雰囲気到底知れぬ人間性を感じ夜鷺は何者か探りたかったが、続いて口を開いた大柄な男の特徴的な外見に気を取られ忘れてしまった。

「全く闘おうともせず、ひたすらに己の身を護ろうと助けを求めたこの男には儂^{わし}が怒りを見せる価値もなかったわ」

重厚な鎧を纏っているので素肌は殆ど見えず、左手に握った薙刀は灰色の柄、その両端に刀身の付いている薙刀としてはかなり大きいものだった。鎧で声がかくぐもりわかりにくい上に、その堅苦しい口調のせいでどんな人物なのか見当もつかない。

鎧を纏った大柄な男は右肩に担いでいた何か、この施設の長である人間を床に放り棄てた。放物線を描き床に落ちた身体は微かに動いているものの、目や顔色からは到底生きているように見えない。

「ひつ、し、死んでるの？」

「なんとか生きてはいるが復活するまでかなりの時間が必要だな。俺でもここまで人を精神的に追い込んだことはない」

「怖いなら下がってろよ。用があるのはそこに居るお前だからな」
「奇遇だな、俺もあんたに用がある」

夜鷺と千華が声に反応して振り返れば部屋の入口に立っていたのは声の主、閏天月だった。その後ろには神無月瀬津奈、山吹紫苑、鍵錠楔、咲舞凰妃、クープの五人が見えた。

天月たち、と言うよりも天月の姿を改めて確認し陽火の表情は陰しいものになり、声の調子も少し低くなった。

「ようやく来たか、天月」

「……久しぶりだな、陽火」

三十七話：月と太陽は地の下で相対す（後書き）

裏話その二十七

少し間が空いた理由には合宿がありまして…… f ^ | ^ ;

一応今月は更新四回してますのでご勘弁を…… 宿題はやばいですが

ww

今回は今後のポジションの予想がつかない（おい）クープについて。彼女の名前はそのままですがフランスパンの切れ目、『クープ』からです。

外国人の名前は慣れていませんので彼女の名前は読んでいた漫画から頂きました。

パンがメインテーマの漫画…… 多分わかりでしょう（´・`・´）

能力自体は事前に考えてましたが能力名は結構悩みました。とある翻訳サイトを利用しまくった結果大分いい感じに（ノ><）ノ

彼女が今後どうなるかは…… お楽しみってことで（。。（ ; ）

四月は週末大会ばかりなのでどうなるかわかりませんが、皆様のお陰で一年間続いたヒトロクもようやく二章が終わりを向かえ、新たな物語が始まりますのでお楽しみに（# ^ □ ^ # ）

そろそろもう一作の投稿も考えます。現在九話目途中です（ ; ）

三十八話：打ち落とされ欠けた月

「千華！ 無事だったのね！」

「瀬津奈！」

自分の姿を見て嬉しそうな声を上げた瀬津奈に千華は嬉しさに笑顔を浮かべながらも堪え切れず涙を流した。瀬津奈も友の無事に安堵し涙を零しそうになったが、部屋の惨状と謎の人物たちに気付きそんな感情吹き飛ばされてしまった。

「な、なんでこの部屋こんなに血が飛び散ってるの？ それにこの人……」

「ふむ、ここまで似ているのですから無関係とは言わせませんわよ。説明していただけますわね？」

誰に似ているか、誰に説明してもらうかを凰妃は明言しなかったが、瀬津奈たちは今まで見たことない険しい表情でずっと陽火を睨み続けている天月を見た。

天月は陽火から視線を外さず、一文字に強く閉じていた唇を開いた。

「こいつは閨陽火、正確に説明するのは難しいけど、簡単に言えば俺のもう一つの人格つてところだ」

「もう一つの、人格？」

「納得出来ない部分もありますが、なるほどそれで」

それでこんなに似ているのか、そう言いかけた紫苑の言葉を遮ったのは、天月の厳しい視線を正面から受けても全く怯むことのない陽火だった。

「しかも俺が居ないとこいつは左目が見えないし瞳術も使えない。普段左目を眼帯で隠してるのは出てきてほしくない俺を封印するためだ。こいつは俺が嫌いだからな」

「好きとか嫌いとか、そんな単純な話じゃないだろ。あの日”お前が”あんなこと”をしなければ俺は眼帯なんて付けてない」

「そうは言ってもお前はいざ自分がピンチになるとすぐ眼帯を外して俺の力、瞳術を使うじゃねえか。プライド持てよ」

「……っ！ ふざけるなよ、誰がいつ、お前の力なんて言った?!」
全身を震わせ今にも斬りかかりそうな天月を前に、陽火は少しだけ考えるふりをしてからこう言った。

「うーん、俺が、今?」

その言葉に辛うじて抑制していた怒りが爆発し、天月は右手でチーンに繋がれいつもとは異なり鈍い光を反射し首元で銀色に光る十字架のネックレスを握った。ネックレスを外すために力を加えると陽火が地面に横たわる人間を爪先で突いた。

「そうカリカリするなよ。俺はある意味お前の仲間を助けたんだぜ? あのまま闘ってたら穴の中で冬眠してる男が何をしたかわかったもんじゃないねえ」

「言いたいことはそれだけか?」

「お前この施設長様を許さないとか言ってただろ。意識はぶっ飛んでるが今なら好きなようにさせてやるぜ」

「……人間をこんな風にしたのはどっちだ」

陽火は瞳術を使えるだけで幻術や獣術は全く使えず、武術も人並以下のレベルであることはわかっていて。瞳術だけでここまで精神的に追い込むのはかなりの時間と労力が必要以上に陽火はそんなことをするぐらいなら殺してしまう。そもそも天月は陽火の波動を常にこの階から感じていたので、天月は鎧を身に纏った大柄な男が燕尾服を着た少々小柄な男のどちらかだと判断したのだが天月の質問に鎧を身に纏った大柄な男は長めの溜息を吐いた。

「儂がこんな小物を相手にここまでせん」

「おいおい、そんな言い方をしたら俺がやり過ぎたみたいじゃないか」

燕尾服を着た小柄な男は数歩前に出るとその服装に見合った完璧な礼儀作法で自分が何者であるかを明かした。

「御紹介が遅れました皆様方。我が名は村時雨威薙^{むらしぐれ いなぎ}。記憶の片隅に

でも私の名を留めて頂ければ幸いです」

「村時雨……」

「威薙……？」

「つておい、その名前はまさか」

丁寧過ぎる敬語を披露し村時雨威薙は深く下げていた頭を上げた。何か気付いたような反応の紫苑、凰妃、楔に威薙は「おっと」と小さく声を漏らし、どこから取り出した白色の大きなマントで自分の全身を隠した。

マントを取り姿を見せたとき、そこに威薙は居なかった。正確には威薙は奇術師のような染み一つ無い純白のマントにこれまた純白のスーツに、目と口の部分をくり抜いた巨大な力ボチャを被っていた。

「！？」

「君たちは俺のことを知ってるようだから少し遅いけれど、正体は隠させてもらうよ」

「どうでもいいんだよ、そんなことは」

怒気をはらんだ声でそう言つと天月はネックレスを外した。すると天月の背中から神々しく煌めく一対の翼が生え、周囲の空気を震わせる程濃密な波動が溢れ出す。

「発動、天人の翼」

「おいおい、何をそんなにキレてるんだよ」

「いい加減ふざけるのは止める。お前は何の目的があつてここに居る？俺が目的なんだろ、他の人を巻き込むな」

「あ、そんなことでキレてんのか」

陽火のふざけた言葉——わざとふざけて言っているのだが——に天月の怒りは限界を通り越し、今すぐ斬りかかりそうになる。しかし、鎧を纏った大柄の男が庇つかのように陽火の前に立ったので踏み止まった。

兜の奥にあつても大抵の者を萎縮させそうな鋭さを感じさせる目に睨まれようと今の天月にとってはその目も、それどころか大柄の

男の存在も自分の前に立ち塞がる障害にしか思えない。

「そこをどいてくれ。俺はあんたを斬るつもりはない」

「そうはいかん。僕は名を大行門憤怒だいぎょうもんふんぬと申す。お主の怒りは実に見事、是非手合わせを願いたい」

「話を聞いてくれ。俺は理由無くあんたを斬りたくない」

「ならば仕方あるまい。今からそこに立つ者どもを斬り捨て理由とやらを作ろうか。なに安心せい、半刻とかからん」

そこに立つ者ども——瀬津奈や紫苑たちに大行門憤怒は両手で握り直した薙刀の先端を向ける。最初は渋るだろうがこういえば天月は闘う気になる、陽火にはそう聞いていた。

距離はあるのだが一瞬でも気を抜けば斬り捨てられそうな威圧感、彼が口だけではない相当な実力者であるとすぐに悟った瀬津奈たちは息を飲んだ。

「……初対面でいきなり人の性格を見抜きやがって。悪いが今は機嫌が悪いんで、手加減はしないぞ」

「結構、お主の怒りを全力でぶつけてこい」

憤怒が言い終わったその刹那、天月は一步目から全速力で駆け出し一瞬で憤怒の懐に入る。左手は左腰に差した刀の柄を、右手は右腰に差した刀の柄を既に握っていた。憤怒に回避も防御の隙も与えず、天月は両の刀を抜刀した。

——速真迅剣二ノ斬型 轟撃大砲。

右手の刀が鎧に触れると同時に左手の刀で刃を押し込む。動作自体は簡単だがそのタイミングは厳しく、微かにズレただけでもその大砲の如き威力は損なわれてしまう。幾度となく鍛練を繰り返してきた天月だからこそ放てる威力なのだ。

「ふむ、大した威力だ」

「なっ……」

金属と金属がぶつかり合う轟音、それに続いて攻撃を受けた相手はその衝撃に耐え切れず遥か後方まで吹き飛ぶ筈なのに。憤怒は自身と天月の合間に薙刀を滑り込ませ灰色の柄で轟撃大砲を受け止め

た。

天月が刀を押し込もうとしても衝撃は完全に受け止められてしまい、鎧に覆われているが屈強な肉体を持つ憤怒に正面からの力比べでは勝ち目が無いことは誰の目から見ても明らかだった。

轟撃大砲は天月が扱う武術の中で最高威力とも言える技で、天人の翼を発動した状態で放てば技の対象となった者は無事では済まない。天月自身思っていた。それなのにいとたやすく受け止められた、それが何を意味するのか。この時点で心は折れかけ、天月の身体は硬直してしまった。

「どうした、これで終わりか？」

「っ！ くそっ」

憤怒の言葉に身体を無理矢理動かす、後退して再度抜刀術を放つために無刃想を鞘に納めようとした。この普段の天月からは考えられない隙だらけの行動に気付いたときにはもう遅かった。

「愚かな」

憤怒は右足を一步強く踏み込み、右手で握り直した薙刀を水平に薙ぎ払う。その軌跡が斬り裂いたのは天月の肉体ではなく、無刃想の刃。流れていた波動が途切れた細身の刃はくると回りながら宙を舞い、床に落ちた衝撃に耐え切れず砕け散った。

一連の出来事に思考が停止した天月は頭の中で何度も何度も繰り返してようやく理解し始めた。理解し始めた、否、頭が受け入れ始めたのだ。自分の闘いを今まで支え続けた相棒の無惨な死を。

動揺のせいで天人の翼の煌めきが僅かに薄れた、その隙に陽火は左目の色を黒色に変えて天月の背後に回り瞳術を発動した。

「サヨウナラ」

ありえもしない感触にゆっくりと振り向けば陽火の背中から伸びている闇を凝縮したような二本の黒い腕に翼が掴まれていた。触れた部分から闇に侵食されていき、笑いを堪え切れず口の端を歪めた陽火が天月の背中を蹴った。

肉体と肉体のぶつかる鈍い音がした後に絹が裂けたような、どこ

か小綺麗な音が天月は聞こえてしまつ。聞こえた直後天月は全身から力が抜け、膝から崩れる。陽火の黒い腕が上へ向かつて放り投げた翼がばらになり羽となって舞う中、天月は両手を地面に付いた。

「……まずいですね」

「て、天月っ！」

瀬津奈の自分を呼ぶ声も耳に届かず、無刃想を失い天人の翼を引きちぎられる程の実力者たちに天月は恐怖を覚え、全身の震えが止まらなくなる。さっきまでの怒りも消えてしまったのか、その姿は見るに堪えないものがあつた。

「あーあ、この心の折れ方は闘うどころか立ち上がるのももう無理だな」

「……っ！ あんたねえ！」

「そうキレないで落ち着け神無月瀬津奈。彼方飛蓮へかなたひれん」
『の敵討ちをしたんだぜ？』

「——え？」

「そこまでだ、お前たち」

地下七階に続く扉の前、目を向けるとそこには琴鳴学園生徒会長、光波神宮が右手にグングニルを握りしめ、切っ先を陽火に向けて立っていた。刃を突き付けられ、陽火自身は知るよしもないがグングニルの見えない刃に囲まれても平然と立つその姿からは余裕の程が窺える。

神宮は今すぐグングニルを振るい陽火に攻撃をしかけるか迷ったが、それよりも両手両膝を地面に付き全身を小刻みに震わせている天月の姿が気になってしまい陽火から視線は外さず紫苑たちに状況を尋ねた。

「刀の刃を根本から折られた上に君と闘ったときに使っていた天人の翼、あれをちぎられたんですよ。恐らくしばらくは立ち直れないでしょうね」

「……なるほどね、まさかそんなことが出来るとは相当な実力者だ」

「そいつはどーも。それよりさつさと槍を納める。刃で囲めば牽制になると思っただか」

神宮は陽火の言葉に戦慄を覚えた。まだ刃は陽火に触れていないのだからわかる筈がない、ないのだが陽火は何の疑いもなく自分の置かれた状況を見抜いてしまった。それでいて顔色一つ変えないのだ、神宮は一瞬陽火たちに向けていた意識が途切れた。

その一瞬を陽火が見逃すわけもなく、全身から波動を放出しそれだけで自身を囲んでいた刃を吹き飛ばした。その風圧に神宮が目を閉じた隙に威薙は背後に回り短刀を首に突き付けた。

「もうこのショーもファイナーなんだ、ゆっくりと見ていきな」

「っ、くそ……」

神宮が大人しくなったのを確認すると陽火は右手を高く突き上げ指を鳴らした。それが合図だったのか、上の階から大きな爆発音が聞こえた。

「な、なんだ?!」

「それじゃあ約束通り施設ごと潰そうか」

三十八話：打ち落とされ欠けた月（後書き）

裏話その二十八

お久しぶりです（*。ー。）v
何があつたかは活動報告に書いてありますf^|^；

今回は大変な最期を迎えてしまった十種宝玉さん。

名前は『十種神宝』からです。

僕の携帯『宝玉』って一発で出ないんですよ（..；）

能力名は悩んだ結果このようになりましたがどうでしょう？もう少し捻りを加えた方がよかったのか（*ー*）

能力自体はずっと考えていましたからお気に入りです（#^ ^#）
ただ再登場は……。

更新遅れてすみませんでした。

今後の更新は未定ですがなるべく急ぎますのでよろしく願います。

次話で二章は終了です！（^^）！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4209k/>

瞳で繋がる六道輪廻

2011年7月26日03時15分発行